

宇都宮市埋蔵文化財調査報告 第5集

権現山北遺跡

1979年3月

宇都宮市教育委員会

発刊にあたって

昭和52年3月、宇都宮市茂原町花欠開田組合によって畑地を水田にすべく、開田工事を実施したところ、開田した土地の一部から古代住居跡らしい遺構が数基露出しました。

当教育委員会では、埋蔵文化財を重視する立場から、開田組合の人々と協議を行い緊急発掘調査を実施いたしました。

発掘調査の結果、予想以上の住居跡が密集しかなり重要な遺跡であることが判明しました。また、完全な形を残したカマドや炉などの遺構が検出されただけでなく土器や石製模造品なども数多く出土しました。

これら貴重な資料をもとにして、ここに「権現山北遺跡発掘調査報告書」を刊行することができましたことは喜びにたえません。

この調査にあたり、終始御指導と御協力を賜りました、宇都宮大学助教授久保哲三先生をはじめ、同大学考古学研究会の方々、および全面的に御理解と御協力をいただきました茂原町花欠開田組合の方々に対しまして本書発刊に際しあらためてお礼申し上げます。

昭和54年3月

宇都宮市教育委員会





教育長 後藤 一雄

例 言

- 1 本書は、栃木県宇都宮市茂原町字花欠に所在する権現山北遺跡のうち、開田工事により消滅することになった北東地区の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宇都宮市教育委員会の依頼をうけて久保哲三（宇都宮大学助教授）が担当者となり、宇都宮大学考古学研究会の学生が参加し、1977年4月14日～5月9日および同年7月13日～8月31日の2期にわけて実施した。
- 3 本書は発掘・整理参加者が協議して分担執筆し、文責を文末に明記した。
- 4 遺構・遺物の実測には各報文執筆者があつたが、トレースは大島和子と柳田正弘が担当した。写真撮影はすべて斎藤均があつたが、遺物撮影の際には森 昭氏の指導を得た。記して感謝の意を表する。
- 5 編集作業は久保哲三の指導のもとに、本文については大島和子が、図版については斎藤均があつた。
- 6 本遺跡の資料は、すべて宇都宮市教育委員会によって保管されている。
- 7 発掘調査から報告書製作までに多くの方のご援助を得た。記して心から感謝の意を表する。
橋本兵治、橋本明治、小野恵子、中村紀男、石川隆郎、小出義治、玉口時雄、森田 優、岩崎卓也、崎 静夫、竹沢 謙、田熊信之、鶴見武道、大川 清、大金直亮、橋本澄朗、相山林継

凡 例

- 1 挿図中に使用した記号は、次の通りである。

○ 石製模造品	 カマドの焼土
□ 鉄器	 カマドの粘土
 カマドの石	 炉址
- 2 遺構断面図の標高は、82.700mに統一した。しかし統一できなかったものは、図中にその数字を記した。
- 3 写真図版中の遺物の番号と挿図、表の番号とは一致する。
- 4 土器の表における法量の数字は、口径、器高、底径の順で、単位はcmである。また、() は推定、- は不明、・ は丸底を表す。

発掘調査参加者（内は昭和52年当時のもの）

調査担当 久保哲三

マネージャー 大島和子（宇大3年）

調査員

水品信男（研究会OB，岡本西小教諭）

（4年）…小森哲也，瀧石力也，架木 誠，藤沢敬幸，山崎正男

（3年）…石川美智子，伊津井芳子，牛島康男，壽井美知子，大島和子，谷井 彰，長谷川一朗，宮崎光明，渡部肇子

（2年）…青柳三恵子，石川幸夫，小川晴代，大方俊吾，加藤修一，北井 清，小林仙哉，古田土亨，斎藤 均，藤原菜穂子，田村一代，鶴見早苗，中村京子，野沢悦子，保坂育子，増山美年子，森 和昭，柳田正弘

（1年）…飯田 誠，五十嵐勝己，荻野直子，梶 和彦，金沢正子，上吉原明夫，小林富幸，高橋由勝，徳原久美子，直井正行，中山一郎，西田勇一，前原美彦，和気敏章，渡辺照子，渡辺秀夫

（以上宇都宮大学）

田熊清彦（専修大OB，現栃木県文化課技師）下口昭子，村田健二（専修大OB）

大草義造，榊原秀雄，高桝榮治，松尾秀紀

（以上専修大学）

特別参加者

岩上照朗，石橋知明，斎藤一男，小森紀男（以上宇大考古学研究会OB）

篠原 豊（雀の宮中学校生徒・郷土部）

五十嵐利勝，山崎芳家（下野考古学研究会）

事務局

宇都宮市教育委員会社会教育課

社会教育課長 半田 昭

文化振興係長 丸山秀彦

文化振興係 定岡明義・桜井敬朝・松沢清一郎

文化財調査員 寺内弥三郎

目 次

I 調査経過

1 発掘調査までの経過	1
2 発掘調査の経過	1
3 発掘日誌抄	3

II 遺跡をめぐる環境

1 地理的環境	8
2 歴史的環境	9

III 遺構と遺物

1 住居址

1号住居址	16
2号住居址	24
3号住居址	33
4号住居址	37
5号住居址	56
6号住居址	68
7号住居址	73
8号住居址	82
9号住居址	84
10号住居址	90
11号住居址	94
12号住居址	97
13号住居址	106
14号住居址	111
15号住居址	115
16号住居址	116
17号住居址	125
18号住居址	128

2 土壌

1号土壌	132
2号土壌	133

3号土墳	133
4号土墳	135
5号土墳	135
6号土墳	135
7号土墳	136
8号土墳	137
9号土墳	138
10号土墳	138
11号土墳	139
12号土墳	139
13号土墳	139
14号土墳	140
15号土墳	140
16号土墳	141
17号土墳	143
3 溝状遺構	
溝状遺構No.1	146
溝状遺構No.2	146
溝状遺構No.3	147
IV 出土遺物・遺構の若干の考察	
1 権現山北遺跡出土の弥生時代の遺物について	149
2 鬼高式土器と住居址について	164
3 土墳について	172
4 権現山北遺跡採集の石器について	177
V 結 語	183

挿 図 目 次

第1図	権現山北遺跡付近の遺跡分布図	10
第2図	権現山北遺跡付近の地形図	14
第3図	発掘調査区域内遺構分布図	15
第4図	1号住居址実測図	17
第5図	1号住居址出土土器実測図	19
第6図	1号住居址出土石製模造品実測図	20
第7図	2号住居址実測図	25
第8図	2・18号住居址遺物出土状態実測図	27
第9図	2号住居址出土土器実測図	28
第10図	2号住居址出土土器実測図	29
第11図	2号住居址出土石製模造品実測図	30
第12図	3号住居址実測図	34
第13図	3号住居址カマド実測図	35
第14図	3号住居址出土土器実測図	35
第15図	3号住居址出土鉄製品・玉実測図	35
第16図	4・5・6号住居址実測図	折込
第17図	4号住居址カマド実測図	39
第18図	4号住居址遺物出土状態実測図	40
第19図	4号住居址出土土器実測図	43
第20図	4号住居址出土土器実測図	44
第21図	4号住居址出土土器実測図	45
第22図	4号住居址出土土器実測図	46
第23図	4号住居址出土土器実測図	47
第24図	4号住居址出土石製模造品実測図	48
第25図	4号住居址出土鉄製品実測図	48
第26図	5号住居址遺物出土状態実測図	57
第27図	5号住居址出土土器実測図	58
第28図	5号住居址出土土器実測図	59
第29図	5号住居址出土土器実測図	60
第30図	5号住居址出土石製模造品実測図	61

第31図	6号住居址出土土器実測図	69
第32図	6号住居址出土遺物実測図	70
第33図	7・8号住居址, 8号土坑実測図	折込
第34図	7号住居址遺物出土状態実測図	73
第35図	7号住居址出土土器実測図	75
第36図	7号住居址出土土器実測図	76
第37図	7号住居址出土土器実測図	77
第38図	7号住居址出土土器実測図	78
第39図	8号住居址出土土器実測図	83
第40図	9号住居址実測図	86
第41図	9号住居址カマド実測図	87
第42図	9号住居址出土土器実測図	88
第43図	9号住居址南側P _a 遺構出土土器実測図	88
第44図	9号住居址南側P _a 遺構実測図	88
第45図	10・11・17号住居址, 溝No.2・No.3実測図	91
第46図	10号住居址カマド実測図	92
第47図	10号住居址出土土器実測図	93
第48図	10号住居址出土鉄製品実測図	93
第49図	11号住居址出土土器実測図	94
第50図	11号住居址出土石製模造品実測図	95
第51図	12号住居址実測図	98
第52図	12号住居址カマド実測図	99
第53図	12号住居址出土土器実測図	100
第54図	12号住居址出土土器実測図	101
第55図	12号住居址出土遺物実測図	102
第56図	12号住居址出土石器実測図	102
第57図	13号住居址実測図, 15・17号土坑実測図	107
第58図	13号住居址カマド実測図	108
第59図	13号住居址出土土器実測図	110
第60図	14・15号住居址, 16号土坑実測図	112
第61図	14号住居址出土土器実測図	113
第62図	14号住居址出土石器実測図	114

第63図	16号住居址実測図	117
第64図	16号住居址カマド実測図	118
第65図	16号住居址遺物出土状態実測図	119
第66図	16号住居址出土土器実測図	120
第67図	16号住居址出土土器実測図	121
第68図	湯津上村出土須恵器実測図	124
第69図	17号住居址カマド実測図	125
第70図	17号住居址出土土器実測図	126
第71図	17号住居址出土瓦拓影図	126
第72図	17号住居址出土遺物実測図	127
第73図	18号住居址実測図	129
第74図	18号住居址出土土器実測図	130
第75図	18号住居址出土石製模造品実測図	130
第76図	18号住居址出土鉄製品実測図	130
第77図	1・2号土壇実測図	132
第78図	2号土壇出土石製模造品実測図	133
第79図	3・4・5号土壇実測図	134
第80図	3号土壇出土遺物実測図	135
第81図	3号土壇出土石製模造品実測図	135
第82図	6号土壇実測図	136
第83図	7号土壇実測図	136
第84図	8号土壇実測図	137
第85図	8号土壇出土土器実測図	138
第86図	9・10号土壇実測図	139
第87図	11・12・13号土壇実測図	140
第88図	14・15号土壇実測図	141
第89図	15号土壇出土土器実測図	142
第90図	16号土壇実測図	144
第91図	17号土壇実測図	144
第92図	17号土壇出土土器実測図	145
第93図	溝状遺構 No.1 実測図	147
第94図	溝状遺構 No.2 出土石製模造品実測図	147

第95图	弥生式土器拓影图	150
第96图	弥生式土器拓影图	152
第97图	弥生式土器拓影图	153
第98图	弥生式土器拓影图	154
第99图	弥生式土器拓影图	156
第100图	弥生式土器拓影图	157
第101图	弥生式土器拓影图	158
第102图	弥生式土器拓影图	159
第103图	弥生式土器拓影图	160
第104图	採集石器実測图	179

図 版 目 次

- P.L. 1 権現山北遺跡全景 (北方より空撮)
- P.L. 2 権現山北遺跡発掘区全景 (東方より空撮)
- P.L. 3 ①発掘前風景 (北より)
②1号住居址 (西より)
- P.L. 4 ①1号住居址全景 (南より)
②2号住居址貯蔵穴遺物出土状態 (北より)
- P.L. 5 ①2号住居址階段状遺構 (北より)
②2号住居址全景 (北より)
- P.L. 6 ①3号住居址全景 (南より)
②4号住居址遺物出土状態 (東より)
- P.L. 7 ①4号住居址カマド付近遺物出土状態 (南より)
②4号住居址遺物出土状態全景 (南より)
- P.L. 8 ①4号住居址カマド (南より)
②4号住居址全景 (北西より)
- P.L. 9 ①5号住居址階段状遺構 (東より)
②5号住居址階段状遺構内遺物出土状態 (南より)
- P.L. 10 ①5号住居址遺物出土状態
②5号住居址全景 (南より)
- P.L. 11 ①6号住居址遺物出土状態 (北より)
②6号住居址全景 (南より)
- P.L. 12 ①7号住居址貯蔵穴遺物出土状態 (北より)
②7号住居址遺物出土状態全景 (西より)
- P.L. 13 ①7号住居址全景 (北より)
②8号住居址全景 (北より)
- P.L. 14 ①9号住居址全景 (南より)
②10号住居址遺物出土状態 (西より)
- P.L. 15 ①10号住居址カマド (南より)
②10号住居址全景 (南より)
- P.L. 16 ①10・11・17号住居址全景 (西より)
②12号住居址張り出しピット遺物出土状態 (南より)

- P.L. 17 ①12号住居址張り出しピット (南より)
②12号住居址カマド (南より)
- P.L. 18 ①12・13・14・15号住居址全景 (南より)
②13号住居址遺物出土状態
- P.L. 19 ①13号住居址カマド (南より)
②13号住居址全景 (南より)
- P.L. 20 ①14号住居址遺物出土状態 (北より)
②14号住居址, 16号土壇全景 (南より)
- P.L. 21 ①16号住居址南北セクション (東より)
②16号住居址貯蔵穴遺物出土状態 (東より)
- P.L. 22 ①16号住居址カマド (南より)
②16号住居址全景 (南より)
- P.L. 23 ①17号住居址遺物出土状態 (西より)
②17号住居址, 溝状遺構全景 (南より)
- P.L. 24 ①18号住居址貯蔵穴遺物出土状態 (東より)
②2・18号住居址全景 (北より)
- P.L. 25 ①1号土壇 (北より)
②2号土壇 (北より)
- P.L. 26 ①6号土壇 (北より)
②7号土壇 (北より)
- P.L. 27 ①8号土壇 (南より)
②9・10号土壇 (東より)
- P.L. 28 ①11・12・13号土壇 (北より)
②14・15号土壇 (南より)
- P.L. 29 1号住居址出土土器
- P.L. 30 1号住居址出土土器
- P.L. 31 1号住居址出土遺物
- P.L. 32 2号住居址出土土器
- P.L. 33 2号住居址出土土器
- P.L. 34 2号住居址出土遺物
- P.L. 35 3・4号住居址出土遺物

- P L. 36 4号住居址出土土器
- P L. 37 4号住居址出土土器
- P L. 38 4号住居址出土土器
- P L. 39 4号住居址出土土器
- P L. 40 4号住居址出土土器
- P L. 41 4号住居址出土遺物
- P L. 42 5号住居址出土土器
- P L. 43 5号住居址出土土器
- P L. 44 5号住居址出土土器
- P L. 45 5号住居址出土土器
- P L. 46 5号住居址出土土器
- P L. 47 6号住居址出土土器
- P L. 48 6号住居址出土遺物
- P L. 49 7号住居址出土土器
- P L. 50 7号住居址出土土器
- P L. 51 7号住居址出土土器
- P L. 52 7号住居址出土土器
- P L. 53 8号住居址出土土器
- P L. 54 9号住居址出土土器・9号住居址南P。遺構出土土器
- P L. 55 10・11号住居址出土遺物
- P L. 56 12号住居址出土土器
- P L. 57 12号住居址出土遺物
- P L. 58 13・14号住居址出土土器
- P L. 59 14号住居址出土土器
- P L. 60 16号住居址出土土器
- P L. 61 16号住居址出土土器
- P L. 62 16号住居址出土土器
- P L. 63 16・17号住居址出土土器
- P L. 64 17号住居址出土遺物
- P L. 65 18号住居址出土遺物
- P L. 66 土藏出土土器

P L. 67 覆土出土弥生式土器

P L. 68 覆土出土弥生式土器

P L. 69 覆土出土弥生式土器

P L. 70 覆土出土弥生式土器

I、調査の経過

1、発掘調査までの経過

本遺跡は、栃木県宇都宮市茂原町字花欠に所在し、権現山古墳（前方後円墳）の北部一帯にひろがる遺跡として、すでに栃木県遺跡地図に「権現山北遺跡」として登録され周知されている。一部分の山林を除いては従来畑地として利用されてきたが、1976年11月から、橋本明治氏を組合長とする茂原町花欠開田組合によって開田工事が実施された。工事中、畑の下から多数の土器片と、数基の住居址が露出するに至った。考古学研究者としてこの状況を最初に実見したのは下野考古学研究会の山崎芳家・五十嵐利勝・田熊信之の3氏であった。1977年3月、五十嵐氏は宇都宮市教育委員会を訪れ、遺跡の状況を報告し、直ちに対策を講ずるよう要望した。市教委は現地を調査し、本遺跡が従密に遺構の存在する重要な遺跡であることを確認し、地元関係者と協議の上、田植えに支障をきたさないことを条件に発掘調査を実施することを決定した。

発掘調査は、宇都宮市教育委員会が主体者となり、その委託をうけた久保が調査担当者となって実施されることとなった。

(久保 哲三)

2、発掘調査の経過

1977年3月から、我々宇都宮大学考古学研究会会員は、久保哲三助教授の指導の下に宇都宮市茂原町江連所在の愛宕塚古墳の調査にあっていた。4月上旬、周溝調査の最中に、宇都宮市教育委員会から、愛宕塚古墳の北約0.5kmの地点にある本遺跡が開田のため消滅するので緊急に調査をしてほしいとの要請があった。我々は、古墳調査のあい間に現地を訪れ、ブルドーザーで削平されてプランの明確になった住居址や、散布する多数の土器片を目のあたりにした。早速宿舎での夜のミーティングの際に、発掘調査を引き受けるか否かについて討議した。田植えまでという限られた期間にきわめて僅かな調査費で調査を遂行することには、多くの困難が予想されたがやはりこのまま放っておいては無調査のまま遺跡が破壊されることにもなるので、水田下に沈む前に事前調査をしよう、ということになった。そのため、それまで調査していた愛宕塚古墳の方は、夏季に改めて継続調査することとし、本遺跡の緊急調査に入ったのである。

4月14日から本遺跡の調査を開始した。ブルドーザーにより削平されているため、調査区域のうち南西部は住居址のプランが明確であった。まず、その地区の発掘から取りかかり、併行して、他地区の客土取り除き作業、並びに3mごとに0.5m巾のトレンチを東西に設定し、プラン確認にあたった。その結果、住居址18軒、溝状遺構3本、円形土壇17個が検出された。また、一方では実測のための遺り方の設定を急いだ。当初の発掘期間としては、水田化の期日も迫っていることから、4月末までが限度とされていた。しかし、折悪しく、大学の方の授業がすでに始まっていたことから、調査団の人数が激減し、また、住居址の発掘方法として、一片一片の出土遺物につきレベルを明記し、平面図にその位置をプロットするという手間のかかる方法を取っていたため4月中に調査終了の見通しは立たず、結局は、本遺跡地主である橋本兵治氏の御好意により、開田を1年間見合わせていただくこととなった。それまでには、市教委社会教育課の半田課長、丸山秀彦係長と久保助教授、橋本兵治氏との間で話し合いが持たれ、市教委より橋本氏に保障金を支払うということにより、調査は1年近く延長できることとなった。そのため調査は5月9日に一旦打ち切り、夏季に再開するまで発掘が中断される遺構に対してはある程度の埋め戻しをおこなった。

7月13日、調査は再開された。今回の発掘調査は、愛宕塚古墳調査と併行して行なわれたため、調査団は、研究会員を二分した形で編成された。春から2か月余り放って置かれたせいか、遺跡には雑草が繁茂していた。まず遺跡内の除草作業から始まり、春季調査で発掘が中断していた遺構から手をつけていくことにした。

8月13日から15日までは、お盆休みを取り、調査員は皆帰省の途についた。しかし、16日に現場へ戻ってみると、盗掘に遭っている住居址・土壇があった。我々調査団の手抜きによることではあるが、盗掘するという不心得者がいることには心が痛んだ。以後一切、出土土器はすべて、その日のうちに取り上げ、現場にはなるべく置かないこととした。

調査中は比較的雷雨が多く、夕刻はほとんど毎日と言っているほど見舞われた。また、雨で調査が潰れる日も少なくはなかった。しかし、卒業生や卒論で忙しい4年生の手を煩わし、8月31日には調査はほぼ終了し、宿舎を引きはらった。しかし、まだ完全に終わったわけではなく、その後も各遺構担当者が土曜・日曜ごとに調査に出向き、10月の愛宕塚古墳内部主体調査期間中にも何回となく本遺跡に通り、12月に入って調査はようやく終了したのであった。

(大島和子)

3、発掘日誌抄

オ1次調査

4月14日(木)曇

愛宕塚古墳調査を打ち切り、本遺跡調査にとりかかる。レベル移動。遺り方測量のための基準線を並北に平行して設定する。

4月15日(金)曇のち晴

3mごとに50cm巾のトレンチを東西に入れ、遺構検出をいそぐ。ブルドーザーによりローム面まで削平されているため、発掘区域内の南西部にある2軒の住居址は既に確認されている。西より1号住居址、2号住居址とし発掘調査に入る。並行して遺り方の設定。

4月16日(土)曇のち雨

5m方眼のグリッドを設定、北から南へ1～12、西から東へA～Iとする。新たに3号住居址を掘り始める。夕刻激しい雨に見舞われ作業中止。

4月18日(月)曇

重複関係にある3軒の住居址の平面プランを確認し、北から4号住居址・5号住居址・6号住居址とする。その際石製模造品出土。本遺跡の破壊を市教委に連絡した五十嵐、山崎両氏が来訪し、先土器時代の遺物検出のためのトレンチを掘る。

4月19日(火)晴

4号住居址の北側に、重複関係にある2軒の住居址を確認し、北から7号住居址・8号住居址とする。9号住居址、客土取り除き作業。発掘区域内南東部で重複関係にある2軒の住居址を検出し10号住居址・11号住居址とする。鉄塔下の遺構検出をいそぐ。

4月20日(水)晴

4・5号住居址の新旧関係をサブトレンチを入れて確認、すぐに新しい方の4号住居址を掘り始める。7・8号住居址を切る溝状遺構No1の調査。鉄塔下に4軒の住居址のプラン確認。

4月22日(金)快晴

9号住居址、客土を取り除いたあとの写真撮影。鉄塔下中央の住居址を12号とし平面プランの写真撮影後、発掘調査に入る。

4月23日(土)晴時々曇

専修大学OBの村田・下口両氏来援。16号住居址の発掘調査を担当してもらう。

4月25日(月)雨のち晴

7号住居址の調査に入る。

4月26日(火) 晴

16号住居址の調査はカマドの部分を残しほぼ終了。4号住居址では、カマド東側より環形土器約20個体がまとまって出土。

4月27日(水) 曇

早朝、雀の宮駐屯航空自衛隊の協力によりヘリコプターで遺跡の航空写真撮影。12号住居址、石包丁様の石器出土、県内に類例なし。市教委よりローリングタワー到着。

4月28日(木) 雨のち曇

4号住居址より完形の遺物続出。今月いっぱいでは終わりそうにない。市教委丸山係長と久保先生とで調査期間延長について話し合う。

4月29日(金) 晴のち曇のち雨

調査地区地主橋本兵治氏の御好意により、開田は1年延期となり、調査期間も5月7日まで延長できる。本日、久保先生の受講生多数が来跡し調査を手伝う。

4月30日(土) 晴

1号住居址、写真撮影。平面図取り。ほぼ完了。

5月3日(火) 晴

16号住居址、写真撮影、全作業終了。

5月4日(水) 曇

航空写真撮影のために、遺跡全体の清掃。しかし悪天候のため中止。発掘区南東部は、10・11号住居址の他にもう一軒切り合っており、17号住居址とする。

5月6日(木) 晴

調査者激減する。4・10・13・14号住居址の調査を行なう。14号住居址、遺物の写真撮影。

5月7日(金) 曇のち雨のち晴

3号住居址及び14号住居址発掘完了。2・7・10・11・13号住居址は終了のメド立たず。調査期間あと2日延長する。

5月9日(月) 晴

7・12号住居址、清掃し写真撮影。2・7・10・11・13号住居址は未完掘のまま夏季調査に期待する。9号住居址、エレベーションの一部、12号住居址のカマドも同様とする。午後は宿舎の清掃をし、夜一路大学へ。長かった発掘も一端休止。

オ2次調査

7月13日(水) 快晴

春に続き、調査を再開。愛宕塚古墳の調査と併行しての調査であるため本日の調査者わずか

5名。春に設定した遺り方が使用できるかどうかを確かめる。2カ所破損。春季調査において、完掘されていない住居址から取りかかることとする。9号住居址完了。12号住居址、柱穴完掘後、平面図作成にはいる。調査地区南東部の草取り作業。

7月14日(木) 晴のち雨

トランシットをすえ、水系が直交しているかどうかを確認。10号住居址、周溝を検出。13号住居址、セクションベルトはずし。夕刻雨のため作業中止。

7月16日(土) 晴

12号住居址、カマド切り開始。

7月19日(火) 晴のち雷雨

2号住居址調査の際、内部にもう1軒の住居址を確認する。

7月20日(水) 曇時々雨

12号住居址、カマドセクション写真撮影。午後は愛宕塚調査団も加わり全員で発掘区外へ排土作業。

7月21日(木) 晴

2号住居址の階段状遺構を切る。周溝がその下をまわっている。12号住居址、カマド切り終了、写真撮影、全作業終了。

7月22日(金) 晴

2号住居址の中に確認された住居址を、18号住居址とする。

7月23日(土) 晴

5号住居址を掘り始める。10号住居址、清掃後写真撮影、カマド切り開始。13号住居址、カマドの調査を残すのみ。

7月25日(月) 晴時々曇

15号住居址を掘り始める。5号住居址より高環形土器が数個体まとまって出土。

7月28日(木) 曇時々晴

10号住居址、カマド切り終了、写真撮影、全作業終了。

7月29日(金) 曇時々晴

17号住居址上の客土を取り除く作業。当住居址の範囲確認のため、1m巾のトレンチを東西に設定し掘り下げる。今日も暑い。

7月30日(土) 晴のち曇

5号住居址、高環形土器を主とする土器群検出。

7月31日(日) 晴

17号住居址の北東コーナー検出のため、トレンチを北に拡張する。18号住居址、床面を出し、

貯蔵穴を掘る、管玉1個検出。

8月3日(水) 晴れ夕刻雷雨

4号住居址、カマド切りにはいる。17号住居址は溝状遺構と重複しており、溝状遺構の全容確認のためサブレンチを設定。

8月4日(木) 晴

17号住居址と切り合う溝状遺構No.2の調査にはいる。

8月6日(土) 晴

4号住居址、袖を残しカマド切り完了、写真撮影。休養のため午後の作業中止。ローリングタワー到着。

8月7日(日) 晴

全員で鉄塔下の遺構の清掃、写真撮影。15号住居址、調査完了。18号住居址の床面調査の際、2号住居址の柱穴と思われるピット2個検出。

8月9日(火) 晴

4号住居址、カマドの袖を切る。溝状遺構No.2の写真撮影、平面図取り。

8月10日(水) 晴

全員で2・18号住居址の清掃、写真撮影。

8月12日(金) 晴のち曇のち雨

4号住居址、調査完了。春季に続き、8号土城と、重複関係にある11・12・13号土城の調査にはいる。

8月13日(土)～8月15日(月)

お盆休み

8月16日(火) 雨のち晴

お盆前に検出された5号住居址の高環形土器数個体が盗難に会う。残りの土器を、位置レベルを記入しながら取り上げる。いかんともしがたい気持ちである。

8月20日(土) 曇

昨日まで雨で調査は遅々として進まなかった。7号住居址、春期に引き続き、周溝・貯蔵穴を掘る。17号住居址を掘りはじめる、北壁にカマド確認。

8月21日(日) 曇時々雨

5号住居址、階段状遺構を切った際、高環形土器坏部2枚の上に小形埴形土器が重なって出土。7号住居址南東コーナーに8号住居址のものと思われるプラン確認。1・2号土城、南北にベルトを残し掘り下げる。7号土城セクション取り。

8月22日(月) 晴

13号住居址，カマド切り開始。

8月23日（火）晴

6号土壌を掘り始める。もう秋のけはいだ。

8月24日（水）曇のち雨

5号住居址，調査完了。6号住居址にうつる。台風による雨のため，早めに作業終了。

8月25日（木）曇時々雨

6号住居址，埴形土器ならびに，数個体の高環形土器出土。

8月27日（土）曇時々雨

調査もいよいよ大詰めだ。8号住居址を掘り始める。7号土壌，平面図完了。

8月28日（日）曇一時晴

8号住居址より器台形土器検出さる。15号土壌を掘り進める。

8月29日（月）曇のち晴

6号住居址，写真撮影。17号住居址のカマドより瓦が立って出土する。春季に引き続き11号住居址の調査にはいる。

8月30日（火）曇のち晴

6・17・18号住居址，調査終了。残すは，8・11号の追いこみ。

8月31日（水）

8号住居址，遺物平面図完了。11号住居址貯蔵穴と思われるピット検出。17号住居址，残すは写真撮影。6・17号土壌，調査終了。15号土壌は未終了。テントをはずし，器材の整理，宿舍の清掃をする。4月から数えると，3か月にも及ぶ合宿生活には一応終止符を打つ。しかし，調査未終了の遺構があるので，それらは，9月に入ってから土・日曜に調査を続けることとする。

9月3日（土）晴

午後より現場に向かう。8号住居址，柱穴を掘る。11号住居址，平面図取り，併行して柱穴検出に力を注いだが，確認できず。15号土壌を掘り進める。

9月4日（日）晴

9月とはいえ残暑はきびしい。8号住居址平面図取り，併行して清掃をする。11・17号住居址，写真撮影，調査完了。15号土壌，土取り作業。

このあと，未完掘の遺構調査は，要岩塚古墳発掘と併行して実施し，12月にすべて完了した。

（大島和子）

II. 遺跡をめぐる環境

1. 地理的環境

権現山北遺跡は宇都宮市茂原字^{花久}に所在する。宇都宮市の南端に近く、市街地中心より南へ約9kmの小台地上にある。この小台地は東西280m、南北450m程で標高約83mである。東方0.9kmを田川が南流しており、その氾濫原との比高は約5mである。権現山古墳はこの南端に位置し、今回の発掘調査区はこの北東端にある。広汎に弥生式土器や土師器が散布しており、この小台地全域に集落が営まれたであろうと想像できる。

この南に田川によって形成された段丘崖と、これと平行する西方の浸蝕谷にはさまれた舌状の洪積台地がある。この台地は南は上三川町下神主まで延びており、標高はおよそ85mである。権現山北遺跡をのせた小台地は、この舌状台地の残丘というべきものである。

県中央部平地は関東平野の北端にあたり、鬼怒川、思川及びそれらの支流が南流しており、それぞれ沖積低地と河岸段丘（台地）を形成する。これら河岸段丘の形成と火山灰の堆積とが継起して行われ、形成時期の古い順に宝積寺面・宝木面・田原面・絹島面（沖積低地）の西地形面に分かれる。

鬼怒川東岸氏家町勝山から真岡市西部は宝積寺面である。鬼怒川西岸岡本から上三川にわたる岡本台地は宝木面、この西側田川東岸は田原面に属する。姿川西岸は宝積寺面であり、そして本遺跡をのせる田川西岸、大きく宇都宮市上町から石橋、小山にいたる台地は宝木面である。なお、宝木面層下部は40500±3500 B. P. と推定されている。

田川は現在堤防が築かれ、川幅50m程であるが、その氾濫原は約2kmを割る。また本遺跡の東方、下横田、細土瀬の地に古田川の蛇行をとどめる三日月湖が存在する。本遺跡の北方及び東方の氾濫原は、古代より稲作が行なわれていたであろうが、現在も区画整理された見事な水田地帯となっている。台地上も本調査地例のように開田されてきているが、まだかんびょう作りも盛んである。夏には農家の庭先いっぱいかんびょうが干され一大風物詩の感がある。しかし、目を西方に転じると国道4号線、国鉄東北線が南北に平行して走り、沿線には茂原団地をはじめ大小の住宅がひしめきあっており、さらに東北新幹線が建設中であり都市化の波が着々と押し寄せている。近い将来この台地上にも及ぶものと思われるが、遺跡が破壊されないことを望む。

また、この地の南、上三川町多功の地は東山道の田郡駅家に比定されており、東山道がこの地の附近を通り衣川駅家（現在宇都宮市石井町とする説と上平出町木の川とする説その他があ

る。)に向ったであろうと推定される。

さらに、古代の交通として欠かせない河川交通が考えられ田川がこの地において重要な交通網であったということは、この地の古墳、歴史時代の遺跡が本遺跡を含めてほとんど河岸段丘東岸付近に分布していることからもうかがえる。本遺跡地付近は古代より水陸交通至便な環境にあったといえる。(北井 清)

参 考 文 献

- (1) 栃木県史編さん委員会「栃木県史、資料編・考古一」 1976年
- (2) 宇都宮市教育委員会「宇都宮市瑞穂野団地遺跡」 1978年
- (3) 宇都宮市教育委員会「竹下浅間山古墳」 1976年
- (4) 前沢輝政「下野の古代史(下)」有峰書店 1975年

2. 歴史的環境

本遺跡周辺地域には弥生時代から奈良・平安時代に至るまでの遺跡が多く分布している。なかでも雀宮一帯は、本県弥生後期の標式土器で知られる二軒屋式土器文化圏の中心地であり、同時期の遺跡や散布地が濃密に分布している。

おおまかに本遺跡周辺の遺跡や散布地を通観すると、鬼怒川の支流である田川がつくる河岸段丘上縁辺に近いところには、南北に連絡と古墳が築造されている。一方、姿川がつくる左岸段丘上には、二軒屋式土器をはじめ土師器・須恵器が広範囲に分布している。時期的には、姿川左岸段丘上の文化に先行性がみられる。

以下、順を追って周辺の主な遺跡を紹介する。第1図の1が権現山北遺跡である。

弥 生 時 代

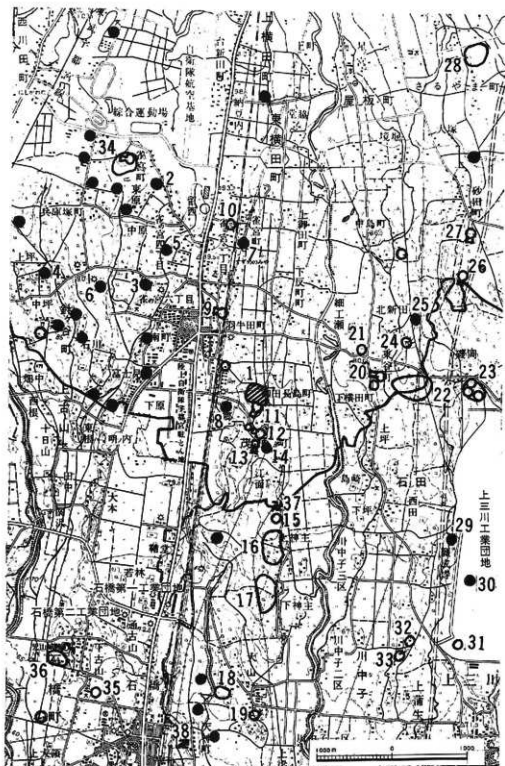
先に述べたように二軒屋式土器文化圏の中心地であり、特に、西原・天狗原・針ヶ谷一帯の台地には弥生後期の大集落址が存在したことを想定させる。

2. 二軒屋遺跡 二軒屋式土器の標式遺跡となったところであり、深鉢形、壺形土器が出土している。宝木段丘東縁に立地し、標高約93メートルである。

3. 天狗原遺跡 二軒屋遺跡の南東約600メートルに位置し、雀宮と安家を結ぶ道路の南側にある。遺跡地は、現在宅地化が進んでおり消滅の恐れがある。宝木段丘東縁近くに立地し、標高約90メートルである。

4. 上坪遺跡 東武宇都宮線安塚駅の北東部に位置し、姿川の左岸低台地上にある。ここは現在畑地と宅地になっている。二軒屋式土器の資料を得ている。

その他、5. 裏山遺跡、6. 双子塚北遺跡、7. 雀宮駅東遺跡、8. 北原遺跡など、雀宮一帯は広範囲な二軒屋式土器の散布地となっている。



第1図 権現山北遺跡付近の遺跡分布図

古墳時代

この地域では、田川左岸は田原面の田原段丘、右岸は宝木面の宝木段丘となっており、それぞれの台地に古墳が主として築造されている。

9. 牛塚古墳 国鉄雀宮駅南方1.2キロの地点、宝木段丘縁辺に近いところに位置する帆立貝式前方後円墳である。木棺直葬と考えられる主体部から江田船山古墳と同範の両面帯神獸鏡を出土し、5世紀末から6世紀初頭に編年されている。同駅北方には、人物埴輪を伴った10歳女塚古墳があった。

11. 権現山古墳 本遺跡の南側に隣接する全長約80メートルの中期型前方後円墳である。前方部は南面している。本古墳は西側くびれ部に大きな盗掘痕がみられるが、主体部は現われておらず、竪穴系の内部施設が想定される。北東方には、陪塚的な存在として小円墳一基がみられる。

12. 大日塚古墳 宝木段丘が谷状に切れ、再び始まる突端に位置する。牛塚型の帆立貝式前方後円墳であり、西面して築造されている。本古墳は後円部に比べ前方部が未発達な古式古墳のようにも見える。本古墳の前方部に接するようにかつて円墳があった。貯水塔建設の際、削平され、その時に銅鏡が出土している。4世紀末から5世紀初めに比定されており、この一帯の古式の様相をみせている。

13. 愛宕塚古墳 大日塚古墳から南方100メートルのところ、陪塚2基を伴って南面する前方後円墳である。本古墳は、昭和52年を通して久保哲三宇都宮大学助教授を主任とし、同大学考古学研究会によって発掘調査がなされた。その結果、普尺を基準尺とした緻密な設計のもとに築造された全長48メートルの前方後円墳であることが判明した。周溝内より底部穿孔の葦形土器をはじめ数個の土器を検出し、また、粘土塊を両小口においた木棺直葬の主体部からは、鏡や玉類などの貴重な資料を得た。栃木県中央部の古墳発生の問題に一つの示唆を与えてくれた意味でも重要な古墳である。現在報告書作成中である。

14. 愛宕塚横遺跡 愛宕塚古墳の東側畑地となっているところであり、宝木段丘の東縁辺に立地する。弥生後期の二軒屋式土器や古式土師器片など表採されている。愛宕塚古墳との関連においても、精査が望まれる。

15. 浅間山古墳 宝木台地東端をさらに南下し、上三川町地内に入ったところに、径約55メートルの大形円墳がある。墳頂平坦部には浅間神社が祭られており、竪穴系の内部施設が考えられる。本墳のまわりに数基の小円墳があり、古墳群を形成している。

16. 上神主古墳群 浅間山古墳を南下したところにある前方後円墳を中心墳とする小古墳群である。中心墳の前方後円墳は全長34メートルの南面して築造された後期型の古墳である。なお、この古墳には埴輪が伴っている。

17 下神主古墳群 浅間山古墳から南へ約600メートルの山林の中にある、10基ほどの小円墳からなる古墳群である。さらに南下し、石橋町大山地内には、18二の谷沼古墳群や19浄法寺西古墳のような小円墳がみられる。

20 笹塚古墳 田川左岸、田原段丘に築造された全長100メートルの中期型前方後円墳で西面している。木遺跡とは、ちょうど田川を隔てて対岸に位置する。本古墳は、南側くびれ部から後円部にかけて大きな盗掘痕がみられるが、主体部は現われていない。竪立系の内部施設が想定される。また、逆盾形の肩溝を持ち、墳丘には県内では古式の埴輪をめぐらしている。本古墳の南西方に道路により半壊した古墳一基が現存している。そして、北西方向、宇都宮南高校南に径40メートルの円墳、21双子塚古墳がある。

22 東谷古墳群 笹塚古墳東方、宇都宮市と上三川町との境界地区に位置し、全長40～50メートルの2基の前方後円墳と8基の円墳よりなる。東谷古墳群をさらに東に向くと、磯岡の地内に円墳3基からなる23磯岡古墳群がある。また、東谷古墳群から北方に向くと円墳の24桜船荷古墳、土師の遺跡、25立野遺跡、前方後円墳の26琴平塚古墳、同じく前方後円墳の27平塚古墳とつづき、前方後円墳3基、円墳23基からなる28さるやま古墳群に遡る。

29 願成寺遺跡 上三川町願成寺の日産自動車株式会社栃木工場敷地内にあり、段丘最端部の田川の支流無名瀬川左岸に立地する。和泉期に比定される土器が検出されている。また、同敷地内、南東方に鬼高期の土器を出した大野遺跡がある。

30 上蒲生遺跡 願成寺遺跡南東方、日産自動車栃木工場敷地内にある。工場建設に伴い、栃木県教育委員会によって発掘調査された。鬼高期後半に位置づけられる2基の住居址が切り合い関係で検出されている。さらに南に下ると31荒田古墳群や32北原1号墳、33北原2号墳などの小円墳がみられる。

34 兵庫塚古墳群 本古墳群は、この地域では異例な分布を示している。姿川左岸段丘上に位置する、全長約100メートルの中期型前方後円墳を中心に、60m前後の牛塚型の帆立貝式前方後円墳2基からなる古墳群である。

35 横塚古墳 宝木段丘西縁辺を姿川沿いに南下し、石橋町下古山の地内に前方後円墳の横塚古墳があった。現在は、その姿をみることはできないが、石橋中学校校庭の片隅に鏡石が安置されている。北東方段丘縁辺に小円墳数基からなる36大夫塚古墳群がある。

歴 史 時 代

37 上神主庵寺 浅間山古墳の北隣りの宝木段丘縁辺にある。人名瓦を出土することでよく知られた庵寺跡であるが、このため、盗掘濫掘で遺溝はかなり痛められている。伽藍配置は不明であるが、7世紀末の建立と考えられる。

38 多功庵寺 国鉄石橋駅東側の現在は、天神社境内となっているところに位置する。これ

も伽藍配置は全く不明であるが、出土する瓦は奈良時代後期を上限としているという。

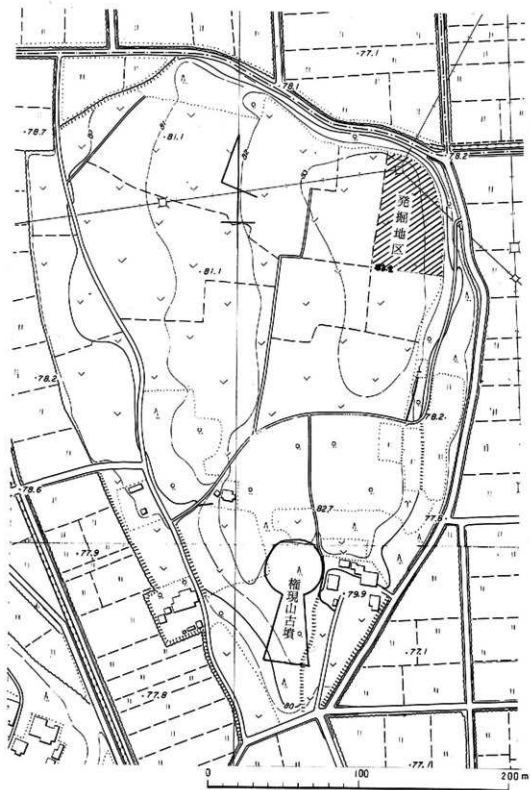
以上、主なるものとして紹介してきたが、この他にも多くの土器散布地や古墳がある。

弥生後期には、当時、最も栄えたところがこの雀宮一帯であろう。それが衰えることなく次の古墳時代へと引きつがれ、そして上神主庵寺へとつづく。このように繁栄の真中に、この権現山北遺跡が形成されている。本遺跡の性格を探るうえでも、雀宮一帯を一つの中心文化圏として把らえ、究明の手を伸ばす必要があろう。

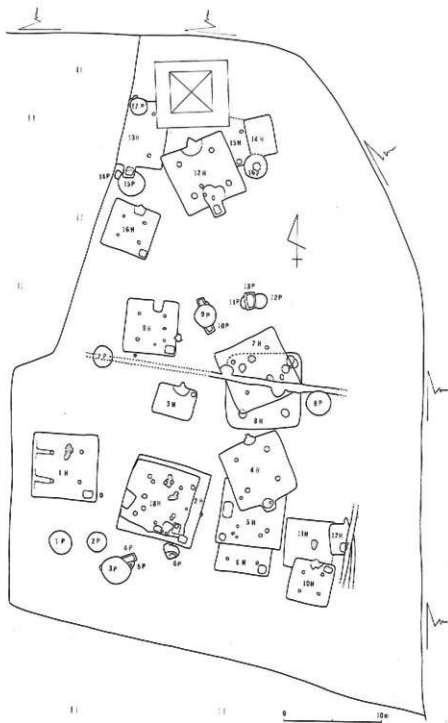
(石川 幸夫)

参考文献

- (1) 栃木県史編さん委員会「栃木県史、資料編・考古一」 1976年
- (2) 倉田芳郎他「栃木日産遺跡」 1971年
- (3) 大和久震平、埴静夫共著「栃木県の考古学」 1972年
- (4) 宇都宮市教育委員会「雀宮牛塚古墳」 1969年
- (5) 宇都宮市瑞穂野土地区画整理組合・宇都宮市教育委員会「宇都宮市瑞穂野岡地遺跡」 1978年
その他、文化庁文化財保護部編集「全国遺跡地図」 9 栃木県 1977年



第2図 権現山北遺跡付近の地形図



第3図 発掘調査区域内遺構分布図

Ⅲ 遺構と遺物

1. 住居址

1号住居址 (第4図, P L, 3, 4)

位置と規模 本住居址は発掘区の南西端にあり、東隣りに2号・18号住居址が、また南側には1号土壇がある。平面プランは南北6.8m、東西6.55mとほぼ方形で44.5㎡の面積を有する。主軸の方向はほとんど北向きである。

壁 ブルドーザーでルーム面まで削平されたため本来の壁高は不明であるが、残存していた壁高は、約25cmで、ルーム層を剥り込んでいる壁の傾斜は約80度である。

周溝 全周にわたって掘りめぐらされている。幅は20~30cm、深さ15~20cmで壁の直下にある。周溝は全体的にはほぼ等幅・等深を保ち、南東部にある貯蔵穴に直接つながっている。特に注目すべきことは西壁側の周溝から柱穴P₁、P₄へ向かって垂直にはり出している周溝があることである。この巾、深さは四方をめぐっている周溝と同じである。その用途目的は排水や間じきりなどに関係するものであろうか。

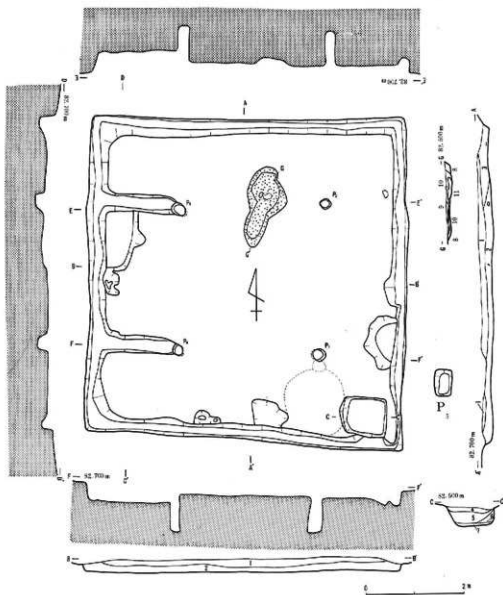
柱穴 主柱穴が4つあり、各柱穴とも幅は25~30cmの円および楕円で深さは各70~75cmである。

P₁、P₂、P₃はそれぞれ本住居址の内側へ向かって斜めに掘り込んでおり、P₂はほぼ垂直に掘られている。

各柱穴は本住居址の方形プランの対角線上にあり、各コーナーより2.5mのところにある。間隔は2.9~3mであり各柱穴の位置関係は一辺2.9~3mの方形をなしている。

P₄は本住居址から約1mほど離れた南東部に位置し長方形の平面プランを有している。深さは約50cmであり、その用途目的は不明である。

No.	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	備考
P ₁	楕円形	30×25	70	柱穴
P ₂	円形	20×20	70	〃
P ₃	楕円形	30×25	70	〃
P ₄	円形	25×25	75	〃
P ₅	長方形	35×50	50	用途不明



第4図 1号住居址実測図

貯蔵穴 南東部コーナー付近に75×100cmの長方形の形状をもった貯蔵穴があり、深さは東側が40cm西側が50cmで西へ向かって傾斜している。

埋没状態は自然埋没であり、7の土層の後に壁制よりロームを多量に含んだ6が、先にくずれ落ちて堆積した後、床面側より5が徐々に堆積していったものと思われる。

床面 貼り床は無く北壁側、東壁側が相対的に数cm低くなっている。南東部の南壁付近に1m四方の範囲で約5cm～10cmの高さのロームの高い面がある。本住居址の出入口口かもしれない。なお西壁の中央部に40～50cm四方の範囲において焼土の混入している黒色土が分布してい

るのがみられる。

炉址 炉は中央より約1 m北側へよってつくられ、平面プランは不整形で楕円が2つ結合した形をしている。全体的な大きさは全長165 cmで北側の短軸は80 cm、南側の短軸は45 cmである。2つの炉があったためこのような不整形になったのであり、9、10の焼土混入の黒色土の切りあいの関係より南側の炉の方が古い。南側の炉址は長軸100 cm、短軸45 cmの楕円形で深さは30 cmである。南側より新しい北側の炉は長軸100 cm、短軸80 cmの楕円で深さは15 cmである。

焼土である11を囲むように焼土を混入した黒色土の9・10層がみられ、この9・10の切りあいの関係では、9が10を切っているために10の土層が新しく、北側の炉が南側の炉よりも新しいという新旧関係がわかる。8は熱によって固く変化したローム層である。なお南側の炉に炉石がみられた。

覆土

- 1 茶褐色土層（ロームブロック・ローム粒混入）
- 2 茶褐色土層（ローム粒多量混入）
- 3 黒色土層（ローム粒、焼土混入）

2の土層が最初に堆積し、その後1が堆積したものであるが炉付近においては焼土を含んだ3の土層が堆積している。

堆積状態より自然埋没と思われる。

遺物 完形の埴形土器と多数の破片が出土している。

器種は、埴・甕・高環・器台などで特に高環の数が多し。また石製模造品が多く出土し、勾玉2個・剣形品1個・白玉6個の9個がみられる。

土器（第5図、P.L29～31、表1）

1は甕形土器で南東コーナーの貯蔵穴内より出土し、頸部・口縁部が残っていたが他に接合できる土器片は見られない。

2は甕形土器で中央より50 cmほど西の床面より数 cm ういた状態で口縁部が残っていた。

3は埴形土器で北東コーナー付近の床面より10 cm ういた状態で頸部・口縁部が残っていた。

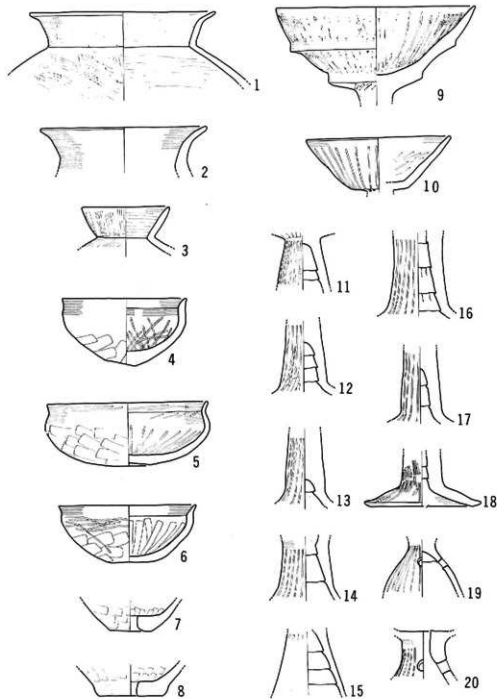
4は埴形土器で東壁より1 m離れたほぼ中央部より、床面より5 cm ういた状態で破片で出土した。

5は北壁付近より10 cm 床上の範囲で出土し接合できた。

6は埴形土器でほとんど完形として残っていた。床上より15 cm ほど上にあり北壁にほとんど接して出土した。

7は南東コーナー付近の貯蔵穴内より出土した甕の底部である。

8は北壁より1 m 離れ、床面より15 cm ういた状態で出土した甕の底部である。



第5图 1号住居址出土土器实测图

9は貯蔵穴内より出土した高环形土器の坏部である。
 10は東壁中央部より約50cm西へ向かって散っていた土器片の接合が高环形土器の坏部となった。床面より数センチういていたがほとんど床面直上といえる。坏部のみが遺存していた。
 11は北壁中央部で上述した6の土器に隣接して出土した高坏脚部の上部で、床より15cmういた状態で出土した。

12は東壁中央より50cmほど離れ、ほとんど床面直上より出土した高环形土器の脚部である。
 13は北西コーナーより1m中心へ向かった位置で15cm床面よりういた状態で出土した高坏形土器の脚部である。

14は西壁中央より2m中心へ向かった位置で床面より5cmういた状態で出土した高坏形土器の脚部である。

15は南西コーナーより1m中心へ向かった位置で床面より15cmういた状態で出土した高坏形土器の脚部である。

16は前述の8の甕形土器に隣接して出土した高坏形土器の脚部で床面より15cmういていた。
 17は中央より西へ1mよった位置で床面より20cmういて出土した高坏形土器の脚部である。
 18は北西壁より1m中央へよった位置で床面より10cmういて出土した高坏形土器の脚部割部である。

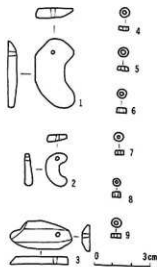
19は中心部より2m北へよった位置で床面より20cmういた状態で出土した高坏形土器の脚部割部である。

20は北東壁にほぼ接した位置で床面より20cmういた状態で出土した器台形土器の脚部である。
 21は北西コーナー付近より地表面直下から出土した器台形土器の脚部である。

石製模造品

1は北壁中央より1mの位置で15cmほどういて出土した。
 2は東壁中央より2mの位置で10cmほど床からういて出土した。
 3は半分欠けた状態で北壁より50cm離れた位置で10cm床面よりういて出土した。
 4～9の白玉はほとんど北東壁に近い状態で6個まとまって出土した。床面より10cmほどういていた。

本住居址の概要は以上の通りであり、和泉期後期のものと思われる。



第6図 1号住居址出土石製模造品実測図

(加藤修一)

表1 1号住居址出土土器

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・部成・色調	備考
1	甕	(19.0) — —	胴部は、外傾して立ち上がり、口縁部は、さらに外方へ開く。胴部は、球形状を呈すとされる。	口縁部外面は縦方向のクシ目の後ヨコナデ、内面横方向のクシ目の後ヨコナデ。胴部内外面ともクシ目。	胎土は、砂粒、雲母、長石を含む。焼成良好。黄褐色を呈す。外面に黒斑を有す。	クシは、5本又は6本1組。口縁部に残存。
2	甕	(17.0) — —	口縁部は、大きく外反する。	口縁部内外面ともヨコナデ。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。黄褐色を呈す。	口縁部に残存。
3	甕	9.0 — —	口縁部は、外傾して「く」の字状を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ、その境外面縦方向のクシ目、内面横方向のクシ目。胴部外面クシ目、内面ナデ調整。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	
4	甕	12.6 5.8 3.8	体部上半は、直立し、下半は、直線的に底部に到る。口縁部は、内面に稜を有し、やや外傾する。底部は、平底であるが斜め。つくりは、粗雑。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、内面不定方向のヘラミガキ、上部クシ目。胴部ヘラケズリ。	胎土は、砂粒を含む。焼成普通。外面赤褐色、内面茶褐色を呈す。	片残存。
5	甕	(16.4) 6.3 4.5	扁平な半球形状の体部を有し、口縁部は、内面に稜を有し、外傾する。底部は、上げ底。	口縁部内外面ヨコナデの後横方向のヘラミガキ。体部外面ヘラケズリ、内面は、ナデ調整の後ヘラミガキ。底部ヘラケズリ。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。褐色を呈す。	片残存。
6	甕	13.9 5.9 4.6	半球形状の体部を有し、口縁部は、内面に稜を有し、外傾する。底部は、平底。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ヘラケズリで上位はその境ヘラミガキ、内面放射状にヘラケズリ、底部ヘラケズリ。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。黄褐色を呈す。	完形。
7	甕	— — 4.2	底部は、平底で、直径1.4cmの孔を穿つ。	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部ヘラケズリの後ナデ調整。孔は、外方から穿つ。	胎土は、砂粒、砂礫を含む。焼成普通。赤褐色を呈す。	
8	甕	— — 6.5	底部は、平底で、直径1.5cmの孔を穿つ。	外面ナデ調整、内面ヘラナデ。底部ヘラケズリの後ナデ調整。	胎土は、砂粒、砂礫を含む。焼成普通。赤褐色を呈す。	
9	高坏	20.5 — —	外面に、断面三角形の凸部を2条持つ。器壁は、厚い。	外面ヨコナデの後ヘラミガキ、内面放射状のヘラミガキ。	胎土は、砂粒、砂礫を含む。焼成普通。赤褐色を呈す。	外面にすす状炭化物が付着。胴部を欠く。
10	高坏	15.0 — —	底面外面に稜を有し、体部は、直線的に外方へ伸びる。	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ調整の後ヘラミガキ、内面ナデ調整の後粗いヘラミガキ。	胎土は、砂粒を少量含むが精選されている。焼成良好。黄褐色を呈す。	片残存。胴部を欠く。

番号	器種	法量	器形の特徴	調査の特徴	胎土・焼成・色調	備考
11	高 杯	— —	やや開き気味の胴。	外面ナゲ気味のヘラケズリ。	胎土は、砂粒、長石を含む。焼成普通。暗褐色を呈す。	内面に細粒み取。 坏部を欠く。
12	高 杯	— —	柱状の脚部で下方で曲折する。	外面クレ目の後ナゲ気味のヘラミガキ。	胎土は、砂粒を含む。焼成普通。赤褐色を呈す。	内面に細粒み取。 坏部を欠く。
13	高 杯	— —	柱状の脚部で、下方で曲折する。	外面ナゲ気味のヘラミガキ	胎土は、砂粒、砂礫を含む。焼成普通。黄褐色を呈す。	坏部を欠く。
14	高 杯	— —	下方に開く。やや太目。	外面ナゲ気味のヘラケズリ。	胎土は、砂粒を含む。焼成不良。黄褐色を呈す。	内面に細粒み取。 坏部を欠く。
15	高 杯	— —	「ハ」字状に開く脚部。	刺痕が強く、明瞭には解らない。	胎土は、砂粒、砂礫を含む。焼成不良。黄褐色を呈す。	内面に細粒み取。 坏部を欠く。
16	高 杯	— —	柱状の脚部、やや太目。	外面、ナゲ気味のヘラケズリ。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	内面に細粒み取。 坏部を欠く。
17	高 杯	— —	柱状の脚部で、下方で曲折する。	外面クレ目の後ナゲ調整。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	内面に細粒み取。 坏部を欠く。
18	高 杯	— (12.0)	柱状の脚部から強く曲折して脚部を形成する。	外面ハケ目。脚部ヨコナゲの後一部ヘラミガキ。脚部内面ヨコナゲ。	胎土は、砂粒、長石、砂礫を含む。焼成普通。赤褐色を呈す。	内面に細粒み取。 片残存。 坏部を欠く。
19	器 台	— —	内湾して、下方に大きく開く脚部で、内孔を穿つ。	外面ヘラミガキ、内面ナゲ調整。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。黄褐色を呈す。	内孔の数は、3個と思われる。
20	器 台	— —	下方に開く脚部で3個の内孔を穿つ。受部と脚部を貫く孔径は、1.5cm。	外面ヘラミガキ。	胎土は、砂粒、雲母、長石、石英を多く含む。焼成不良。黄褐色を呈す。	

表2. 1号住居址出土石製模造品

番号	種類	計測値 (mm)				備考
		(長さ)	(巾)	(厚さ)	(孔径)	
1	勾玉	36.0	— 20.05	— 5.0	— 2.1	
2	〃	17.0	— 11.0	— 4.0	— 2.0	
		(長さ)	(巾)	(厚さ)	(孔径)	
3	剣形品	33.0	— 15.0	— 4.0	— 2.0	
		(直径)		(厚さ)	(孔径)	
4	白玉	5.0	—————	2.0	— 2.0	
5	〃	5.0	—————	2.0	— 2.0	
6	〃	5.0	—————	2.5	— 2.1	
7	〃	4.5	—————	2.5	— 1.9	
8	〃	4.0	—————	3.0	— 1.5	
9	〃	5.0	—————	2.0	— 1.8	

2号住居址 (第7図, P.L. 4・5・24)

位置と規模 本住居址は、発掘区の南部中央に位置する。18号住居址と西壁を共有して重複しており、本住居址は18号住居址を拡張したものと思われる。西3mに1号住居址、東1mに5号住居址が並び、南壁の東部に接して6号土塼がある。南北7.9m、東西7.9mの正方形を呈し、面積は62㎡を有し、発掘された住居址の中では最も大きい住居址である。主軸方向はN-15°Eを示す。

壁 ローム面まで削平されていたため正確な壁高を知る事は出来ないが、残存壁高は、平均23cmを測る。ほぼ垂直に立ち上がっているが西壁はゆるやかに外傾している。

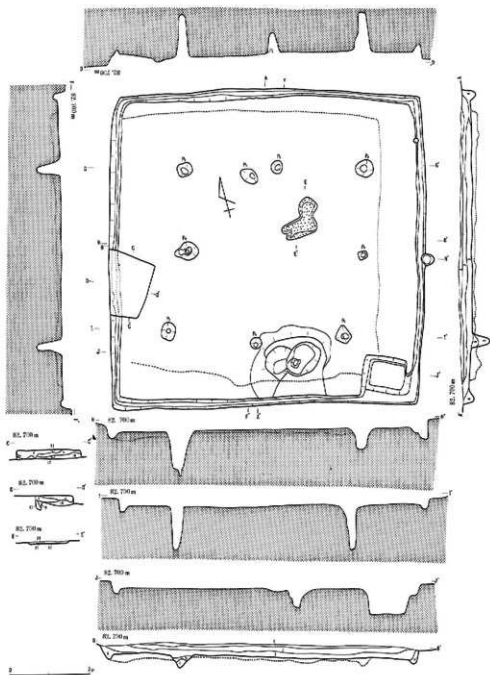
周溝 巾18~22cm、深さ約9cmで、南東コーナーの貯蔵穴付近を除いて、壁直下を一周している。周溝のレベルは南壁と東壁をめぐる周溝が他の周溝より2~4cmほど高い。断面形はU字形を呈する。

柱穴 主柱穴P₁・P₂・P₃・P₄はほぼ正方形に配置され、P₁とP₂、P₃とP₄は4.5m、P₁とP₃、P₂とP₄は4.3mの間隔である。各コーナーの主柱穴の間にはP₁・P₄・P₃・P₂があり、P₂の40cm西側にはP₃が並んでいる。P₁・P₄は、主柱穴を結ぶ直線よりも30cm西に寄って位置している。また、P₁・P₃の延長線上東壁には、32cm×30cm深さ27cmの浅いピットがあるが、柱穴とは呼び難い。各コーナー間にある柱穴は、主柱穴と比べて小さく、深さも半分しかなく、支柱的な性格を持つが、P₃だけは例外で主柱穴と同じほどの大きさと深さを持っている。

No	形状	大きさ(cm)	深さ(cm)	その他
P ₁	方形	40×32	104	2号住居址床面より
P ₂	円形	32×28	48 (推定)	"
P ₃	円形	46×42	98	"
P ₄	方形	22×20	50 (推定)	"
P ₅	円形	36×34	106	"
P ₆	方形	28×28	48 (推定)	"
P ₇	楕円形	36×42	110	"
P ₈	不整形	60×46	112 (推定)	2つのピットが切り合っている
P ₉	楕円形	48×34	60 (推定)	2号住居址床面より

P₈は2つの柱穴が切り合っており、新旧関係は不明であるが、住居のたてかえが行なわれたことを推測させる。P₂・P₄・P₆・P₈・P₉は18号住居址床面検出中に発見された。

貯蔵穴 南東コーナーに位置し、深さ48cm、124cm×92cmの長方形を呈する。貯蔵穴の東側と南側は、周溝底に続く一段低い面から落ち込んでいる。底は平坦で長方形である。また、南壁



第7图 2号住居址实测图

近く中央よりやや東寄りに長辺92cm短辺72cm深さ20cmの楕円形のピットがあるがその壁はつかみにくく、大きさは不明瞭であった。周囲には、高さ約4cm、巾30cm～60cmの堤状の盛土がしてある。盛土はローム土が、18号住居址の覆土である黒褐色土の上に貼ってあった。このピットの中側には直径20cmの方形のピット（深さ23cm）が掘り込まれている。これらのピットが何のために掘られたのか不明である。

床面 18号住居址の床面を6cm～20cmほど、ロームブロック（2cm～3cm）とローム粒の混入した黒褐色土で貼り床にして、拡張している。住居址の中央部は踏みしめられて堅いが、周囲は軟く床面が不明瞭であった。

炉址 住居址の中央よりやや北側に偏在し、床面には160cm×34cmの長楕円形に焼土が広がっていた。110cm×30cmの不整形に掘り込んであり、厚さ5cmの焼土を多量に含んだ暗褐色土が見られ中心部はよく焼けていた。炉址のセクションは3層に分けることが出来る。

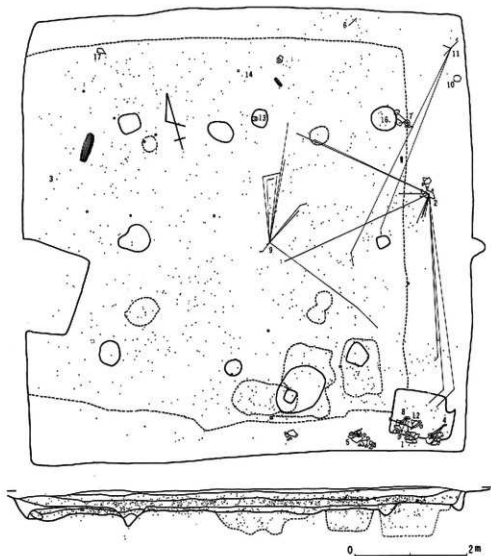
- 14 暗褐色土層（焼土多量混入、軟かい）
- 15 赤褐色土層（焼土混入、16よりやや軟かい）
- 16 赤褐色土層（焼土混入、硬い）

特殊遺構 本住居址で特徴的なことは、西壁中央に西辺170cm、北辺132cm、東辺143cm、南辺70cm、高さ約20cmの「階段状遺構」が設けられていることである。当初、住居址を構築する際に掘り残されたものであろうと考えていたが、セクションを見ると、大きなロームブロック層の下には住居址の床面に続く黒褐色土層が認められ、また黒色土と黒褐色土を含んだ周溝が、この遺構の下を通過していた。したがって、住居構築後、この階段状遺構を取り付けたものと考えられる。セクションは次のように分けられた。

- 7 ローム大ブロック層
- 8 暗黄褐色土層（小ロームブロック、黒褐色土混入）
- 9 黒色土層
- 10 ローム中ブロック層（ブロック間は黒色土）
- 11 ローム小ブロック層（8よりロームブロックは密に存在）
- 12 暗茶褐色土ブロック層
- 13 黒褐色土層（ローム粒、ロームブロック混入）

覆土

- 1 黒褐色土層（ローム粒微量混入）
- 2 黒褐色土層（ローム粒少量混入、焼土炭化物少量混入）
- 3 茶褐色土層（ローム粒混入、焼土炭化物混入）
- 4 暗茶褐色土層

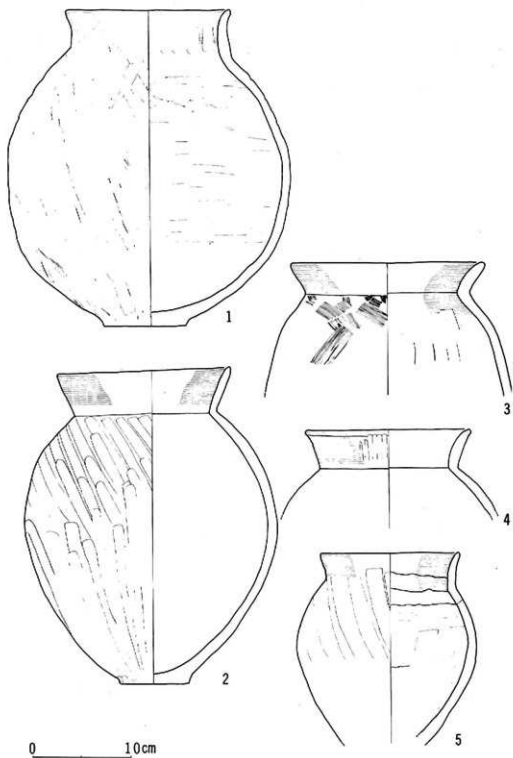


第8図 2・18号住居址遺物出土状態実測図

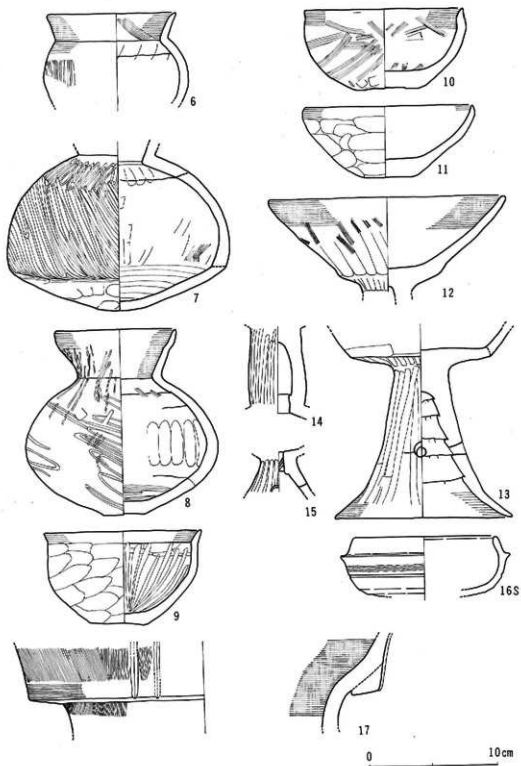
5 褐色土層 (ロームブロック, ローム粒多量混入)

6 茶褐色土層 (ローム粒多量混入, もろい)

1 はしまりのない黒褐色土層で攪乱を受けている。2-6が自然堆積土であり、まず柱穴が6と5で埋まり、4が住居址の周辺から入り込んだ後、3, 2の順に自然埋没している。5のロームブロックは、柱穴の壁が崩れたものであろう。2, 3と床面に近くなるにつれて、ローム粒の混合度が高くなっている。



第9图 2号住居址出土土器实测图



第10图 2号住居址出土土器实测图

遺物の出土状態 3の茶褐色土層中には炭化物や焼土が見られ、焼失家屋であることを物語っていた。P₁の西側、P₂の北側、P₃の南側に木炭が出土し、P₁の西側のものは丸太の形(15cm×50cm)で残っており、P₁で使われた柱であったと思われる。他のものは、小さいので柱というよりも上屋葺材の一部と思われる。焼土は特に、住居址の北西コーナー付近、北壁中央部、P₃の東側付近に散布していた。



第11図 2号住居址出土石製模造品実測図

遺物 土師器・須恵器・弥生式土器・石製模造品が出土し、土師器の破片が大部分をしめる。遺物は3層の茶褐色土層中に含まれるものが多い。貯蔵穴の西側、南壁際には5の小形甕形土器が土圧で割れて、つぶれた状態で検出された。またP₃の東側には、7の埴形土器が割れた状態で、東壁北部には、10の碗形土器が完形のまま置かれた状態で出土した。これらの土器は、床面直上から出土し、住居址の廃絶の時点での原位置のものと考えられる。貯蔵穴の南側から、貯蔵穴内部へ崩れ落ちた形で土器群が出土した。土器は土圧で割れており、復元できるものは、1の甕形土器4の甕形土器、8の埴形土器、12の高環形土器である。その中で完形となり得たものは、1の甕形土器のみであった。3の甕形土器の破片は西壁近く中央よりやや北側から出土した。13の高環形土器の脚部は、P₃の中、床面よりも低いレベルで逆立ちで検出されたが、これは住居址の埋没過程でピット内に転り込んだためであろう。14の高環形土器の脚部(柱状部のみ)は、住居址の北部中央から、15の器台形土器の脚部(上部)は、貯蔵穴の中から検出された。

2の甕形土器、9の埴形土器、11の小形鉢形土器の接合関係図を見ると、住居址の東側に、かなり広い範囲にわたって土器片が散在している。11の小形鉢形土器の破片は、みな床面から10cmほど上の同レベルで出土しているが、2の甕形土器と9の碗形土器の土器片のレベルは、住居址の中央部に位置しているものが、周縁にあるものよりも低い傾向にある。これらの土器は住居廃絶後投棄されたものであると思われる。6の小形甕形土器は、北壁東部から、17の壺の口縁部は、北西コーナーやや東よりの地点から、床面より20cm以上浮いて2層の茶褐色土層中から出土した。17の口縁部は、棒状浮文が付された複合縁であるが、7号住居址からこれと同一個体と思われる土器片が出土している。

須恵器は、2片出土している。そのうち器形が高環の環部とわかる16の須恵器の破片は、P₂の上面から床面より8cmほど浮いて検出された。(第9・10図、PL32~34、表3)

石製模造品の白玉は、2個出土している。出土地点は、住居址北部中央と、東部やや南寄りの地点で、どちらも床面直上から出土した。

以上が2号住居址の概要であり、和泉期のものと考えられる。

(野沢悦子)

表8 2号住居址出土土器

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	粘土・焼成・色調	備考
1	甕	16.9 32.3 8.2	頸部が立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。胴部最大径(28.9)は中央にあり、球形に近い。やや突き出しきみの平底をもつ。器面凸凹はげしい。	口縁部内面は、ヨコナダの後ヘラナデ。胴部内面ヘラナデ。上縁にヘラ先のひっかけ痕がある。外面は口縁部ヨコナデ、胴部縦方向のヘラケズリ。底部ヘラケズリ。	粘土は、砂粒、長石粒、小石を含む。焼成普通。胴部外面一部黒色、その他は、赤褐色を呈す。	赤彩。 貯蔵穴より出土。
2	甕	(17.5) 31.6 (7.0)	口縁部「く」の字状に外反し、胴部は、ゆるやかな張りをもって底部に至る。胴部最大径(25.6)は中央より上にある。やや突き出しきみの平底をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半部は斜方向、下半部は縦方向のヘラケズリ。下縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	粘土は、微砂粒、雲母粒を少量含む。焼成普通。黒褐色を呈す。	片残存。
3	甕	(19.6) —	口縁部は肥厚して、「く」の字状に外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ヘラナデ、外面ハケ整形。	粘土は、砂粒、長石粒、雲母粒、石英粒を多量に含む。焼成普通。内面赤褐色、外面黄褐色一部黒色。	口縁部から頸部を残存赤彩。
4	甕	(17.0) —	口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部外面ヨコナダの後一部縦方向のヘラミガキ。内面は割落がはげしく調整不明。	粘土は、小石、砂粒を含む。焼成不良。黒褐色を呈すが外面一部黄褐色。	口縁部から頸部を残存貯蔵穴より出土。
5	小形甕	14.2 —	口縁部は、非常にゆるく外反する。	内面は、口縁部ヨコナデ、胴部縦方向のヘラナデ。外面は頸部を縦方向にけずった後、口縁部ヨコナデ。口縁部と胴部の接合痕が残る。	粘土は、小石、砂粒、雲母粒、石英粒を多量に含む。焼成不良。赤褐色を呈すが外面一部黒色。	底部欠損。
6	小形甕	10.1 —	口縁部は「く」の字状に外反する。	内面は、口縁部ヨコナデ、胴部上位の粘土接合部、ヘラナデ。外面は、口縁部から頸部にかけてヨコナデ。一部ハケ整形。	砂粒を含む。焼成普通。内外面褐色一部黒色。	底部欠損一部すずり付着。
7	甕	— — —	胴部は、強い張りを持ち、底部近くで急激にすぼむ。胴部下縁に髪を有す。	内面は、胴部上位指面によるおさえ、以下はヘラナデ、底部はヘラケズリ。外面は、胴部丁寧なヘラミガキ、底部ヘラケズリ。	粘土は、微砂粒を含む。焼成良好。赤褐色を呈し、器面に光沢がある。	胴部片残存赤彩。
8	甕	(9.4) 14.2 3.2	「く」の字形の頸部を呈し、口縁部はわずかに内凹する。そろばん形の胴部をもつ。底部は平底。	内面は、口縁部ヨコナデ、胴部中央部指面によるおさえ、底部ハケ整形。外面は、口縁部ヨコナダの後、頸部に明瞭な細いヘラのひっかけ痕を残す。胴部斜方向のヘラミガキ。	粘土は、砂粒、石英粒、雲母粒を少量含む。焼成普通。内面黄褐色、外面赤褐色を呈す。	片残存赤彩。 貯蔵穴より出土。
9	甕	12.3 7.3 4.4	口縁部が短く外反する。口縁部内面に髪を有す。底部は平底。	内面は、口縁部ヨコナデ、体部上縁部ヘラケズリの境、中心に向かって放射状のヘラミガキ。外面は、口縁部ヨコナデ、体部、底部ヘラケズリ。	粘土は、砂粒、小石を少量含む。焼成普通。赤褐色を呈すが、口縁部黒褐色。	
10	甕	12.3 6.1 5.0	口縁部は、短く垂直に立ち上がる。底部は凹みをもち、原手。	口縁部ヨコナダの後、ヘラ状工具によりなで、不定方向に調整痕を残す。底部外面はドーナツ状の粘土ヒモを貼りつけその後ヘラケズリ。	粘土は、砂粒、雲母粒、石英粒を含む。焼成普通。内面黒色、外面黒褐色を呈す。	

番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	調 整 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
11	小形鉢	13.2 5.5 3.9	口縁部は、内湾する。底薄平手。	内面の口縁部底部ヨコナデがわかるが、以下は調整のため調整不明。外面は、口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ。	胎土は、雲母粒、石英粒を含む。焼成普通。赤褐色を呈す。	口縁部一部欠損。赤彩。
12	高 杯	(18.6) —	杯部は、外面に丸味をおびた縦がつき、内湾気味に外傾する。	口縁部内外ヨコナデ。体部内面割茶のため調整不明。外面は、体部中央から斜め上へ、ハケ整形の後、縦から斜め上へ、ヘラケズリ。	胎土は、小石、砂粒を含む。焼成普通。赤褐色を呈すが外面一部黒色。	杯部 ^{1/2} 残存。赤彩。貯蔵穴より出土。
13	高 杯	— (14.0)	巾が広く、ゆるやかに外反する脚部をもつ。円孔(径 1.2)を2つ有す。	胴部内面は割部がヨコナデ。下から2段は輪形み、その上は巻き上げの取跡が顕著に残る。外面は、割部ヨコナデの後、縦方向のヘラケズリ。	胎土は、砂粒、雲母粒、小石を含む。焼成普通。黄褐色を呈す。	杯部底部と脚部。P・2の内から出土。
14	高 杯	— —	脚部は、円筒が伸縮みにのび、急に折折して広がると思われる。	内面は、ヒモ痕み痕が一条残る。外面は、縦方向のヘラケズリ。	胎土は、石英粒、雲母粒を少量含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	脚部円筒部。赤彩。
15	器 台	— —	円孔(径 1.2)を3つ有すと思われる。	外面に縦方向のヘラケズリ。	胎土は、砂粒、雲母粒、石英粒を含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	胴部上部。赤彩。貯蔵穴より出土。
16S	須恵器有蓋高杯	(11.0) —	たねめがりは、内傾し端部は丸い。受溜を持ち、その下には、輪指き波状文が施されている。その下にヘラ指き沈線を描く一菜めぐらす。	底部外面ヘラケズリ。	胎土は、緻密。焼成良好。青灰色を呈す。	杯部 ^{1/2} 残存。
17	甌	— —	棒状浮文を付した複合口縁をもつ。	口縁部に胎土帯を外側に重ねて口縁部をつくっている。複合部上部ハケ整形、下部ヨコナデ。頸部ハケ整形。	胎土は、小石、砂粒を含む。焼成普通。黄褐色を呈す。	口縁部 ^{1/2} 残存。

表4 2号住居址出土土製模造品

番号	種 類	計 測 値 (mm)			備 考
		(口径)	(厚さ)	(孔径)	
1	白 玉	5.0	1.5	1.4	黒褐色
2	〃	4.5	1.3	2.0	黒褐色

3号住居址(第12図, P.L.6)

位置と規模 本住居址は、発掘地区の中央より南、2号住居址の北側5m、9号住居址の南側3m、8号住居址の西側3.5mに位置する。南北2.9m、東西3.9mの隅丸長方形を呈し、面積は11.3㎡を有する。主軸はN-13°Eである。発掘地区の中では、最も小さい住居址である。

壁 ローム面まで削平されているため正確なところはわからないが、残存壁高は28~30cmである。北東隅と南西、北西の隅付近で内弯しているほかは、ほぼ垂直に立ち上がっている。

周溝 認められなかった。

柱穴 柱穴と思われるピットはなく、住居址外を捜したが認められなかった。性格不明のピットが北東隅、カマドより東へ約40cmの所に1個検出された。長径46cm、短径26cmの楕円形を呈している。このピット内の覆土には、焼土や炭化物があり、周囲にも焼土が認められた。これは、カマドに付属するものと考えられる。

床面 住居址中央よりピットに向かってやや下方に傾斜しているが、全体的にほぼ水平である。北西隅には、焼土及び少量の炭化物が50×36cmの広がりで見とめられ、さらに40cm東には、炭がカマドを囲むように出土している。他にも、少量ずつ住居址中央部等に散在している。

カマド 北壁中央よりやや東に位置し、壁を外へ75cm、巾120cm掘りこんでいる。焚口には3カ所の落ちこみがあり、約27cm掘りこまれている。さらに、奥へやや上がりながら火床が55cm続いている。C-C'で、左側に巾15cm、高さ10cmの粘土で作られた袖らしいものがあったが、右側では確認できなかった。張出し部の回りには、巾15cm~25cm、厚さ45~50cmで粘土が張ってある。純粋な粘土は上部のみで、下部の粘土が粗く、若干の焼土が含まれている。

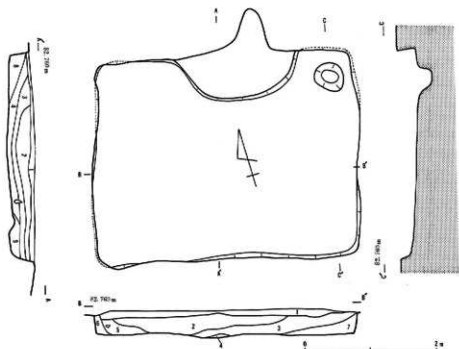
覆土 住居址内の覆土は、東西南北に設定したセクションベルトにおいて9層に分かれた。

- 1 客土層(黒色土にロームブロック混入)
- 2 黒褐色土層(黒色土に多量のローム粒混入)
- 3 黒褐色土層(2に比べ、ローム粒が大粒となり、所々にロームブロック混入)
- 4 黒褐色土層(3よりロームブロック多量混入)
- 5 黒色土層(微量のローム粒混入)
- 6 暗黄黒色土層(壁からの流れ込みと思われる、黒色土に多量のローム混入)
- 7 暗茶褐色土層(2よりロームが全面にある)
- 8 黒褐色土層(4よりさらにロームブロック多量混入)
- 9 黒褐色土層(焼土が混入)

堆積の状態から自然埋没と思われる。

カマド内の覆土は、南北1本、東西2本のセクションベルトにおいて15層に分かれた。

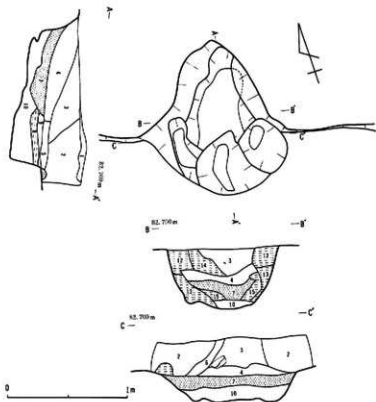
- 1 客土層



第12図 3号住居址実測図

- 2 茶褐色土層 (ローム粒多量, ロームブロック若干混入)
- 3 茶褐色土層 (ローム粒多量, ロームブロック若干混入, 炭化物及び焼土を含む)
- 4 赤褐色土層 (黒色土中に多量の焼土を含む)
- 5 暗茶褐色土層 (3より焼土が多量に混入)
- 6 黒褐色土層 (多量の黒色土に微量のローム粒, ロームブロック混入)
- 7 赤色土層 (焼土)
- 8 灰白色土層 (粘土)
- 9 黄褐色土層 (10より黒くない)
- 10 黄褐色土層 (ローム, 若干の黒色土混入)
- 11 黄褐色土層 (ロームに黒色土混入)
- 12 黄色土層 (粘土)
- 13 黄色土層 (12と比べ, 純粋な粘土でなく中に焼土を含み, 粒が粗い)
- 14 黄黒色土層 (粘土に黒色土と少量の焼土混入)
- 15 灰褐色土層 (粘土の中に若干の焼土を含む)

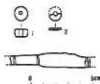
遺物 須恵器の坏1個, 刀子1個, 滑石製白玉1個, 他は土師器片のみ240点である。他の



第13図 3号住居址カマド実測図



第14図 3号住居址出土土器実測図



第15図 3号住居址出土
鉄製品・玉実測図

住居址に比して、著しく遺物が少ない。

1 環型土器 カマド内はほぼ中央部，第3層より出土，口径13.2cm，器高4.3cm，底径7.5cm，器形は碗形に近い形をとる。口縁部が一部破損しているがほぼ完形に近い。平底である。器体外側には，ろくろ目の跡が4段にはっきり残っており，下部から底部にかけてへら削りが施されている。内側にも，外側と同様にろくろ目の跡が見られる。胎土は粗い長石粒，石英粒混入，砂粒が多い。焼成は不良。(本遺跡から出土した他の須恵器と比べて，かなり良くない) 灰白色を呈する。

2 石製模造品 白玉，南壁中央部，床面より16cmういて出土，直径11mm，厚さ6mm，孔径2.5mm，灰色。

3 鉄製品 刀子，北壁より125cm，西壁より55cm，ほぼ床面直上より出土。現存身長63mm，元幅8mm，元重ね2.5mm，先幅8.5mm，先重ね3.5mm，茎の元幅7mm，茎の元重ね2mm，鋒はふくら枯れである。

以上が本住居址の概要であるが，本址と直接むすびつく遺物や，遺構が17号住居址と類似していることなどから，国分期のものとみて大過ないと思われる。（青柳三恵子・増山美年子）

4号住居址 (第16図, P L. 6~8)

位置と規模 本住居址は、8号住居址の1m南方に隣接し、5号住居址の北壁を切って構築されている。プランは一辺約6.2mの正方形で、南壁ほぼ中央に、巾1.3m、長さ0.8mの張り出し部を有する。南壁は張り出し部に近づくにつれて、胴張りとなり、中央付近では、30~50cmの張りをもつ。このため全体的には南北に長い長方形プランにもみえる。主軸方向は、N-20°-Wで、12号住居址、13号住居址などと、ほぼ同じ向きである。張り出し部を含めた面積は、約39.5㎡と、比較的大型である。ルーム地山への掘り込みは、35~40cmで、5号住居址の床面よりも約10cm深い。

壁 全体的に遺存状態が良く、80~85度の傾斜で、鋭どく立ち上がっている。ただし5号住居址と切り合っている箇所では、壁の上から2/3ほどが5号住居址の覆土である黒褐色土となり、当時の状態を検出するのに困難であった。壁高は全体的にほとんど差はないが、北西コーナー付近がやや高めである。

周溝 U字溝で、整美で遺存状態のよい住居址のわりには明確さを欠き、張り出し部を含めた南壁および西壁南部では確認されず、また北西コーナーで途切れている。北壁ではカマドの中に入らず、袖部の直前で途切れている。深さは10cm前後で、ほぼ一定しているが、幅は一様でなく広い所で20~25cm、狭い所で10~15cmを測る。特に東壁中央部は幅50cmほどの突出部をつくっている。

柱穴 主柱穴が4個検出され、それぞれの中心は一辺3.3mの正方形の頂点に位置する。また形状と深さから、明確な中端をもち、深めのP₁・P₂と、下端が広く浅めのP₂・P₁とに分類できる。しかもそれぞれが対角線上に位置しているのが、特徴的である。張り出し部には径1m前後の不整形で、深さ80cm近いピットが検出された。西側に床面から5~6cm低い所で幅20cm前後の棚状の段を有し、あとは底に向ってすぼまる逆円錐状となる。なお、このピットの東壁には5号の柱穴と思われるピットが半載で検出されている。

4号住居址柱穴一覧

No.	形状	大きさ(cm)	深さ(cm)	その他
P ₁	円形	43×42	51cm	
P ₂	不整形	63×62	37cm	
P ₂	円形	47×45	75cm	
P ₁	不整形	47×48	35cm	

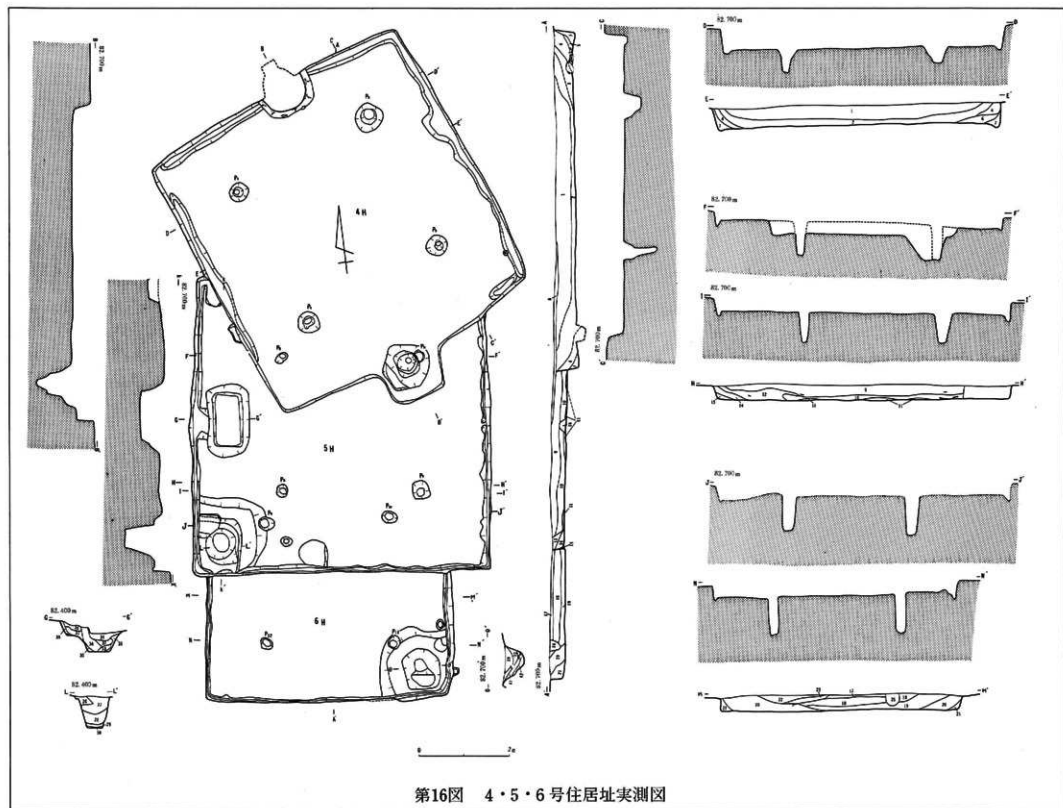
床面 中央部とカマド前面の踏み固めが強く、堅緻であるが壁際や張り出し部周辺はやや軟弱である。レベルは西壁中央近くがやや低く、北東コーナー付近が高い。しかし4柱穴に囲ま

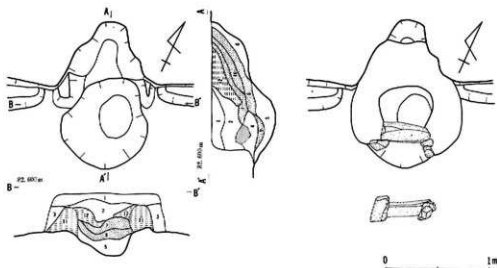
れた部分は、かなり平坦で、高低差も2～3cmしかない。出入口に関連した設備と思われるものは検出されなかったが、南壁では振り出しピットが中央にあるし、付近の踏み固めも弱いのではまず考えられず、西壁あるいは東壁にあったものと考えられる。なお北壁および東壁の北東コーナー近くでは、炭化材が検出され、また床面には全体的に焼土と炭化物のちらばりがみられるため、本住居は焼失したものと考えられる。

カマド 北壁のやや東よりに設けられており遺存状態は、比較的良好であった。北壁への掘り込みは約1mで、煙道部が台形状に突出して切り込まれている。切り込み底部面は住居址の床面より10cmほど高い平坦面となっており、煙道部掘り込みは、約60度の傾斜で立ち上がる。火床の掘り込みは径1.7m、深さ約40cmの大きな鍋底状を呈する。また北壁への切り込み部両コーナーには、ハードルームを削り出した突出部を設けている。長さは両方とも約40cmぐらいで、床面との比高差は壁際で20cm、先端部で10cmを測る。これは袖の基部としたものであり、カマド構築の計画性がうかがわれる。袖は突出した基部を覆うように粘土で造られている。(第17図-11層)袖の先端には長さ45cmの凝灰岩と、その両面にやや小さめの凝灰岩が出土したが、これらは、焚口部をコの字状に高架していたものが崩れたものと考えられる。なお凝灰岩は切り石で、加工した際のノミの痕が認められた。天井部は粘土で構築されているが(第17図-12層)やはり燃焼部に向って崩れている。燃焼部は火床の掘り込みに約20cm近くの厚さでロームブロックの混った土を埋めて仕立てられており(第17図-5層)、その上層に厚さ10cm近くの焼土層が確認できた(第17図-9層)。また煙道部にも厚さ10cmほどで約35度の傾斜で立ち上がる焼土層が(第17図-10層)確認でき、カマドの使用状態がうかがわれる。

- 1 黒褐色土層 (ローム粒, 焼土若干混入)
- 2 黒褐色土層 (ローム粒, 焼土, 炭化物少量混入)
- 3 暗褐色土層 (ローム粒, 炭化物少量混入)
- 4 褐色土層 (焼土, 炭化物少量混入)
- 5 褐色土層 (ローム小ブロック多量混入)
- 6 暗赤褐色土層 (焼土少量混入)
- 7 赤褐色土層 (焼土多量, 炭化物混入)
- 8 赤褐色土層 (焼土多量, 炭化物混入)
- 9 赤色土層 (焼土) (炭化物, 灰, ローム小ブロック混入, 焼けている)
- 10 赤色土層 (焼土) (炭化物混入, バリバリした層)
- 11 灰褐色土層 (粘土混入, 粘性強い)
- 12 茶褐色土層 (焼土, 炭化物少量, 粘土, ローム粒混入, 粘性強い)

覆土 住居址内の覆土は、東西・南北に設定したセクションベルトにおいて7層に分層さ





第17図 4号住居址カマド実測図

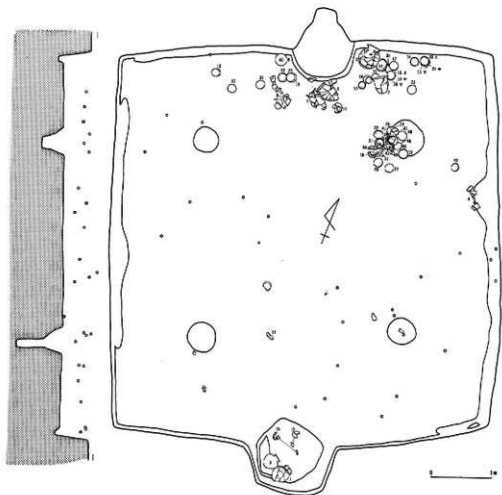
れた。

- 1 黒色土層
- 2 黒褐色土層（ローム粒多量，焼土，炭化物を少量含む）
- 3 淡褐色土層（焼土，炭化物を比較的多量に含む）
- 4 暗黄褐色土層（ローム粒を若干含む）
- 5 暗赤褐色土層（焼土をきわめて多量に含む。カマドからの流れを考えられる）
- 6 褐色土層（焼土，炭化物を多量に含む）
- 7 黄褐色土層（小ロームブロックを多量に含む，ローム壁崩壊時のものと考えられる）

以上の，堆積状態より，本住居が，自然に埋没したことが考えられる。

遺物 本住居址からは，土器・石製模造品・鉄製品が出土した。土器と石製模造品の出土量は本遺跡で最も多く，鉄製品についても，最も明確な出土を示している。

土器はすべて土師器であり，個体数は6,70点にのぼるものと思われる。このうち図示できたものは，54点あり，そのほとんどが床面直上かそれに近いものである。なお覆土の中間層からの土器の出土は少なく，むしろ上層からかなりの破片が出土していたが，図示できるものはなかった。床面からの出土状態をみると，カマド周辺，北東柱穴周辺，および張り出しピット上面の3箇所に集中しており，4柱穴に囲まれた中央部からはほとんど出土していないことが知られる。本住居址が焼失家屋である可能性の強いことを考えると，これらはほぼ当時の生活状態を留めているとみてよく，住居内空間の利用状況が想定できる好資料である。出土土器個々の詳細は，別表にまとめたので，ここでは，出土状態を，器種別に述べてみたい。出土した器



第18図 4号住居址遺物出土状態実測図

種は、甕・甌・埴・坏の4種である。甕は球胴甕が4点、長胴甕が2点、小型甕が3点出土した。球胴甕は2がカマド東側床面、1、3が張り出しピット西側の棚状部より、それぞれ横転した状態で出土した。1、3はおそらく、棚状部に、並べて添えてあったものと思われる。長胴甕は、5、6がカマドの真正面に横転して並んでいた。カマド内部からの土器の出土が全く無かったことより、これらはカマドから外されて前面に置かれたものと考えられる。小型甕は全てカマド周辺より出土した。なお長胴甕5・6と、球胴甕1・3の出土状態はそのまま煮沸甕と貯藏甕の分化を示していると言えよう。甌は大小2点出土した。7は大型でカマド東側から横転して出土した。8は小型で、カマド西側の壁下に倒立して出土した。埴は2点出土し、12が、カマドのすぐ東、13がカマドの約1m西である。坏は、総数41点と最も多く、その出土状況は杜撰であった。まず最も集中していたのは北東柱穴周辺であり、計20個体の坏が、2、

3個ずつに重なった状態で出土した。その状態は“よく整頓された”という感が強く、恐らくこの柱下がいつもの置き場所だったのであろう。次に多いのは、カマドの周囲である。ここで、重なって出土したのは、カマドのすぐ東側の16, 14, 36と、カマドと北東コーナーの中間壁下の33, 21, 53とである。その他は単独でバラバラ出土しておりあたかも整頓を怠ったかのようである。張り出しピットの中は、ほとんど遺物がなかったが、覆土中間層から環の破片が出土した。この破片がほぼ床面と同じレベルで出土した35の環に接合し、ピットは、当時、開口していたことが考えられる。ところで本住居址の環は分類すると、Ⅰ類—半球形状のもの、Ⅱ類—外面に稜を有して口縁部が内傾するもの、Ⅲ類—外面に稜を有して口縁部が、外反するものとなり、それぞれ18点、20点、3点を数える。これらの環を整理してみると、Ⅰ類とⅡ類は、蓋と身のセットではないかと考えられる。その理由としてⅠ類とⅡ類の絶対数が近似的にあり、まったく同じつくりで、しかも黒色処理している17と34の様に、充分セットとして考えられるものがある点、さらに口径の平均値をみたところⅠ類がⅡ類より1.66cm大きく、蓋として充分機能できる点、などが挙げられる。残念なことにⅠ類とⅡ類がセットされて出土した例はなく決定さを欠くが、北東柱穴周辺の一帯は示峻的である。ここからはⅠ類が8点、Ⅱ類が11点、Ⅲ類が1点の計20点出土している。そして39—41—44, 47—40, 48—46—45, のようにⅡ類が—かたまりで重ねられ、Ⅰ類は26—20, 24—31のように、やはり—かたまりで、Ⅱ類をとり囲むようであった。つまり、このような峻別した置き方はそれぞれの機能の違いを意識してのことではなからうか。(第19—23図, P L 35—41, 表5)

石製模造品は計20点出土し、その内訳は有孔円盤8点、剣形品4点、白玉8点である。図示はできなかったが、小破片も2・3点出土した。石材質は、すべて滑石で灰褐色あるいは、緑褐色を呈している。有孔円盤は大小さまざまで、形状も1のようにだ円形を呈するものもある。剣形品は比較的規格性があり、長さ3cm前後、幅2cm弱を測る。白玉は13のみが特に大きい。他は全て径5mm前後である。ただし厚さにはバラエティーがある。白玉の製作技法については、径が等しいものが多いこと、ときどき側面に段差が認められること、同じ個体でも厚さが変わっていることなどからして棒状のものを輪切りにしていたものと考えられる。石製模造品の出土状態は、そのほとんどが覆土の中間層あるいは上層であり、床面からは剣形品の破片であると考えられる12のみであった。しかし本住居に伴うことはまず疑いなく、長い年月の間に浮上したものと考えられる。位置的には南東柱穴周辺が、特に多く、他のものについても土器の多い所から外れているのは注目に値する。つまり、最も日常的な遺物である土器からかけ離れた位置にあることは、それらが非日常的、たとえば、祭祀的な遺物であることと無関係ではないだろう。

鉄製品は鎌1点、鏃2点が出土した。鎌は、刃先がやや内反りし、基端部におり返しを有す

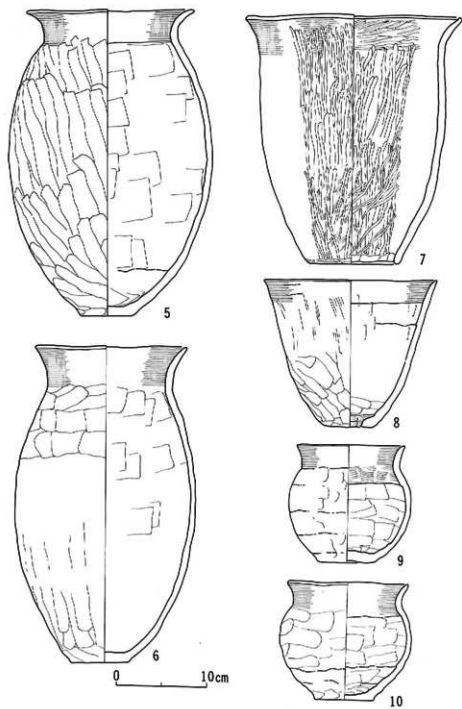
る。出土地点は住居址中央やや西よりで、床面より17～8cm浮いていた。鎌はどちらも尖根式で、2が北東コーナー近くより床面から33cm浮いて、3が鎌のすぐ南より床面から38cm浮いて出土した。なお計測値は別表にまとめた。

以上が、本住居址の概要であるが、時期的には、土器からみて鬼高期中ごろのものと考えられる。

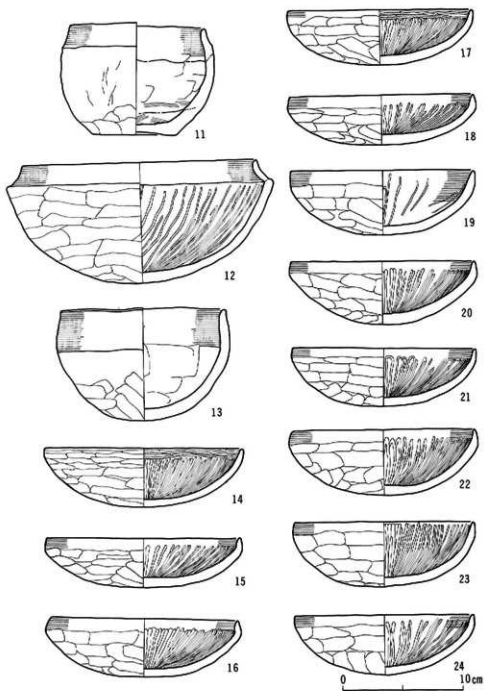
(梁木 誠)



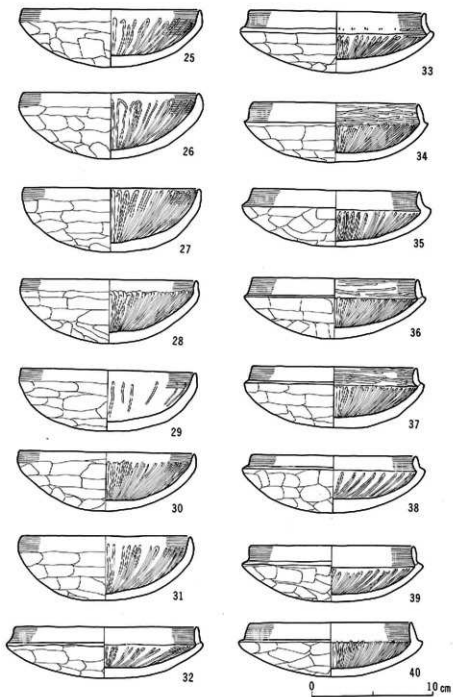
第19图 4号住居址出土土器实测图



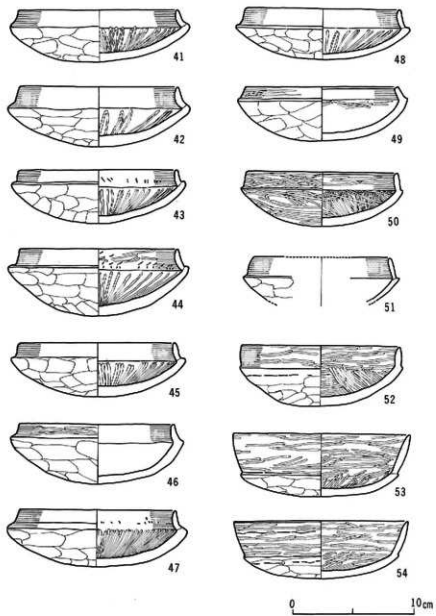
第20图 4号住居址出土土器实测图



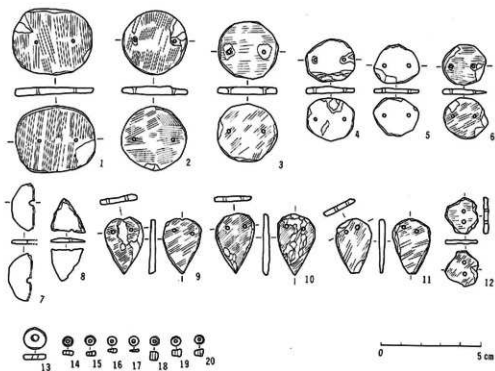
第21图 4号住居址出土土器实测图



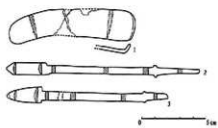
第22图 4号住居址出土土器实测图



第23图 4号住居址出土土器实测图



第24图 4号住居址出土石製模造品実測図



第25图 4号住居址出土鉄製品実測図

表5. 4号住居址出土石器

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・泥成・色調	備考
1	甕	19.3 33.9 6.8	口縁部は、外脣して立ち上がり、端部に、稜を有す。胴部は、球形を呈し、ほぼ中程に最大径(30.3)をもつ。底部は、やや突出する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、上位が、横方向のヘラナデ。以下は不明。外面は、全面ナデの後、縦方向のヘラミガキ。底部外面もヘラミガキ。	胎土は、少量の砂礫と雲母末を含む。泥成やや良好。赤褐色で部分的に、黒褐色を呈す。	外面赤褐色か？
2	甕	18.8 33.7 6.6	頸部が、直立し、口縁部が、ゆるく外反する。口唇部は、短かく直立し、外面に凹縁が、めぐる。胴部は、球形を呈し、ほぼ中程に最大径(30.3)を有す。底部は、やや突出する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、横方向のヘラナデ。外面は、全面ヘラケズリの後、下半部を中心に、斜方向のヘラミガキ。底部外面は、ヘラケズリ。	胎土は、少量の砂礫を含む。泥成やや良好。内面褐色、外面は赤褐色で、部分的に黒色を呈す。	外面赤褐色か？
3	甕	15.6 28.8 6.8	口縁部は、外脣して立ち上がり、端部に凹縁が、めぐる。胴部は、やや上位に最大径(27.3)を有し、球形を呈す。底部は、突出する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、横方向のヘラナデ。外面は、上位が、横方向、以下縦方向のヘラケズリで、その後、全面に粗いヘラミガキ。底部外面ヘラケズリ。	胎土は、微砂粒、雲母末を多量に含む。泥成良好。黄褐色で、部分的に黒褐色を呈す。	
4	甕	(15.0) — —	口縁部は、外脣して立ち上がり、端部に凹縁が、めぐる。胴部は、球形を呈すと思われる。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、横方向のハケメ、外面は、縦方向のヘラケズリ。	胎土は、砂粒を少量含む。泥成良好。淡黄褐色を呈す。	外面にすす状炭化物付着。
5	甕	18.0 33.8 5.6	頸部が、やや直立し、口縁部が、大きく外反する。胴部は、反割を呈し、ほぼ中程に最大径(22.3)を有す。底部は、わずかに突出する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、横方向のヘラナデ、外面は、縦方向のヘラケズリで、底部近くでは、横方向となる。底部外面ヘラケズリ。	胎土は、砂粒を多量に含む。泥成良好。暗褐色を呈す。	
6	甕	16.5 35.0 6.2	口縁部は、ゆるく外脣して立ち上がり、端部に、反割を呈し、ほぼ中程に最大径(20.0)を有す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、横方向のヘラナデ、外面は、上位が、横方向、下位が、縦方向のヘラケズリで、中位は、不明。底部外面ヘラケズリ。	胎土は、砂粒を多量に含む。泥成不良。暗褐色を呈す。	外面にすす状炭化物付着。
7	瓶	23.5 27.4 9.7	口縁部は、外反し、端部に凹角。胴部は、ほぼ垂直に下がり、下半部が、すぼまる。底部は、筒抜け。最大径は、口縁部にある。	内面は、口縁部横方向、胴部縦方向のヘラミガキ。孔部ヘラナデ。外面は、口縁部ヨコナデ、胴部全面縦方向のヘラミガキ、下半部下にヘラケズリ痕、下半縦方向ヘラミガキ。	胎土は、少量の砂粒を含む。泥成良好。褐色を呈す。	
8	瓶	19.1 16.3 5.3	胴部から口縁部が、直線的に外上方へのびる。球形を呈す。底部は、平底で、中央に径3cm前後の円孔を有す。小型。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、縦方向のヘラナデ。外面は、ヘラケズリの後、上半は、ナデ調整を施す。底部外面ヘラケズリ。	胎土は、砂粒、雲母末を含む。泥成良好。淡赤褐色を呈す。外面に混斑有り。	内面全体に、炭化物が付着する。
9	小形甕	11.9 13.0 6.0	口縁部は、外脣して立ち上がり、端部に、稜を呈し、ほぼ中程に最大径(13.7)を有す。底部は、やや上げ底気味。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、上位にハケメを残し以下横方向のヘラナデ。外面は、つくねと指ナデ。外面ヘラケズリ。	胎土には、砂礫、石英粒・雲母末などを含む。内面は、黒褐色、外面は暗褐色を呈す。	
10	小形甕	13.3 13.0 6.4	口縁部は、外脣して立ち上がり、端部に、稜を呈し、ほぼ中程に最大径(14.7)を有す。底部は、やや突出する。つくりは、粗雑。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、横方向のヘラナデ。外面は、横方向のヘラケズリとナデ調整。器面の凹凸が、著しい。底部外面ナデ調整。	胎土には、砂粒と雲母末を含む。泥成良好。淡赤褐色を呈す。外面に、混斑有り。	内面全体に、炭化物が付着する。

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
11	小形瓶	11.0 9.1 6.9	口縁部は、内傾する。胴部は、球形を呈し、ほぼ中腹に最大径(12.8)を有す。底部は、やや上げ気味。つくりは、粗雑。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、横方向のヘラナデで、底部には、ハケミが覗く。外面は、ホナデで、下部は、ヘラケズリ。底部外面木炭痕。	胎土は、若干の砂粒と雲母末を含む。焼成やや不良。黄褐色を呈す。	
12	瓶	19.3 10.0	口縁部は、体部との境外面に絞をもって、強く内傾する。体部から底部は、半球形状を呈し、大型。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、ナデ調整の後、全面を、縞文風にヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂粒と石英粒、雲母末を含む。焼成良好。暗赤褐色を呈し、部分的に黒褐色を呈す。	
13	瓶	13.5 9.3	半球形状を呈し、口縁部は、やや内傾気味。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、横方向のヘラナデ。外面は、体部上位がナデ調整で、以下ヘラケズリ。	胎土は、砂粒、石英粒、雲母末を含む。焼成良好。内面黒褐色、外面黄褐色を呈す。	
14	杯	16.3 4.8	扁平な、半球形状を呈す。	内面は、口縁部を横方向にヘラミガキした後、放射状の密なヘラミガキ。外面は、全面ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂粒を少量含む。焼成良好。黒色を呈し、光沢がある。	内外面黒色処理。
15	杯	15.9 4.1	扁平な、半球形状を呈し、口縁部は、ほぼ直立する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、微砂粒、雲母末を含む。焼成良好。暗赤褐色を呈し、底部外面に黒斑有り。	
16	杯	15.4 4.8	扁平な、半球形状を呈し、口縁部は、内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状の密なヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、微砂粒、雲母末を含む。焼成良好。暗赤褐色を呈す。	
17	杯	15.3 4.5	扁平な、半球形状を呈す。	内面は、口縁部を横方向にヘラミガキした後、放射状の密なヘラミガキ。外面は、口縁部ヨコナデの後、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、微砂粒を少量含む。焼成良好。内面および口縁部外面黒色、その他暗褐色を呈す。光沢がある。	内面黒色処理。
18	杯	15.3 4.1	扁平な、半球形状を呈し、口縁部は、直立する。口縁部は、尖る。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、微砂粒、雲母末を含む。焼成良好。暗赤褐色を呈す。	
19	杯	15.2 5.3	半球形状を呈し、口縁部は、尖る。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状のヘラミガキと思われる。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、微砂粒、石英粒、雲母末を含む。焼成良好。暗赤褐色を呈す。	
20	杯	13.2 5.2	半球形状を呈し、口縁部は、やや内傾する。口縁部は、尖る。やや厚手。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、微砂粒、雲母末を少量含む。焼成良好。暗赤褐色を呈し、底部外面に黒斑有り。	

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
21	坏	15.2 4.8 ・	半球形状を呈し、口縁部は、直立する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、花卉状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂粒、雲母末を含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
22	坏	15.1 5.4 ・	半球形状を呈し、口縁部は、やや内傾する。口唇部は、尖る。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、花卉状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂粒、雲母末を含む。焼成良好。暗赤褐色を呈し、底部外面に黒斑有り。	
23	坏	14.8 5.3 ・	半球形状を呈し、口唇部が、尖る。	内面は、全面密な放射状のヘラミガキ。外面は、口縁部ヨコナデの後、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂粒、石英粒、雲母末を少量含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
24	坏	14.7 5.0 ・	半球形状を呈し、口縁部は、わずかに直立する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂粒、雲母、石英粒を少量含む。焼成良好。暗褐色を呈し、底部外面に黒斑有り。	
25	坏	14.7 4.8 ・	半球形状を呈し、口縁部は、直立する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、花卉状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂粒、雲母末を含む。焼成良好。暗褐色を呈し、底部外面に黒斑有り。	
26	坏	14.5 5.5 ・	半球形状を呈し、口唇部が、尖る。厚手。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、花卉状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂粒、石英粒、雲母末を含む。焼成良好。暗赤褐色を呈し、底部外面に黒斑有り。	
27	坏	14.5 5.3 ・	半球形状を呈し、口唇部が、尖る。厚手。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、花卉状と放射状のヘラミガキの組合わせ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂粒、雲母末を含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
28	坏	14.4 5.2 ・	半球形状を呈し、口縁部は、ほぼ直立する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状の密なヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、少量の砂粒と雲母末を含む。焼成良好。暗赤褐色を呈し、底部外面に黒斑有り。	
29	坏	14.4 5.0 ・	半球形状を呈し、口縁部は、ほぼ直立する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、やや粗い、放射状ヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、少量の砂粒と雲母末を含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
30	坏	14.4 4.9 ・	半球形状を呈し、口縁部は、直立する。口唇部は、尖る。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂粒、雲母末、石英粒を含む。焼成良好。暗褐色を呈し、底部外面に黒斑有り。	

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
31	坏	13.9 5.3 ・	半球形状を呈し、口唇部は、尖る。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状と花卉状ヘラミガキの組合わせ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂糖、雲母末を含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
32	坏	14.9 4.2 ・	体部外面に稜を有す。口縁部は、やや内傾して立つ。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状と花卉状ヘラミガキの組合わせ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、微砂粒、石英末、雲母末を含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
33	坏	14.5 5.0 ・	体部外面に、稜を有す。口縁部は、外湾気味に、内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、花卉状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、微砂粒、雲母末を含む。焼成良好。暗赤褐色を呈す。	
34	坏	13.8 4.9 ・	体部外面に、鋭い稜を有す。口縁部は、内傾し端部が尖る。	内面は、口縁部が横方向、底面が放射状の密なヘラミガキ。外面は、口縁部ヨコナデの後、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂糖を少量含む。焼成良好。内面および口縁部外面黒色で光沢有り、その他黄褐色を呈す。	内面黒色処理。
35	坏	13.8 4.7 ・	体部外面に、稜を有す。口縁部は、外湾気味に、内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状と花卉状のヘラミガキの組合わせ。外面は、ヘラケズリ。	胎土は、砂糖を多量に含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
36	坏	13.7 5.0 ・	体部外面に、稜を有す。口縁部は、内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状の密なヘラミガキで、口縁部にも鋭い横方向のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は横方向。	胎土は、砂糖を含む。焼成良好。内面暗赤褐色、外面暗黄褐色を呈す。	
37	坏	13.6 5.0 ・	体部外面に、稜を有す。口縁部は、外湾気味に、内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状の密なヘラミガキで、口縁部にも鋭い横方向のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は横方向。	胎土は、微砂粒、雲母末を含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
38	坏	13.6 4.7 ・	体部外面に、稜を有す。口縁部は、内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、花卉状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂糖を含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
39	坏	13.5 4.6 ・	体部外面に、鋭い稜を有す。口縁部は、やや内傾し、端部が、尖る。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、微砂粒を含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
40	坏	13.4 4.5 ・	体部外面に、稜を有す。口縁部は、内傾し、端部が、鋭い。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状の密なヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、微砂粒を含む。焼成良好。暗赤褐色を呈す。	

番号	器種	広量	器形の特徴	調査の特徴	胎土・泥成・色調	備考
41	坏	13.1 4.3 ・	体部外面に、稜を有す。 口縁部は、外湾気味に内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、花弁状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、微砂粒、雲母、石英粒を含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
42	坏	13.0 5.0 ・	体部外面に、稜を有す。 口縁部は、外湾気味に内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、花弁状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、微砂粒、雲母、石英粒を含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
43	坏	13.0 4.5 ・	体部外面に、稜を有す。 口縁部は、内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、微砂粒、雲母、石英を含む。内面および口縁部外面黒色、その他暗褐色を呈す。	内面黒色処理。
44	坏	12.9 5.5 ・	体部外面に、稜を有す。 口縁部は、やや外湾気味に、内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状のヘラミガキで、口縁部にも粗い横方向のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂粒を含む。泥成良好。暗褐色を呈す。	
45	坏	12.8 4.5 ・	体部外面に、稜を有す。 口縁部は、内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂粒を多量に含む。焼成良好。褐色で、口縁部内外面のみ黒褐色を呈す。	
46	坏	12.7 5.0 ・	体部外面に、稜を有す。 口縁部は、外湾気味に内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、不明。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。また口縁部に粗い横方向のヘラミガキ。	胎土は、微砂粒を多量に含む。焼成は、不良。暗褐色を呈す。	
47	坏	12.7 4.7 ・	体部外面に、稜を有す。 口縁部は、外湾気味に内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状の密なヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂粒、雲母末を含む。暗褐色を呈す。	
48	坏	12.7 4.2 ・	体部外面に、稜を有す。 口縁部は、内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状と花弁状ヘラミガキの組合わせ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、微砂粒を含む。泥成良好。内面および口縁部外面黒色、その他暗褐色を呈す。	内面黒色処理。
49	坏	12.6 4.5 ・	体部外面に、稜を有す。 口縁部は、内傾し、端部は、四角。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、不明。外面は、ヘラケズリ。	胎土は、砂粒を含む。焼成普通。黒褐色を呈す。	
50	坏	12.4 4.6 ・	体部外面に、稜を有す。 口縁部は、内傾し、端部は、やや四角。	内面は、口縁部ヨコナデの後、口縁部を横方向、底面を一定方向にヘラミガキ。外面は、全面ヘラミガキ。	胎土は、砂粒を含む。泥成良好。黒褐色を呈す。	内外面黒色処理。

番号	器種	法量	器形の特徴	調査の特徴	胎土・混成・色調	備考
51	坏	(11.3) - (・)	体部外面に、稜を有す。 口縁部は、内傾する。寿 手。	口縁部内外面ココナデ。内面は、 不明。外面は、ヘラケズリ。	胎土は、微砂粒を含む。 焼成良好。暗褐色を呈 す。	口縁部約1/3 存。
52	坏	13.0 5.0 ・	体部外面に、稜を有す。 口縁部は、直立し、端部 は、尖る。	内面は、全面ヘラミガキで、口縁 部は、横方向。底面は、四方向。 外面は、口縁部ココナデの後、横 方向のヘラミガキ。底部は、ヘラ ケズリ。	胎土は、炭母末、長石、 石灰粒を含む。焼成良 好。茶褐色を呈す。	
53	坏	14.5 5.2 ・	体部外面に、稜を有す。 口縁部は、外上方にのび、 端部は、尖る。	内面は、全面ヘラミガキで、口縁 部は、横方向。外面は、口縁部が 横方向のヘラミガキ。底部がヘラ ケズリ。	胎土は、砂粒を含む。 焼成良好。暗赤褐色を 呈す。	内外面赤彩 か？
54	坏	14.3 4.7 ・	体部外面に、稜を有す。 口縁部は、外上方にのび、 端部は、尖る。	内面は、全面ヘラミガキで、口縁 部は、横方向。外面は、口縁部が 横方向のヘラミガキ。底部がヘラ ケズリ。	胎土は、砂粒を含む。 焼成良好。暗赤褐色を 呈す。	内外面赤彩 か？

表6 4号住居址出土鉄製品

番号	種類	長さ (mm)	巾 (mm)	厚さ (mm)	備考
1	鎌	9.9	2.0~2.5	0.25	ほぼ完形
2	鎌	根 3.4	0.9	0.2	完形
		穂被 8.5	0.5	0.2~0.4	
		茎 3.25	0.4	0.4	
3	鎌	根 (2.7)	(1.2)	0.3	ほぼ完形、根先一部欠
		穂被 8.2	0.6	0.2~0.35	
		茎 1.7	0.5	0.2	

表7 4号住居址出土石製模造品

番号	種類	計測値 (mm)				備考
		(長径)	(短径)	(厚さ)	(孔径)	
1	有孔円盤	40.0	— 33.5	— 4.0	< 1.5 1.5	
2	〃	32.5	— 32.5	— 4.5	< 1.5 1.5	
3	〃	30.5	— 29.0	— 4.0	< 2.0 2.0	
4	〃	25.5	— 22.0	— 3.5	< 1.5 1.5	
5	〃	23.5	— 20.0	— 2.5	< 1.5 2.0	
6	〃	22.5	— 21.0	— 3.0	< 1.5 1.5	
7	〃		— (25.0)	— 2.5	< (2.5)	片残存
8	〃		—	— 2.5	< 2.0	片残存
		(長さ)	(巾)	(厚さ)	(孔径)	
9	剣形品	29.0	— 19.0	— 3.5	< 2.0 2.0	
10	〃	30.5	— 19.5	— 3.5	< 2.0 2.0	
11	〃	(28.0)	— 19.0	— 3.0	< 2.0 2.0	一部欠損
12	〃	(17.0)	— 18.5	— 2.5	< 2.0 2.0	片残存
		(直径)		(厚さ)	(孔径)	
13	白玉	11.0	—————	3.0	— 4.0	
14	〃	5.5	—————	2.5	— 2.0	
15	〃	5.0	—————	2.5	— 2.0	
16	〃	5.0	—————	2.0	— 2.0	
17	〃	5.0	—————	1.5	— 2.0	
18	〃	4.5	—————	4.5	— 2.0	
19	〃	5.0	—————	4.0	— 2.0	
20	〃	4.5	—————	4.0	— 2.0	

5号住居址 (第16図, P.L. 9・10)

位置と規模 本住居址は、発掘区域内でも南方に位置している。2号住居址の東、約2mの地点で11号住居址の西側に隣接して確認された。4号住居址の南側にあり、北側約3分の1は4号住居址によって切られている。また本住居址は、6号住居址の北半分を切って構築されている。すなわち新旧関係は、6号住居址(旧)→5号住居址→4号住居址(新)となる。本住居址は、南北6.6m、東西6.6mの方形を呈し、面積43.6㎡を有する。主軸方向は、N-8°-Eである。

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、壁高20~30cmを示すが、ルーム面まで削平されているため住居址構築当時の壁高を示すものではない。

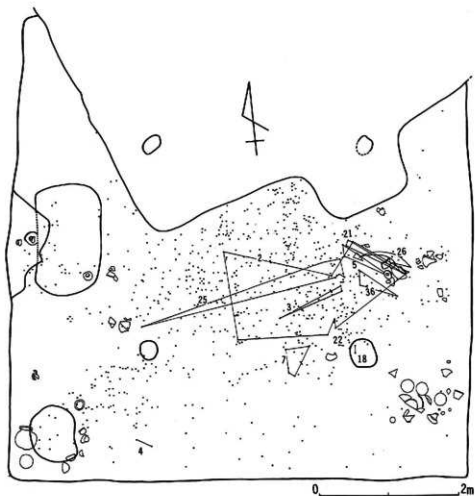
周溝 4号住居址に切られている北壁際を除けば、すべての壁を回っている。西壁では中央部にあるピットに周溝が流れ込んでいる。巾は、10~20cmで断面はV字形ないしはU字形を呈する。深さは4~14cmである。

柱穴 主柱穴は4個あり、P₃・P₄・P₇・P₈が本住居址に伴うものである。それらは、ほぼ対角線上に規則正しく配置されている。柱穴間の巾は、いずれも約3mである。北側のP₃・P₄は4号住居址の床面より検出され、P₄は張り出し部のピットにより西半分が壊されている。この2本の柱穴は4号住居址構築の際にルームでつき固められてしまったため検出が困難であった。また4号住居址の床面は、本住居址の床面よりも10cmほど低いため、P₃・P₄の上部10cmは、4号住居址構築の際に壊されてしまった。次表のP₃・P₄の大きさ及び深さは推定の数字である。

No	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	その他
P ₃	楕円形	30×20	74	4号住居床面より
P ₄	円形	24×22	74	4号住居張り出しピット中
P ₇	円形	40×28	74	
P ₈	円形	28×24	68	

貯蔵穴 貯蔵穴と思われるピットは、南西コーナーと西壁際中央部との2つがある。南西コーナーにあるピットは、長径70cm、短径60cmの楕円形を呈し、深さは約70cmである。このピットを囲むかのように巾50~60cm、高さ10cmの堤状に盛土がしてある。本ピット付近より4個体の埴形土器と1個体の小形鉢形土器が検出された。また、本ピットの北西側には試験溝があり、埴形土器1個体と高埴形土器環部のみ1個体が出土している。覆土は褐色土が主体で軟かく、床面とは容易に区別できた。

26 褐色土層 (焼土, ローム粒, 粘土混入)

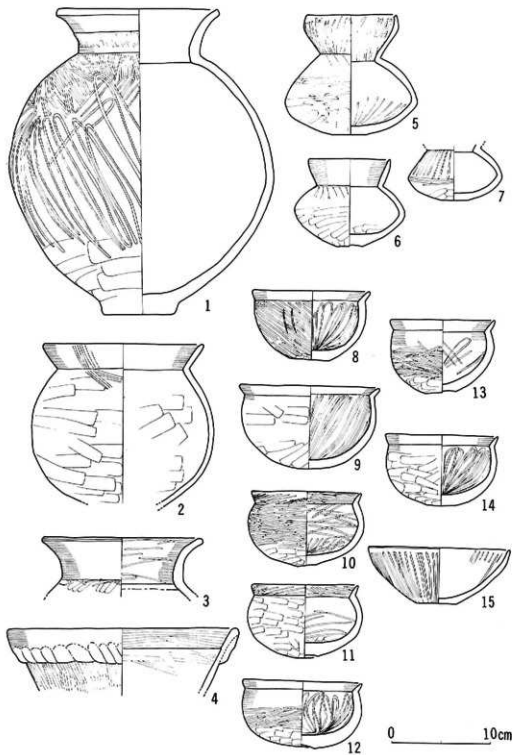


第26図 5号住居址遺物出土状態実測図

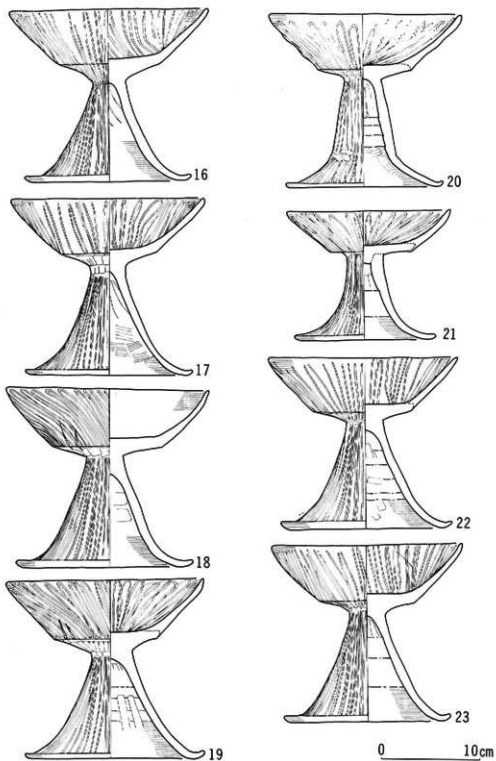
- 27 褐色土層 (ローム粒, 木炭混入)
- 28 黒褐色土層 (ローム粒, ローム小ブロック混入)
- 29 黒色土層 (ローム粒少量混入)
- 30 黄色土層 (ローム粒, ロームブロック主体)

次に、西壁際中央部にあるピットであるが、これは南北160cm、東西90cmで、いったんゆるやかに傾斜してから段を有しほぼ垂直に底面に至るような二段式であり、深さは40~45cmである。本ピットは、所謂階段状遺構の直下にある。また周溝が本ピットに向かって流れ込んでいる。覆土は、黒色土で軟かく床面とは容易に区別できた。

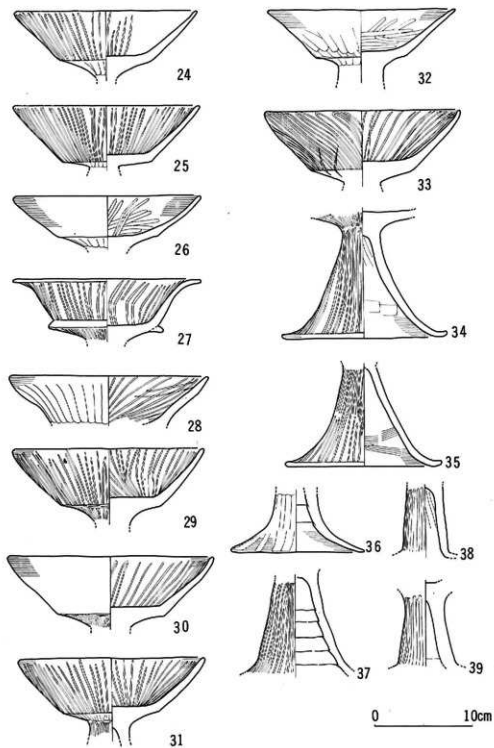
- 31 黒褐色土層 (ローム粒, 木炭混入)
- 32 淡褐色土層 (焼土粒, ローム粒, 木炭混入)



第27图 5号住居址出土土器实测图



第28图 5号住居址出土土器实测图



第29图 5号住居址出土土器实测图

- 33 赤褐色土層 (焼土, ロームブロック, 木炭混入)
- 34 黒褐色土層 (ローム粒, ローム小ブロック, 木炭混入)
- 35 黄色土層 (ロームブロック)

また、本ピットは、果たして貯蔵穴か否かは疑問である。後述するように本住居址からは高環形土器が多量に出土し、階段状遺構中からは遺物が特殊な出土状態を示していることから、本ピットも何か祭祀的色彩が強いことがうかがえる。



第30図 5号住居址出土石製模造品実測図

床面 一部床面まで攪乱層が達しているが床面を直接切っていない。床面は比較的硬くしてしまっており、6号住居址を切っている部分は貼り床になっている。6号住居址と本住居址の床面はほぼ同じレベルか、6号住居址の方がわずかに低い程度であるが、本住居址を構築する際に6号住居址の床面を約40cmほど掘り下げ、その上に黒色土混入土を埋め、ロームをのせてつき固めている。これは、本住居址内にある6号住居址の柱穴を調査した際にその断面から判明したことである。

特殊遺構 西壁際中央ピットの直上にあり、西壁に接している小規模な、所謂階段状遺構と称するものである。覆土は、黄色土が主体でロームブロックでつき固めて構築されている。

- 36 黄色土層 (つき固めたロームブロック)
- 37 黒色土層 (ローム粒, 焼土, 木炭混入)
- 38 黄褐色土層 (ローム粒多量混入)

37の土層からは土器が検出されている。ちょうど西壁中央ピットの西側上面で、27, 28の高環形土器の坏部が2枚重ねられた上に、6の埴形土器が載せられた状態で検出された。おそらく、これらの土器は意図的に重ねられ、ピット上面に置かれ、その上をロームブロックでつき固めたものと思われる。きわめて特異な出土状態を示している。

炉址 検出されなかった。おそらく中央より北側に設けられていたため、4号住居址によって切られたものと思われる。

覆土 8層に分類でき、大略黒褐色土・黄褐色土・黒色土がほぼレンズ状に堆積していた。床面直上の黒褐色土は、焼土・炭化物が含まれており、焼失家屋であることを物語っていた。

- 9 黒褐色土層 (ローム粒混入)
- 10 黒褐色土層 (ローム粒多量, 焼土, 木炭少量混入)
- 11 黄褐色土層 (ローム粒多量混入)
- 12 黒褐色土層 (ローム粒, ロームブロック多量, 木炭少量混入)
- 13 黒褐色土層 (ローム粒混入, 9, 10より黒くしまっている)
- 14 黒色土層 (ローム粒混入)

15 黒色土層（14より粘性がありしまっている）

16 黄褐色土層（ローム粒混入，11よりローム粒の混入度が低い）

遺物 本住居址からは，土器・石製模造品が出土した。土器はすべて土師器であり，図示できたものは39点あり，うち24点は高環形土器であった。出土遺物のほとんどは，床面直上かそれに近いものであった。覆土中からも多くの土師器片を検出している。床面からの出土状態を見ると，南東コーナー付近， P_1-P_2 ピット間，南西コーナー貯蔵穴周辺，および西壁際中央ピット周辺からの出土が多い。本住居址は焼失家屋である可能性が強いため，これらの遺物は，ほぼ当時の生活のなごりをとどめていると言えよう。器種別に見ると，甕・甕・埴・埴・鉢・鉢・高環の6種である。甕形土器3点，甕形土器1点が出土した。甕形土器のうち1は南東コーナー貯蔵穴の上面から西壁に沿うごとく，横転して出土し，2は住居址のほぼ中央から P_1-P_2 間に散在していた9片の土器片を接合してできたものである。甕形土器3は， P_2 北西部から出土した3片の土器片の接合から成り，甕形土器4は，これも破片であるが南西コーナー貯蔵穴東側より出土している。埴形土器は3点あり，5は P_1-P_2 間のほぼ中央より出土，6は西壁際中央ピット上部の階段状遺構中より高環形土器の環部2枚を重ねた上に載せられた状態で出土した。7は P_2 の西側より出土した4片の破片の接合から成る。埴形土器は7点あり8・9・10・11は，南西コーナー貯蔵穴東側の盛土上から出土し，12は西壁際中央部ピット南東コーナー上面より，13・14は P_1-P_2 間中央よりそれぞれ出土している。小形鉢形土器15は，南西コーナー貯蔵穴東側の盛土上から検出された。（第27～29図，PL.42～46，表8）

本住居址では，他の住居址に比べ高環形土器の出土量が多いのが目につく。完形品8個体，環部のみ10個体，脚部のみ6個体，計24個をも数える。遺態ながらお盆中に盗掘にあった数個体を加えると，その数はもう少し増えるものと思われる。これら高環形土器のほとんどは東半分に集中し，西側で見られるのは，階段状遺構中より環部が2枚重なって出土した27・28（27の方が下）と，南西コーナーより1の甕形土器と並んで出土した33の環部を数えるだけである。ほとんどの高環形土器は P_1-P_2 間か，それ以東に集中して置かれていたようである。それは，貯蔵穴周辺に日常什器であるところの埴形土器が置かれていたのとは対称的である。

本住居址出土の高環形土器はいくつかに分類することができる。まず完形品から述べてみたい。

I類 環部外形において環底部の接合部に明瞭な稜をもち内湾ぎみに口唇に至る。脚部は，やや中膨み気味で所謂「ハ」字状に開き裾部との境界はなだらかであり裾端部は反転する。16・17・18・19・22・23の6個体がこれにあたる。

II類，I類に比べると小形であり，環部の形態は似ているが浅い。脚部は外反り気味にラッパ状を呈し裾端部は反転しない。21がこれにあたる。

Ⅲ類 環部はⅠ類のものと同大差ないが、稜より外反ぎみに立ち上がり口辺で僅かに内湾する。脚部は、柱状部がⅠ・Ⅱ類に比べ細身で筒状を呈しやや中膨み気味に裾部に至る。裾部との境界はなだらかであるが急に開いており裾端部は反転する。20がこれにあたる。

完形品は以上であるが、環部・脚部のみで検出されたものを含めると、もう少し分類できる。それを以下に示してみる。

Ⅳ類(環) 環部外形において環底部の接合部に粘土紐張り付けによる隆起帯によって斜下方に垂れ下るような感じで段をなし、段よりいくぶん内湾ぎみに立ち上がるが口辺に至り大きく外反している。27がこれにあたる。

Ⅴ類(環) 環部外形において環底部の接合部に段を有し、外反しながら口唇に至る。32がこれにあたる。

28・30の環部はⅢ類に、29・31・33の環部はⅠ類に、34・35の脚部はⅠ類にあたる。

住居址南側は、土器片の出土も少なく、中央より西側に一段高い面があることから、こちら側は出入口に使用されていた可能性が高い。また住居址中央部からは、土器片の出土は多いがこれといった器体にはならなかった。

次に石製模造品であるが、完形品でなく半個体であるため何を模したのかははっきりしない。石質は滑石で緑褐色を呈し、巾1.5cm、残存部長1.2cmで孔の直径1mm前後を測る。

以上が本住居址の概要であるが、遺物からみて和泉期後半のものと思われる。

(大島和子)

表 8 5号住居址出土土器

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	16.2 31.2 7.2	球形胴部を呈し、最大径は胴部中央で27cmを計測する。口縁部は、ゆるやかに外反する。	口縁部外面ヨコナデ。口部部は縦方向のハケ調整。胴部外面は、上半ハケ調整、中央ヘラミガキ。下半はヘラズリが施されている。内面は剥落激しく不明。	胎土は、石英、長石、小石を含む。焼成は普通。色調は外面赤褐色で一部黒色を呈し、内面は黄褐色。	貯蔵穴上面出土。
2	甕	16.4 —	球形胴部を呈し、口縁部は「く」字状に外反する。折手でつくりが良い。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面横方向のヘラケズリ。ところどころハケ目直が見受けられる。胴部内面は横方向のヘラナデ。	胎土は、石英を含む。焼成良好。色調は炭褐色を呈する。	底部を欠く。全体の片残存。
3	甕	(16.4) —	甕部は垂直に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部外面ヨコナデ。内面ヨコナデ後ところどころ横方向のヘラミガキ。	胎土は石英を含み稍遊されている。焼成良好。色調は赤褐色を呈する。	口縁部片残存。
4	甕	(11.8) —	胴部より口縁部まで直線的に立ち上がる。折り返し口縁を有する。	口縁部外面ヨコナデ。内面ハケ目。折り返し部外面には指圧の跡が残る。胴部内外面ともハケ調整。	胎土は砂粒が入り、焼成良好。色調は外面赤褐色一部黒色、内面は黒色を呈す。	口縁部片残存。
5	埴	(9.4) 12.2 3.4	算盤玉形の胴部から外反する甕部を有し、口縁部は内傾する。胴部下半に最大径13.6cmを計る。	口縁部内外面ともヨコナデ後縦方向のヘラミガキ。胴部外面は、上半ヘラナデ、中央縦方向のヘラミガキ。甕部はヘラケズリ。底部内面ヘラミガキ。	胎土は、石英、黒雲母を含む。焼成良好。赤褐色を呈する。甕部外面は黒色を呈す。	外面及び、口縁部内面赤褐色を呈している。
6	埴	7.6 2.7 8.8	算盤玉形の胴部から、ゆるやかに外反する口縁部を有す。胴部中央に最大径11.4cmを計る。甕部の底部をもつ。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面は、上半ヘラナデ、中央以下ヘラケズリ。甕部内面ヘラケズリ。	胎土は砂粒を含む。焼成は普通。黒色を呈す。	27の環部にのって出土。
7	埴	— 2.7	算盤玉形の胴部を有し、胴部下半に最大径9.5cmを計る。	胴部外面上半縦方向、中央縦方向のヘラミガキ。甕部はヘラケズリ。内面は剥落激しく不明。	胎土は砂粒、石英を含む。焼成は普通。赤褐色を呈す。	
8	甕	12.1 7.1 4.0	半球形の胴部を呈し、外口縁部を有す。口縁部内面に稜をもつ。底部は平底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面祭方向のヘラミガキ。1対の突み文が見られる。体部内面は花卉状のヘラミガキ。	胎土は砂粒が微量含まれる。焼成良好。色調は外面黄褐色一部黒色を呈し、内面は赤褐色を呈す。	18, 19, 33の高環形土器と同様な突み文を有す。
9	甕	(14.4) 8.4 8.4	半球形の胴部を呈し、外口縁部を有す。口縁部内面に稜をもつ。底部は丸底で、8よりは大形である。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横方向のヘラケズリ。体部内面、花卉状のヘラミガキ。	胎土は砂粒が少量含まれる。焼成はやや不及で赤褐色を呈す。甕部内面は黒色である。	
10	甕	11.2 7.5 ・	半球形の胴部を呈し、外口縁部を有す。口縁部内面に稜をもつ。底部は削ってあるが丸底であり、体部中央に最大径11.8cmをもつ。	口縁部外面ヨコナデのあとヘラミガキ。内面横方向のヘラミガキ。体部内面横方向のヘラミガキ。甕部は横方向のヘラケズリ。体部内面はヘラミガキ。	胎土は砂粒、石英が若干含まれる。焼成良好。赤褐色を呈す。甕部外面は黒色を呈す。	

番号	器種	法量	彫形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
11	瓶	10.8 7.4 2.2	半球形の胴部を呈し、外口短する口縁部を有す。口縁部内面に絞をもつ。平底の底部を有する。胴部中央に最大径11.7cm。	口縁部内外面ヨコナデのあとヘラミガキ。体部外面縦方向のヘラケズリ。体部内面はヘラミガキ、底部はヘラケズリ。	胎土は、砂粒、小石を含む。焼成は普通。色調は赤褐色で内外面ともに底部は黒色を呈する。	
12	瓶	12.2 6.6 2.3	半球形の胴部を呈し、外口短する口縁部を有す。口縁部内面に絞をもつ。平底の底部を有する。	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面上半ヨコナデ、中央縦方向のヘラミガキ、底部縦方向のヘラケズリ。体部内面はヨコナデのあと花卉状のヘラミガキ。	胎土は砂粒を少量含む。焼成は不良で粗雑なつくりである。赤褐色を呈す。	
13	瓶	10.7 7.4 3.0	球形の胴部を呈し外短する口縁部を有す。口縁部内面に絞をもつ。平底の底部を有する。	口縁部から体部上半にかけ内外面ともヨコナデ。体部中央縦方向のヘラミガキ、底部はヘラケズリ。体部内面は刺磨きいらいヘラミガキの痕が見られる。	胎土は砂粒、小石を少量含む。焼成不良。褐色を呈す。	
14	瓶	(11.4) 7.1 2.5	半球形の胴部を呈し、外短する口縁部を有す。口縁部内面に絞をもつ。平底である。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、内面は花卉状のヘラミガキ。	胎土は砂粒少量混入。焼成良好。色調は赤褐色。	
15	小形鉢	19.6 5.6 4.1	平底の底部をもち外上方へ伸びる体部から、内湾気味に立ち上がる口縁部を有す。	内外面とも口縁部をヨコナデした後ヘラミガキ。底部外面はヘラケズリが見られる。内面は刺磨きが激しい。	胎土は砂粒を含み、焼成は普通。色調は内面赤色で一部黒色、外面は、赤褐色で半分黒色を呈す。	
16	高杯	(20.4) 17.4 17.1	杯部は底部外面に絞を有し直接的に外上方へ伸び口縁部はやや内湾する。胴部は中部気味で、「ハ」字状に大きく開き杯端部は反転する。	杯部内外面ともヨコナデの後、放射状のヘラミガキ。胴部外面縦方向のヘラミガキ、杯部はヨコナデ後ヘラミガキ。杯部内面ヨコナデ。杯部内面ヘラによる切り込みあり。	胎土は砂粒混入しているが、精選されている。焼成は良好で赤褐色を呈する。一部黒色を呈す。	杯、胴部の接合部は単につけただけである。赤彩。
17	高杯	19.8 18.0 17.0	杯部は底部外面に絞を有し直接的に外上方へ伸びる。杯部は「ハ」字状に大きく開き杯端部は反転する。	杯部外面ヨコナデ後ヘラミガキ、内面ヨコナデ後放射状のヘラミガキ。杯、胴接合部外面ヘラケズリ、胴部外面縦方向のヘラミガキ、内面ハケ調整、胴部ヨコナデ。	胎土は砂粒混入し、焼成は良好。色調は赤褐色を呈し、一部黒色を呈す。	赤彩。杯、胴部の接合部は単につけただけである。
18	高杯	20.3 18.7 18.1	杯部は底部外面に絞を有し内湾気味に口縁部に至る。杯部は「ハ」字状に大きく開き杯端部は反転する。	杯部外面口縁部ヨコナデ後、花卉状のヘラミガキ、内面は口縁部ヨコナデ以下ヘラナデ。杯部外面縦方向のヘラミガキ、接合部ヘラケズリ、内面ヘラナデ、杯部ヨコナデ。	胎土は小石を含むが精選されている。焼成良好。色調は赤褐色で一部黒色を呈する。	赤彩。8、19、33同様の2本1組の組み文を3対有す。
19	高杯	20.2 18.3 18.3	杯部は底部外面に絞を有し内湾気味に口縁部に至る。杯部は「ハ」字状に大きく開き杯端部は反転する。	杯部内外面とも口縁部ヨコナデ後、花卉状のヘラミガキ、杯部外面縦方向のヘラミガキ、接合部ヘラケズリ。杯部ヨコナデ。杯部内面ヨコナデ、杯端ヨコナデ。	胎土は砂粒が微量混入している。焼成良好。赤褐色で一部黒色を呈す。	赤彩。8、18、33同様の2本1組の組み文を3対有す。短髪み形明磨。
20	高杯	19.8 17.6 16.1	杯部は底部外面に絞を有しやや内湾気味に口縁部に至る。杯部は「ハ」字状に大きく開き杯端部はやや反転気味である。	杯部内外面ともヨコナデ後、花卉状のヘラミガキ。杯部外面縦方向のヘラミガキ、接合部ヘラケズリ。杯部内面刺磨きいらいヘラケズリも見られる。	胎土は小石、砂粒が混入し、焼成は普通である。褐色を呈す。	赤彩。輪髪み形明磨。杯、胴部はボツ穴で接合。

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
21	高坏	16.8 13.1 14.5	坏部は底部外面に稜を有し直線的に外上方へ伸び口縁部では外反り気味に大きく開く。頸部は反転しない。小形である。	坏部内外面ともヨコナデ後、花弁状のヘラミガキ。腹部外面縦方向のヘラミガキ。胴部内面ヨコナデ。	胎土は砂粒が少量混入している。焼成良好。赤褐色を呈する。	赤彩。細柄み度形眼。坏部にホゾ、頸部にホゾ穴で接合。
22	高坏	19.5 17.5 17.6	坏部は底部外面に稜を有し、直線的に外上方へ伸びる。頸部は「ハ」字状に大きく開き、頸部は反転する。	坏部内外面ともヨコナデ後ヘラミガキ。胴部外面縦方向のヘラミガキ。接合部はヘラミガキ。胴部内面割部ヨコナデ。部分的にヘラケズリ。	胎土は小石が含まれる。焼成良好。赤褐色を呈し、一部黒色である。	赤彩。
23	高坏	19.7 18.0 17.2	坏部は底部外面に稜を有し、やや内凹気味に口縁部に至る。頸部は「ハ」字状に大きく開く。頸部は反転する。	坏部内外面ともヨコナデ後、放射状のヘラミガキ。胴部外面縦方向のヘラミガキ。接合部はハケ調整後ヘラミガキ。胴部内面ヨコナデ。	胎土は砂粒を微量含むが精選されている。焼成良好。褐色で一部黒色を呈す。	赤彩。柄杓み度形。
24	高坏	(18.6) — —	坏部は底部外面に稜を有し、直線的に外上方へ伸びる。	坏部内外面とも放射状のヘラミガキ。割部が激しい。接合部ヘラケズリ。	胎土は砂粒を多量に含む精選されていない。焼成不良。赤褐色を呈す。	赤彩。頸部を欠く。
25	高坏	(19.0) — —	坏部は底部外面に稜を有し直線的に立ち上がる。	坏部内外面とも放射状のヘラミガキ。接合部ヘラケズリ。	胎土は砂粒を含み、選成は普通。赤褐色を呈す。	頸部を欠く。
26	高坏	(19.2) — —	坏部は底部外面にゆるやかな稜を有し、やや内凹気味に口縁部に至る。	坏部外面口縁部ヨコナデ。体部は割ナデ。口縁部内面ヨコナデ後、縦なヘラミガキ。	胎土は小石を含みあまり精選されていない。選成は不良。赤褐色を呈す。	赤彩。頸部を欠く。
27	高坏	19.2 — —	坏部は底部外面に斜下方に而下する突起部によって稜をなす。体部は内凹気味に立ち上がり、外反して口縁部に至る。	坏部内外面とも口縁部をヨコナデし、体部をハケ調整した後、全体に放射状ヘラミガキを施している。接合部ヘラミガキ。	胎土は小石を少量含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	赤彩。頸部を欠く。四角形中央部と上より出土。
28	高坏	20.2 — —	坏部は底部外面に稜を有し直線的に外上方へ伸びる。	坏部外面、口縁部ヨコナデ後体部は上方へのヘラケズリ。内面は口縁部をヨコナデした後ヘラミガキ。	胎土は小石、砂粒を含む。焼成は普通。赤褐色を呈す。	赤彩。坏部、腹部を欠く。上に27の坏部をのせて出土。
29	高坏	19.5 — —	坏部は底部外面に稜を有し、直線的に外上方へ伸びる。口縁部は丸味を帯びる。	坏部内外面とも、口縁部をヨコナデした後放射状のヘラミガキ。接合部はヘラミガキ。底部と体部との境界は横方向のハケ調整が見られる。	胎土は、砂粒を少量含む。焼成良好。赤褐色を呈し、一部黒色である。	頸部を欠く。
30	高坏	20.9 — —	坏部は底部外面に稜を有し、外反気味に立ち上がり口縁部は内凹する。	坏部外面、口縁部ヨコナデ。内面は口縁部をヨコナデした後放射状のヘラミガキ。底部内面には割部が残る。接合部はハケ調整。	胎土は砂粒を少量含む。焼成良好。赤褐色を呈し、内面一部黒色を呈す。	赤彩。頸部を欠く。

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
31	高坏	19.0 — —	坏部は底部外面に紐を有し、内湾気味に立ち上がる。	坏部内外面とも、口縁部をヨコナデした後、全体に放射状のヘラミガキ。接合部はヘラミガキ。	胎土は砂粒を含み、焼成普通である。赤褐色を呈し、一部黒色。	赤彩。脚部を欠く。
32	高坏	19.2 — —	坏部は底部外面に紐を有し、体部は直線的に外上方向へ伸びる。	坏部外面、口縁部ヨコナデ、体部は縦方向のヘラケズリ。内面は口縁部をヨコナデした後、粗いヘラミガキ。接合部はヘラケズリ。	胎土は小石を少量含む。焼成不良。赤褐色を呈する。	赤彩。脚部を欠く。
33	高坏	20.2 — —	坏部は底部外面に紐を有し内湾気味に口縁部に至る。	坏部外面、口縁部ヨコナデ後集合体に花弁状のヘラミガキ。内面、口縁部ヨコナデ後放射状のヘラミガキ。接合部ヘラナデ。新文3対あり。	胎土は砂粒を含みが精選されている。焼成良好。赤褐色を呈し一部黒色。	赤彩。脚部を欠く。8、18、19と同程度の刷目文を有す。
34	高坏	— — 17.0	脚部は「ハ」字状に大きく開き、胴部はやや反転する。	坏底部内面にはヘラミガキが見られる。胴部外面は胴部ヨコナデ後縦方向のヘラミガキ。内面はヘラナデ、脚部はヨコナデ。上方にはヘラによる切り込みあり。	胎土は砂粒を含み、焼成は良好。赤褐色を呈する。	赤彩。坏部を欠く。
35	高坏	— — 16.1	脚部は「ハ」字状に大きく開く。	胴部外面、ハケ裏側後部部をヨコナデ、その後縦方向のヘラミガキ。内面は胴部ヨコナデ、以上ハケ調整。	胎土は、石英、虫歯砂を含む。焼成不良。赤褐色で一部黒色を呈す。	赤彩。坏部を欠く。
36	高坏	— — 13.7	脚部は「ハ」字状にゆるやかに開き、胴部に至り大きく開く。	胴部外面、胴部ヨコナデ後縦方向のヘラケズリ。内面は胴部ヨコナデ。	胎土は砂粒を含み、焼成は不良。赤褐色を呈する。	赤彩。坏部を欠く。輪痕み取明瞭。
37	高坏	— — —	脚部は、胴部を欠くが、「ハ」字状に大きく開くと思われる。	胴部外面は縦方向のヘラミガキ。内面はところどころにハケ調整が施されている。	胎土は砂粒を少量含む。焼成良好。色調は赤褐色で内面一部黒色を呈する。	赤彩。坏部、胴部を欠く。輪痕み取が5条明瞭に残る。
38	高坏	— — —	脚部は、田筒状を呈し、若しく曲折して胴部を形成するものと思われる。	胴部外面は縦方向のヘラミガキ。内面には粘土のヒダが残る。	胎土は精選されており、焼成は良好。赤褐色を呈する。	外面赤彩。坏部、胴部を欠く。
39	高坏	— — —	脚部は、田筒状に近いもので胴部が欠く。	胴部外面は縦方向のヘラミガキ。	胎土は、小石、石英を含む。焼成不良で赤褐色を呈す。	赤彩。坏部、胴部を欠く。輪痕み取を1条残す。

6号住居址 (第16図, P L. 11)

位置と規模 本住居址は発掘区域内において最も南方に位置するものの1つである。5号住居址の南側にあり、北半分は5号住居址によって切られている。平面プラン及びセクションから、5号住居址よりも本住居址の方が古いと判断される。南北5.4m、東西(推定)5.4mの方形を呈し、面積は29.2㎡(推定)、主軸方向はN-6°-Eである。

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、壁高25-30cmを示すが、ルーム面まで削平されているため住居址構築当時の壁高を示すものではない。

周溝 5号住居址に切られている北半分を除けば、南半分にはすべて周溝がまわっている。巾は広い所で22cm、狭い所では6cm、深さは4-10cmで断面はU字形を呈する。

柱穴 支柱穴は4個あり、P₉・P₁₀・P₁₁・P₁₂が本住居址に伴うものである。北西及び北東コーナーは不明ではあるが、それらはほぼ対角線上に規則正しく配置されているようである。柱穴間の巾は2.7-2.8mである。北側のP₉・P₁₀は5号住居址の床面より検出された。またP₉の内側に支柱穴と思われる22×20cmの浅い円形のピットがあり、南東コーナーよりの東壁には、壁を14cmほど掘り込んだ深さ16cm程度のピットがある。

No.	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	その他
P ₉	楕円形	34×26	74	5号住床面より
P ₁₀	楕円形	34×26	86	5号住床面より
P ₁₁	円形	30×26	91	
P ₁₂	円形	28×26	82	

貯蔵穴 南東コーナーにあり長径92cm、短径82cmの楕円形を呈する。床面からの深さは、南側32cm、北側45cmで南側の方が高く、2段式に構築されている。本ピットを囲むように巾60cm高さ4cmの堤状の盛土がしてあり、盛土上で東壁際には白色粘土の固さが見られた。また、そのすぐ北側にもう一塊の白色粘土が検出された。貯蔵穴中から、3個体の完形に近い埴形土器が、また盛土上白色粘土の東側からは完形の埴形土器がそれぞれ検出されている。覆土は、褐色土で軟かく、床面とは容易に区別できた。

39 黒褐色土層 (ルーム粒多量, 炭化物混入)

40 灰褐色土層 (ルーム粒, 粘土混入)

41 黄褐色土層 (軟ルームに褐色土混入の層)

42 黒色土層 (ルーム粒, ルームブロック混入)

40 に混入されている粘土と盛土上にある白色粘土とは同じものである。

床面 中央部は非常に硬くなっており、その周辺は比較的軟かくなっている。本住居址の床



第31图 6号住居址出土土器实测图

面と5号住居址の床面のレベルはほぼ同じ、ないしは本住居址の方がやや低いレベルにあるが、5号住居址構築の際に、本住居址の床面は大きく壊されている。

炉址 検出されなかった。おそらく、5号住居址によって切られてしまったものと見られる。

覆土 9層に分類でき、大略黒褐色土・黄褐色土・黒色土・茶褐色土がほぼレンズ状に堆積していた。床面直上は黄褐色土が堆積していた。

- 17 黒褐色土層（ローム粒微量混入）
- 18 黄褐色土層（ローム粒多量，ロームブロック，黒色土ブロック混入）
- 19 黄褐色土層（ローム粒少量，ロームブロック，黒色土ブロック混入）
- 20 黄褐色土層（ロームブロック混入，ローム粒主体）
- 21 黒褐色土層（ローム粒多量，焼土微量混入）
- 22 黄褐色土層（ローム粒，ロームブロック混入）
- 23 黒色土層（ローム粒，ローム小ブロック混入）
- 24 茶褐色土層（ローム粒混入）
- 25 黒褐色土層（ローム粒混入）

遺物 本住居址の出土遺物は、土器・石製模造品・白玉ならびに土製品である。北半分が5号住居址によって切断されているため、全体は把握できないが、残存している所から見ると、貯蔵穴内とその周辺、特に貯蔵穴の北側に遺物が集中している。とりわけ、貯蔵穴北側からは高坏形土器が5個体もまとまって検出されている。また貯蔵穴内からは、落ち込んだ状態で3個体の埴形土器が出土した。うち1と2の2個は完形であり3は底部を欠いていた。貯蔵穴のまわりの盛土上から小形埴形土器4が、貯蔵穴西側1mの地点から同様な埴形土器がいずれも完形のままで出土している。（第31図，P.L.47，48，表9）

石製模造品としては、滑石製の白玉が2個床面ならびに床面近くの覆土から検出されている。また床面から青緑色を呈する碧玉製の白玉が1個検出された。これらはいずれも貯蔵穴付近からの出土である。

土製品は、高坏形土器群中に混じって検出されたもので、三角形を呈し、高坏形土器の破片と思われるが、各辺とも人為的に擦った痕跡が残る。覆土からの遺物は主に土師器片であり、西側からの出土は東側に比べるとはるかに少ない。

以上が本住居址の概要であるが、時期的に見ると、和泉期前半のものであると思われる。

（大島和子）



第32図 6号住居址出土遺物実測図

表10 6号住居址出土石製模造品

番号	種 類	計 測 値 (mm)			備 考
		(直径)	(厚さ)	(孔径)	
1	白 玉	4.5	3.0	1.5	
2	〃	4.5	2.5	1.5	
3	〃	4.0	2.0	1.5	

7号住居址 (第33図, P.L.12・13)

位置と規模 本住居址は4号住居址の北、発掘区の中央に位置する。8号住居址を切って構築されている本住居址は溝状遺構No.1に切られており、このため全容は知り得ない。これら3つの遺構の新旧は平面プラン及びセクションにより確認され、8号住居址→7号住居址→溝状遺構No.1の順に構築されている。規模は東西6.9m、南北6.8m、面積46.8㎡。四隅がほぼ直角をなす正方形を呈する。主軸の方向はN-26°-Wである。

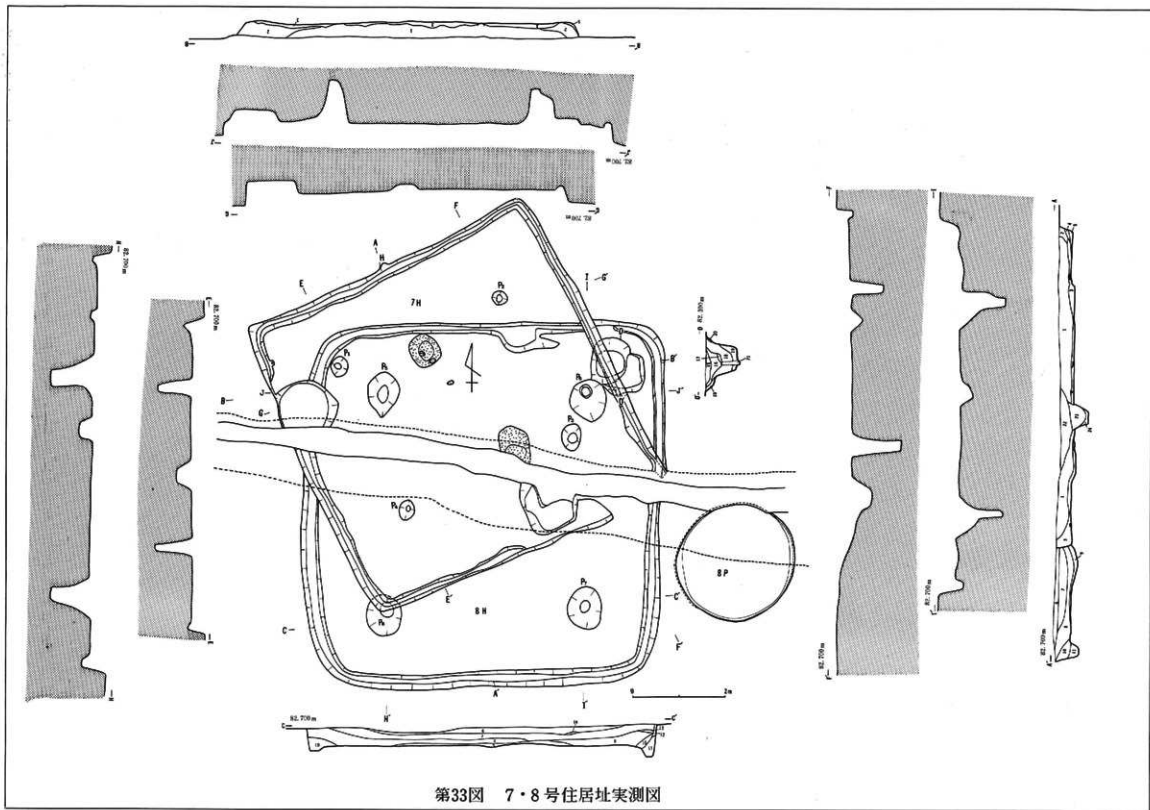
壁 ローム面まで削平されているため、完全には残っていない。壁高は残存値で25~30cmを測り、やや外傾して直線的に立ち上がる。

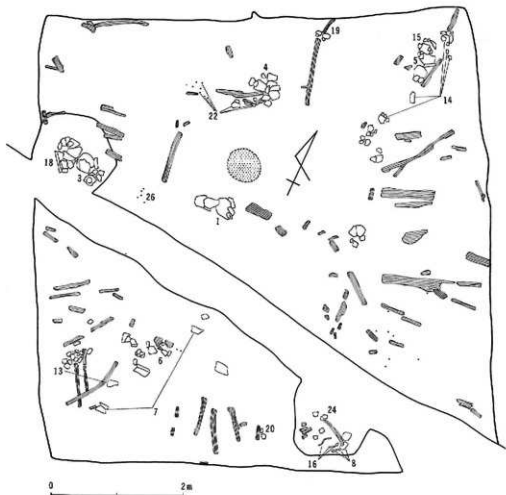
周溝 西壁の貯蔵穴の北側と、南壁の貯蔵穴と対応する部分で切れる。他では全周する。しかし溝状遺構No.1に切られているため、貯蔵穴1の南側と接するのかどうか、南壁南東コーナー付近の状態は不明である。幅は様ではなく15~30cmである。断面は浅いU字形を呈し、深さは8~15cmを測る。

柱穴 4個の柱穴がある。いずれも垂直に掘り込まれている。間隔はP₁-P₁・P₂-P₂が3.4m、P₁-P₁・P₂-P₂が3.9mを測る。

No.	形 状	大きさ (cm)	深 さ (cm)	そ の 他
P ₁	円	44×39	73	
P ₂	円	35×30	79	
P ₃	楕 円	52×42	56	
P ₄	円	41×36	82	

貯蔵穴 2つ発見された。いずれも溝状遺構No.1に切られている。1は西壁中央より1mほど北西コーナー寄りであり、南の部分をおおむね切られている。楕円形を呈するが、口辺がやや角張る。底はほぼ平坦である。径125cm、深さ28cmを測る。2は南壁中央より南東コーナーへ1mほど寄っている。半分近くを切られているが、不整形を呈すると思われる。推定で長





第34図 7号住居址遺物出土状態実測図

辺120cm, 短辺110cm, 深さ35cmを測る。

炉址 P₁・P₂の中間よりやや南寄りにある。やや角張った楕円形を呈する。掘り方は浅い台形状の断面で、深さ14cmを測る。炉内に2個の河原石があったが炉石と思われる。

覆土 よく見られるレンズ状の堆積状態を呈する。層序としては、基本的に3・2・1の順に堆積し、住居址内北側では5, 4が入る。本住居址は火災を受けている。2～5に焼土・炭化物を含み、特に3は多量で炭化材を含む。覆土の詳しい層序は下記のとおりである。

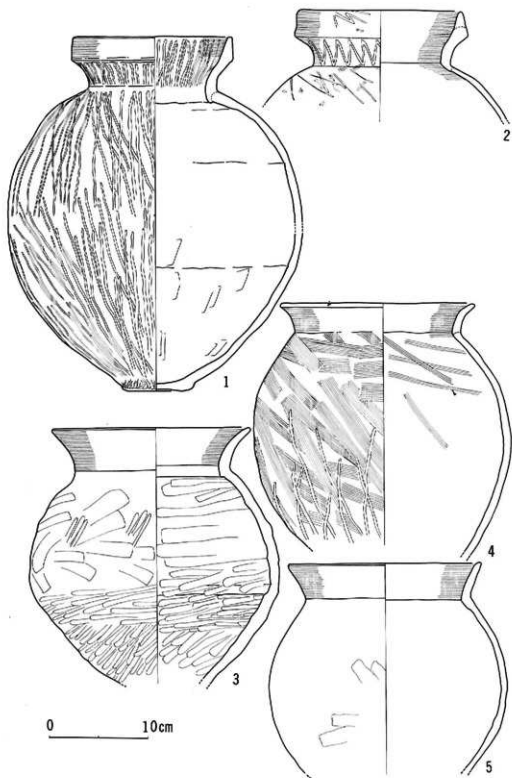
- 1 暗茶褐色土層 (ローム粒多量混入)
- 2 暗黄褐色土層 (焼土・炭化物を含む)
- 3 褐色土層 (ローム・ブロック混入, 焼土炭化物・炭化材を含み, 粘性がある)
- 4 暗褐色土層 (粘性が少ない)

5 黄褐色土層（焼土・炭化物を少し含み、サラサラしている）

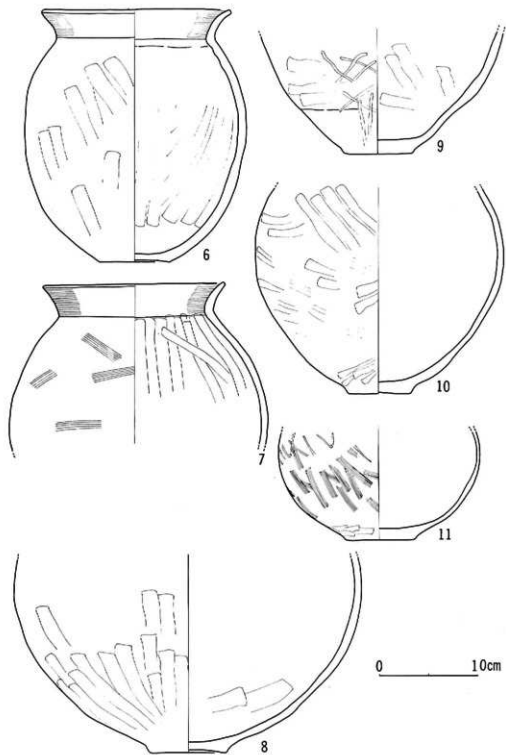
遺物 本住居址は土器以外の遺物の出土はない。火災を受けているため、割合多くの土器が出土しているが、ほとんどが割れた状態で、2次焼成を受けている。器種別の個体数では甕形土器が最も多く、大半を占めており、バラエティーに富んでいる。ほかに甕・壺・杯・高杯があるが、いずれも少数である。平面的な出土分布を見ると、ほとんどが壁際にあつたもので、特に北東・南西コーナーに多く、当時の生活をうかがうことができる。これらはすべて2・3層中の床面直上のもので、本住居址に伴うと考えてよい。出土遺物のうち1-16は甕形土器である。1は住居址中央よりやや南西寄り、柵の北側よりの出土。3は貯蔵穴1より出土したもので、底面よりやや浮いているが、住居址に伴うものと考えられる。4は北壁中央より1mほど離れた壁際よりの出土。5は北東コーナー付近にあつたものである。7は南西コーナーより対角線にそうようにちらばって出土した。8は貯蔵穴2より出土したもので、底面よりやや浮いているが、住居址に伴うものと考えられる。13は南西コーナー付近にちらばって出土した。14は北東コーナーにちらばっていた。15も北東コーナーより出土した。16は貯蔵穴1の底部よりの出土。18は貯蔵穴1より出土したもので、3とセットをなすものであろう。19は北壁中央より1mほど北東コーナーへ寄った壁際よりの出土。20は南壁際、貯蔵穴2の北側よりの出土。26は貯蔵穴1の東側50cmのところより出土した。(第35-38図, P.L.49-52, 表11)

以上が本住居址の概要であるが、構築時期は出土遺物からみて和泉期末とみてよいであろう。

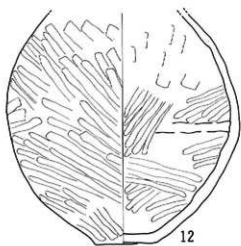
(宮崎光明)



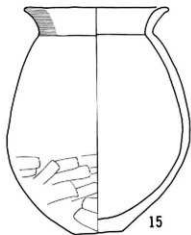
第35图 7号住居址出土土器实测图



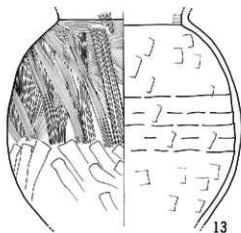
第36图 7号住居址出土土器实测图



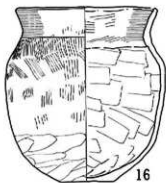
12



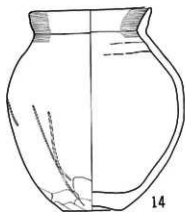
15



13



16



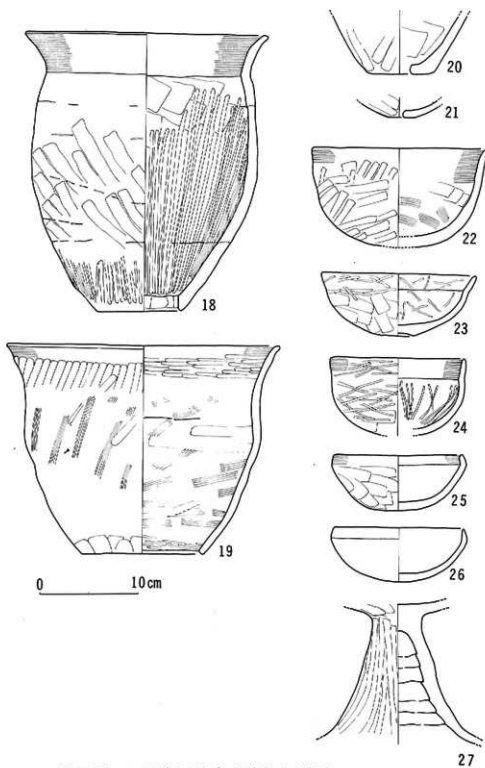
14



17

0 10cm

第37图 7号住居址出土土器实测图



第38图 7号住居址出土遺物実測図

表11 7号住居址出土土器

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	16.3 36.0 7.2	頸部が、強く外湾し、口縁部は、外面に稜をもって直立気味になる。胴部は、ほぼ球形を呈し中程に最大径(30.0)を有する。器壁はやや厚目。	口縁部外面ヨコナデ、頸部ヘラミガキ。内面ヨコナデの後ヘラミガキ。胴部外面は、ナデの後縦方向のヘラミガキ。内面は、ヘラナデ。	胎土は、砂粒、長石、雲母を含む。焼成良好。黄褐色を呈す。	胴部内面に、輪積み痕を残す。
2	甕	16.9 — —	頸部が強く外湾し、口縁部は、外面に稜をもって直立気味になる。	口縁部外面ヨコナデ、胴部外面ヨコナデの後ヘラミガキ。内面は、ヨコナデ。胴部外面は、ヘラミガキ。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。外面赤褐色、内面黄褐色を呈す。	
3	甕	20.2 — —	口縁部は、外湾気味に外反する。胴部は、ほぼ球形を呈すが、下半部はやや円筒的となる。胴部中程に最大径(25.3)を有す。やや粗雑な作り。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面は、ヘラケズリの後、太めのヘラミガキ。(特に下半部は密)内面は、上半が縦方向のヘラナデ、下半ヘラミガキ。	胎土は、砂粒を含む。焼成普通。外半は、赤褐色で下半に黒点を有す。内面は、暗褐色を呈す。	胴部内面に輪積み痕を残す。
4	甕	20.1 — —	口縁部は、外湾して立ち上がり、やや短め、胴部は球状を呈す。最大径は、胴部中程にある。(26.3)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面は、全面クシ目、下半部は、クシ目の後ヘラミガキ。内面は、上半クシ目、下半部は不明。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。内外面とも赤褐色を呈す。	外面一部にすず状炭化物が付着。
5	甕	(19.8) — —	口縁部は、外反して「く」の字状を呈する。胴部は球形状を呈す。胴部中程に最大径(24.3)を有す。	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面は、割落が激しく調整不明であるが、外面ヘラケズリが少し見られる。	胎土は、砂粒を多く含む。焼成不良。褐色を呈す。	
6	甕	19.3 25.7 7.2	口縁部は、大きく外反する。胴部は、やや長い球状を呈す。胴部中程に最大径(22.6)を有す。	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ。内面上部はナデ、下半部は、縦方向のヘラケズリ。	胎土は、雑砂粒を多く含む。焼成良好。赤褐色を呈すが外面の一部に黒斑が見られる。	
7	甕	18.6 — —	口縁部は、大きく外反する。胴部は球状を呈するものと思われる。胴部に最大径(26.3)を有す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面は、クシ目の後、丁寧にナデている。内面は、縦方向のヘラナデ。	胎土は、砂粒を含むが粗選されている。焼成良好。外面黒褐色、内面黄褐色を呈す。	胴部外面にすず状炭化物が付着。
8	甕	— — 7.8	胴部は、球状を呈すものと思われる。最大径は、35.5cm(推定)底部は、突出気味であり、上げ尻。	胴部外面は、縦方向のヘラケズリ。内面は、底部付近ヘラナデであるが、その位は不明。底部外面は、ヘラケズリ。	胎土は、砂粒を多く含む。焼成普通。外面黄褐色、内面黒褐色を呈す。	両隣溝りピット内出土。
9	甕	— — 7.0	底部は、やや突出気味。	胴部外面は、ヘラケズリの後ヘラミガキ。内面は、ヘラケズリ。底部外面は、ヘラケズリ。	胎土は、砂粒、砂礫を多く含む。焼成良好。黄褐色を呈す。	
10	甕	— — 6.5	胴部は、球形を呈し、中に最大径(推定25.4)を有すと思われる。底部は、突出する。	胴部外面は、ヘラケズリ、およびナデ調整。内面は、割落が激しく不明、底部外面ヘラケズリ。	胎土は、砂粒を多く含む。焼成普通。外面黄褐色、内面暗褐色を呈す。	

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
11	甕	— — 7.2	胴部は、強い張りを持った球形を呈し、最大径は、20.5cm。底部は、やや突出する。	胴部外面の上部は、ヘラミガキ、下半部は、クシ目。胴部内面は、不明。底部外面ヘラケズリ。	胎土は、砂粒、石英を含む。焼成良好。赤褐色を呈すが外面に黒斑を有す。	
12	甕	— — 6.5	胴部は、やや長い球形を呈す。中程に最大径(23.6)を有す。底部は、突出気味。	胴部外面は、太目のヘラミガキ。内面は、上位が、ヘラナデ、中位から上位は、太目のヘラミガキ。底部外面ヘラケズリ。	胎土は、砂粒を多く含む。焼成普通。外面黒褐色で一部赤褐色。内面は、赤褐色を呈す。	胴部外面にすず状炭化物が付着。南壁寄りピット内出土。
13	甕	— — —	胴部は、球形を呈し、中程に最大径(推定24.0)を有す。	胴部外面は、上半部が、縦方向のクシ目。下半部が、ヘラケズリ。内面は、ヘラケズリの後、ナデ調整。	胎土は、砂粒を含む。焼成不良。内面暗褐色。外面、赤褐色で、黒斑を有す。	胴部外面にすず状炭化物が付着。胴部内面に明瞭な輪陥み痕を残す。
14	甕	12.5 20.2 6.0	口縁部は、外反する。胴部の上位に最大径(18.0)を有す。底部は、上げ底。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半部ヨコナデ。中下半部ヘラケズリの後ナデ調整。内面ナデ調整。底部および内縁部ヘラケズリ。	胎土は、砂粒・砂礫を含む。焼成良好。赤褐色を呈し、外面には、黒斑を有す。	胴部外面にすず状炭化物付着。
15	甕	14.8 23.1 4.9	口縁部は、外反する。胴部は、やや下位に最大径(19.7)を有し、やや長い。	口縁部外面ヨコナデ。胴部外面ヘラケズリの後ナデ調整。内面上部ヨコナデ。底部ヘラケズリの後ナデ調整。	胎土は、砂粒・雲母末を含む。焼成普通。外面赤褐色、外面赤褐色を呈し、一部に、黒斑を有す。	
16	甕	14.6 17.7 5.5	口縁部は、外反する。口縁部内面に、折線を持つ。胴部上位に最大径(16.4)を有し、肩帯を形成する。	口縁部外面ヨコナデ。内面ハケ目の後ヨコナデ。胴部外面は、上半部ハケ目の後ナデ調整。下半部ヘラケズリ。内面は、ヘラナデ。底部外面ヘラケズリ。	胎土は、微砂粒を含む。焼成良好。内外とも、暗褐色を呈す。	胴部外面にすず状炭化物付着。南壁寄りピット内出土。
17	小形甕	12.6 11.5 4.2	口縁部は、大きく外反し、「く」の字状を呈す。胴部は、やや張りを持った球形を呈し、中程に、最大径(13.2)を有す。口縁部の厚りは、鈍状。	口縁部外面ヨコナデ。内面、ヨコナデの後一帯ハケ目。胴部外面ヘラケズリの後ナデ調整。内面は、胴部ハケ目以下不明。底部外面ヘラケズリの後ナデ。	胎土は、砂粒を多く含む。焼成不良。黒褐色を呈す。	
18	甕	24.8 28.5 8.7	口縁部は、外反する。胴部は、やや丸みを持って下がり、下半部で、すぼまる。底部は、筒抜け。最大径は、口縁部にある。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上位から中位ヘラケズリ、下位縦方向のヘラミガキ。内面上位ヘラナデその後全面ヘラミガキ。孔部は、血取り状のヘラナデ。	胎土は、砂粒、石英を少量含む。焼成良好。内外面とも赤褐色で外面には、黒斑を有す。	胴部内外面とも輪陥み痕を残す。
19	甕	(27.8) (21.4) (12.2)	口縁部は、短く、外反する。胴部は、直線的に下がり、下半部ですぼまる。	口縁部内外面ヨコナデ。外面は、上位ヘラケズリ、中位ハケ目、下位ヘラケズリ。内面は、上位ヘラミガキ、体部ハケ目、下部部ヘラケズリ。	胎土は、砂粒、長石、雲母末を含む。焼成良好。内面赤褐色、外面口縁部付近黄褐色、体部黒褐色。	片残存。
20	甕	— — (7.1)	平底で、中央に2.2cmの円孔を有す。	外面ヘラケズリの後ナデ、内面ヘラナデ。	胎土は、砂粒を含む。焼成普通。赤褐色を呈す。	

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
21	瓶	— — —	中央に直径 0.9cmの円孔を有す。	外面ヘラケズリ、内面ナデ。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好、黄褐色を呈す。	
22	瓶	{17.9} {10.1} { . }	半球形状を呈す。口縁部は、わずかに外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリの後ミガキ。体部内面ヘラケズリおよびヘラナデ。	胎土は、砂粒を含むが精選されている。焼成普通。暗褐色および赤褐色を呈す。	
23	壺	13.8 6.3 3.4	半球形状を呈し、口縁部は、外傾する。口縁部と体部の間の外面には、わずかな凹部を有し、内面には、稜を持つ。上げ底。	口縁部内外面ともヘラミガキ。体部外面ヘラケズリで上部はその後ヘラミガキ。内面は、割落が激しいが、不定方向のヘラミガキと思われる。	胎土は、砂粒を含む。比較的精選されている。焼成良好。赤褐色を呈す。	南壁寄りピット内出土。
24	壺	13.8 (7.9) (.)	半球形状を呈し、口縁部は、直立する。口縁部と体部の間の内面に稜を有する。	口縁部外面ヨコナデの後ヘラミガキ。内面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリの後ヘラミガキ。内面放射状のヘラミガキ。	胎土は、砂粒を含むが精選されている。焼成良好。黄褐色を呈す。	南壁寄りピット内出土。
25	杯	15.3 5.8 5.3	半球形状を呈し、口縁部は、内傾する。平底であるが、整形不良。	口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部ヘラケズリ。内面は不明。	胎土は、砂粒を多く含む。焼成普通。黄褐色を呈す。	
26	杯	13.4 5.5 .	半球形状を呈し、口縁部は、内傾する。丸底。	内外面とも割落が激しく不明。	胎土は、砂粒を少量含むが、精選されている。焼成普通。赤褐色を呈す。	内外面の一部に赤彩。
27	高杯	— — —	胴部は、「ハ」字状に大きく開く。	胴部外面は、縦方向のヘラケズリ内面は、ナデ調整。	胎土は、砂粒、雲母を含む。焼成普通。黄褐色を呈す。	胴部内面に輪郭みねを残す。杯部を欠く。

8号住居址 (第33図, P L .13)

位置と規模 本住居址は発掘区のはほぼ中央に位置し、7号住居址・溝状遺構No.1の2つの遺構に切られており、このため全容は完全には知り得ない。規模は推定で、南北7.7m、東西7.6m、面積58.5㎡を示す。隅丸正方形の平面プランを呈し、西壁はわずかに崩が張る。主軸は南北と平行する。

壁 ローム面まで削除されているため、完全には残っていない。やや外傾して立ち上がり、壁高30～45cmを示す。

周溝 溝状遺構No.1に切られているため、これも完全には残っていない。北壁の北東コーナー付近でわずかに切れるが、他では全周するものと思われる。北壁中央よりやや東寄りの部分が半円形に住居内へ張り出し、さらに東の部分より50cmほど半島状に細く延びている。何らかの施設であるとは考えられるが、用途は不明である。周溝の幅は18～40cmで、断面はU字形を呈する。

柱穴 4個の柱穴が確認された。すべて対角線上に並ぶ。いずれも非常に深く、断面がロート状を呈する。各柱穴間の巾は4.2～4.6mを示す。

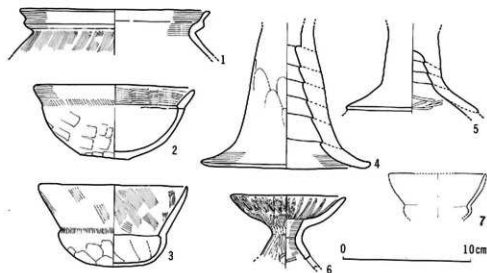
No.	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	その他
P ₁	楕円	96×70	88	
P ₂	円	90×90	77	
P ₃	楕円	94×76	89	
P ₄	楕円	89×76	87	

貯蔵穴 北東コーナーに1個所みとめられた。平面プランを見ると2本の方形ピットが切り合っているように見える。おそらく作り変えたのであろう。21層は底の小ピットから出ているように見えるが、明瞭なものではない。あるいは、小ピットの柱のようなものが立っていたのではないであろうか。深さは67cm、断面はU字形を呈する。

炉址 溝状遺構No.1に切られており、3分の2ほど残存する。長楕円の平面形を呈すると思われ、浅いU字形の断面である。

覆土 覆土の上層は削除されているが、整然とした自然な堆積状態を示し、攪乱などもない。14の焼土は、狭い範囲の部分的なもので、本住居と直接には関係ない。覆土の層序は下の通りである。

- 6 茶褐色土層 (ローム粒混入, 8より粘性が強い)
- 7 黒褐色土層 (ローム粒混入, サラサラしている)
- 8 茶褐色土層 (ローム粒混入)
- 9 黄褐色土層 (ローム粒多量混入)



第39図 8号住居址出土土器実測図

- 10 黒褐色土層（ローム粒少量混入，7より粘性が強い）
- 11 黄褐色土層（ローム粒多量混入，9より粘性が強い）
- 12 黄褐色土層（ローム粒，ロームブロック混入）
- 13 ロームブロック層
- 14 焼土層
- 15 黒色土層
- 16 黒色土層（炭化物粒，焼土粒少量混入）
- 17 赤褐色土層（焼土多量混入）
- 18 褐色土層（ローム粒，ローム小ブロック，炭化物混入）
- 19 黒褐色土層（ローム小ブロック混入，粘性あり）
- 20 黄褐色土層（ソフトローム）

遺物 本住居址の出土遺物は土器だけで、石製品や鉄器等はない。また完形品や器形の推定が可能なのは少ない。2は埴形土器で南辺の周溝内にあったもので、溝底に密着したのではなく、やや浮いた状態で11層中にあった。1はS字状口縁の台付甕の口縁部である。貯蔵穴の南40cmの床面から、やや浮いて出土した。3は埴形土器でP₂の真上、9層中にあるものである。6・7は貯蔵穴中より出土したもので、底よりやや浮いていた。この2つは小形埴形土器と器台形土器のセットである。以上が出土遺物であるが本住居址の時期決定に関係するものは、1～5であるが、これらで住居に確実に伴うと断言できるものはないが、少なくとも廃絶直後のものであり、本住居構築の時期は五領期とみて大過ないであろう。

（宮崎光明）

表12 8号住居址出土土器

番号	器種	法尺	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色澤	備考
1	罎	(14.8) — —	胴部は、「S」字状を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ目。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。黒褐色を呈す。	外面にわずかな炭化物付着。身残存。
2	埴	12.5 5.7 4.0	胴部は、半球形状を呈し、口縁部は、内面に明瞭な線をもって、外縮する。底部は、平底であるが、不整形。	口縁部外面ヨコナデ。体部との境ヨコナデの放射方向のハケ目。内面横方向のハケ目。体部外面ヘラケズリ。内面ヘラケズリ。	胎土は、砂粒、雲母を含む。焼成普通。黄褐色を呈す。	2/3残存。
3	埴	11.7 6.3 —	胴部は、扁平な半球形状を呈す。口縁部は、長く、外縮する。口縁部の長さに対して、胴部は浅い。	口縁部外面放射方向のハケ目。体部との境ハケ目。内面ハケ目。体部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	胎土は、砂粒、雲母を含む。焼成普通。黄褐色を呈す。2と類似。	2/3残存。
4	高坏	— — 13.4	長目の横置で、やや下方に開き、胴部に至って、大きく開く。	外面ヘラケズリの後丁字にナデ調整。胴部内外面ヨコナデ。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	内面に粘土紐の巻き上げ痕。坏部を欠く。
5	高坏	— — —	胴部は、やや丸みを持って直線的に下がり、底部で大きく開く。胴部には、段を有し、さらに開くと思われる。	胴部外面ヘラケズリの後ヘラミガキ。胴部ナデ調整。	胎土は、磨滅されている。焼成良好。赤褐色を呈す。	段の所で接合した痕跡を残す。坏部を欠く。
6	器台	9.1 — —	受部は、内凹して、大きく外方へ開く。脚部は、「ハ」字状に開く。3個の母孔を持つ。受部と脚部を貫く孔径は、1.5mmで、受部壁から穿っている。	受部外面ヨコナデの後ヘラミガキ。内面放射状のヘラミガキ。胴部外面放射方向のヘラミガキ。内面ハケ目の後ナデ調整。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。赤褐色を呈する。	脚部下半欠損。
7	埴	(10.9) — —	胴部は、扁平な半球形状を呈し、口縁部は、長く、内凹きみに外開する。	口縁部内外面ナデ調整。他は、不明。	胎土は、砂粒、石英、長石を多く含む。焼成普通。黄褐色を呈す。	貯蔵穴より出土。身残存。

9号住居址 (第40図, P L.14)

位置と規模 本住居址は発掘区域内の西方中央部に位置している。3号住居址の北約3mの地点にあり、北方4mの位置には16号住居址がある。南北5.40m・東西5.45mで平面形はほぼ正方形を呈し、面積は約29.4㎡を有する。主軸方向はN-5°-Eであり、ほぼ真北を向いている。覆土および床面より焼土・炭化物が検出されており、焼失家屋と思われる。

壁 ローム上面まで削平されているため、壁高および傾斜角度は明確ではないが、5~10cm遺存する。特に北西および北東コーナ付近は、削平のため壁の立ち上がりが不明瞭になっている。

周溝 検出されなかった。

柱穴 支柱穴は4個確認された。P₁・P₂・P₃・P₄であり、ほぼコーナーを結んだ対角線上に位置し、規則正しく配列されている。各々の柱穴間の距離は、P₁-P₂が2.70m、P₂-P₃が2.60m、P₃-P₄が2.80m、P₄-P₁が2.60mである。P₅はP₂とP₃とを結んだ線上にあり、中間点に位置している。深さは16cmと浅いが、規則正しく並んでおり、支柱穴の様相を呈する。

No.	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	その他
P ₁	円形	30×24	72	支柱
P ₂	円形	22×20	68	支柱
P ₃	円形	28×24	56	支柱
P ₄	円形	32×30	82	支柱
P ₅	楕円形	28×20	16	支柱
P ₆	円形	26×24	15	
P ₇	円形	30×28	38	
P ₈	円形	22×20	26	

また、東壁やや南寄りの所で壁を破壊して、P₉が検出された。平面形は、76×58cmの不正形で深さ44cmを測る。この土層セクションを見ると、P₉の覆土が、本住居址の覆土を切っていることから、本住居址に伴うものではないと考えられる。

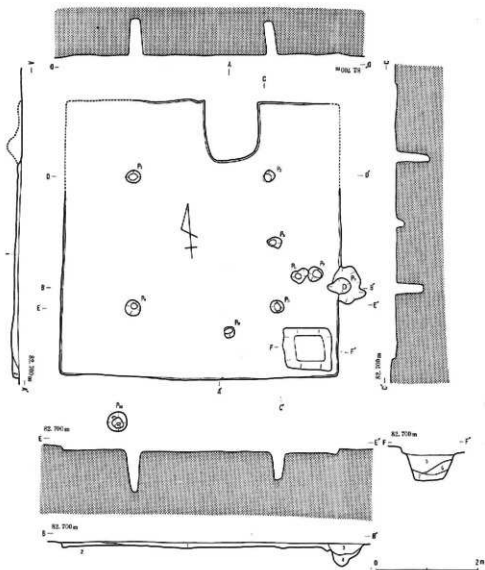
貯蔵穴 貯蔵穴は、南東コーナーにあり、方形を呈する。90×80cmで深さは床面から58cmを測る。壁面あるいは底面は、美しく整形されており凹凸はなく、底部は水平である。覆土は、黄褐色土、茶褐色土、黒褐色土であり、黄褐色土が上面にあり、底面には黒褐色土が堆積していた。

- 5 黄褐色土層 (ローム粒, ロームブロック混入)
- 6 茶褐色土層 (ローム粒, 少量混入)
- 7 黒褐色土層 (ローム粒, 少量混入)

カマド カマドは、北壁東寄りに設けられている。大部分が削平され、遺存状態は良くなかった。このため、壁を掘り込んで住居址外へ伸びる張り出しは、ほとんど見られない。火床の掘り込みは方形を呈し、床面から28cm掘り込まれている。さらに、この掘り込みは、東袖にそって伸び、煙道部へ至っている。火床は、ロームがつき固められた状態で敷かれており、焼けた状態であった。その上に、3～4cmの厚さで焼土が堆積していた。

袖には粘土が用いられ、直径2～3cmの河原石が混入していた。これは袖の強度を増すために用いられたものと思われる。また住居址内南側覆土中より凝灰岩が検出されたが、これはカマドに用いられた可能性もある。カマド内より、高環形土器の坏部および脚部が検出されている。

- カマド土層
- | | |
|-----------------------|----------------|
| 1 黄褐色土層 (ローム粒多量混入) | 3 焼土層 |
| 2 赤褐色土層 (焼土・灰・ローム粒混入) | 4 ローム層 (焼けている) |



第40図 9号住居址実測図

5 黄褐色土層(ローム粒混入) 6 茶褐色土層(ローム粒混入) 7 粘土層(小河原石混入)

覆土 削平のため、深さ10cmを計るのみで住居址全体の堆積状態は明らかでないが、自然堆積と思われる。黄褐色土が主体であり、黒褐色土が壁寄りに堆積していた。3・4の土層は、P.内に堆積していた土層で、1の黄褐色土を切っていることから、P.は本住居址より新しいものと思われる。

- 1 黄褐色土層(ローム粒, ロームブロック多量混入)
- 2 黒褐色土層(ローム粒少量混入)

- 3 茶褐色土層（ローム粒少量混入）
 4 茶褐色土層（ローム粒ほとんど混入しない）

床面 床面はローム面であり、凹凸は少く、水平であった。また全体的に踏み固められていたが、特にカマド前面から主柱穴に囲まれた部分が固かった。ほぼ床面全体にわたって炭化物が検出され、焼失家屋と思われる。

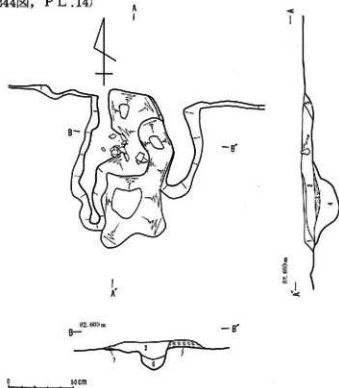
遺物 覆土が浅いため、検出された遺物は少く、そのほとんどが土師器片であった。その中で、主なものの出土状態を記してみる。1は甕形土器底部で、カマド前面の位置に底を床面につけた状態で検出された。この土器の上部は、削平の際にとばされてしまったものと思われる。2は埴形土器で接合によって復元したものである。カマド西側から検出された3片とかなり離れた住居址内の東側から検出された1片とが接合できたものである。3は環形土器でカマド東側の床面に10片ほど散らばった状態で検出された。4は高環形土器坏部でカマド内ほぼ中央部から検出された、5の脚と同一個体と思われる。5は高環形土器脚部でカマド内中央部から4とともに検出された。

以上が、本住居址の概要であるが、期的には、鬼高期前半のものと思われる。

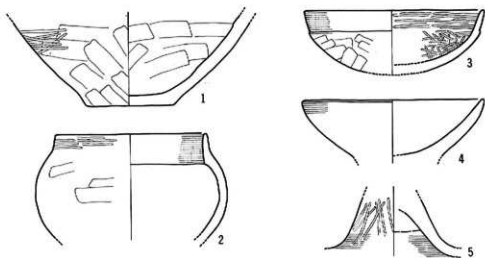
9号住居址南P.10遺構（第44図，P.L.14）

9号住居址の南70cmの位置にある。平面形は、円形を呈し、直径38cm、深さ23cmを測る。覆土は、ローム粒の混入した黄褐色土層であった。覆土中より甕形土器の口縁部から脚部にかけての破片、および底部の破片、環形土器・器台形土器が検出された。期的には、五領期から、和泉期にかけてのものと思われる。

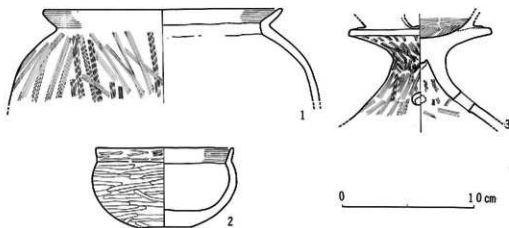
（柳田正弘）



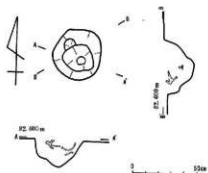
第41図 9号住居址カマド実測図



第42图 9号住居址出土土器实测图



第43图 9号住居址南P.10遺構出土土器实测图



第44图 9号南P10遺構实测图

表13 9号住居址出土土器

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	— — 6.6	底部は、平底である。	外面は、ヘラケズリ、その後一部ヘラミガキ。内面は、ヘラナデ、底面外面ヘラケズリ。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。内面褐色、外面黄褐色で一部黒斑を有す。	底部のみ
2	瓶	(11.5) — —	胴部は、球形状を呈し、口縁部は、内傾きみに立ち上がる。	口縁部外面ヘラミガキ、内面ヨコナデ。胴部外面ヘラケズリ、その他は、剥落が激しく不明。	胎土は、砂粒、砂礫を含む。焼成良好。淡赤褐色を呈す。	片残存。
3	杯	13.7 (4.9) (・)	半球形状を呈し、口縁部は、外面に段を持って外傾する。	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデの敷板方向のヘラミガキ。体部外面ヘラケズリ、内面不定方向のヘラミガキ。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。黒褐色、一部赤褐色を呈す。	2/3残存
4	高杯	13.8 — —	やや内湾気味に外方へ開く。	口縁部内外面ヨコナデ。その他は、剥落が激しいが、外面ヘラケズリ、内面ヘラナデと思われる。	胎土は、砂粒を含むが精選されている。焼成普通。黄褐色を呈す。	胴部を欠く。
5	高杯	— — —	「ハ」の字状に開き、胴部で、さらに強く開く。やや短目の脚と思われる。	外面胴部ヨコナデ、その後ヘラミガキ、内面ヨコナデ。	胎土は、砂粒を含むが精選されている。焼成普通。黄褐色を呈す。	外面赤彩の取落、内面一条の輪痕み取。4と同一個体と思われる。

表14 9号住居址南P10遺構出土土器

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	(18.1) — —	口縁部は、短く、強く外傾する。胴部は、球形状を呈すと思われる。器壁は、薄い。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面敷方向のハケ目、内面ナデ調整。	胎土は、小石を多量に含む。焼成不良。外面黒褐色、内面黄褐色を呈す。	同一個体と思われる平底の底面破片が単に出土。
2	杯	10.4 6.0 4.0	口縁部は、内面に段を持ち、外湾気味に立ち上がる。胴部は、扁平な球形状を呈し、やや上位に最大径(11.0)を有す。平底を呈す。	口縁部外面ヘラミガキ、内面ヨコナデ。体部外面ケズリ気味のヘラミガキ、内面剥落が激しく不明。底面ヘラケズリの後ナデ調整。	胎土は、砂粒、小石を含む。焼成良好。淡黄褐色を呈す。	2/3残存
3	器台	— — —	受部は、円盤状の白の上になり、脚部は、「ハ」字状に大きく開く。受部には、径2mm位の孔を3個穿つ。脚部には、円孔を4個穿つ。	受部内面山の広いハケ目。脚部内面は、山の狭いハケ目、内面粗いハケ目。	胎土は、砂粒、石英、長石、小石を含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	

10号住居址 (第45図, P.L. 14, 16)

位置と規模 本住居址は、発掘区域内の南東に位置しており、台地の東端部に当る。11号住居址の南壁を切って構築されており、東側には、溝状遺構が南北に走っている。平面形は方形を呈し、南北4.40、東西4.30m、面積は18.9㎡を有する。4辺ともやや張りを持っているのが特徴である。主軸方向はN-13°-Eである。

壁 ローム上面より約60cm掘り込まれている。傾斜角度は、82~88度と垂直に近く直線的に立ち上がっている。

周溝 住居址内を1周するが、カマドの手前で切れている。巾12~35cm、深さ6~15cmで、壁にそってまわっているが、コーナー部では壁から離れ、隅丸状にまわっているのが特徴である。しかし、北東コーナーでは貯蔵穴があるため壁にそっている。南壁中央付近で、約40cm張り出している。コーナー部においてやや深く掘り込まれており、特に北西コーナーからカマド西側の部分が深くなっている。

柱穴 柱穴は4個確認された。コーナーを結んだ対角線上にあり、シンメトリーに配列されている。それぞれの柱穴間の巾は、P₁-P₂が1.9m、P₂-P₃が2.1m、P₃-P₄が2m、P₄-P₁が2mである。また、P₁とP₂の間でやや南側に、直径5~10cm、深さ6~10cmの、小さなピットが、15個、不規則な配置で検出された。

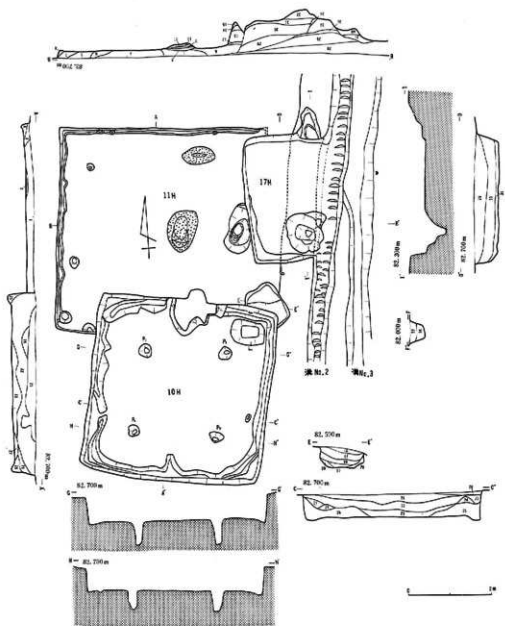
No.	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	その他
P ₁	円形	32×32	58	
P ₂	円形	32×30	60	
P ₃	円形	34×26	48	
P ₄	円形	28×26	50	

貯蔵穴 北東コーナーに位置している。東西に長い長方形を呈し、丸みを持っている。長辺82cm、短辺58cm、深さ35cmを測る。周溝との間は、やや高くなっており、堤状を呈する。

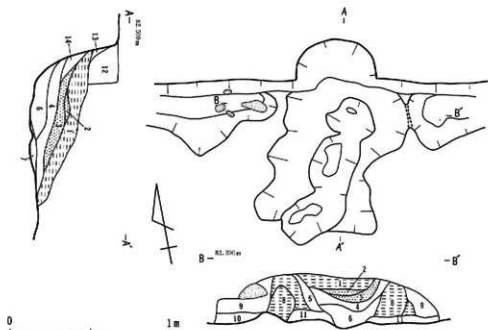
33 茶褐色土層 (ローム粒多量混入)

34 黒褐色土層 (ローム粒混入)

カマド 北壁中央部に設けられている。壁への掘り込みは約50cmと小さく、平面形では円形である。また角度も約70度で急角度で立ち上がっている。火床の掘り込みは、南北に長く不整形であり、深さは約10cmと浅い。袖には粘土が用いられている。天井部は崩れており、粘土の混入した灰褐色土が焼土層の上に堆積して住居内に向かって傾斜している。火床の掘り込みも小さく、張り出し部も発達しておらず、概して簡単な構造のカマドである。また焼土の混入量



第45図 10・11・17号住居址，溝状遺構No.2. No.3実測図



第46図 10号住居址カマド実測図

も少く、ひんばんには使用されなかったことを物語っている。

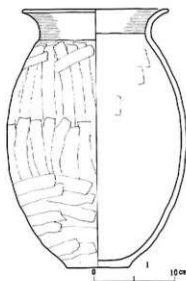
カマド土層

- 1 淡灰褐色土層 (粘土, 焼土, ローム粒混入)
- 2 赤褐色土層 (焼土)
- 3 淡赤褐色土層 (焼土多量, 粘土混入)
- 4 淡黒色土層 (炭化物, 焼土混入)
- 5 黄褐色土層 (焼土, 粘土少量混入)
- 6 暗黄褐色土層 (焼土少量, ローム混入)
- 7 黄色土層 (焼けたローム)
- 8 灰色土層 (粘土)
- 9 黄褐色土層 (ローム粒混入)
- 10 黒褐色土層 (ローム粒混入)
- 11 暗黄色土層
- 12 黄褐色土層 (ローム粒多量混入)
- 13 黒黄褐色土層 (ローム粒多量混入)
- 14 黄色土層 (ロームブロック)

覆土 大きく3層に分類でき、黒褐色土層・茶褐色土層・黄褐色土層が、レンズ状に堆積し

ていることから、自然埋没と思われる。住居址南側の床面近くに焼土および炭化物の混入した赤褐色土が堆積していたが、その下に掘り込みなどの施設はなかった。

- 21 黒褐色土層 (ローム粒、ロームブロック微量混入)
- 22 茶褐色土層 (ローム粒・ロームブロック少量混入)
- 23 茶褐色土層 (ローム粒・ロームブロック多量混入)
- 24 黒褐色土層 (ローム粒・ロームブロック微量混入
21より粘性強)
- 25 茶褐色土層 (ロームブロック多量混入)
- 26 黄褐色土層 (ローム粒・ロームブロック多量混入)
- 27 赤褐色土層 (ロームブロック・焼土多量・炭化物
微量混入)
- 28 黒色土層 (客土層)



第47図 10号住居址出土土器実測図

遺物 覆土中より土師器片が多数検出された。本住居址に伴うと考えられる遺物は非常に少く、甕形土器1個体および鉄製品のみである。

甕形土器 住居址内中央部やや南側の床面直上より、同一個体と思われる土師器片が集中して検出され、これを接合復元したものである。胴部および底部はほぼ遺存するが、口縁部から頸部にかけては一部遺存するのみである。

口径18.1cm、器高31.6cm、底径7.7cmを計る。器形は頸部がやや直立し、口縁部が大きく外反する。胴部は長胴を呈しほぼ中程に最大径(22.0cm)を有する。底部は突出する。調整は、口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面は上半縦方向、下半横方向のヘラケズリを行う。内面は、ナデ調整、底部外面はヘラケズリを行う。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。内外面とも黄褐色を呈し、外面は一部黒斑を有する。

鉄製品 住居内南側から検出された。床面よりやや浮いた状態であった。

以上のことから本住居址は、鬼高期中葉に比定できるとと思われる。

(柳田正弘)



第48図 10号住居址出土鉄製品実測図

11号住居址 (第45図, P.L.16)

位置と規模 本住居址は、発掘地区の南東部に位置し、南側を10号住居址、東側を17号住居址に切られている。そのため正確なプラン・規模は得がたいが、南北の長さはわずかに残っている南壁のところで4.90mを測り、東西は、東壁が北側でわずかに残るものの、ブルトナーの削平により正確な壁が確認できなかったため、推定で5.50mほどの東西に長い長方形を呈し、床面積は27㎡程度であったと思われる。主軸は、ほぼ南北を示すが、正確にはN-7.5°-Eである。

壁 住居構築の際、ルーム層をそれほど深く掘り込んでいない上、ブルトナーの削平のため調査時において、壁が残る北から西にかけての高さは平均で20cm前後である。東壁近くにおいては、床面のレベルまで削平がすすみ確認できないという遺存状態であった。ルーム層をどんな角度で掘り込み、壁をつくったかは正確に知り得ないが、北壁から西壁にかけて残るところから推定すると、ほとんど垂直に近い角度で掘り込んだと思われる。

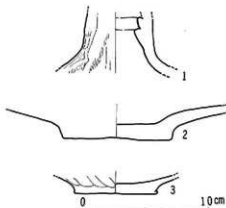
周溝 壁下には幅10cm、床面からの深さ5cm程度の断面U字形の周溝が南西コーナーから北東コーナー付近まで周っていた。他は10号住居址と17号住居址に切られているため不明である。

柱穴 四隅に柱があったとすれば、切り合いになっている住居址とはいえ、北西コーナーと南西コーナー部で柱穴が確認できてもよさそうであるが、それらしきピットは検出できなかった。確認されないものの、恐らく何人らかの柱はあったであろうから、それに伴う遺構がなければならぬ。床面やや東よりに深さ58cmの断面V字に近いピットを確認したが、このピットは他の数個のピットとは様子が異なるものである。しかし、このピットが柱に伴う遺構かどうかは確認するべきがない。

貯蔵穴 貯蔵穴は南東コーナー部のところに位置し、南側を10号住居址に切られて確認された。幅80cm、長さ100cm、深さ47cmほどの長方形のプランを示す。貯蔵穴より数片の土師器破片が検出された。

貯蔵穴内には、次の5層の堆積層がみられた。

- 16 茶褐色土層 (ルーム粒多量・焼土少量混入、やや固い)
- 17 褐色土層 (ルーム粒多量・焼土・ルームブロック混入、固い)
- 18 明褐色土層 (ルーム粒多量混入、非常に固い)



第49図 11号址出土土器実測図

19 黄褐色土層（黒色土少量混入，やや軟かい）

20 黄色土層（ソフトローム）

以上・セクションを観察すると，第20層は，貯蔵穴内に自然に流れ込んで堆積した様子がうかがわれ，順次，土が流れ込んで堆積したものと考えられる。

床面 床面は東側が低くなる若干の傾斜をもっている。中央部は，生活の主要な場であったかを示すがごとく非常にかたく，壁に向うにしたがってやわらかくなり，床面を出すにも苦勞するほどであった。

炉址 炉と思われる焼土のプランが床面中央部と北壁よりに2ヶ所確認された。中央部の焼土プランの規模は，長軸1m，短軸66cmの南北を長軸にした楕円形を呈し，床面から10cmの深さを測る。他方北壁よりのものは，長軸80cm，短軸42cmの東西を長軸とする楕円形を呈し，最も深いところで14cmを測る。両方のプランとも堆積土層は同じようであり，堆積土層をみると，第9層は，焼土上に堆積した黒褐色土で焼土粒を多量に含んでいた。第10層は，火に直接あたった土層で焼土そのもので赤色をしている。第11層は，ロームブロックを主とする黄色土で，熱により粘性がなくボロボロしている。いずれも炉として使用された可能性が非常に高いと思われる。ただし，同時期に使用されたものか，またどんな性格のものかは不明である。

覆土 住居内には次のような土層が堆積していた。

1 黒褐色土層（ローム粒混入）

調査時において最上層の堆積土であり，本住居を埋めた土層の主体を占めている。

2 黄褐色土層（ロームブロック主）

3 黒褐色土層（ローム粒・ロームブロック混入）

4 黄褐色土層（ロームブロック主，固い）

5 黄褐色土層（ローム粒・ロームブロック混入，固い）

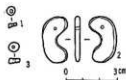
6 茶褐色土層（ローム粒微量混入）

7 黒褐色土層（ローム粒混入）

8 黄褐色土層（ローム粒・ロームブロック混入）

これら土層の堆積状態をみると，壁ぎわから住居内に土が流れ込んで堆積している様子がうかがえる。つまり，本住居は，放棄されたのち自然的な条件により土が堆積し，埋没したものと考えられる。

遺物 遺物は炉周辺にかなりのまとまりをみせているものの，全体的に住居内広く分布して検出された。種類は土器，石製模造品及び礫石であり，すべてが床面直上の土層（第1層）より得られたが，量的には多くなかった。土器はすべて破片で検出され，土師器がほとんどであ



第50図 11号住居址出土
石製模造品実測図

たが弥生式土器も数片みられた。器種は甕・高坏等がみられた。すべて破片であり、接合によっても完形品は得られなかった。土器1は床面中央部の炉と思われる焼土プラン直上及びその周辺から検出された高坏である。接合により胴部のみが得られた。また、土器2・3はいずれも底部のみ床面直上のレベルから検出された。土器2は、やはり中央部の焼土プラン内から、土器3は西壁よりの位置に、底を床面につけた様子で検出された。

これだけの土器をもって、本住居址の編年的な位置づけをするのは困難である。他の種々の要素をも考慮し、考えてみたい。

石製模造品は、滑石製の白玉2個、勾玉1個を検出した。これらはすべて埴土作業中動かされた状態で検出されたため、正確な位置・レベルは不明であるがこの住居に伴うことは確実である。また、当時の使用痕を残す砥石が貯蔵穴近くの床面直上より1個検出された。

以上出土土器や滑石製の模造品が多いこと、それに炉の使用などから推察すれば、本住居址は和泉期に属するものと考えられる。

(石川幸夫)

表15 11号住居址出土土器

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	高坏	— —	胴柱部は、中節み。	粗いヘラミガキ。	胎土は、よく精選されている。焼成良好。赤褐色を呈する。	内面に検眼み痕をよく残している。胴部のみ。
2	不明	— (8.6)	やや上げ底		胎土は、砂粒・雲母・石英等多量に混入している。焼成普通。黄褐色を呈する。	
3	不明	— (7.6)	やや上げ底	ヘラケズリあり。	胎土には、砂粒を多量に混入している。焼成普通。黄褐色を呈する。	

表16 11号住居址出土石製模造品

番号	種	類	計測値 (mm)			備考
			(直径)	(長さ)	(孔径)	
1	白	五	5.0	2.0	1.5	灰色、粗粒
			(長さ)	(巾)	(孔径)	
2	勾	玉	27.0	9.0	2.5	両面みがき
			(直径)	(厚さ)	(孔径)	
3	白	玉	6.0	2.5	1.5	灰色

12号住居址 (第51図, P L. 16~18)

位置と規模 本住居址は、発掘区域の中で最も北に位置する。住居址の北西隅で張り出しピットをもつ13号住居址と、東側で15号住居址と重複しているが、平面プランより本住居址が三軒の中で一番新しい事が確認できた。南北6.6 m, 東西6.7 mの方形プランを呈し、北壁にカマド、南壁に1.2 m四方の方形の張り出し部を設けてある。面積は約46㎡で、主軸方向はN-25°-Wである。

壁 上部は土取りによりルーム面まで削平されている。壁面は垂直に立ち上がり、壁高は北壁で約30cm, 南壁で約15cm, 平均して25cm前後で、住居址の南側の壁は低くなり、遺存状態はよくない。

周溝 壁直下をめくり、張り出しピットの両脇でなくなるが、13号住居址と切り合っていた北西隅では検出されなかった。周溝が切れる所で、深さ12cmのP₁・P₆が検出されたのみである。巾は10~25cm, 深さ5~10cmで、断面はU字形を呈する。周溝底はどこでもほぼ同一レベルであった。また東側の周溝底面には径5~10cm, 深さ3~8cmのピットが6個並列してあげられていた。

柱穴 柱穴は4個で、方形住居の対角線上にほぼ並ぶ。P₁~P₄が3.7 m, P₂~P₅が3.8 m, P₃~P₆が3.6 m, P₁~P₂が3.7 mを測り、一辺が3.7 m前後の正方形に配置されている。

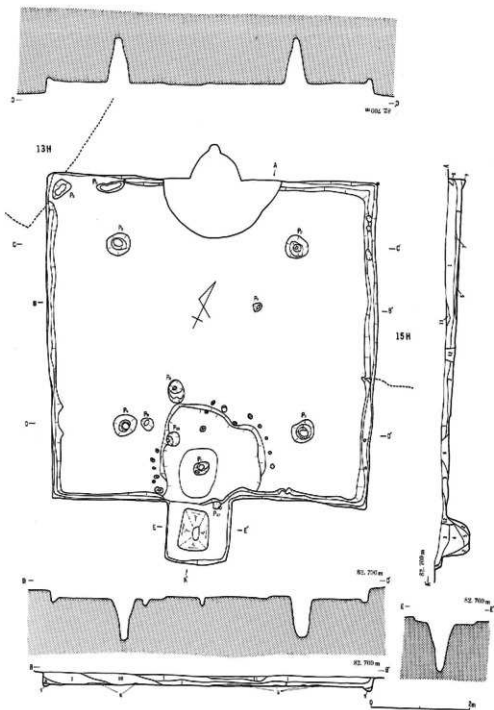
No.	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	その他
P ₁	楕円形	45×53	93	
P ₂	円形	46×48	94	
P ₃	楕円形	42×50	87	
P ₄	楕円形	42×48	85	

他のピットの深さは、次のようである。

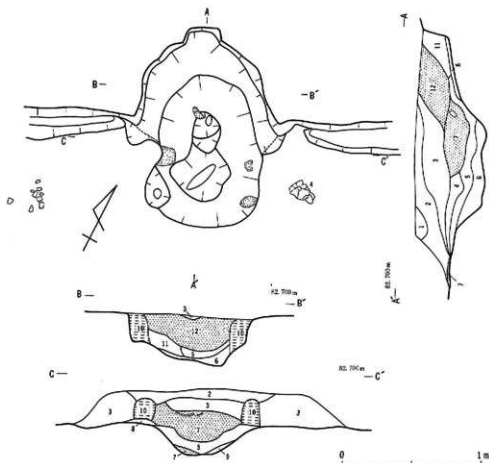
P₅-12cm, P₆-12cm,
P₇-20cm, P₈-20cm,
P₉-16cm, P₁₀-24cm,
P₁₁-15cm, P₁₂-18cm。

貯蔵穴 検出されなかった。

張り出しピット 南壁中央にあり、巾20~40cmのテラスをもつ。東側テラスで小形甕1個体、環2個体、高環2個体が出土されている。ピットはテラスの中央を80×60cmの方形に掘りこんでいるが、深さは100 cmと人の手がとどかないくらい深い。断面は主軸方向でU字形、主軸の直角方向でV字形を呈する。ピット内からの遺物はほとんどなかった。また床面直上にもみられる暗黄褐色土がピット底部にもみられるので、本住居址が廃棄されるまでピットは開口していたことがわかる。しかしこのピットが貯蔵穴であったかは形状やピット内の遺物の量からみて疑問である。



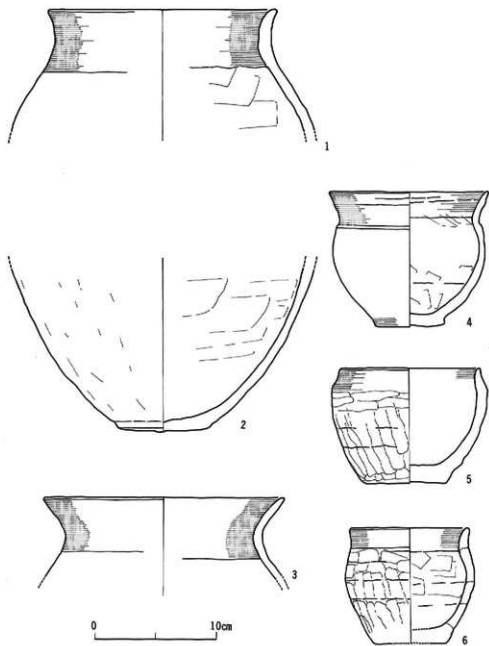
第51图 12号住居址实测图



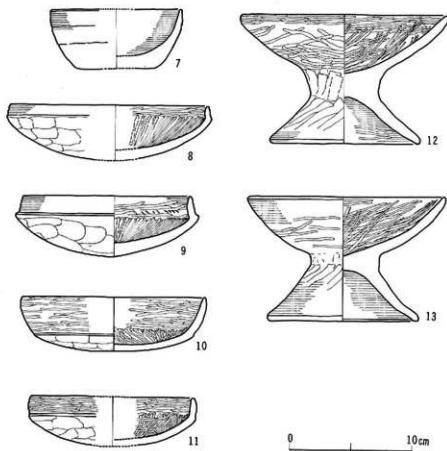
第52図 12号住居址カマド実測図

床面 床面は全面ローム土で、中央部からカマドにかけてかなり踏みかためられていた。床面直上には木炭と厚く堆積した粘土が全面に見られることから本住居址は火災にあったと思われる。住居址の南側では低い堤状に床面が5cm前後高くなって振り出しピットの北側をめぐる。さらに堤の外側には径6～12cm、深さ4～10cmの小ピットが並び、堤の中央部には大きさ25×33cmの楕円形で深さ15cmのP₁₁がある。これらの施設は振り出しピットに何らかの関連のある遺構と思われる。

カマド カマドは北壁ほぼ中央に築かれていて、遺存状態は良好である。壁を約65cmほど、約15度の傾斜をもたせて半楕円形状に掘り込んでいる。火床の掘り込みは、楕円形を呈し、床面から約25cmほど掘り込んで底面に至る。底面には2つの掘り込みが認められ、南側の方が大きく北側の方が小さい。北側の掘り込みには支脚と思われる凝灰岩が立った状態で検出された。また火床のロームは焼けた状態であり、灰も認められた。火床の掘り込みが2つ認められ、全体的に南北に長いことから考えると、あるいは単孔のカマドではなく、2孔だったのかもしれない。



第53图 12号住居址出土土器实测图



第54図 12号住居址出土土器実測図

ない。

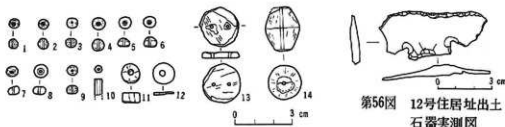
袖には粘土が用いられ、芯として両袖から凝灰岩が検出されたが、あるいは袖そのものに用いられたのかもしれない。また左袖前面からカマドに付設されたと思われる深さ18cm程度の小ピットが検出された。

焼土はかなり厚く堆積しており、15-20cmを測る。煙道部にも焼土が多量に堆積しており、約40度の傾斜をもって立ち上がっている。

カマド内からの遺物は土師器片だけであるが、カマドの東側より小形壘形土器が完形に近い状態で横転して出土した。

覆土

- 1 褐色土層 (ローム粒, ローム小ブロック, 焼土微量混入)
- 2 褐色土層 (ローム粒混入)



第55図 12号住居址出土石製模造品・土玉実測図

第56図 12号住居址出土
石器実測図

- 3 褐色土層（ローム粒，焼土粒，木炭混入）
- 4 黒褐色土層（ロームブロック多量混入，固くて粘性がある，木炭も少量混入）
- 5 黒褐色土層（焼土混入）
- 6 黄色土層（ローム土がカマドの廻り込みの中に堆積したもので，火にあたっているため，粒状になりサラサラしていてもろい）
- 7 焼土層（カマドの前面の床にちらばったものと思われる）
- 8 ロームブロック
- 9 灰褐色土層
- 10 褐色土層（紫がかっている，袖のあとと思われる）
- 11 黄褐色土層（焼土混入，火にあたっているためもろくかわいている。煙道への道がわかる）
- 12 焼土層（粘性あり）

遺物 カマドと張り出しピット周辺からの出土が多かった。土器は甕2個体，小形甕3個体，碗1個体，杯4個体，高杯2個体出土している。石製模造品の種類と量が多く，有孔円盤1個，管玉1個，土玉1個，白玉1個小玉9個が出土しているのが本住居址の特徴である。他に鉄器と石包丁様の石器が出土している。

土器 1の甕口縁部はカマド内より出土した。2の甕下半部と出土地点が同じであり，胎土，調整なども同じ事から，1と2は同一個体であると思われる。3の甕口縁部はカマドの西で床面から15cmほど浮いて出土した。4の小形甕はほぼ完形である。カマドの東の床面上から横転した状態で出土した。5の小形甕は張り出しピットの東側テラスより出土した。6の小形甕は張り出しピットの北で2片に割れて出土した。7の碗はやはり張り出しピットの北より出土した。底部には木葉痕がある。8の杯は片残存し，住居址の中央部からカマドの南側にかけて4片に別かれて出土した。9の杯は張り出しピットの東側テラスより出土した。10の杯は片残存している。住居址北西の覆土上層の破片と北西柱穴中の充填土より出土した破片を接合したものである。11の杯は2片に割れて床面中央より出土した。12，13の高杯は，張り出しピットの東側テラスより出土した。

甕はカマドの周辺に多く、坏・高坏はカマドの南から張り出しピットにかけて多く出土している事がわかる。

石製模造品 有孔円盤と管玉は覆土中から出土した。小玉は北東の柱穴のそばに7個、張り出しピットの北から2個、かたまって出土している。

土玉は北側の西壁寄りに出土した。

鉄器 小片なので用途は不明だが、おそらく釘であろう。

石器 床面上5cmの所から出土した。石包丁のような形をしているが、破片なので、断定はできない。

以上が本住居址の概要であり、構築時期は鬼高期と考えられる。

(斎藤 均)

表17 12号住居址出土土器

番号	器種	数量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	(18.5) —	口縁部は、ゆるく外弯して、立ち上がる。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面、横方向のヘラナデ、外面は、指ナデ。	胎土は、砂粒、石英粒を多量に含む。焼成良好。淡黄褐色を呈す。	カマド内出土
2	甕	— 7.5	胴下半部の残存であるが、1と同一個体と思われる。やや反胴型。	内面は、横方向のヘラナデ、外面は、指ナデで、凹凸が著しい。底部外面、ナデ調整。	胎土は、砂粒、石英粒を多量に含む。淡黄褐色を呈す。	カマド内出土 胴部外面にすす状炭化物付着。
3	甕	(19.6) —	頸部が、若干立ち上がり、口縁部が、大きく外反する。やや反胴型を呈すと思われる。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面は、指ナデ。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。淡黄褐色を呈す。	
4	小形甕	13.1 11.1 5.6	口縁部は、「く」の字状に外反する。胴部は、球形を呈し、底部は、やや突出気味。頸部に線を有す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、横方向のヘラナデ。外面は、ヘラケズリの数、ナデ調整。底部外面、ナデ調整。	胎土は、砂粒、石英粒を含む。焼成やや不良。淡黄褐色を呈す。	カマド内出土
5	小形甕	11.8 9.5 6.7	口縁部は、内傾し、底部が、わずかに直立する。底部は、やや大きめ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、不明。外面は、上位が、横方向、以下縦方向のヘラケズリ。底部外面ヘラケズリ。	胎土は、砂粒を多量に含む。焼成不良。淡黄褐色を呈す。	
6	小形甕	9.6 9.6 (5.7)	口縁部は、短かく外傾する。胴部上位に最大径(10.7)を有し、底部が、やや大きめ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、横方向のヘラナデ。外面は、上位が、横方向、以下縦方向のヘラケズリ。	胎土は、砂粒を含む。焼成普通。淡赤褐色を呈す。	
7	甕	(10.7) 4.9 (6.0)	体部が、外上方へのび、口縁部は、直立し、肩部が尖る。底部は、厚手。	内面は、全面ヨコナデ。外面は、口縁部ヨコナデ、体部、指ナデ。底部外面、木炭痕。	胎土は、砂粒を少量含む。焼成良好。淡黄褐色を呈す。	
8	坏	16.3 (4.6) —	口縁部は、短かく、内傾する。	内面は、口縁部が横方向、底部が、放射状の密なヘラミガキ。外面は、口縁部ヨコナデの後、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、微砂粒を含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
9	坏	13.8 5.0 —	体部外面に、線を有し、口縁部は、内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状の密なヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂粒、雲母、石英を含む。焼成良好。褐色を呈す。	
10	坏	13.0 4.5 —	体部外面に、軽い線を有し、口縁部は、大きく内弯して薄く。底部は、やや扁平。	内面は、口縁部が横方向、底部がやや放射状の密なヘラミガキ。外面は、口縁部が、ヨコナデの後ヘラミガキ、底部ヘラケズリ。	胎土は、微砂粒を含む。焼成良好。内面黒色、外面黒褐色を呈す。	内面黒色処理

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
11	坏	(13.3) (4.1) —	体部外面に、稜を有し、口縁部は、ほぼ直立する。	内面は、口縁部が横方向、底面が、放射状の密なヘラミガキ。外面は、口縁部が、横方向のヘラミガキ、底部ヘラケズリ。	胎土は、石英、長石などを含む。焼成良好。内面黒色、外面暗茶褐色を呈す。	内面黒色処理
12	高坏	17.0 10.6 12.2	坏部は、やや内側気味に外上方へ開く。胴部は、短めで、大きく開く。	坏部内面は、全面ヘラミガキで口縁部は、横方向。外面もヘラミガキで、口縁部は横方向。胴部は内面が全面ヨコナデで、下部部に横方向のヘラミガキ。外面は縦方向のヘラケズリで下端はヨコナデ。	胎土は、雲母、石英粒を含む。焼成良好。坏部内面黒褐色その他は、淡黄褐色を呈す。	坏部内面黒色処理
13	高坏	16.1 10.2 12.2	坏部は、やや内側気味に外上方へ開く。胴部は、短めで、大きく開く。	坏部内面は、全面ヘラミガキ。外面は、口縁部ヨコナデ、体部が横方向のあらいヘラミガキ。胴部内外面は、全面ヨコナデで、坏部との接合部を指ナデ蕪整。	胎土は、砂粒を少量含む。焼成良好。坏部内面暗褐色、その他茶褐色を呈す。	坏部内面黒色処理か?

表18 12号住居址出土玉類

番号	種類	計測値 (mm)	備考
1	小玉	(直径) (厚さ) (孔径) 5.0 ————— 5.0 — 1.0	緑色、一部欠損
2	〃	5.0 ————— 5.5 — 1.0	
3	〃	5.5 ————— 5.0 — 1.0	
4	〃	6.5 ————— 6.0 — 1.0	
5	〃	6.5 ————— 4.5 — 1.0	
6	〃	5.5 ————— 5.5 — 1.0	
7	〃	5.5 ————— 4.0 — 1.0	
8	〃	7.0 ————— 4.0 — 2.0	
9	〃	5.0 ————— 4.5 — 1.0	
10	管玉	(直径) (長さ) (孔径) 3.5 ————— — 1.5	
11	白玉	(直径) (厚さ) (孔径) 10.5 ————— 5.0 — 2.5	
12	〃	11.5 ————— 1.5 — 3.0	
13	有孔円盤	(長径) (短径) (厚さ) (孔径) 21.0 — 20.0 — 3.0 < 1.5 1.5	
14	土玉	(口径) (最大径) (長さ) (孔径) 9.0 — 18.0 — 23.0 — 2.0	

13号住居址（第57図，P.L. 18・19）

位置と規模 調査区域北部に位置し，12号住居址，15号，17号土壌と重複関係にある。本住居址は，北東部を送電線の鉄塔，西半を水田の畦畔に遮られているため，完掘することができず十分な調査を果せなかった。

このため，本住居址の明確な規模・形態は不明であるが，カマドと張り出し部を結ぶ線を中心線と考えると推定すると，主軸方向N-5°-E，南北約6.75m，東西（推定）6.8m，面積（推定）45.6㎡の方形プランであったと思われる。また本住居址は，北壁中央にカマド，南壁中央に長径1.3m短径1.1mの方形を呈する張り出し部を設けている。

壁 壁穴のローム上面から床面までの高さは，南壁において25cm，北壁において33cm，平均約29cmを測り，壁は，カマドと重複している17号土壌のため，カマド東寄りの北壁の一部を17号土壌の覆土である黒色土をもちい，張り出し部の南半を15号土壌の覆土である黒褐色土をもちいている。他は，ローム層をもって築いており，ほぼ垂直に立ち上がる。

周溝 張り出し部を除く南半，北壁下の一部で検出し，幅10～18cm，平均14cm，深さ（床面下）約6cm，断面はU字形を呈し，壁の直下を周っている。また，東壁直下の南側から延びる周溝は，東壁の中央からやや南寄りの地点でとぎれ，北壁の周溝は，重複によりどこでとぎれるかは明確ではないが，カマド内には周溝が周っておらず，カマドの袖付近でとぎれるものと思われる。

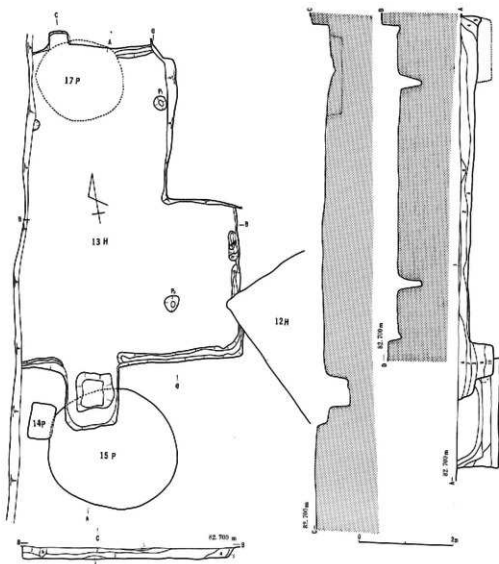
柱穴 P₁・P₂の2個でP₁～P₂は4.25mである。

No.	形状	大 き さ	深さ(cm)	そ の 他
P ₁	円形	34×28	50	
P ₂	円形	34×28	50	西側斜面は傾斜がややゆるい

そのほか，カマドの南西の位置に小ピットが認められたが，2個の柱穴に比べ傾斜がゆるく深さも10cmと浅いところから，柱穴とは考えにくく，土器を置くための穴と思われる。

貯蔵穴 検出できなかったが，張り出し部内に長径80cm，短径75cm，深さ50cmの方形を呈するピットが15号土壌を切って確認された。ピットの四方を囲むように，幅10～43cmのテラスを有し，南半はローム粒及びロームブロックをもってたたいて形成されている。底部南半も同様である。ピット中の南斜面の傾斜が急であるのに対し，東側斜面はゆるやかである。そのため，南側テラスは幅が広いのに対し，東側テラスは極端にせまい。ピット中からは，土器の破片が出土したがテラス部からは，出土していない。

床面 中央部とカマド附近に貼り床が施されているほかは，ロームをたたいて形成している。

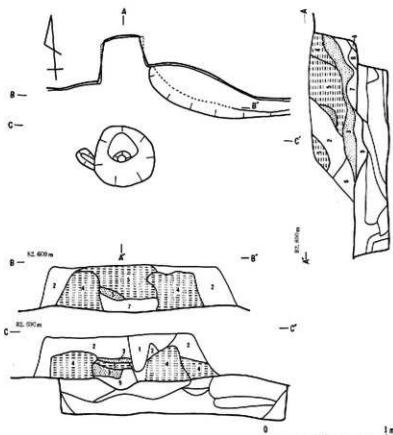


第57図 13号住居址、15・17号土壌実測図

本址中央部の貼り床は、僅かにロームブロックが混入している黒色土をもって堅くつき固めたものである。次に17号土壌と重複しているカマド周囲の貼り床は、17号土壌の底部まで及んでおり、また土壌の覆土の埋没状態を見る限り（第58図）17号土壌が完全に埋没していない状態において貼り床が施されたと思われる。貼り床には、ロームブロックを多量にもって堅固にたたいている。

床面全体にわたって、多量の焼土及び炭化物がみられるところから、本址は焼失家屋であると思われる。

カマド カマドは貼り床上にあり、壁を台形状に約36cm、85度の傾斜をもたせて掘りくぼめ



第58図 13号住居址カマド実測図

て構築され、その両脇は3cmほどオーバーハンクしている。火床は57cm×50cm、深さ13cmのほぼ円形を呈している。

両袖は、壁から住居址内に約70cm突き出しており、正面の幅は55cm、その奥で45cm、奥行は約1.9mであり、灰白色の大変粘性の強い粘土を芯として構成した後、やや粗雑な粘土でおおっている。

天井は一部陥没しているところがあるが、保存状態は良好であり(第58図)、セクションにより、南北27cm程の土器の掛け穴が認められる。(第58図) 焼土層は、火床に厚い所で10cm堆積し、その奥の煙道部には、焼土に混ってかなりの灰も堆積していた。火床から煙道にかけての床面であるが、17号土壌の覆土が軟弱であったためか覆土を掘りくぼめ平坦にした後、ロームブロック・ローム粒多量混入の黄褐色土を敷き(カマド・17号土壌セクション図参照)、その後埋没時の覆土の傾斜にそってロームブロックを敷き、火床の北側の斜面を構成し、その後再び黄褐色土層を平坦に敷き、火床の深さを決定させ、次にロームブロックをもって今度は南側斜面を構成したと思われる。

つまり、火床は貼り床の施された後に掘り込んだのではなく、カマドを意識しながら貼り床を施したと思われる、住居構築の段階においてカマドの形成は構想されていたものと思われる。

カマド内の覆土

- 1 黒褐色土層（ロームブロック、ローム粒、黒色土混入）
- 2 茶褐色土層（ローム粒、ロームブロック、焼土混入）
- 3 焼土層
- 4 粘土層
- 5 粘土層
- 6 黒色土層（ローム粒、焼土混入）
- 7 暗黒褐色土層（灰多量混入、ローム粒、焼土混入）
- 8 暗褐色土層
- 9 暗茶褐色土層（ロームブロック、ローム粒、黒色土混入）

覆土

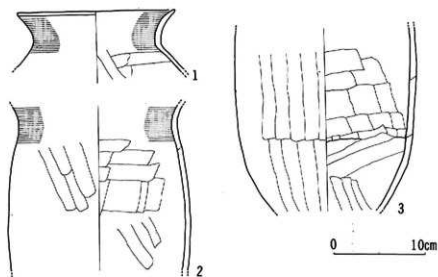
- 1 茶褐色土層（ローム粒混入）
- 2 黒褐色土層（ローム粒混入）
- 3 黄褐色土層（ローム粒多量混入、ロームブロック混入）
- 4 黒色土層（ローム粒混入）
- 5 ローム層（流れ込みによる）
- 6 攪乱層
- 7 ロームブロック層
- 8 黒褐色土層（ローム粒多量混入）
- 9 黒色土層（ロームブロック混入）
- 10 黒色土層（粘性弱い）

遺物 本址出土の土器類は、ほとんどが土師器片である。完形品は未完製のこともあって出土していない。

土器片が集中しているのは、本址中央部からやや東に寄ったところであり、長胴の甕の破片が検出された。

以上が本住居址の概要であり、鬼高期に構築されたものと思われる。

（森 和昭）



第59図 13号住居址出土土器実測図

表19 13号住居址出土土器

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	(26.1) — —	頸部は、ほぼ垂直に立ち上がり、口縁部がゆるやかに外反する。口縁部の脚壁は、やや肥厚。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面上部ヘラケズリ。	胎土は、軽砂粒を少量含む。焼成良好。褐色を呈す。	口縁部片残存
2	甕	— —	口縁部は、外反すると思われる。胴部は、長胴を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ヘラケズリ、内面粗い、横方向のヘラケズリ。	胎土は、砂粒を含む。焼成普通。赤褐色を呈す。	胴部上半片残存。3と同一形体と思われる。
3	甕	— —	直線的な胴部が、下半部で、すぼまる。	外面は、縦方向のヘラケズリ、内面は、横方向の粗い、ヘラケズリ。	胎土は、砂粒を含む。焼成普通。赤褐色を呈す。	外面すず状炭化物付着。胴部片残存。底部欠損。

14号住居址（第60図，P.L.18・20）

位置と規模 本住居址は、発掘地区北端、鉄塔の東に位置し、15号住居址と16号土壌と重複している。平面形態は長方形を呈し、長軸3.93m、短軸2.80mを測り、床面積は10.95㎡である。住居址の主軸はN-13.5°-Wである。

壁 壁は上部を削平されているため残存部で推定するほかはないが、調査時で東側の最も深いところは28cm、南側の浅いところで17cm、平均22cmを測りロームをほぼ垂直に掘り込んでいる。

周溝 壁下には幅10cm、床面よりの深さ5cm程度を測る断面U字形を呈する周溝がめぐっている。周溝は南壁より東壁、北壁とほぼ4分の3周し、西壁では幅が倍増して南西コーナーへ向かう、この部分の周溝は他と形を異にしている。南西コーナーは、16号土壌に切られているため、周溝の有無は確認できないが、壁下を一周していたものと考えられる。

柱穴 床面に20数個の大小さまざまなピットが確認できたが、柱穴らしい遺構は確認されなかった。これらのピット群は床面中央を囲むように存在し、あたかも支柱のかわりをしていのかのように感じられるが、不規則な並び方を示していることや、それぞれのピットの規模がまちまちであることなどから柱穴と決めることは困難である。

貯蔵穴 貯蔵穴は南西コーナー付近に確認された。南側はやはり16号土壌に切られており、正確な規模は確認しがたいが、長軸70-80cm、短軸50cm、深さは床面から30cmほどの南北に長い楕円形を呈する小型の貯蔵穴であったと思われる。貯蔵穴内には、第20層黒褐色土の焼土・木炭混入の土層と第21層黄色土のソフトロームの土層の2層が堆積していた。貯蔵穴内の遺物は土師器数片のみであった。

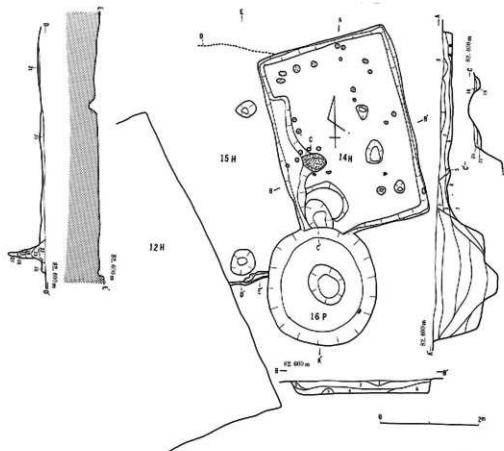
床面 中央付近が最も固く、壁に向うにしたがってやわらかくなる。壁ぞいでは床面の確認がむずかしいほどの、いわゆるソフトロームであった。なお、張り床は確認されなかった。

本住居は、火災により放棄されたものであろう。排土作業中床面より多量の炭化した家屋構造材や焼土が確認された。

炉址 炉と思われる焼土のプランは、西壁から70cm、南壁から1.5m、床面中央やや南西よりのところ、貯蔵穴の北側に隣接して確認された。炉の平面形は、長軸50cm、短軸35cmほどの東西を長軸とする楕円形を呈し、床面を20cmほど掘り込んであった。炉内の土層をみると、第18層は直接火にあたっていたところらしく、黒色土を少量含んでいたが焼土そのものであった。第19層は火による熱のため、ロームの粘性がなくなった、かたい・ぼろぼろしたロームブロックであり、黄褐色をしていた。

覆土 住居址内には次のような堆積土層がみられた。

1 黒色土層（ローム粒微量混入）



第60図 14・15号住居址、16号土壌実測図

2 黒色土層（ローム粒少量混入）

両層は、調査時において最も上層の堆積土であり、第2層のほうがローム粒を多量に含んでいた。

3 茶褐色土層（ローム粒・焼土混入）

4 黒色土層（焼土・木炭混入）

この層が床面直上の堆積土であり、遺物包含層であった。

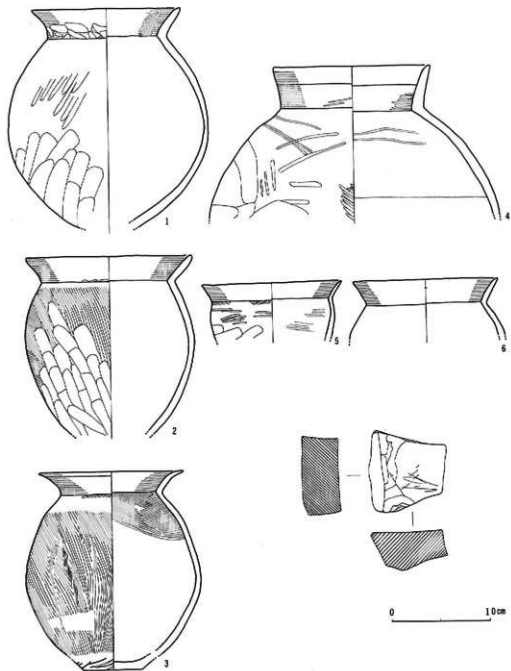
5 焼土層

6 黄褐色土層（ロームブロック少量混入）

7 黄褐色土層（ロームブロック多量混入）

8 黒褐色土層（ローム粒・焼土混入、攪乱土層）

これらの土層は、焼土・木炭を多く含んでおり、特に、床面直上の第4層は、顕著で本住居が火災に遭い放棄されたことを物語っている。この放棄された住居は、その後の、土層堆積状



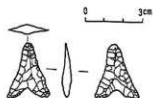
第61图 14号住居址出土遗物实测图

態をみると、まわりから土が流れ込み、次第に埋没していったものと考えられる。そして、後世、この住居の一角を切るかたちで16号土壇が設けられたものと考えられる。なお15号住居址との新旧関係は、平面プランより本住居址の方が新しい時期のものであると考えられる。

遺物 出土遺物はすべて土器で、種類は土師器が主体で

弥生土器が多少混じっていた。器種は、甕・壺・坏である。量は多くはないが、ただ火災に遭って破壊された住居のため、完形に近い甕が2・3個体分おしつぶされた状態で原位置を保って検出された。土器の出土位置は炉の周辺に集中しており、土器使用の様子がうかがえる。

甕形土器1・2は、いずれも床面直上におしつぶされた状態で検出され、整理時の接合により、共に底部を欠くがほぼ完形になった。また甕形土器3・4も同じように、それぞれ数片ま



第62図 14号住居址出土
土器実測図

表20 14号住居址出土土器

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・混成・色調	備考
1	甕	15.2 —	胴部中央に最大径をもつ。口縁部は、ゆるやかに外反し、口縁部内面には、稜をもつ。	口縁部は、内外ともココナデ。胴部は、ヘラケズリの後粗いヘラミガキ。	胎土は、砂粒・雲母・石英等多量に混入する。焼成良好。赤褐色を呈する。	口縁部と胴部を接合する際の指痕が明瞭に残る。
2	甕	16.9 —	胴上位に最大径をもつ。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部内面には、稜をもつ。	口縁部は、内外ともココナデ。胴部は、ヘラケズリの後上部をハケ状工具で丁寧に調整している。	胎土は、よく精選されている。焼成良好。赤褐色を呈する。	口縁部と胴部の接合痕をよく残している。
3	甕	14.7 (20.1) 1.0	頸部が、一組ゆるやかに外反し、口縁部でさらに開く。胴部やや下位に最大径をもつ。	口縁部は、内外ともココナデ。胴部外面は、全面一方向から、また、胴部内面上部は、二方向からハケ目。	胎土は、大粒の砂粒、雲母が混入する。混成普通。黄褐色を呈する。	
4	甕	15.9 —	口縁部が、ほぼ垂直に立ち上がる。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部は内外ともココナデ。胴部外面は、全体に粗いヘラミガキ。	胎土は、砂粒、雲母が多量に混入する。焼成普通。赤褐色を呈する。	
5	甕	(14.2) —	口縁部が、ゆるく外反する。	口縁部内外ともココナデ。	胎土は、砂粒を少量混入する。焼成良好。赤褐色を呈する。	
6	甕	(14.8) —	口縁部が、「く」の字状に外反する。	口縁部内外ともココナデ。	胎土は、砂粒を混入する。焼成良好。赤褐色を呈する。	

とまって検出されたが、かなりの欠損部分があり、完形とはならなかった。その他、土器片が数十片検出されているが、比較的大きな破片で器種のわかるものを図にしたのが土器5・6である。また排土作業中に石礫や弥生土器片を検出したが、床面からかなり上の土層にみくまれており本住居址とは直接の関係はない。

数個の土器資料からみて、これらの形式が和泉式に属し、また、かまどでなく炉が営まれていることなどから本住居址は和泉期のものとしてよいであろう。

本住居址はわずか11㎡ほどの床面積であり、居住人員はきわめて少数であったと思われる。本遺跡の同時期の住居址をみると、かなり大型であるのに対して、この14号住居址だけが小さい部類に属するものである。この大小のちがいが何を意味するか、今後の課題としたい。

(石川幸夫)

15号住居址 (第60図, P L .18)

位置と規模 本住居址は、調査地区の北寄りに位置し、本住居址西側を12号住居址に、東側を14号住居址と16号土壌により切られ、また、北側が削平されているため、その規模は不明である。

壁 壁面は南壁の一部が残存するのみであり、ローム上面を10cmほど掘りくぼめて壁面をつくり床面に達している。

周溝 南壁直下の一部で認められ、幅15cm、深さ(床面下)5cmで断面はU字形を呈する。

柱穴 柱穴は検出できなかった。

南壁の北45cmほどの位置に長径50cm、短径45cm、深さ(床面下)76cmの円形を呈するピットが確認されたが15号住居址に伴うものとは、考えにくくピットの方が新しいと思われる。(第60図) また、ピット内からは、土師器の破片が数片出土したのみである。他に炉の北東1.8mの位置に長径38cm、短径31cm、深さ(床面下)15cmのほぼ円形を呈する小ピットを確認した。この小ピットの南寄りに焼土・炭化物が多量に検出されたが、ピット内には焼土の堆積はみられなかった。用途は不明である。

床面 やや凹凸があり、堅固である。

炉址 炉は12号住居址東壁の北側に切られた状態で検出された。長径30cm、短径10cm、深さ2cmの半円形を呈する。焼土は2cmほど堆積し、底部は熱のためバリバリであった。掘り込みは浅く明確ではない。

覆土 覆土はローム粒混入の黒褐色土の一層のみであり、それもほとんど削平によりとばされている。

遺物 本址出土の土器類は、すべて土師器片及び少数の弥生土器片であり、完形品は出土していない。

(森 和昭)

16号住居址 (第63図, P L .21・22)

位置と規模 本住居址は、発掘区域の北西部に位置し、北に13号住居址、南に9号住居址が隣接する。平面プランは、南北4.9m、東西4.95mでほぼ正方形を呈する。面積は約24.3m²。主軸方向は、N-19°-Eである。北西コーナーがやや歪むほかは、いずれもシャープに屈曲し、整美な感を与える。

壁 ハードロームを平均28cm切り込んで構築されている。立ち上がり角度は、平均85度と急傾斜であり、西壁南部と東壁南部ではほぼ垂直となっている。

周溝 北壁のみに認められる。幅は平均5cmとやや狭く、深さも3-4cmと浅い。周溝の両端はやや幅広くなり、西端は径10cmのピット状になる。また北西コーナーから1.7mの位置には、幅20cm、長さ45cmの突出部が住居址内方へのびている。

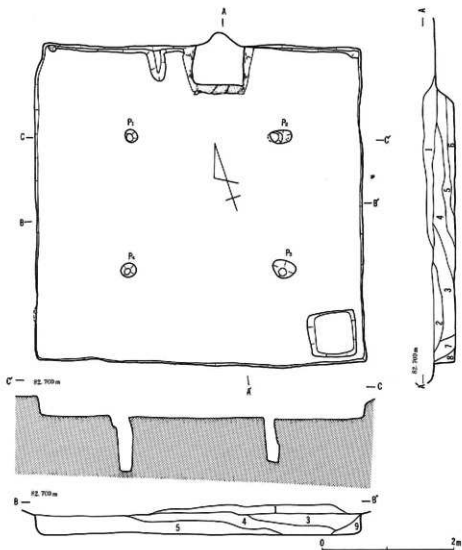
柱穴 主柱穴4個が確認された。4柱穴は、P₁がややずれるが、東西2.2m、南北2mの長方形の頂点に位置する。なお、P₁・P₄は、ほぼ住居址の対角線上にあるが、P₂・P₃は、東壁側にずれる。いずれも基本的には円形を呈するが、P₂・P₄の上端は楕円形となる。深さは平均75cmと深めで、しっかりした柱穴である。

No.	形 状	大 き さ (cm)	深 さ (cm)	そ の 他
P ₁	円 形	20×19	65	
P ₂	楕 円 形	36×20	82	
P ₃	不 整 円 形	32×29	68	
P ₄	円 形	22×20	71	

貯蔵穴 南東コーナーに位置する。東西75cm、南北70cmの長方形を呈し、深さ32cmを測る。底はほぼ平坦である。

床面 壁ぎわがやや高いほかは全体的に平坦でしっかりしている。踏み固めは、4柱穴に囲まれた部分および、カマド前面が著しく、堅緻で光沢がある。4柱穴と壁の間は、全体にやや軟弱であるが、西壁との間は、比較的踏み固められており、出入口が西側にあった可能性が強い。

カマド 北壁やや東よりに位置し、遺存状態は比較的良好である。北壁への切り込みは約25cmで、半円形状の平面プランを呈する。火床の掘り込みは非常に浅く、住居址床面より4-5cmの深さであり、形状は不整円形を呈する。煙道部の立ち上がり角度は約45度である。袖は、良質な白色粘土にロームブロックを混ぜたもので構築され、両袖の先端をつなぐように石組みの焚き口が、つくられている。石組は、両袖の先端に立てた高さ20cmの石に長さ70cmの石をのせたもので、凝灰岩の切り石を用いている。石の表面は、加熱のため非常にもろくなっており、



第63図 16号住居址実測図

天井部に当る部分は特に強い炎を受けたためか、赤黒く変色している。天井部は崩れ落ちているが、甕形土器がほぼ中央から出土しており、かけ穴にかけたままの状態であったと思われる。また、その甕形土器の真下で燃焼部に当る所には、長さ20cmほどの凝灰岩が、やや西方に倒れた状態で出土しており、支脚として甕形土器をささえていたものと思われる。燃焼部には、厚さ5～6cmの灰の層（図5層）があり、その上に焼土と白色粘土を含む層（図4層）が堆積し、煙道へつながっている。

覆土

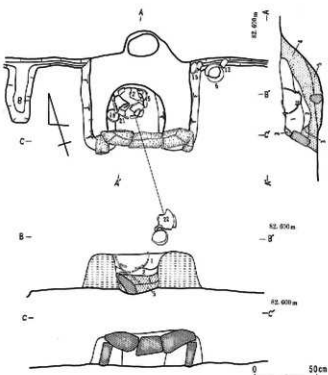
- 1 暗黄褐色土層（攪乱層）

- 2 暗褐色土層 (ローム粒を多量に含み、弱い粘性がある。土器をほとんど含まない)
- 3 暗褐色土層 (小ロームブロックを若干含み、レベルが上がるごとにローム粒が多くなる。焼土・炭化材とともに多量の土器を含む)
- 4 淡黄褐色土層 (粘性のきわめて強いロームの層で土器を含まない)
- 5 黄褐色土層 (10cm前後のロームブロックによる層で、土器を含まない)
- 6 黒褐色土層 (ロームブロック・焼土・木炭を含み粘性が強い。カマドの崩壊土を含む)
- 7 黒色土層 (ローム粒を含む)
- 8 暗黄褐色土層 (ソフトロームを含む)
- 9 黒褐色土層 (第8層に同じで、壁崩壊時のものである)

以上が各層の詳細であるが、その堆積状態を見ると、最下層の第6層が、カマド周辺から北西コーナーにかけて堆積した後、全く土器を含まないロームによる第4・5層が、北壁から南壁に向かってかなり広範囲に堆積している。何らかの理由で人為的に埋められたものであろう。その上層である第2・3層に関しては、比較的自然な堆積状態を示している。

遺物 出土遺物は、弥生式土器・土師器・須恵器などの土器だけであるが、量は豊富である。本住居址は、上述したように特異な埋没状態を示しているため、層位ごとに出土土器を整理することが可能である。したがってここでは、①カマド内およびその周辺、②貯蔵穴内、③北西コーナー付近(第6層中)、④東南コーナー付近(第3層中)の4群に分けて説明をしたい。

①. 本住居址の廃絶時期を示す一群である。図示できたものは、カマド内の2・5・18・21、カマド東側の6・11・12・15・23そして前面の22と計10点である。2の甕形土器は先述したようにカマドにかけられていたものであり、5の小形甕形土器、18・21の坏形土器は、燃焼部中よりの出土である。6の小形甕形土器と11・12・15の坏形土器は、



第64図 16号住居址カマド実測図

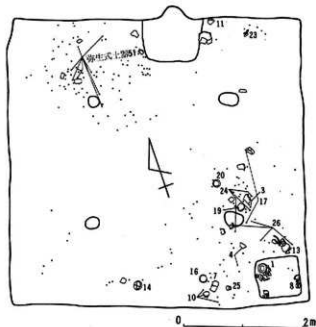
東袖と北壁とのなすコーナーにおかれていた。22は、高環形土器で、カマド内より出土した破片との接合がみられる。

②. やはり本住居址の廃絶時期を示すものと思われる。図示できたものは、1の甕形土器と8の埴形土器の2点である。1は完形品で貯蔵穴の北西コーナー近くに押しつぶされた状態で出土した。

③. 弥生式土器の破片が多量に出土しており接合するものも何点かみられる。もちろん本住居址に伴うものではないが、一時的に埋没した可能性が高い。

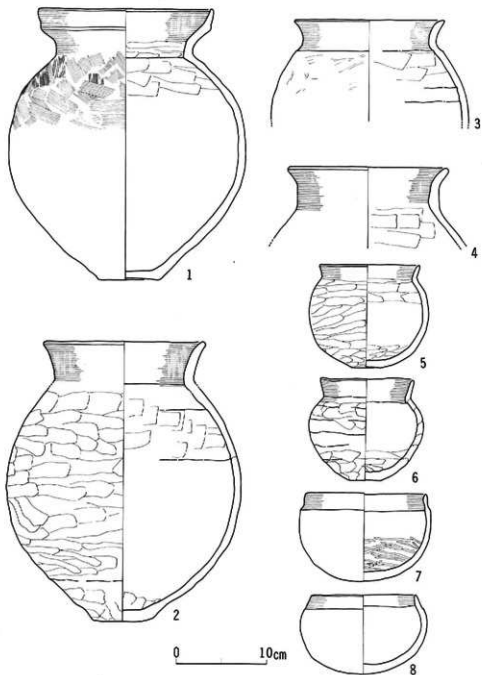
④. 本住居址で最も多量に土器が出土している。図示できたものは、甕形土器2点(3・4)、埴形土器1点(7)、環形土器8点(9・10・13・14・16・17・19・20)、甕形土器(24)小形埴形土器(25)、須恵器高環1点(26)の計14点である。本群は住居址の廃絶後、一括して投棄されたと思われるが、4～6層が人為的な埋没状態を示していることを考慮するとかなり住居廃絶時期に近いものと考えられる。また、土器の様相からみても、カマド内あるいは貯蔵穴内出土のもの、あまり隔たりは感じられない。

26の須恵器は、短脚で三個の長方形スカシを有する無蓋高環で、胎土・焼成ともに良好な秀品であるが、器形・技法的な特徴から大阪陶邑古窯跡群における須恵器編年のⅠ期後半に比定できるものである。現在県内において、この時期の須恵器の出土例は非常に少く、堅穴住居址では、真岡市井須遺跡8区8号住居址出土の蓋、佐野市上敷遺跡A区2号住居址出土の坏身、また古墳では宇都宮市雀宮牛塚古墳出土の蓋と高環の計4例が報告されているにすぎない。これらは本遺跡出土の高環同様陶邑古窯跡群のⅠ期後半に比定できるものであり、県内では最も早い段階の須恵器である。そしてこれらの実年代としては、陶邑古窯跡群のⅠ期が5世紀代～6世紀前半とされていることより6世紀前半とするのが妥当であろう。なお第68図の須恵器破片は、那須郡湯津上村より出土したものであり、やはり県内では最も早い段階の須恵器の一つである。

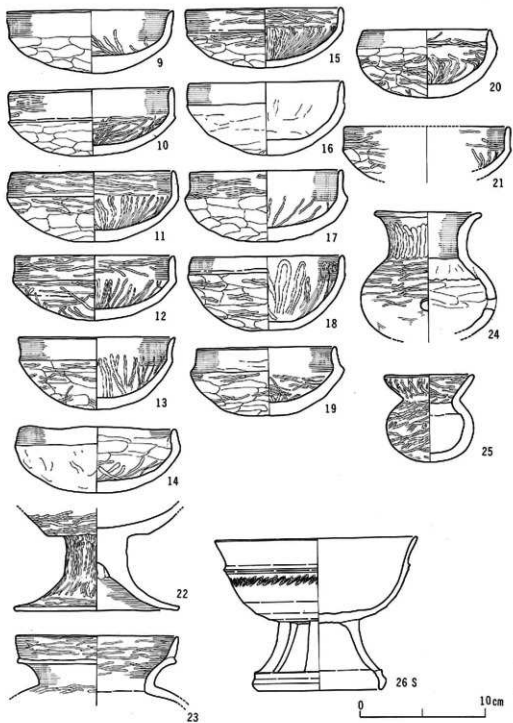


第65図 16号住居址遺物出土状態実測図

本住居跡に伴なう土師器は、鬼高期初頭の様相を具備しているが、実年代としては、上記した須恵器高坏の年代と近い年代が考えられる。(梁木 誠)



第66図 16号住居址出土土器実測図



第67图 16号住居址出土土器实测图

表21 16号住居址出土土器

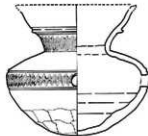
番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	19.0 29.9 6.6	頸部が、強く外弯し、口縁部は、外面に稜をもって直立気味になる。胴部は、ほぼ球形を呈し、中程に最大径(262)を有す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、上位が横方向のヘラナデ、以下不明。外面は、上位が、細かいハケ目で、以下不明。	胎土は、砂粒を多量に含む。焼成良好。内面赤褐色、外面黒褐色を呈す。	外面すす状炭化物付着。
2	甕	17.5 31.0 6.6	口縁部は、ゆるやかに外弯する。胴部は、やや長い球形を呈し、ほぼ中程に最大径(26.2)を有す。底部は、突出気味。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、横方向のヘラナデ。外面は、横方向のヘラケズリで、鋭どきはない。底部外面ヘラケズリ。	胎土は、砂粒、雲母末を含む。焼成良好。内面赤褐色、外面黒褐色を呈す。	外面すす状炭化物付着。
3	甕	(16.0) — —	口縁部は、外弯して立ち上がり、やや短かめ。胴部は、球形を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、横方向のヘラナデ。外面は、ヘラケズリの後、ナデ調整。	胎土は、砂粒を多量に含む。焼成不良。灰赤褐色を呈す。	
4	甕	17.0 — —	頸部が、ほぼ前面に立ち、口縁部が、わずかに外反する。胴部は、球形を呈すと思われる。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、横方向のヘラナデ。外面は、ナデ調整。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。内面淡赤褐色、外面暗褐色。	
5	小形甕	11.0 11.3 3.3	口縁部は、短かく、外弯する。胴部は、球形を呈し、中程に最大径(13.3)を有す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、横方向のヘラナデ。外面は、横方向のヘラナデ。底部外面ヘラナデ。	胎土は、砂粒、石英粒などを含む。焼成良好。暗赤褐色を呈す。	
6	小形甕	10.1 11.2 3.7	口縁部は、短かく、外弯する。胴部は、球形を呈し、やや上位に、最大径(12.8)を有す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、ヘラナデ。外面は、横方向のヘラケズリ。	胎土は、微砂粒を含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
7	埴	13.2 9.7 *	半球形状を呈し、口縁部は、外面に稜をもって、立ち上がる。	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面、ヘラミガキ。その他不明。	胎土は、砂粒、雲母、石英を含む。焼成不良。内面黒褐色、外面暗褐色を呈す。	
8	埴	11.4 8.7 *	半球形状を呈し、口縁部は、外面に稜をもって、内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。その他不明。	胎土は、砂粒を含む。焼成不良。暗赤褐色を呈す。	
9	坏	13.1 5.0 *	口縁部が、わずかに外弯する。底部は、厚手。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、ヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂粒、雲母、石英を含む。焼成良好。黄褐色を呈す。	
10	坏	12.9	体部外面に、稜を有して、口縁部が、直立する。	内面は、口縁部がヨコナデ。底部が、ヘラミガキ。外面は、口縁部が、ヨコナデの後、横方向のヘラミガキ。胴部が、ヘラケズリで、体部は、横方向。	胎土は、砂粒を若干含む。焼成良好。灰青褐色を呈す。外面に黒斑有り。	

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
11	坏	12.8 5.6 *	口縁部は、わずかに内傾する。	口縁部内外面ヨコナデの後、それぞれ横方向のヘラミガキ。内面は、放射状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部には、粗いヘラミガキ。	胎土は、砂粒、雲母末を含む。焼成やや良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
12	坏	12.5 5.2 *	口縁部は、ほぼ直立する。	口縁部内外面ヨコナデの後、それぞれ横方向のヘラミガキ。内面は、放射状と花卉状ヘラミガキの組合せ。外面は、全面ヘラミガキ。	胎土は、砂粒を若干含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	
13	坏	12.3 3.8 *	口縁部は、外側気味に立ち上がり、体部外面に、強い稜を有す。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリの後、全面に粗いヘラミガキ。	胎土は、砂粒、雲母末を含む。赤褐色を呈し、部分的に黒斑有り。	内面赤彩
14	坏	12.3 5.2 *	口縁部は、内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、横方向のヘラナデの後、底面をヘラミガキ。外面は、ヘラケズリとナデ調整。	胎土は、砂粒を若干含む。焼成不良。明赤褐色を呈す。	
15	坏	12.3 4.8 *	体部外面に、強い稜を有して、口縁部が、ほぼ直立する。	内面は、口縁部が、横方向、底面が放射状のヘラミガキ。外面は、口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリで、口縁部から底部には、粗いヘラミガキ。	胎土は、砂粒、雲母末を含む。焼成不良。明赤褐色を呈す。	内面赤彩
16	坏	12.1 5.8 *	体部外面に、稜を有し、口縁部は、直立する。口縁部は、尖る。	内面不明。外面は、口縁部ヨコナデ、体部および底部ナデ調整。	胎土は、砂粒を含む。焼成不良。明赤褐色を呈す。	
17	坏	12.0 5.6 *	体部外面に、強い稜を有し、口縁部は、直立する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、放射状のヘラミガキ。外面は、ヘラケズリで、体部は、横方向、口縁部外面には、粗いヘラミガキ。	胎土は、砂粒を少量含む。焼成やや良好。黄褐色を呈す。	
18	坏	11.9 5.9 (3.5)	体部と口縁部の境外面に、一帯の沈線を有す。口縁部は、ほぼ直立する。小さな平底。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、花卉状のやや割れたヘラミガキ。外面は、ヘラケズリの後、横方向の粗いヘラミガキ。底面外面ヘラケズリ。	胎土は、砂粒、雲母末を含む。焼成良好。黄褐色を呈す。黒斑有り。	
19	坏	10.8 5.4 *	体部外面に、強い稜を有し、口縁部は、やや内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、ヘラミガキ。外面は、ヘラケズリの後、横方向の粗いヘラミガキ。	胎土は、微砂粒を含む。焼成やや良好。赤褐色を呈す。底面外面黒斑有り。	内面および口縁部外面赤彩
20	坏	10.1 5.4 *	口縁部は、やや内傾し、底面に尖る。口縁部内面に強い稜を有す。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は、ヘラミガキ。外面は、ヘラケズリの後、横方向の粗いヘラミガキで、底面にも及ぶ。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。赤褐色を呈す。底面外面黒斑有り。	内面赤彩

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色染	備考
21	坏	(13.1) — (*)	口縁部は、ほぼ直立する。	口縁部内外面ヨコナデの後、それぞれ横方向の粗いヘラミガキ。内面は、ヘラミガキ。外面は、ヘラケズリの後、粗い横方向のヘラミガキ。	胎土は、雑砂粒を少量含む。焼成良好。暗赤褐色を呈す。	
22	高坏	— (13.0)	胴部外面に稜を有す。胴部は短かく、縮部が大きく開く。	外面は、全面ヘラミガキで、環部および縮部が横方向、胴部が縦方向となる。環部内面ヘラミガキ、縮部内面ヨコナデ。	胎土は、緻密。焼成良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
23	壺(?)	12.8 —	頸部が、すどく、外反し、口縁部は、外面に稜をもつて、やや外転する。胴部は、球形を呈すと思われる。	内外面ヨコナデの後、それぞれ横方向の粗いヘラミガキ。	胎土は、緻密。焼成良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
24	瓶	8.4 (10.5) (*)	頸部が、立ち上がり、口縁部が、ゆるく外反する。口縁部は、丸い。胴部は、やや横長の球形を呈し、中に最大径(10.9)を有す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は、ヘラナデ。頸部外面は、縦方向のヘラミガキ、胴部外面は、上半が、横方向のヘラミガキ、下半が、ナデ調整。	胎土は、砂粒を少量含む。焼成良好。暗赤褐色を呈す。	
25	小形罎	7.0 6.9 *	口縁部は、「く」の字に大きく外反する。胴部は、球形を呈す。最大径は、口縁部にある。	内面は、口縁部が横方向のヘラミガキ、胴部は不明。外面は、口縁部が、ハケ目の後、粗いヘラミガキ、胴部がヘラケズリの後、横方向のヘラミガキ。底部は、ナデ調整。	胎土は、砂粒、雲母、石英などを含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	
26S	須恵器高坏	15.9 12.1 9.7	口縁部は外上方へ伸び、縮部は丸い。口縁部と体部は1本の断面三角形の凸条によって区切られる。胴部は外反し、縮部は段を成す。透しは三方で長方形。	環部成形後、胴部ハリツケ。環部外面は、粗いヘラケズリ。胴部内面は、ナデ調整。ロクロ廻転。環部凸条下に段状文(8本)を配す。	胎土は、緻密で、2~3mmの白色砂粒を含む。焼成良好で、堅緻。青灰色を呈す。	環部内面に自然釉が認められる。胴部外面にヘラ記号「卍」有り。

註

- ① 陶邑古窯址群Ⅰ(田辺昭三, 平安学園考古学クラブ, 1967年)のT K23に類似するものがみられる。
- ② 大金宜亮, 橋本澄朗他, 「井頭」栃木県教育委員会, 1974年
- ③ 竹沢 謙, 石川 均, 山ノ井清人, 「上敷遺跡」栃木県教育委員会, 1977年
- ④ 大和久震平, 「富宮牛塚古墳」宇都宮市教育委員会, 1969年



第68図 湯津上村出土須恵器実測図

17号住居址 (第45図, P.L.16, 23)

位置と規模 本住居址は、台地の最東端部に位置しており、住居址の5m東側は崖となっている。また発掘区域においては南東部に当たっている。本住居址は11号住居址、および溝状遺構Na2と重複関係にあり、11号住居址の東壁を切って構築され、また本住居址の東壁は、溝状遺構Na2により破壊されている。平面形は南北に長い長方形を呈し、南北3.1mで、東西は約2mと思われるが、東壁が溝状遺構により破壊されているため正確な数値はわからない。面積は推定で6.2㎡を有し、概して小形の住居址である。主軸はほぼ真北を向いている。

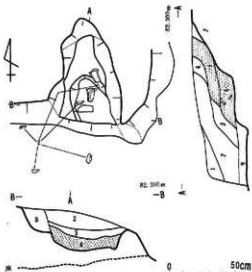
壁 ロームを深く掘り込んでおり、西壁は11号住居址の床面下60cmを測る。壁は72~75度の角度をもって立ち上がる。南壁および西壁西側は、床面から一度ゆるやかに立ち上がり、そこから約75度の角度をもって立ち上がる。

周溝 確認されなかった。

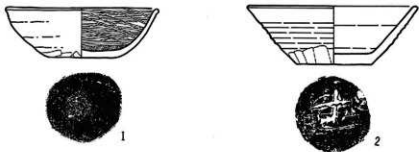
柱穴 主柱穴と思われるものは住居址内からも、住居址外からも確認できなかった。住居址内南側に、不整形のピットが確認された。85×95cmで深さ50cmを測る。底面は、鹿沼軽石層に達している。覆土は、ロームブロック多量混入、および鹿沼軽石土混入の暗黄褐色土層であり、人為的に埋められたものと思われる。

床面 床面は硬ローム面であった。また床面直上には、ロームブロックおよびローム粒が多量に混入したやわらかい黄色土層が堆積していた。床のローム面は風化を受けておらず、この層と明確に区別できた。

カマド 北壁を掘り込んで設けられている。東壁が破壊されているため正確にはわからないが、かなり東寄りに設置されていると思われる。住居址外への張り出しの平面形は、長三角形状を呈し、約60cm張り出している。またこの掘り込み面は、床面より10cmほど高く、平坦な面を作り、火床となっている。いわゆる住居址内には、火床の掘り込みはなく、袖も検出されなかった。張り出し部のみがカマド施設として利用されたものと思われる。火床からは、瓦が4片検出されている。これは、支柱などカマドの施設に用いられていたものと思われる。焼土の層は、火床部とさらに外に立ち上がる煙道部とに多く、傾斜にそって



第69図 17号住居址カマド実測図



第70図 17号住居址出土土器実測図



第71図 17号住居址出土瓦拓影図

堆積していた。これらのことから、壁を掘り込んで、そこに焚口を設け、両側のロームの壁を袖として利用したものと思われる。

カマド土層

1. 黄褐色土層（ローム粒少量混入）
2. 黒褐色土層（ローム粒多量混入）
3. 褐色土層（焼土少量，ローム粒混入）
4. 黒褐色土層（焼土少量，ローム粒混入）
5. 淡赤色土層（焼土，炭化物多量混入）

6. 赤褐色土層（焼土・炭化物およびローム粒混入）
7. 黒褐色土層（ローム粒多量混入）
8. 暗黄色土層（ローム粒多量混入）
9. 黄色土層（ローム粒・ロームブロック多量混入）

覆土 本住居址は、溝状遺構と重複関係にあり、上面は、溝状遺構によって切られており、その程度は、東側ほど大きく、東壁は完全に破壊されている。

覆土は、大きく3層に分類でき、レンズ状に堆積していた。このことより自然埋没と考えられる。

29. 黒褐色土層（ローム粒少量混入）
30. 黄褐色土層（ローム粒多量混入）
31. 黄色土層（ローム粒・ロームブロック多量混入、やわらかい）
32. 暗黄褐色土層（ロームブロック多量、鹿沼礫石混入）

遺物 覆土中より多数の土師器片が検出されたが、本住居址に伴うものかどうかは明らかでない。本住居址に伴うものと考えられるものは、环形土器（完形）、須恵器环形土器、瓦、鉄製品である。

环形土器 住居址中央部やや西側の床面より8cmほど浮いた状態で検出された。内面黒色処理されており、外面には、墨書がみとめられる。（第70図1，P.L.63）

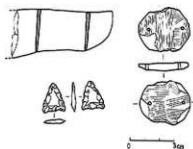
須恵器环形土器 カマド内、およびカマド周辺より出土した破片が接合複元できたものである。また住居址内南側から出土した1片も接合できた。底部は完全に遺存しているが、口縁部は大部分欠損している。（第70図2 P.L.64）

瓦 カマド内より4片出土している。すべて丸瓦である。凹面には、布目痕が明瞭に残っており、凸面は平滑に仕上げられている。

鉄製品 住居址内、北西部より検出された。床面からは25cmほど浮いていた。長さ7cm、巾3cmを計る。鎌と思われる。

この他に、石鉄および有孔円盤が出土しているが、これらは住居址埋没の際に流れこんだものと思われる。

本住居址出土の須恵器に類似するものとして、真岡市「井頭遺跡」1区4号・6号、2区3号、3区10号、4区10号・16号・17号、5区6号・41号、10区D-2号・E-2号、E-6号・G-5号住居址、益子町「星の宮ケカチ遺跡」の住居址群、「宇都宮市瑞穂野団地遺跡」北区6号・7号、南区7号・8号住居址出土の土器をあげることができる。星の宮ケカチ遺跡では、



第72図 17号住居址出土遺物実測図

伴出遺物（石帯）より9世紀前半に比定している。本住居址出土の土器は、ケカチ遺跡出土の土器より、やや新しい様相を示すものと思われる。従って、9世紀中葉以降に比定できるものと思われる。

(柳田 正弘)

表22 17号住居址出土土器

No	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	環	11.6 3.8 5.0	体部は、内湾して、外方に開く。口唇部は、玉状を呈す。底部は、平底を呈す。器壁は、薄い。	体部外面に不明瞭なクロロ成形成を残す。内面底面一定方向のヘラミガキ。体部同心円状のヘラミガキ。底部外面に糸切り痕を残し、周縁部手持ちによるヘラケズリ。	胎土は、砂粒混入。焼成良好。内面黒色、外面赤褐色を呈す。	内面黒色施。外面口縁部付近に墨書をもつ。少くとも4文字以上。
2S	須恵器 牙	(13.0) 4.4 5.6	平底の底部から直線的に外方に伸びる体部を持つ。	体部には、不明瞭なクロロ成形成を残す。体部下位はヘラケズリを行う。底部は、ヘラ切りであり、カマ印が記されている。	胎土は、砂粒を少量含むが精選されている。焼成良好。青灰色を呈す。	体部1/2欠損。

18号住居址 (第73図, P.L.24)

位置と規模 本住居址は、発掘地域の最も南に位置する。2号住居址と重複しているが、平面プラン及びセクションから2号住居址は本住居址の掘りこみを拡張して建てられたと判断される。南北 6.7m, 東西 6.6mの方形プランを呈し、面積約44㎡を有する。主軸はN-15°Eである。

壁 2号住居址に壁下部まで削平されているために遺存状態はよくない。傾斜はやや外傾しているがほぼ垂直である。壁高は10~15cm程度で、ほとんど拡張されなかった西壁のみ40cmを測る。

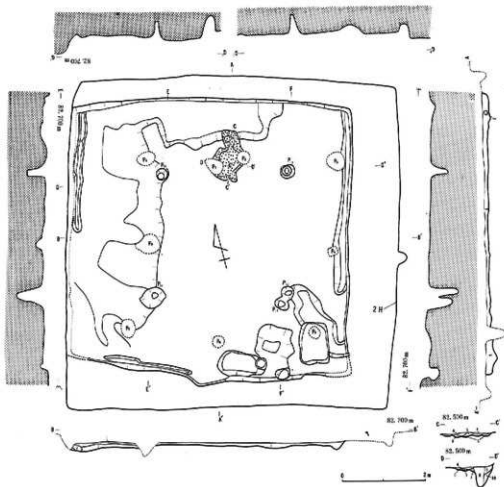
周溝 全周せず、壁直下を所々、途切れながらめぐっているが、北壁では検出されなかった。巾は10~22cm, 深さは7~15cmほどで、断面はU字形を呈している。

柱穴 柱穴は4個で、柱穴間の巾は2.9~3.1mを測り、ほぼ正方形に配置されている。南東のP₁₀・P₁₁は重複しているが、新旧関係は不明瞭で確認できなかった。

No	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	その他
P ₁₀	円形	26×28	50	北西柱穴
P ₁₁	円形	31×35	48	北東柱穴
P ₁₂	円形	31×34	72	南東柱穴
P ₁₃	円形	32×34	63	〃
P ₁₄	円形	45×62	64	南西柱穴

貯蔵穴 南壁寄りと南東隅にある2つのピットが貯蔵穴と思われる。南東隅のピットは大き
 さ70×95cmの方形で、深さ45cmを測る。ほぼ垂直に掘りこまれており、底は平坦になっていて、
 中から管玉が1個出土している。南壁寄りのピットは大きさ45×115cmの隅丸方形で、深さ40
 cmを測り、断面はU字形を呈している。ピット南側上端より鉄器が出土している。

床面 全面ローム土で、焼土が3個所で見られた。南壁寄りピット脇と炉の北には厚さ2－
 3cmの白色粘土が置かれていた。床面の中央部は良く踏み固められていたが、P₁₀・P₁₁・P₁₂
 の柱穴を結ぶ線の外側から西壁、北壁にかけての床面は軟弱で起伏もあり、中央部より10cm前
 後低くなっていた。また遺物もこの面にかなりまとまって出土している事から推測して、この
 面と中央部の土間にあたる部分とは何らかの利用区分がなされていたと思われる。

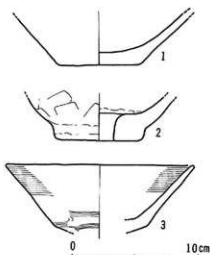


第73図 18号住居址実測図

炉址 P₁ と P₁₈ の間のやや北寄りに位置する。不整形に掘りこまれており、大きさ70×115cm、深さ24cmを測る。下層は焼土混入の茶褐色土で、焼けたロームブロック塊をはさんで、焼土混入の黒色土が堆積していた。焼土は25×85cmの長楕円形の範囲にみられた。

覆土 住居址内の覆土は次の各層に分れる。

- 1 黒褐色土層（直径2cm～3cmのロームブロック及びローム粒混入）
- 2 ロームブロック
- 3 黒色土層（直径4cm～5cmのロームブロック及びローム粒少量混入）



第74図 18号住居址出土土器実測図

1～2の土層は、自然堆積したものではなく、2号

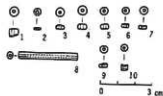
住居構築の際の人為的な貼床土と思われる。大きなロームブロックは区別して図示した。

遺物 土器・石製模造品・鉄鏃や炭化した木の実が出土している。土器は土師器の破片が大部分で、他に弥生式土器数片、須恵器1片を含み、住居址の西側と貯蔵穴の周辺より多く出土した。また石製模造品の数が多いのも本住居址の特徴である。

土器1の甕形土器底部は炉と北壁の間の床面より横転した形で出土した。2の甕形土器底部は住居址の南西の一段低い床面より2片に割れて出土した。単孔で孔径2cmを測る。3の坏形土器杯部片は南壁寄り貯蔵穴のロームブロック混入黒色土層よりの出土である。

石製模造品 白玉9個、管玉1個がでている。白玉は住居址の中央から北西にかけて7個、南壁寄り貯蔵穴の北に2個出土している。石質はいずれも滑石製である。管玉は、南東隅にある貯蔵穴中より出土した。鉄鏃は南壁寄り貯蔵穴より出土した。有茎の棘鏡被を有し、全長20cm、身と頸部の長さは15cmを測る。炭化した木の実は床面直上より出土した。

以上が本住居址の概要であるが、遺物からみて和泉期のもと思われる。（斎藤 均）



第75図 18号住居址出土石製模造品実測図



第76図 18号住居址出土鉄製品実測図

表23 18号住居址出土土器

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	— 6.3	底部は平底。	全面にわたり剥落が、はげしく内外面調整不明。	胎土は砂粒、石英粒、雲母粒、長石粒を含む。焼成不良。灰褐色を呈す。	底部のみ
2	瓶	—	底部中央に径2.0cmの単孔を有す。	胴部外面下部ヘラケズリ	胎土は、砂粒、石英粒、雲母粒を含む。焼成良好。黄褐色を呈す。	底部のみ
3	高 杯	(10.5) —	杯部底器外面に軽い稜を有し、直線的に外方へ伸びる。	口縁部内外はヨコナデ。杯部下部、横方向のハケ状工具による調整。	胎土は砂粒を含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	外面赤彩 杯部土残存

表24 18号住居址出土石製模造品

番号	種 類	計 測 値 (mm)			備 考
		(直径)	(厚さ)	(孔径)	
1	白 玉	5.0	5.0	2.0	片側断面破損
2	〃	4.5	1.0	1.5	矽欠損
3	〃	5.0	2.0	1.5	
4	〃	5.5	3.0	2.0	黒色
5	〃	4.5	3.0	1.5	
6	〃	4.0	2.5	1.5	
7	〃	5.0	2.0	2.0	
8	管 玉	(直径)	(長さ)	(孔径)	緑白色、光沢あり
		4.0	45.0	1.0	
9	白 玉	(直径)	(厚さ)	(孔径)	
		4.0	2.5	2.0	
10	〃	4.0	4.0	1.5	

2, 土 壙

1号土壙 (第77図, P L. 25)

位置と規模 1号住居址の南4.5mの地点に位置する。東に1.5m離れて2号土壙がある。

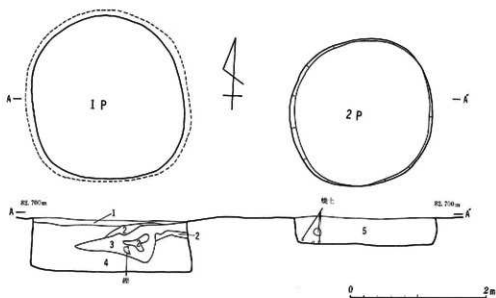
口径2.24m×2.38m, 底径2.4m×2.5m, 深さ0.76m。底面は全体的に見るとほぼ平坦であるが, 掘具の跡と思われる細かい凹凸が全面に認められる。断面形は, 対称で, 口径より底径が大きく口部がすぼまる。

覆土

1. 茶褐色土層 (ローム粒多量混入, 径2~3cmのロームブロック若干混入)
2. 黒褐色土層 (ローム粒少量混入)
3. 茶褐色土層 (径2~3cmのロームブロック少量混入, 炭化物若干混入)
4. 茶褐色土層 (径2~10cmのロームブロック多量混入, 炭化物若干混入)

全面にわたるロームブロックの混入とロームブロックの大きさによる存在の仕方がかたよっており, 径の大きいロームブロックが4層上部にまとまって存在することから, 人為的に埋められたと考えられる。

遺物 土師器75片。すべて小破片であり, 器形を復元出来るものはない。土壙内覆土の全体にわたり散在していた。土壙を埋める際に混入したものであり, 意識的に埋納されたのではない。



第77図 1・2号土壙実測図

2号土壇 (第77図, P.L.25)

位置と規模 1号土壇の東に1.5m離れて存在し, 2号住居址の南西2.5mの地点に位置する。南東に1m離れて3号土壇がある。

口径2.12m×2.22m, 底径2m×2.16m, 深さ0.4m。南北にやや長いがほぼ円形を呈する。

底面には1号土壇と同様の凹凸が認められる。東壁はややオーバーハンクしているが, 他はほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土

5. 黒褐色土層 (ローム粒混入, 径2~4cmのロームブロック混入, 炭化物及び焼土ブロック混入)。

ロームブロック, 焼土ブロックの混入状態から, 人為的に埋められたと考えられる。

遺物 弥生式土器1片, 土師器108片, 須恵器1片。石製模造品 (有孔円盤) 1個。

土器はすべて小破片であり, 土壇内覆土の全体にわたり散在していた。石製模造品が1個, 土壇中央北東よりの底面より出土した。有孔円盤で, 径18mm×16mm, 厚さ2.5mm, 孔径は両孔とも2mm。

3号土壇 (第79図)

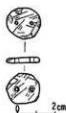
位置と規模 2号住居址の南4mの地点に位置する。北西に1m離れて2号土壇がある。4号土壇, 5号土壇と一部重複している。

口径2.66m×2.80m, 底径2.78m×2.91m, 深さ1.06m。ほぼ円形を呈する。壁は4号土壇・5号土壇と一部重複しているため西壁と東壁の一部で明確でない。北壁は底部より少し内傾して直線的に立ち上がる。南壁はややオーバーハンクして口部に至る。底面はほぼ平坦であるが, 南壁側は少し傾斜し高くなっている。

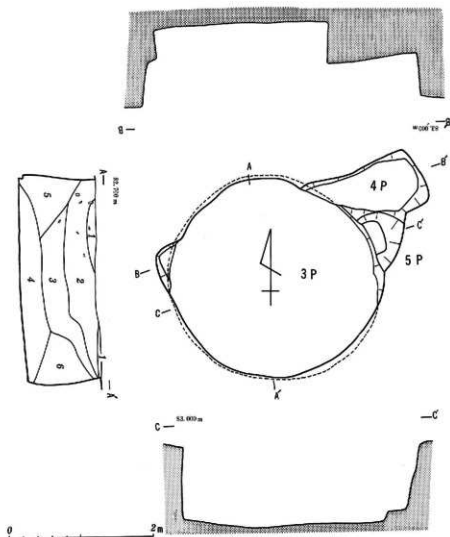
覆土

1. 暗黒褐色土層
2. 黒褐色土層 (ローム粒, ロームブロック多量混入, 炭化物若干混入)
3. 黄褐色土層 (大ロームブロック多量混入)
4. 暗黄褐色土層 (小ロームブロック多量混入)
5. 茶褐色土層 (ローム粒多量混入, ロームブロック混入)
6. 茶褐色土層 (ローム粒, ロームブロック多量混入)

壁きわに多量にローム粒, ロームブロックを含む層が流れ込んでおり, 自然埋没の状態を示している。



第78図 2号土壇
出土石製模造品



第79図 3・4・5号土城実測図

遺物 土師器 147片。石製模造品1個（有孔円盤）。土師器はすべて小破片であり実測可能なのは甌形土器の底部片1個のみである。推定底径6.9cm。底部中央に径2.0cmの単孔を有する。孔の周囲に粘土をはりつけ平底の底部を作り出している。胴部は底部より内弯して立ち上がる。外面ナデ調整でやや粗雑。内面ヘラ調整。胎土は砂粒を含む。焼成良好。赤褐色を呈す。

石製模造品は有孔円盤で径31mm×29mm、厚さ4.5mm、孔径は両孔とも2mm。両孔とも、近接して穿孔途中の孔がある。

1・2・3層より多量の土師器片が出土した。土城埋没の過程での流れ込み、あるいは数十片がまとめてかさなるように出土したことから、半ば埋まった土城に土師器片を投げすてたとも考えられる。遺構に直接伴うものではない。石製模造品も土師器片と同様の出土状態であった。

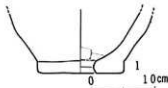
4号土壇(第79図)

位置と規模 2号住居址の南4mの地点に位置する。3号土壇, 5号土壇と一部重複している。

2つの土壇と重複しているため全容を把握することが出来ず, その両端を確認したのみである。長辺3.93m×短辺0.84mの長方形を呈する。深さは, 北東壁付近で0.60mである。底面は, 中央を3号土壇によって切られているのはっきりしないが, 東壁より中央にかけて徐々に浅くなっている。

覆土 ロームブロックを主体とした土層で, 固くしまっていた。人為的に埋められたと考えられる。

遺物 なし。



第80図 3号土壇出土土器実測図

5号土壇(第79図)

位置と規模 2号住居址の南4mの地点に位置する。

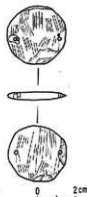
3号土壇, 4号土壇と一部重複している。平面プランでは確認されず, 4号土壇発掘中に4号土壇の南壁を切って別の遺構が存在するのが確認された。大きさは3号土壇に切られているため不明。深さは0.94mである。壁は外側に傾斜して, ほぼまっすぐに立ち上がっている。

覆土 本址に伴うものは明確にできなかった。

遺物 本址に伴うものは明確にできなかった。

4号・5号・6号土壇の関係について。

平面プラン, 及び3号土壇の土層図に4号土壇の断面が確認できないことからみて3号土壇の方が4号土壇より新しい。5号土壇と3号土壇, 4号土壇との新旧関係については明確でない。



第81図 3号土壇出土石製模造品実測図

6号土壇(第82図, P.L.26)

位置と規模 2号住居址の南壁東よりに一部重複して位置する。口径1.79m×1.36mで不整形を呈する。深さは最深部で0.78m。底部は凹凸がある。壁は両側がほぼ垂直に立ち上がるほかは, なだらかに口部にいたる。

覆土

1. 黒褐色土層(ローム粒少量混入)
2. 茶褐色土層(ローム粒混入)
3. 黒褐色土層(ローム粒混入)
4. 茶褐色土層(ローム粒混入, ロームブロック多量混入)

5. 黒褐色土層（ローム粒少量混入，粘性あり）
 6. 黄褐色土層（ローム粒及びロームブロック多量混入）
- 4層，6層への多量のロームブロックの混入という点から見たら人為的にうめたと考えられる。

遺物 土師器3片。遺構に直接伴うものではない。

2号住居址の南壁を一部切っているが，その新旧関係は明確でない。

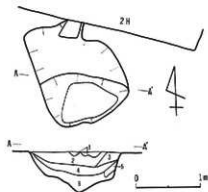
（1号～6号土壌 水品信男）

7号土壌（第83図，P.L.26）

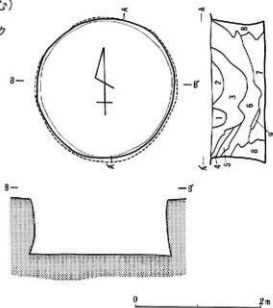
位置と規模 9号住居址の南西2mの地点に位置する。また溝状遺構No1が東西を横断する。口径2.16m×2.22m・中径（最小径）2.10m×2.16m・底径2.27m×2.30mの正円形プランを有する。底面は全体的には平坦であるが全面にわたり掘具の跡と思われる細かい凹凸がある。墳底より30cm上の所がくびれており，最小径を測る。深さは85cmである。

覆土

1. 黒褐色土層（ローム粒をわずかに含む）
2. 茶褐色土層（ローム粒密に含む）
3. 茶褐色土層（ローム粒多量，小さなロームブロックを含む）
4. 灰褐色土層（ローム粒をわずかに含む）
5. 赤褐色土層（ローム粒を含む）
6. 黒色土層（小ロームブロック，木炭片を含む）
7. 黄褐色土層（ロームブロックを多く含む）
8. 黄褐色土層（ソフトローム及びブロック多量混入）
9. ローム塊



第82図 6号土壌実測図



第82図 7号土壌実測図

1層が溝状遺構No.1の覆土である。

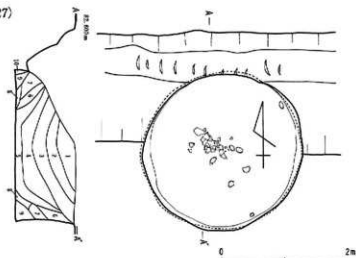
遺物 弥生式土器9片, 土師器298片の土器片が出土。投棄されたものと思われる。

(北井 清)

8号土壇 (第84図, P.L.27)

位置と規模 8号住居址の東に0.5m離れて存在する。北壁上部を溝状遺構No.1によって切られている。

推定口径2.56m×2.52m, 推定中径2.3m×2.4m, 底径2.58m×2.54m, 深さ0.93m。北壁上部が溝状遺構によって切られているので口径・中径は明確でないがほぼ円形を呈する。底部



第84図 8号土壇実測図

は全体的に見ると平坦であるが, 瓶具の跡と思われる細かい凹凸が全面にわたって存在する。

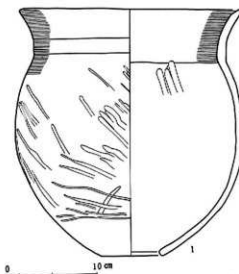
壁は内側に傾斜して立ち上がり内湾して口部にいたる。口径と底径は同じで, 壁中部が最小径を呈する。

覆土

1. 黒褐色土層
2. 黒褐色土層 (ローム粒若干混入, 灰色粘土ブロック混入, 硬い)
3. 黄褐色土層 (ローム粒混入)
4. 暗褐色土層 (ローム粒混入)
5. 黄褐色土層 (ロームブロック混入)
6. 黄褐色土層 (ローム粒多量混入, ロームブロック混入)
7. 黄色土層 (軟ローム主体)
8. 黒褐色土層 (ローム粒若干混入, 軟かい)
9. 黄褐色土層 (ローム粒多量混入, 軟かい)
10. 褐色土層 (ローム粒多量混入)

北壁を新しい遺構によって切られている。土層図はほぼ対称形をなし, 壁近くに軟かいローム粒を多量に含んだ層があることから自然埋没と考えられる。

遺物 弥生式土器1片，土師器47片。土器片は，土壌覆土中の全体に散在していた。復元できた甔形土器は，その約2分の1が残存し，土壌底部中央に投げ棄てられた状態で出土した。口径24.4cm，器高27.2cm，推定底径6.9cm。頸部が直立し，口縁部はゆるやかに外弯する。胴部は縦長の球形を呈し，やや上位に最大径（25.1cm）をもつ。底部は，全体が穿孔されている。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面は粗いヘラミガキ，底部付近不明。内面は頸部付近ヘラミガキ，他は不明。胎土は，砂粒を含む。焼成良好。赤褐色を呈す。



第85図 8号土壌出土土器実測図

甔形土器の周辺に径12cmほどの河原石が散在していた。

(水品信男)

9号土壌 (第86図, P L .27)

位置と規模 本址は，調査区の中央に位置し，9号住居址の東2.50mにある。10号土壌と重複するが，平面プラン等からみて本址の方が新しい。口径（推定）2.10×2.25m，底径2.50m×2.30mを測る円形土壌である。深さ78～88cm。底面は中央部が浅く壁際がやや深くなる。壁はオーバーハングしている。底面・壁面ともしっかりしており，底面には掘具痕が見られる。

覆土

1. 黒褐色土層（ローム粒多量混入，粒は細かい）
2. 黒色土層（ローム粒微量混入）
3. 茶褐色土層（ローム粒多量混入）
4. 黒褐色土層（ローム粒若干混入）

遺物 弥生式土器3片，土師器41片が散在して検出された。

10号土壌 (第86図, P L .27)

位置と規模 本址は9号土壌に真中を切られる長方形プランの土壌である。本址は9号土壌構築以前に完全に埋没していたと思われる。長軸3.84m，短軸0.70m，南北に長い土壌で底面はこれより約10cm短かく水平である。深さは約68cmである。

覆土 時間的制約のためセクションを取らずに掘りあげた。ロームブロックを含む黄褐色土層及びローム粒を多量に含む明褐色土層からなり，一時に人為的に埋めたものと思われる。

遺物 何ら検出されていない。

11号土坑 (第87図, P L. 28)

位置と規模 7号住居址の北方, 9号土坑の東4mほどの所に位置する。13号土坑と重複し, 12号土坑とも近接する。

口径1.15×1.43mの不整形形の土坑である。なお, 最初13号土坑のプランを確認できなかったため, 坑底を打ち抜いてしまい, 底面の状態ははっきりしないが, すり鉢状であったと思われる。最深部で50cmを測る。

覆土 第87図4・5・6が本址のものである。

4. 黒色土層 (ロームブロック混入)
5. 黒褐色土層 (ロームブロック混入)
6. 黒褐色土層 (ローム粒混入, 軟かい)

遺物 土器片一片の出土もみられなかった。

12号土坑 (第87図, P L. 28)

位置と規模 11号土坑のすぐ東側に位置し13号土坑と重複する。これもまた13号土坑と重複するが, 本址の方が新しい。口径1.55×1.65mの正円形のプランを持つ。深さは30cmと浅く, 底面は平坦である。

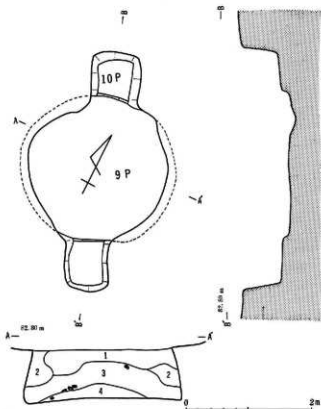
覆土

1. 茶褐色土層
2. 黒褐色土層
3. 黒褐色土層 (ローム粒混入)

遺物 弥生式土器4片, 土器器2片が検出された。

13号土坑 (第87図, P L. 28)

位置と規模 前述のように東側を12号土坑, 西側を11号土坑に切られている。長径1.60m,



第86図 9・10号土坑実測図

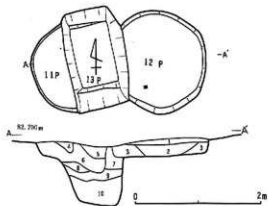
短径95cmで主軸が、ほぼ南北を向く長方形プランをもつ。底面は65cm×95cmの平坦面を有し、深さ90cmを測る。南北壁は、いったん直立きみに立ち上がった後、外方に大きく開く。

覆土 第87図7・8・9・10が本址の覆土である。

7. 黒褐色土層（ロームブロック混入、鹿沼軽石土粒若干混入）
8. 黄褐色土層（ロームブロック混入）
9. 茶褐色土層（ローム粒、ロームブロック混入）
10. 黄褐色土層（ロームブロック混入、非常に固い）

遺物 何も検出されなかった。

（9号～13号土層 北井 清）



第87図 11・12・13号土坑実測図

14号土層（第88図，P.L.28）

位置と規模 13号住居址の南1mの地点に位置する。東側に15号土層があり、一部重複している。長辺0.76m，短辺0.53mの長方形を呈する。深さ0.2mで底面は鍋底状を呈し平坦ではない。底面西よりに長径10cm，短径6cmの楕円形の小ピットがある。

覆土

1. 黒色土層
2. 茶褐色土層（ローム粒多量混入）

覆土は概して軟かく自然埋没と考えられる。（第88図）

遺物 遺物は全く認められなかった。

東壁に重複して15号土層がある。土層図から見て本土層の方が新しい。

15号土層（第88図，P.L.28）

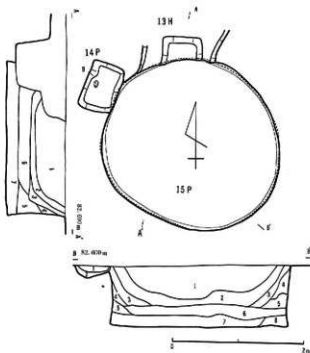
位置と規模 13号住居址の南に位置し13号住居址の張り出しピットと一部重複関係にある。西側には14号土層があり口部を切られている。口径2.73m×2.52m，中径2.65m×2.39m，底径2.70m×2.48m。深さ0.90m。東西にやや長いが、ほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦であるが細かい凹凸が全面にわたって存在する。壁は内側に傾斜して立ち上がり内湾して口部にいたる。口径と底径はほぼ同じで、壁中部に最小径をもつ。

覆土

1. 茶褐色土層（ローム粒混入）

2. 黒色土層 (ローム粒混入)
3. 黒色土層 (ローム粒少量混入)
4. 黒色土層 (ローム粒, ロームブロック混入)
5. 黄褐色土層 (軟ローム主体)
6. 茶褐色土層 (ローム粒混入)
7. 茶褐色土層 (ロームブロック多量混入)
8. 茶褐色土層 (鹿沼軽石ブロック混入)

土層図でわかるように、北がわの壁を13号住居址の張り出しピットにより切られている。1～4までの土層は、土層中央に流れこんだ状態を示しており自然に埋没したと考えられる。5層と6層を見てみると一部では6層の下に5層が入りこみ、また6層の上に5層が流れこんだような状態を呈しているところもある。しかし、2・3・4層と6層の関係は不整合の状態にある。このことから考えると6・7層は人為的に埋められた層であり、その上部は自然に埋没した層と考えられる。



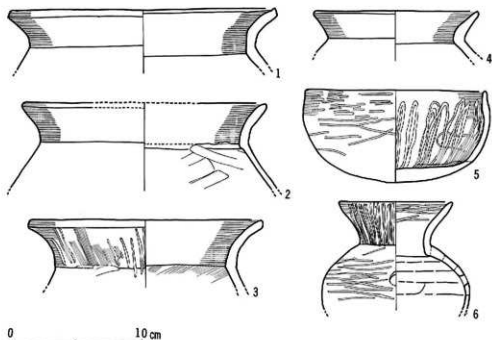
第88図 14・15号土層実測図

遺物 弥生式土器60片。土師器195片。須恵器1片。5は完形の埴形土器で、底部近く中央やや北東よりに口縁部を上にして出土した。6は鉢形土器で胴下半部を欠損、同じく底部近くより出土した。

本土城では他の土城と比較して弥生式土器片が多く出土している。本土城の南に0.6m離れて存在する16号住居址からも弥生式土器片が出土しており、一部は本土城の破片と接合できた。

16号土城 (第90図, P.L.20)

位置と規模 14号住居址の南に接し12号住居址東壁より0.6m離れて存在する。口径2.30m×2.44m, 底径1.73m×1.89m, 深さ1m。ほぼ円形を呈する土城である。底部中央に径0.8m, 深さ0.25mの鍋底状のピットがある。壁は底部より外傾して口部にいたる。東側壁の底部



第89図 15号土壇出土土器実測図

近くに横方向に穿たれた径10cm、深さ5cmの小ピットがある。

覆土

1. 黒色土層
2. 黒褐色土層（ローム粒混入）
3. 黒色土層（ローム粒混入）
4. 黒色土層（ローム粒混入，3より軟らかい）
5. 黒褐色土層（鹿沼軽石粒混入）
6. 黒褐色土層（ロームブロック混入）
7. 黒色土層（ローム粒，鹿沼軽石粒混入）
8. 黄褐色土層（ローム粒多量混入）
9. 黄色土層（ロームブロック，ローム粒多量混入）

14号住居址の南西コーナーを切っており本土壇の方が新しい。土層が周りに流れ込んでおり自然埋没と考えられる。底部は鹿沼軽石層に達している。底部中央のピットも開口状態にあり埋没したと考えられる。

遺物 土師器25片，須恵器1片。いずれも小破片であり土壇覆土中より散在して出土した。須恵器片は，一部自然融の付着した蓋である。

表25 15号土壇出土土器

番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	(20.0) —	口縁部は、直立気味に立ち上がり、外傾する。口徑外部に縦を持つ。	口縁部内外面ヨコナデ。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。内面褐色、外面黒色。	片残存
2	甕	(18.2) —	口縁部は、外湾して立ち上がる。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。黒褐色を呈す。	小破片
3	甕	(17.4) —	口縁部は、強く外反する。	口縁部内面ヨコナデ、外面はヨコナデの後、ヘラ調整、後一部ヘラミガキ。	胎土は、砂粒を含む。焼成不良。褐色を呈す。	片残存
4	小形甕	(12.4) —	口縁部は、外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。	胎土は、砂粒、雲母を含む。焼成不良。褐色を呈す。	片残存
5	甕	14.0 7.0 ・	口縁部は、わずかに内傾する。底面は、厚手。	内面は、口縁部ヨコナデの後縁方向のヘラミガキ。外面は、口縁部ヨコナデの後縁方向のヘラミガキ。体部は粗い横方向のヘラミガキ。	胎土は、砂粒、雲母を含む。焼成良好。内面黒褐色、外面茶褐色。	完形
6	甕	8.7 —	口縁部は、わずかに外湾して外傾する。胴部は、楕球形を呈し、中程に最大径(11.9)を有する。やや上位に推定径0.8の孔がある。	口縁部は、内面横方向のヘラミガキ、外面はヨコナデの後、縦方向のヘラミガキ。胴部は、内面不明、外面は横方向のヘラミガキ。	胎土は、砂粒を少量含む。焼成良好。茶褐色を呈す。	胴下半部欠損

17号土壇 (第91図, P L. 28)

位置と規模 13号住居址の北壁中央カマドと一部重複して存在する。13号住居址のカマドの掘り方を検出していた際にカマド東側の住居址壁に黒色土の部分があるのが判明し、本土壇の存在を確認した。口径1.85m×1.71m、底径1.72m×1.53m、13号住居址の床面からの深さ0.58m。円形を呈する土壇である。底部はほぼ平坦であるが細かい凹凸が全面にわたって存在する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土

- 1 ロームブロック層
- 2 黒褐色土層 (ローム粒混入)
- 3 茶褐色土層 (ロームブロック, ローム粒混入)
- 4 黄褐色土層 (ローム粒, ロームブロック多量混入)

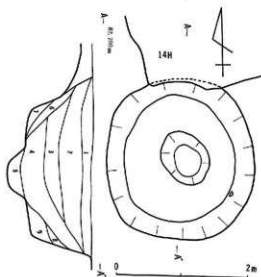
5 黒色土層（ロームブロック少量混入）

6 黄色土層（ローム主体）

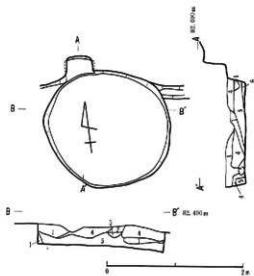
土壌上面にあたる1層と6層は、ロームを主体とする土層であり、13号住居址の床面では土壌の平面プランを検出できなかった。13号住居址が構築される時には、本土壌は開口状態にあり、土壌を埋めて張り床を作ったと考えられる。

遺物 弥生式土器2片。土師器21片。5層中より多く出土した。5は口縁部がわずかに欠損しているだけの坏形土器である。土壌の埋没状況からみると本土壌の使用時期に近い時期のものと考えられる。

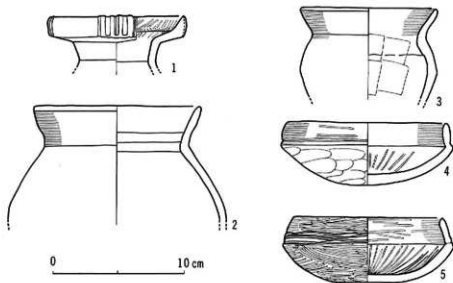
（14号～17号土壌 水品信男）



第90図 16号土壌実測図



第91図 17号土壌実測図



第92図 17号土壌出土土器実測図

表26 17号土壌出土土器

番号	器種	口径	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	皿	10.1 —	やや外傾する頸部から外面に線をもちて内湾する。口径縁へ移行する。外面に4本一組の棟状浮文、内面には、ヘラ状工具による羽状文を有する。		胎土は、砂粒を少量含む。焼成不良。黒褐色を呈する。	
2	小形甕	(12.8) —	口径部は、外傾し、上方が肥厚している。胴部に最大径(16.6)を有する。	口径部外面ヨコナデ。他は不明。	胎土は、砂粒を含む。焼成不良。黒褐色を呈する。	外面にすす状炭化物付着。
3	小形甕	(10.5) —	口径部は外傾する。胴部最大径と口径部径が等しい。	口径部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ調整。	胎土は、砂粒を含む。焼成良好。内面黒褐色、外面茶褐色。	
4	杯	12.1 4.7 *	口径部は肥厚して、わずかに内傾する。体部外面に線を有する。	口径部内面はヨコナデ。外面はヨコナデの後、横方向のヘラミガキ。体部内面放射状のヘラミガキ、外面は横方向にヘラケズリ。	胎土は、砂粒、雲母夾を含む。焼成不良。赤褐色を呈する。	口径部欠損
5	杯	(11.3) 4.9 *	口径部は、わずかに内湾して内傾する。下部にび線を有する。体部外面に線を有する。底縁は、平底気味。	口径部内外面ヨコナデの後、横方向のヘラミガキ。体部内面、放射状のヘラミガキ。外面ヘラミガキ。	胎土は、砂粒を含む。焼成不良。内面赤褐色、外面黒褐色。	片残存

3. 溝状遺構

溝状遺構 No.1 (第93図)

位置 発掘区域内のほぼ中央を東西に横断している。東は6号土壌や重複する2つの住居址7・8号を切り、西は7号土壌を切って検出された。発掘調査を行なったのは東側の各遺構を切っている部分だけであるが、平面プランから西にも伸びていることがわかる。

規模 巾は、狭い所で1.12m、広い所では1.86mで平均1.50m程度である。北側は急に、南側はゆるやかに掘り込んであり、段を有して底面に至り、段下の断面はU字形を呈する。深さは平均60cm程度であるが、すでにローム面まで削平されていたため、その正確なところはわからない。底面の巾は20~30cmで、底面からは、三か月形を呈する凹凸の掘具痕が15~30cmおきに検出された。おそらくは鋤か鍬か農具の跡であろうと推測される。

覆土 覆土はロームブロックと黒色土が混在しており、所謂レンズ状の層序を示していないことから、一括して埋められたであろうことが推測される。(第93図)

- 22 黄褐色土層 (ローム粒, ロームブロック混入)
- 23 褐色土層 (ロームブロック混入, やわらかい)
- 24 黒褐色土層 (ロームブロック多量混入)

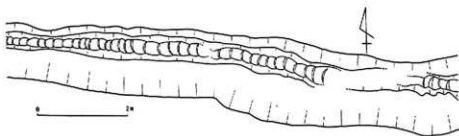
遺物 溝に伴うと思われる遺物は皆無であるが、覆土中からは、石製模造品の半個体が検出された。残存部1.2×2.1cm、厚さ2mmでほぼ中央に直径2mmの孔が1個穿けられている。完形でないため、何を模造したものかははっきりしないが、おそらくは勾玉か有孔円盤ではないかと思われる。石材は滑石であり、色は灰緑色を呈している。

本溝は、おそらく溝No.2とつながるものと見られるが、本遺構の東端は調査されていないため明らかではない。

溝状遺構 No.2 (第95図, P.L.23)

位置 発掘区域内の南東端に位置し、本溝のすぐ東側は崖である。17号住居址の東半分を切って構築されており、南北方向に走っている。セクションから本溝の方が新しいと判断される。また本溝は、別の溝No.3をも切っている。

規模 巾は2~2.3m程度であり、いったんゆるやかに掘り込んでから、段を有して底面に至る。段下の断面は溝No.1と同様にU字形を呈する。深さは60~64cm程度である。底面の巾は狭い所では20cm、広い所では30~40cmを計測し、溝No.1と比べると幾分巾広く構築されている。底面からは、三か月形を呈する凹凸の掘具痕が10~20cmおきに検出され、ある所ではそれらが2列に並んで検出された。この掘具痕は、溝No.1と同様なもので、鋤か鍬か農具の跡であると



第93図 溝状遺構No.1 実測図

思われる。

覆土 覆土はロームブロックと黒色土が混在しており、底面には黒色土が、そしてその上面にはロームブロックの層が、西側から流れ込んだような状態で堆積している。これらは自然な堆積状態というよりは、短期間のうちに埋まってしまったようであり、おそらくは、溝No.1同様、人為的に埋められたと考えることもできる。(第45図)

- 28 黒色土層 (客土, ローム粒少量混入)
- 35 黄褐色土層 (ロームブロック少量, ローム粒微量混入)
- 36 黄色土層 (ロームブロック主体)
- 37 黒褐色土層 (ロームブロック少量混入)
- 38 茶褐色土層 (サラサラしている)

遺物 本溝に伴うと思われる遺物はなく、覆土中から石製模造品と、寛永通宝が検出された。また、土師器片も多量に検出された。石製模造品は、滑石製の白玉であり、4.5×4.0mmで中央に直径1.5mmの孔が穿けられている。灰白色を呈する。寛永通宝は完全な形を保ち、ロームの壁面につきささったような状態で出土した。

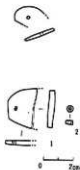
溝状遺構 No.3 (第45図)

位置 溝No.2の東側30~40cmに位置し、南北方向に走っており、北側は溝No.2に切られている。

規模 巾は狭い所で40cm, 広い所では60cmを示す。深さは約40cm程度であるが、ローム面まで削平されているため、その正確なところはわからない。断面はじ字形を呈し、底面の巾は約20cmである。

覆土 ローム粒の混じった褐色土が主体であり、所謂自然の埋没状態を示す。(第45図)

- 39 褐色土層 (ローム粒少量混入)



第94図 溝No.2
出土石製模造品
実測図

40 暗褐色土層（ロームブロック少量，ローム粒多量混入）

遺物 本溝に伴なうと思われる遺物はなく，覆土中から少量の土師器片が検出された。

以上のように，溝状遺構は3本確認されたが，溝Na1と溝Na2は同じ性格のものでありおそらく溝Na1の東端と溝Na2の北端はつながるものと思われるが発掘調査することができなかったため明らかではない。溝Na2が国分期の17号住居址を切っていることから，どの住居址よりも溝Na1・Na2の方が新しいことがわかる。しかし遺物は皆，覆土中からのもので時期を決定するものはない。しいて言えば，溝Na2から出土した寛永通宝が，壁面にききっていたことから，江戸時代以降という年代が考えられる。また，溝Na3は，溝Na2に切られていることから，それよりは古いということは明らかであるが，他の遺構との関連はつかめない。3本とも，その性格は明らかにはならなかった。

（大島和子）

IV 出土遺物・遺構の若干の考察

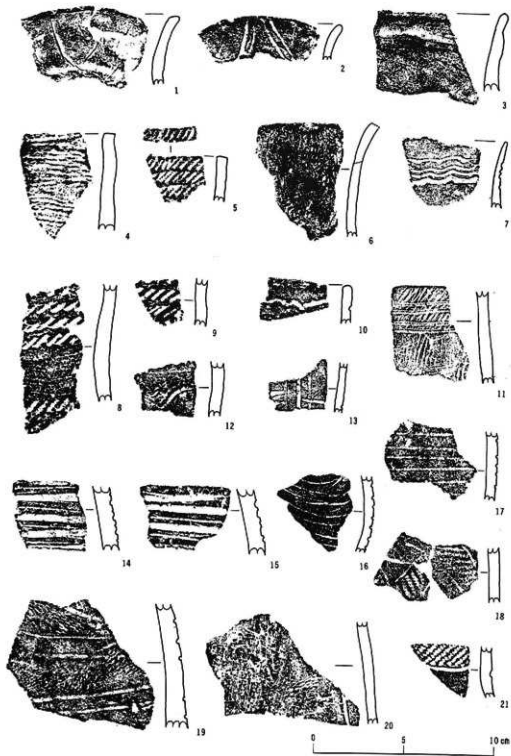
1 権現山北遺跡出土の弥生式土器について

本調査において、弥生時代の遺構は全く検出されなかった。しかし、検出された各遺構覆土中より多数の弥生時代の土器片が出土しているため、ここではその遺物について述べることにする。遺構に伴った遺物ではないので、多くを論じることはできないが、知見にのぼった範囲内で、本遺跡における弥生式土器の内容を述べるとともに、既知の県内の弥生式土器との比較を試みたいと思う。遺物は、すべて覆土中からの出土であるので一部を除いて出土遺構は明示していない。遺物は、少数を除いてすべて破片でその器形は明確でなく、従ってその器種構成は不明瞭である。しかし、壺形土器が主体をなすことは想像にかたくないであろう。詳細は、本文中で述べるが、本遺跡出土の弥生式土器は、中期および後期のものである。

各遺物について

中期…第95図～第99図(1～52)(PL.67～69)

第95図1～7・10は、口縁部破片である。1・2は、長頸壺の破片で朝顔形に外反しており1は頸部との境目に一条の太い沈線が見られる。2は、二本一組の沈線文が見られる。3・6は、無文の口縁部片で、3は、口唇のすぐ下で器内が一段薄くなって口唇に達している。5は、現存で三段の刻み目文が見られ、細い小口状の工具で押圧したものである。口唇上にも同じ刻み目文が見られる。これと同じような刻み目文は、8・9にも見られるが、これらは、各刻み目がやや大きく、各段の間隔がやや広い。これらの刻み目文を施した例は、県内に類例がなく特異なものである。7・10は、口唇下に数条の沈線を施したもので、7は、四本一組の工具による波状沈線であり、10は一本ごとの沈線文である。また、12も数本一組の沈線文が施されている。1～4は、中期の野沢式に属すると思われる。7・10・12は、中期末葉のものと思われる。13は、三条の沈線で縦に区画したのち、横位に沈線を施した頸部片である。11は、半截竹管で横位に施文したのち、その間をへら状工具で充てんしている。14・15は、かなり太い沈線文で、各条間に細い沈線を施している。16・17もやはり沈線文が施されているが、16は、一本のへら状工具で施文した渦巻文と思われるが、上山遺跡にその類例を見ることができる。中期末葉のものと思われる。18は沈線で山形に区画した磨消し手法による山形文である。胎土は非常に細かい精選されたもので、焼成はふつうであるが磨滅している。色調は淡黄色でやや白っぽい。19は磨消し縄文の胴部片で、拓影右下に靱痕が見られる。器内はかなり厚手で、胎土には砂粒が含まれ焼成はやや不良である。色調は黄褐色を呈する。20はやや薄手であるが、21と同じよ

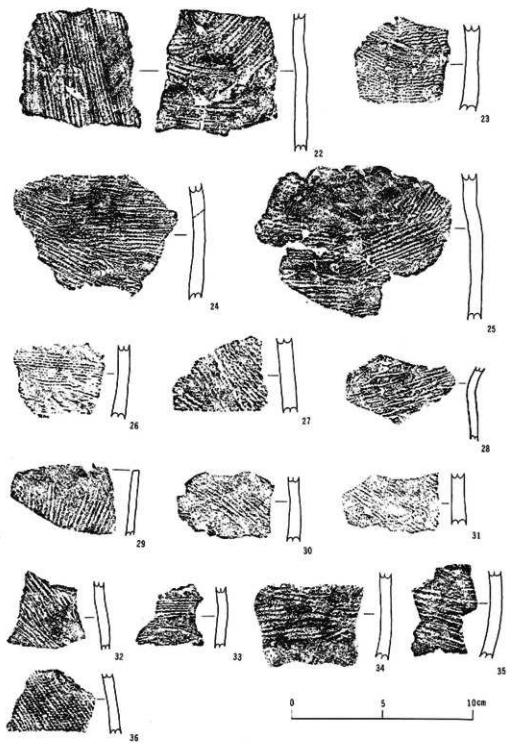


第95图 弥生式土器拓影图

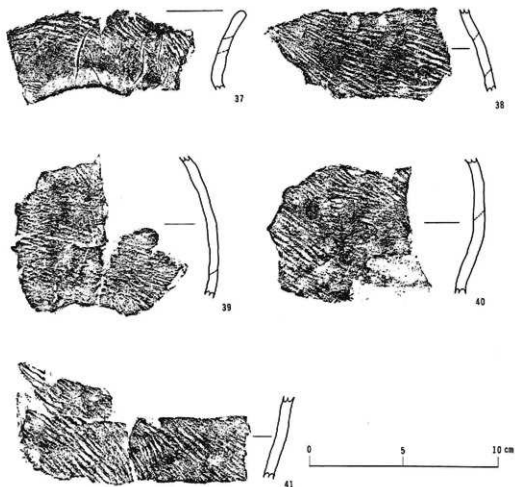
うな破片である。21もやはり磨消し縄文を施した破片であるが、焼成はきわめて良好で、色調は黒褐色を呈する。18～21はその施文手法から見て野沢式に属するものである。第96図22～36は、すべて胴部破片である。22は内外面ともに粗い小口状工具による調整が施されている。25も外面が同じように調整されている。23・24・26・27・30～32・35・36は、RL原体による縄文である。29は条痕文を施した口縁部片であるが、胎土は若干の砂粒を含むが、焼成は良好であり、色調は黄褐色を呈する。第97図37～41、第4図42～49はそれぞれ同一個体と思われる土器片を掲載したものである。第97図37～41は壺形土器の破片で、37は口縁部、38～41は胴部である。胎土には砂粒を少し含むが、焼成は良好で、色調は外面が黒～灰褐色で内面が黄褐色を呈する。16号住居址および7号土壙覆土中から出土したもので、接合関係が認められた。口縁部下に無文帯をおき、口縁部と頸部以下に無節R縄文が施されている。中期末葉に位置づけられよう。第98図42～49も壺形土器の破片で、1は折返しを呈する口縁部片で、43・47・49は頸部片、他は胴部片である。16号住居址および15号土壙覆土中から出土したものであり、接合関係が認められた。焼成はふつうで、色調は赤褐色を呈する。LR原体の縄文が施されているが、それは全面に施文されたものではなく、縄文帯と無文帯が交互にくり返されているようであり、部分的に磨消しがなされている。折返し部にも同じく縄文が施されている。中期末から後期初頭に位置されるものと思われる。50は15号土壙覆土中より出土した長頸壺の頸部破片で、ほぼ全が現存している。現存部では横方向を先に施文しその後縦に施文したヘラ状工具による格子目状の文様と、やはりヘラ状工具で区画し、さらにその中を同様の工具で沈線を充てんした山形文が見られる。胎土はあまりよくない。焼成はふつうで、色調は黄褐色を呈する。これは野沢I式に属する。第99図51は、長頸壺の半完形品で、頸部下半から胴部下半にかけて現存し、現存器高は、約23.6cmである。16号住居址覆土中及び15号土壙覆土中より出土し、接合関係が認められた。最大径を胴部下半に有し、肩を明確にもたない、所謂、長胴の土器である。器肉はほぼ5cmである。胎土は、砂粒を含み、径1mmくらいの小石が若干混入している。焼成は良好で、色調は黄褐色を呈し、ところどころ黒斑および赤褐色の部分が見られます。器面全体にRL原体による縄文をあまり方向にとらわれることなく施している。

また部分的にヘラ調整および指による磨消的な調整が見られる。内面は輪積痕が顕著にみられ、ヘラ調整を施している。ヘラ調整は、上方と下方では工具が異なり、下方は明瞭に4～5本の条が認められる。中期から後期への移行期の所産と思われる。52は7号土壙覆土中から出土した頸部片である。胎土は石英・長石を多量に含み、焼成はあまりよくない。色調は暗褐色および黄褐色を呈する。文様は三本一組のヘラ状工具で縦に六区画し、その後、各条間を横方向に同じ工具で間隔を数段にわたって施文している。中期末から後期初頭の所産と思われる。

後期…第99図～103図(53～149)(P.L. 68, 70)

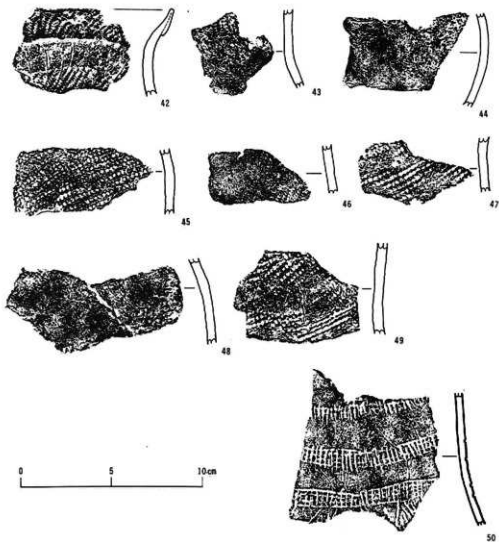


第96图 弥生式土器拓影图



第97図 弥生式土器拓影図

53～59は底部片である。ほとんどに木葉痕が見られるが、56・59は布痕が見られる。また56・59を除いて底部は外方へ「く」の字形に外反している。北関東後期弥生式土器の特徴を呈している。56は剥落があって正確な器内の厚さ・調整はわからない。56以外はすべて縄文が施されており、その原体は、53・54・55・59がLR、57・58がRLである。第100図60～79、第101図81・82は、口縁部片である。60・62・82を除いて折返し口縁の形態を有し、折返し部下端を縄文原体で刺突したもの(61・64・65・72)、棒状工具で刺突したもの(66・67・71・74・77～79)、指で押圧したもの(63・76)がある。また口唇上には、縄文原体を押圧したもの(60・61・63・64・67)、転がしたものを(68)、櫛描きを施したものを(62)がある。これらの特長は、本地域後期弥生式土器によく見られるものであるが、62のように櫛描きを施したものは、類例をみない。口唇部の形態にも一段のものや二段以上につくり出されるもの(61)があり、後者は、二段目



第98図 弥生式土器拓影図

以降もその下側に刺突文が施されている。折返し部文様も、縄文を施したものと無文のものがあり、折返し部以下には、縄文を施したものと櫛描波状文を施したもの(63・65・81)がある。また、61には土器内面に竹管による刺突文が施され、同じく63には櫛描文が施されている。このような文様は施文部位は異なるが上山遺跡にその類例を見ることができる。80・84-90は、櫛描波状文が施された頸部片である。これらの櫛描文は、前述の口縁部から頸部にかけて施され、北関東後期弥生式土器に多用されている。これらは中部高地地方の中期からの施文方法・文様に影響を受けたものと思われる。各破片とも数本一組の工具で施文されており、その数は80・81・89が9本、84・87が7本、85・88が10本、90が6本である。81は3本と4本の二種類が施文されている。また櫛描きの方法もいくつかあり、80・81・88は波状の振幅が小さく、

小きざみである。90は連続した櫛描きではなく、一回円弧を描くごとに器面から工具を離すようにしている。91は重ねて櫛描きをしたのち、同一工具で縦にも施文している。88・89は、横描きの櫛目文を施したのちに波状文を施している。92-94は格子目文の破片である。92は胎土・焼成とも良く赤褐色を呈する。96は櫛目状の平行沈線縦横に施し、その下方に横方向に同じように施文している。これは上山遺跡にその類例を見ることができる。97・98は櫛描籠状文が施された頸部下端の破片である。この籠状文は中原遺跡^②と井頭遺跡5区36号住居跡出土土器をはじめとしてその類例がみられる。これらもやはり、中部高地地方の手法の影響を受けたものであろう。99-134・136-149は胴部片である。すべて縄文が施されており、羽状縄文を構成しているものが多い。全般的に胎土は砂粒を多く含み、焼成もあまりよくないものが多い。色調は、黄褐色-黒褐色を呈するものが大部分である。器肉は全般にそれほどの変化がなく、やや厚手のものである。135は口縁部片で口唇部は扁平であり、縄文が施されている。143は焼成がよく赤褐色を呈する破片である。南関東的な様相を呈している。144はへら先による刺突文を施した破片であり、本資料中にただ一片だけである。

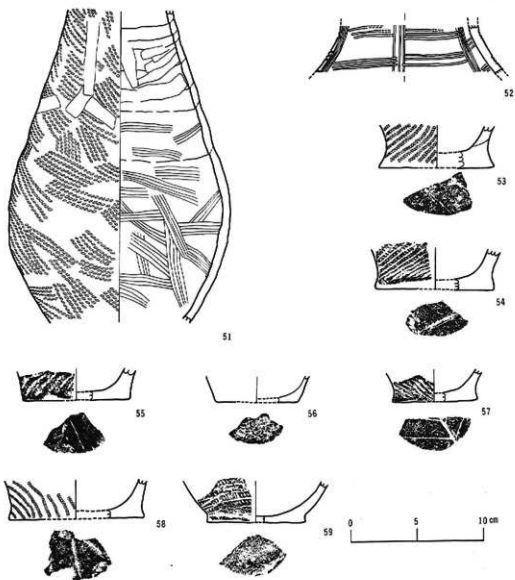
以上、各遺物について説明をしてきたが、文様はかなりバラエティーに富んでおり、検討の余地を残すものが多くある。それらのうち、とくに中期から後期初頭の所産と思われる遺物について、以下、検討を試みたいと思う。

まとめ

本地方における弥生式文化は、そのはじまりは、今のところあまり明確ではないが、野沢式土器の時期には、稲作をもった所謂弥生式文化が存在したと思われる。足利市入小屋遺跡においては、野沢式より古い条痕文土器に靱痕が検出されているという。本遺跡において野沢式の土器片に靱痕がみられ（第95図9）一片だけではあるが稲の存在が認められる。本遺跡は、立地的には稲作に不適というよりむしろ好都合であったと思われる。発掘区域内には弥生時代の遺構が検出されなかったが、中期から後期にかけて連続的な遺物が見られることから、発掘区の西・南においては、弥生時代集落が営まれていたと推定される。

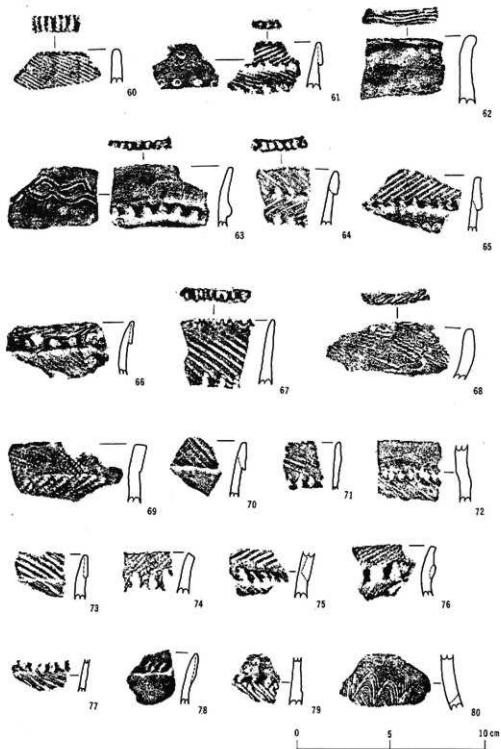
本地方の弥生式文化は、西日本から波及した弥生式文化と在来の縄文時代の流れをひく文化が融合して生じたものと思われる。主に中部地方、群馬県地方を経て流入した弥生式文化が土器にあらわれたものと見られる。本地方最古の弥生式土器である条痕文系土器は、群馬県地方では岩櫃山式土器、本地方では上仙波遺跡の土器として存在しており、弥生式文化波及の経路がうかがわれよう。その文化波及の経路は、大筋的にはその後も変わらなかったと思われる。ここでは以上の弥生式文化波及の経路をふまえた上で本資料中に見られる中期末葉から後期の弥生式土器について述べることにする。

中期末葉には、中部高地の栗林式土器や群馬県地方の竜見町式土器が影響を与えたものと思

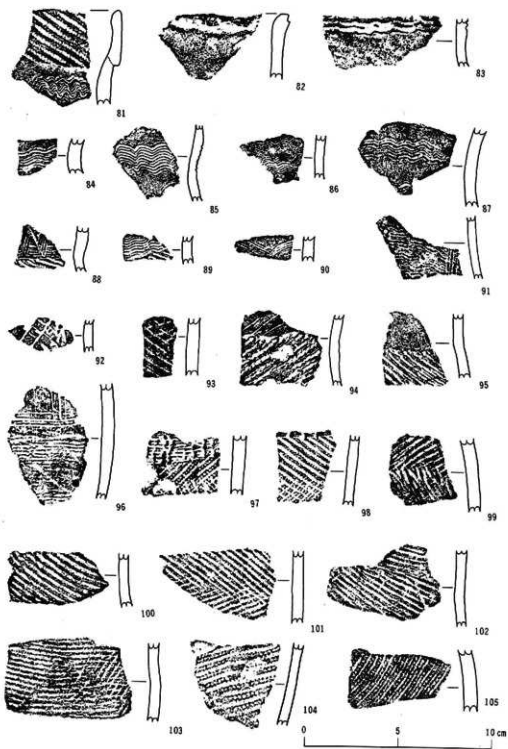


第99図 弥生式土器拓影図

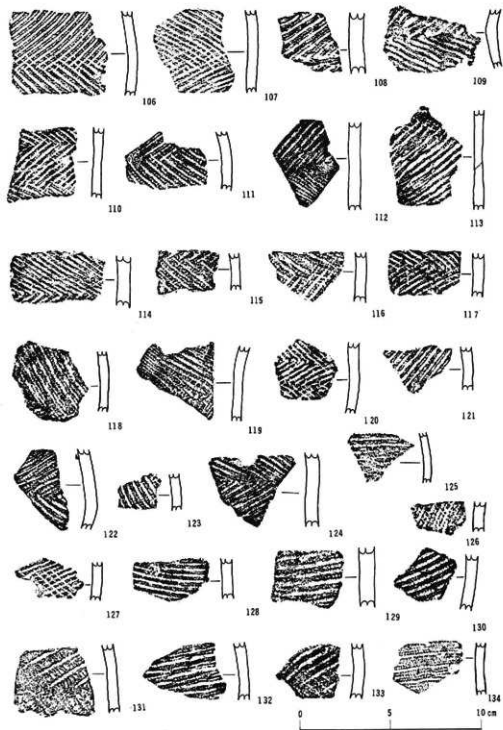
われる。第95図10・12，第100図63・80，第101図81・84・91・96-98などはその例である。櫛描文や篋描沈線文がその特長である。これらの文様は，本地方の中期末から後期の弥生時代遺跡にふつうに見られる。本資料中96の土器片は，県内では上山遺跡にその例が見られ，報告者は，中部高地との関連を推測している。竜見町式土器は，粟林式土器と同系統あるいは末期的な土器としてとらえられており，櫛描きによる波状文や篋状文は，粟林式土器や竜見町式土器の影響によるものと解される。また，群馬県地方では，竜見町式土器のあとに櫛描波状文の



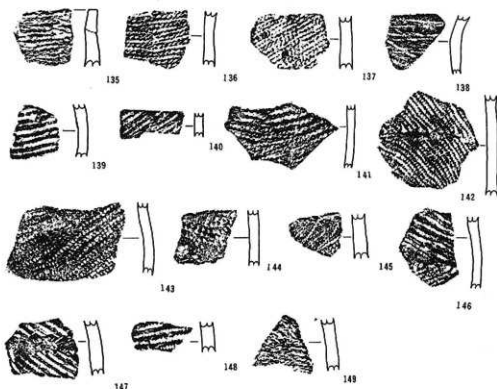
第100图 弥生式土器拓影图



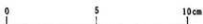
第101图 弥生式土器拓影图



第102图 弥生式土器拓影图



第103図 弥生式土器拓影図



発達した樽式土器が盛行することから、これらの資料は、中期末から後期初頭あるいは、それにつづく所産と思われる。

第97図37～41、第98図42～49、第99図51・52は、器形・文様から見て、野沢式土器から連続した後出的な土器と思われる。個別的に見ていくと、37～41は、器面全面に縄文を施している。42～49は、縄文を施した部分と無文部位があり、一部を磨消している。これら2つは、破片ではあるが、壺形土器であり、37～41は、51のように長胴の器形を呈すると思われる。42～49は、やや胴の張る器形を呈すると思われる。51は長胴の壺形土器である。52は、篋描き沈線文を施した頸部である。以上の土器は、先述したように、野沢式に続く土器で中期末葉に位置づけられよう。

本地方において、中期の土器から後期の土器への移行は、野沢式土器から以上のような土器あるいは、他の地方の影響を徑て、櫛描き文系土器へ移行したと考えられる。その過程は、今まで述べたように、中部高地や群馬地方からの影響あるいは、一部、南関東や茨城県地方および東北部の影響のもとに新しい文化を受容したものである。

櫛描き文土器は、所謂二軒屋式土器の範疇に入る。二軒屋式土器は、寺内武夫・榎崎善之助両氏により、「下野中原遺跡調査概報」の中で提起された土器型式である。その内容の概略は、次のようである。器形は壺形・深鉢形を呈する。口縁部には、斜縄文を施すのがほとんど

で、口唇上部まで及んでいるものが多い。口縁部は段または隆起帯をもって頸部と境をなすものがあり、その段は、1-3段で段の下端には、縄文による刻み目をつけている。また疣状突起をつけるものもある。頸部は、帯目手法による波状文・直線文・籠状文が主である。胴部は、ほとんどに縄文が施され、異條斜縄文とそれが交った羽状縄文である。底部は「く」の字形に外曲するものが普通であり、平底で、木葉痕・布目的な網状痕を有する。以上がその内容であるが、本資料中の土器片をもってしても、ほとんど同じことが言えると思う。しかし、本地方における住居跡の検出が少なく、遺物にも完形の土器はあまりない。従って、土器のセット関係で二軒屋式土器を明確にはしえないが、「中原遺跡調査概報」の内容および本資料、既知の資料をもってすれば、その文様とその特長は、ほぼ看取されるであろう。

二軒屋式土器の細分は、埴 静夫氏により試みられている。土器の細分は既知の資料の再検討および今後の資料の増加により、より明確になされるものと思われる。

二軒屋式土器の分布は、宇都宮を中心にして、かなり広く分布しているが、その濃密な地域は、宇都宮南部地域で、本遺跡もその中にふくまれる。本地方の北部や東部において、東関東の長岡式土器・十王台式土器などの影響だけでなく、それ以外の地域の影響も見られる。とくに埴氏は、福島地方の二ツ釜式の南漸を指摘されている。これは文化波及の複雑さを物語る重要な指摘であり、本資料中にもその例を見ることができる(第95図16)。

本地方における弥生式土器編年は、埴 静夫氏により試論が出されている。氏は、前述したような福島地方あるいは、北茨城地方との関連を重要視され、中期後半の編年をなされている。今市地方を主体とした地域的な偏りはあるにしても、本地方の資料の貧弱性を考えると氏の業績は大きいものである。従ってわれわれは、氏の編年をもとにしてより明確な編年を追求しなければならない。それには、本地方を一つのワケでとらえるよりも、地域に分けて考えるのも一つの手段ではないだろうか。埴氏の編年に対して竹沢 謙氏は、福島地方の渦巻文系土器の南漸はみられるとしながらも、南からの北進が主流であったことを述べ、南漸した土器を単なる介在とする見解を示しておられる。氏は、南関東などの影響を念頭におき、後期初頭の長岡式土器や吉ヶ谷式土器を経て二軒屋式土器へと発展することを提唱しておられる。東秋場遺跡や井頭遺跡、本地方南部において吉ヶ谷式や長岡式の影響が見られ、それ以外にも前述したような中部高地や群馬地方の影響が見られるのは事実である。本地方の土器には、文化の北進、南進およびそれ以外の流入がみとめられ、ともに関連させて考えねばならないであろう。本地方の弥生式土器文化の本質は、常に南からの影響を受け、それに周辺地域からの影響が付加されたものと思う。そして本地方の野沢式以降の弥生式土器は、在来の土器に周辺地域からの影響が組み入れられて生成されたものと考えられる。従って文化の北進や南進およびそれ以外の影響がどの程度であったかは、今後の研究課題であろう。それらが解明されて弥生式土器編年

が確立されてゆくものと思われる。

以上、本地方の中期から後期への移行と後期の土器について、本資料を中心に述べた。しかし、資料の検討と記述に不十分なところが多く、先学諸氏の御教示、御批判を頂ければ幸いである。

本稿については、竹沢 謙氏（栃木県立宇都宮女子高校教諭）に多大なる御教示を賜った。末筆ながら氏に感謝の意を表する次第である。

（梶 和彦）

- 註①、 堀 静夫、竹沢 謙、山ノ井清人「上山遺跡」栃木県埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
栃木県教育委員会、1974年
- ②、 寺内武夫、轟崎普之助「下野中原遺跡調査概報—第一回—」考古学第10巻第10号 東京
考古学会、1939年
- ③、 大金宣亮、橋本澄朗、川原由典、二宮淳子「井頭遺跡」栃木県埋蔵文化財報告書第14集
栃木県教育委員会、1939年
- ④、 前出注①「上山遺跡」P24
- ⑤、 前出注①「上山遺跡」P18、P19第11図
- ⑥、 杉原荘介「上野樽遺跡調査概報」考古学第10巻第9号 東京考古学会、1939年
井上唯雄、柿沼恵介「入門講座・弥生土器—北関東2—」考古学ジャーナル 141、
ニュー・サイエンス社、1977年
- ⑦、 杉原荘介「北関東に於ける後期弥生式文化に就いて」考古学第10巻第10号
東京考古学会、1939年
- ⑧、 前出注②、
- ⑨、 本県東南部を中心に合計17戸確認されている。
- ⑩、「栃木県史、資料編考古—」 1976年
- ⑪、 堀 静夫、田代 寛「真岡市柳久保遺跡発掘調査概報」栃木県史研究三、栃木県史編さ
ん室、1972年
堀氏は、二軒屋式土器を新旧Ⅰ、Ⅱに細分しておられる。
- ⑫、 竹沢 謙他「吉田富士山古墳」栃木県教育委員会 1971年
報告者は、十王台式土器が那珂川を遡上したものと指摘している。
前出注③、報告者は、茨城地方との関連を指摘している。
- ⑬、 堀 静夫「栃木県における弥生式土器の編年試論」栃木県史研究七 1974年
その後、前出注10「栃木県史・資料編考古—」の中で一部訂正している。
堀 静夫「野沢Ⅱ式以後の弥生中期土器について」下野古代文化創刊号 1974年

下野古代文化研究会

⑭ 栃木県考古学会「栃木県考古学年報1, 1975・1976年版」

⑮ 前出注⑭

参考文献

- 杉原荘介「下野野沢及び陸前槇形冢出土の弥生式土器の位置に就いて」考古学第7巻第8号 東京考古学会 1936年
- 藪田芳雄「桐生市およびその周辺の弥生式文化」両毛考古学会 1966年

2. 鬼高式土器と住居址について

本遺跡より検出された18軒の住居址のうち、6軒は鬼高期のものであった。それらの住居址から出土した土器のうち、図示できたものは101個体であった。器形は、甕、甗、甗、小形甗、壺、高環、壺、小形埴、甗形土器の9種類であり、101点のうち甗形土器17点、甗形土器2点、小形甗形土器8点、壺形土器6点、環形土器59点、高環形土器6点、壺形土器1点、小形埴形土器1点、甗形土器1点である。環の多さには目を見はるものがあり、特に4号住居址のものが41点と、かなりの数を占めている。ここでは、これらの土器を形態別に分類し、さらに住居址の編年について考察してみたい。

鬼高式土器の分類

a) 甗形土器

二形式に大別し、A類…球形胴部を有するもの、B類…長胴を呈するもの、とする。

A I類…球形胴部を呈し、最大径は胴部中央にある。口縁部は、ほぼ垂直に立ち上がり外反しながら口唇に至る。口唇部は面取りがしてある。底部はやや突出する。(4号住 1・2)
(第19図)

A II類…球形胴部を呈し、肩部が張り最大径を肩部に有す。口縁部は外弯しながら立ち上がる。底部はやや突出気味。(4号住, 3)(第19図)

A III類…球形胴部を呈し、頸部は直立し強く外反した後、口縁部は外面に稜を有して直立気味に立ち上がる。最大径は胴部中央。(16号住 1)(第66図)

A IV類…長目の球形胴部を呈し、口縁部はゆるやかに外反する。(16号住 2)(第66図)

B I類…長胴を呈し、頸部がやや直立し口縁部は大きく外反する。胴部中央に最大径をもち底部はわずかに突出する。(4号住 5, 10号住 1)(第20図, 第47図)

B II類…長胴を呈し、口縁部はゆるやかに外弯しながら立ち上がる。胴部中央に最大径を有する。(4号住 6, 13号住 2)(第20図, 第59図)

B III類…長胴化傾向にあり、短い口縁部が外弯気味に立ち上がる。最大径は胴部中央。(12号住 1・2)(第53図)

甗形土器では、球形のものA類と、長胴のものB類とに大別することができるが、これは、鬼高期には、貯蔵用のものと、煮沸用のものとに形態が分化していったことを示している。4号住居址では、それをはっきりと認めることができる。本住居址では、A類の球形甗が南側張り出しピット棚状部から、またB類の長胴甗がカマド前部から、それぞれ出土している。すなわち、カマドの発生とその発達によって必然的に導かれたのがB類であり、カマドに即応した土器、熱効率をよくするために使用された形態であるといえる。しかし、16号住居址からは、

B類の出土は見られずA類のものだけである。本住居址では、AⅢ類の土器が貯蔵穴北西コーナー近くから、またAⅣ類の土器は、カマドのかけ孔にかけられたままの状態出土している。前者が貯蔵用に、後者が煮沸用に用いられたことが窺われる。このことは、16号住居址の段階は、当地域にカマドが採用されてから間もないことを示していると思われる。この他に9号住居址もB類の甕形土器をもたない。他の、4・10・12・13号住居址からはB類のそれを出土しており、A類よりは後出的な土器であるといえよう。

b) 甕形土器

4号住居址から出土した2点だけであるが小形のもの…A類、大形のもの…B類、とに分けられる。

A類…鉢形を呈し、平底の底部に径3cm前後の孔が穿たれ、胴部から口縁部まで直線的に開くもの。(4号住 8) (第20図)

B類…口縁部は外反し、直線的な胴部は垂直に下がり、下半部はすぼまる。単孔で筒抜け。砲弾形を呈する。(4号住 7) (第20図)

A類の甕形土器は小形で蒸気孔も小さく、機能性に欠け、弥生時代～和泉期によく見られるものである。またB類のそれは、カマドの発達に伴い所謂、甕—長胴甕—カマド、という組み合わせで用いられたものであり、底が筒抜けになって効率化し、それまでより機能が倍加したと思われる。おそらく、B類は日常的な雑器として用いられ、非日常性を帯びたA類の甕は祭祀用として、「神への御供え」という従来の機能を継続したのだろう。すなわち、B類の方が、A類より後出的であり、4号住居址の時期には、機能が分化し両者が併存するようになったといえよう。

c) 小形甕形土器

口縁部の形態より、外傾するもの…A類、内傾するもの…B類、とに分類した。

AⅠ類…球形胴部を呈し、胴部中央に最大径をもつ。口縁部は外湾する。底部は大きめで作りは粗雑なものが多い。(4号住 9・10, 12号住 6) (第20図, 第53図)

AⅡ類…球形胴部を呈し、口縁部は「く」字状に外反する。頸部に稜を有し、最大径は胴部にある。(12号住 4) (第53図)

AⅢ類…球形胴部を呈し、口縁部は短く外傾する。底部は小さく、最大径は胴部中央ないしは上半にある。(16号住 5・6) (第66図)

B類…ゆるやかな球形胴部を呈し、口縁部は内傾する。底部は大きめ。(4号住 11, 12号住 5) (第21図, 第53図)

d) 壺形土器

大形のをA類、半球形を呈するものをB類、小形のをC類とする。

A類…口縁部と体部との境に稜を有し、口縁部は内傾する。(4号住 12) (第21図)

B I類…半球状を呈し、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。(4号住 13) (第21図)

B II類…半球状の胴部を有し、口縁部は直立する。(9号住, 2, 16号住 7) (第42図,
第66図)

B III類…半球状の胴部を有し、口縁部は外面に稜をもって内傾する。(16号住 8) (第66
図)

C類…体部が外上方へ伸び、直立した短い口縁部を有する。平底で厚手、小形である。(12
号住 7) (第54図)

e) 坏形土器

四大別が可能である。A類は半球状(球体の一部を切ったようなもの) B類は体部、口縁部との境に明瞭な稜を有するもの、C類は体部と口縁部に間に軽い稜を有するもの、D類は平底のものである。

A I類…扁平な半球状(弧状)を呈するもの。口縁部の形態には直立するものと、内傾するものがある。(4号住 14-18, 12号住 8) (第21図, 第54図)

A II類…半球状(弧状)を呈し、口縁部の形態には直立するもの、内傾するもの、外傾するものがある。短い口縁部である。(4号住 19-31) (第21, 22図)

A III類…半球状であり、A II類に比して長い口縁部をもつ。口縁部の形態には、外傾気味のもの、内傾気味のもの、直立するものがある。(16号住9・11・12・14・21) (第67図)

A IV類…半球状であり、口縁部は内傾し内面に軽い稜をもつ。(16号住 20) (第67図)

B I類…ゆるやかに弧を描く体部から内傾する口縁部を有する。外面に明瞭な段を有す。概して扁平であり、本形式は鬼高期のメルクマルとなる。(4号住32-51, 12号住9) (第22, 23図, 第54図)

B II類…半球状の体部から内傾、直立する口縁部を有する。B I類にして口径:器高の比が小さい。外面に明瞭な段を有す。(16号住 17・19) (第67図)

C I類…体部外面に軽い稜を有し、口縁部が長く外上方に開がる。(4号住 53・54, 12号住10) (第23図, 第54図)

C II類…体部外面に軽い稜を有し、口縁部が直立する。(4号住52, 12号住11, 16号住10・15・16) (第23図, 第54図, 第67図)

C III類…体部外面に軽い稜を有し、口縁部が外湾するもの。(16号住13) (第67図)

C IV類…体部外面に軽い稜を有し、口縁部が短く外傾するもの。(9号住3) (第42図)

D類…平底であり、体部と口縁部の境に一条の沈線を有する。口縁部は直立する。(16号住18) (第67図)

以上のように大きく4形態に分けることができる。BⅠ類は所謂須恵器の身の模倣と言われるものである。この類の土器は、4号住居址で20点と豊富に出土しており、12号住居址でも1点が検出されている。また、16号住居址出土の2点のBⅡ類の環形土器はBⅠ類に比して丸味を帯び、器高も深く、口縁部も長い。これもおそらく須恵器の身の模倣として扱ってよいものと思われるが、まだ模倣が盛行の段階に入らず初歩的な段階と言えらるだろう。すなわち、4号住居址の時期がB類の環形土器の盛行期とすることができよう。

後期古墳からの出土が多いのは、このBⅠ類の環形土器である。例えば、上都賀郡西方村にある西方山6号墳^②では、BⅠ類が3点、AⅡ類が3点出土しており(石室内は省く)鹿沼市狼塚古墳^③、上三川町大野D-28号墳^④からもBⅠ類の環形土器がそれぞれ1点ずつ出土している。横穴式石室は、追葬が行われた可能性があり、出土土器類がその古墳の築造年代を示すとは断定できない。しかし他の遺物や石室築造方式などから与えられた古墳の年代を、逆に土器に与えることは可能であり、このことについては後述する。西方山6号墳では、AⅡ類及びBⅠ類の環形土器が、あたかも身と蓋のセット関係をあらわすかのように出土しているが、本遺跡でもそれを指摘することができる。例えば4号住居址の環形土器出土状態を見ると(第18図)18点のA類の土器が一固まりに重ねられ、それらの土器群を取り囲むように20点のB類の土器群が並べられているのがよくわかる。土器の数も近似している。また、17と34の環形土器は両者とも内面及び口縁部外面に黒色処理がなされており、全く同様な作りである。17を蓋に、34を身にと、意図的に製作されたと見られる。12号住居址においても、A類のもの1点、B類のもの1点とセット関係を物語る。また都賀町観音堂遺跡^⑤からも、AⅡ類のもの2点、BⅠ類のもの2点がセットをなすかのように出土している。そして、概してA類の方がB類よりも口縁部径が長いようである。

さて、16号住居址出土の環形土器であるが本住居址のものは、4、12住居址のものを「弧状」とすると「球状」に近い形態をとる。また、AⅣ類形の環形土器(第67図20)は内面に稜を持っているが、これなどは和泉期の環、埴形土器に多く見られるものである。すなわち、環形土器を見た限りでは、16号住居址—4号住居址という大まかな流れがつかめるようである。9号住居址から出土した環形土器は16号住居址タイプといえよう。

f) 高環形土器

半球状の坏部を載せるものをA類、坏部外面に稜のあるものをB類とする。

AⅠ類…半球状のやや内穹気味に開く坏部を載せ、脚部は短く「ハ」字状に開き、急激に曲折して裾部を形成する。(9号住4・5)(第43図)

AⅡ類…半球状のやや内穹気味に外上方に開く坏部を載せ、脚部は短く「ハ」字状に大きく開く。(12号住12・13)(第54図)

B類…坏底部外面に發を有し、脚部は短く直立しているが、裾部は大きく開いている。

高坏形土器を出土しているのは、9・12・16号住居址の3軒である。鬼高期の特長として、和泉期に盛行した高坏形土器が減少することが上げられるが、本遺跡でもその傾向が見られる。特に坏形土器をはじめとする多数の土器を出土した4号住居址に、それが無いのは興味深い。さて、AⅠ類の高坏形土器はAⅡ類の坏形土器を載せている。本形態の土器は県内では類例がなく、近似していると言え、足利市上敷遺跡B区4-A号住居址出土の4・5を当てることができよう。県外では、八王子市中田遺跡E地区19号住居址から坏部^⑥だけであるが同形態のも^⑦のが出土している。

住居址と土器との関係

これまでに、カマドとの関係、須恵器の模倣の有無などから、土器間の新旧関係を述べてきた。ここでは、まず本遺跡における鬼高期の住居址を土器の様相から分けてみたい。

4号住居址…甕形土器AⅠ、AⅡ、BⅠ、BⅡ類を持ち、カマドが採用されてから時間が経過していることが推測される。坏形土器AⅠ、AⅡ類とそれらとセット関係をなすとも言えるBⅠ類の坏形土器を持つ。C類のものも僅かではあるが検出されている。高坏形土器はない。

9号住居址…甕形土器A類をもち、B類の出土をみない。C類の坏形土器をもつ。高坏形土器を有する。

10号住居址…BⅠ類の甕形土器をもつ。

12号住居址…甕形土器BⅢ類をもつ。坏形土器ではAⅠ類及びセットをなすBⅠ類をもつ。高坏形土器2点出土。

13号住居址…BⅡ類と思われる甕形土器をもつ。詳細は不明。

16号住居址…甕形土器はA類のみ。特に和泉的なAⅢ類をもつ。坏形土器は先行的なAⅢ、AⅣ類、平底のD類、ならびにCⅡ、CⅢ類をもつ。また、B類の高坏形土器と陶器Ⅰ期に比定される須恵器無蓋高坏をもつ。

以上のことから、9号、16号住居址は、所謂カマドの発達に伴った長胴のB類の甕形土器がなく、坏形土器にも先行的なものが見られるので、この2址は他の4址に先行すると思われる。

また、おそらく4号住居址と12号住居址は、土器の様相が類似しており、両者とも裏出しピットを有するという同形態のプランを呈することから、ほぼ同一時期の所産と見てきしつかえないだろう。また、12号住居址と13号住居址は、一部重複し12号住居址が13号住居址を切っで構築されていることから、13号住居址は12号住居址に先行するとみられる。しかし、13号住居址も12号住居址と同形態のプランを有し、B類の甕形土器をもつように、12号住居址と時的な差はほとんどみられない。竪穴住居の耐久年数を一世代と見ても、両者が火災に遭っているためその耐久年数はもっと短かったことが推測される。このようなことから、12、13号住居址

の时期的な差は編年作業の上での、大きな支障とはならないだろう。最後に、10号住居址であるが、これもB類の甕形土器I点だけで他の器形の伴出をみないためセットで押えることは不可能であるが、4号住居址類似のBI類の甕形土器をもつことから、やはり4号住居址と併行するものとみて大過ないと思われる。

すなわち、権現山北遺跡における鬼高期の住居址の序列は〔I期〕9号、16号住居址〔II期〕4号、10号、12号、13号住居址、とそれぞれ比定され、ほぼ2期に分類することができる。そして土器の様相をまとめると次のようになる。

〔I期〕甕形土器AⅢ、AⅣ類、小形甕形土器AⅢ類と、いずれも球形を呈す。坏形土器AⅢ、AⅣ類、BⅡ類、C類を有し、高坏形土器、甕形土器、小形甕形土器、甕形土器を有する。

〔II期〕球形甕AⅠ、AⅡ類と、長胴甕B類の両者を併わせもつ。甕形土器A、B類、小形甕形土器AⅠ、AⅡ、B類を有し、碗形土器A、BⅠ類をもつ。坏形土器では、須恵器の身の模倣が盛行しBⅠ類が作られ、蓋様のAⅠ、AⅡ類を伴出する。前時期から引き継がれたCⅡ類の坏形土器をも有し、次期へ引き継がれるであろうCⅠ類のものも出土する。高坏形土器の出土は少ない。

住居址の形態について

さて、ここで住居址の形態について考えて見たい。6軒ともすべてカマドは北壁にある。では、貯蔵穴はどうであろうか。9号、16号住居址では、カマドとかけ離れた南東コーナーに位置している。これは、本遺跡の和泉期の住居址の多くがそうであると同様である。

次に、4号、12号、13号住居址はいずれも張り出しピットを有するので省くが、4号住居址併行の10号住居址では、貯蔵穴はカマドの右手前、すなわちプラン北東コーナーに位置する。これは、栃木県内の鬼高期の住居址の典型的なものである。このようにカマドと貯蔵穴の位置を考えてみても、9号、16号住居址は類似しており、貯蔵穴の位置がカマド右手前に定着する前段階のものと言えよう。このことは、同台地上に立地する大野遺跡でも言える。

絶対年代について

権現山北遺跡で絶対年代決定の手がかりとなるものは16号住居址出土の須恵器高坏形土器である。この高坏形土器は、16号住居址埋没後に投棄されたものと考えられるが、土層の埋没状態より本住居址との时期的な差はない。この高坏形土器は、畿内からの搬入品ではないかと思われ、陶邑編年でいう第I期にあたり、TK208、TK23窯のものに類似する。陶邑の編年では、この第I期^④の絶対年代を5世紀代から6世紀前半としている。このことから考えると、16号住居址では新しく考えても6世紀前半には生活が営まれていたことになろう。ここでは、16号住居址の年代を5世紀末～6世紀前半と比定したい。9号住居址も必然的にこの頃に比定される。

次に、4号住居址出土の坏形土器、西方山6号墳と同様のセット関係を示しており、また狼塚古墳からも同形態のBⅠ類の坏形土器を出土している。西方山6号墳は6世紀後半に、狼塚古墳は追葬は行なわれなかったことが判明しており7世紀初頭に位置づけられている。。このことから、4号住居址に併行する住居址の年代は6世紀後半～7世紀初頭とする。すなわち、

権現山北第Ⅰ期（16号住居址併行期）

5世紀末～6世紀前半

権現山北第Ⅱ期（4号住居址併行期）

6世紀後半～7世紀初頭

ということになる。本遺跡の鬼高期の住居址は2期に分けられたが、4号住居址の土器群がスムーズに次期の貞周期へ移行するものではない。また、16号住居址併行期の上限を、須恵器高坏形土器をもとに5世紀末まで引き上げてしまったが、あくまでも試案であり、検討の余地を残すものである。

栃木県においても、鬼高期は3期に分類できるが、その第Ⅰ期の標式として本遺跡16号住居址を、第Ⅱ期の標式として同じく4号住居址を当てたいと思う。しかし、残念なことに第Ⅲ期をセットで押さえられるような好資料は少ない。しいて言うなら宇都宮市瑞穂野工業住宅団地内遺跡北区15、18号住居址や、上敷遺跡B区7-A号住居址が当てられよう。

最後に、本遺跡7号住居址であるが、本住居址は、一応和泉期最終末期のものともみだが、鬼高期の所産としてもまちがいはないように思われる。14、15の甕形土器（第37図）などは14号住居の甕形土器（第61図）と同形態を示し、他の甕形土器なども球形胴部を呈するものが多い。しかし、18の甕形土器（第38図）のような新しい様相をも含んでいる点は、今後検討を要するものである。

（大島 和子）

註① 柿沼幹夫「甕形土器に対する一考察—南関東を中心として」埼玉考古第15号 1976年

② 倉田芳郎「西方山古墳群」東北縦貫自動車道路埋蔵文化財発掘調査報告書 栃木県教育委員会 1972年

③ 大和久震平「狼塚古墳発掘調査報告書」鹿沼市教育委員会 1966年

④ 倉田芳郎編「栃木日産遺跡」駒沢大学考古学研究会 1971年

⑤ 倉田芳郎他「観音堂遺跡」栃木県埋蔵文化財報告書第5集 1972年

⑥ 竹沢謙、山ノ井清人他「上敷遺跡」栃木県教育委員会 1977年

⑦ 「八王子中田遺跡、資料編Ⅲ」八王子中田遺跡調査会 1968年

⑧（註④）前掲書

⑨ 田辺昭三「阿部古窯址群Ⅰ」平安学園考古学クラブ 1966年

⑩ 岩上照朗, 石橋知明「宇都宮市瑞穂野団地遺跡」宇都宮市教育委員会 1978年

表27 権現山北遺跡住居址一覽

No	規模 (m)	主軸方向	周溝	柱穴	カマド・炉	貯蔵穴	備考
1	6.80 × 6.55	ほぼ北	有	4	炉・北寄	南東隅	
2	7.90 × 7.90	N-15° - E	有	9	炉・北寄	南東隅	焼失
3	3.90 × 2.90	N-13° - E	無	0	カマド・北	——	
4	6.20 × 6.20	N-20° - W	有	4	カマド・北	——	焼失 張出ビット
5	6.60 × 6.50	N-8° - E	有	4	——	南西隅 西壁際中央	焼失
6	(5.40)×5.40	N-6° - E	有	4	——	南東隅	
7	6.90 × 6.80	N-27° - W	有	4	炉・北寄	南壁際東寄 西壁際北寄	焼失
8	7.80 × 7.70	ほぼ北	有	4	炉・北寄	北東隅	
9	5.45 × 5.40	N-5° - E	無	5	カマド・北	南東隅	焼失
10	4.40 × 4.30	N-13° - E	有	4	カマド・北	北東隅	
11	5.50 × 4.90	N-7.5° - E	有	0	炉・中央	南東隅	
12	6.70 × 6.70	N-25° - W	有	4	カマド・北	——	焼失 張出ビット
13	6.80 × 6.75	N-5° - E	有	不明	カマド・北	——	焼失 張出ビット
14	3.93 × 2.80	N-13.5° - W	有	0	炉・南西寄	南西隅	焼失
15	——	——	——	——	炉——	——	
16	4.95 × 4.90	N-19° - W	一部有	4	カマド北・	南東隅	焼失
17	3.10×(2.00)	真北	無	0	カマド・北	——	
18	6.70 × 6.60	N-15° - E	有	5	炉・北寄	南東隅 南壁際東寄	2号と重複

3 土壌について

本遺跡で調査された土壌は、1号土壌から17号土壌までの17個と1号住居址東土壌、9号住居址南P₁₀遺構の併せて19個である。

土壌の分類

19個の土壌は、平面形態によって大きく3分類される。

I類—円形を呈するもの。

1号・2号・3号・7号・8号・9号・11号・12号・15号・16号・17号・9号住南。

II類—長方形を呈するもの。

4号・10号・13号・14号・1号住東。

III類—その他。

5号・6号。

以上の3類は、その形態によってさらに次のように分類することが出来る。

I a類

底面が平坦で壁が垂直あるいは内傾して立ち上がるもの。本遺跡の土壌の主体をなす。

1号・2号・3号・7号・8号・9号・15号・17号の8個が該当する。

この9個は、さらに口径と底径がほぼ同じで壁中位に最小径をもつ7号・8号・15号と壁中位に最小径をもたず口径より底径の大きい1号・3号・9号と、壁がほぼ垂直な2号・17号の3つに分類される。しかし、底面に瓶具の跡と考えられる、細かい凹凸が全面に認められること、覆土や遺物出土状態などから同一の性格をもつ土壌と考えられる。

I b類

口径が底径より大きく底面中央にピットを有するもの。16号土壌がこれにあたる。宇都宮市瑞穂野団地遺跡において「円形有段遺構」と呼称された遺構である。他の類例として、矢板市後岡遺跡^①、南河内町薬師寺南遺跡の土壌がある。

瑞穂野団地遺跡では4個の円形有段遺構が発見されている。時期は出土土器片より国分期と考えられている。性格については、「性格、集落との関連について考察するために、今のところ何ら論点を持ち得ない。検出された4址についても、互いに共通することは、円形有段という形態と充填土の埋まり方のみであり、他に積極的に踏えるものはない」とされている。

16号土壌について見ると、釉がかかった須恵器の蓋の破片が出土していることから、時期は奈良、平安時代と思われるが、詳しい時期は明確でない。その性格についても何ら検討を加えることは出来ない。更に類例の増加を待ちたい。

I c類

表28 土墳一覽

口	縦			横 (m)		形状 (平面)	埋没状況	遺			物		切合い関係	備考
	径	中	底	径	深 (掘進レベル)			弥生片	土師片	須恵片	火洲土器	石製炊道具		
1	2.24×2.38	—	2.40×2.50	0.76 (81.85)	—	円形	人為的	—	75	—	—	—	—	底部に銅具底
2	2.12×2.22	—	2.00×2.16	0.40 (82.25)	—	円形	人為的	1	108	1	—	有孔円盤1	—	底部に銅具底
3	2.66×2.80	—	2.78×2.91	1.06 (81.50)	—	円形	自然	—	147	—	楕1	有孔円盤1	4, 5土壌	—
4	3.93×0.84	—	3.86×0.66	0.60 (81.98)	—	長方形	人為的	—	—	—	—	—	3, 5土壌	—
5	不明	—	不明	0.94 (81.68)	—	不明	不明	不明	不明	不明	—	—	3, 4土壌	—
6	1.79×1.36	—	—	0.78 (82.01)	—	不整形	人為的	—	3	—	—	—	2住	—
7	2.16×2.22	2.10×2.16	2.27×2.30	0.85 (81.70)	—	円形	自然	9	288	—	—	—	溝状遺構1	底部に銅具底
8	(2.56×2.52)	(2.30×2.40)	2.58×2.54	0.93 (81.62)	—	円形	自然	1	47	—	楕1	—	溝状遺構1	底部に銅具底
9	2.10×2.25	—	2.44×2.42	0.78~0.88 (81.66)	—	円形	人為的	3	41	—	—	—	10土壌	底部に銅具底
10	3.84×0.70	—	3.60×0.56	0.60 (81.92)	—	長方形	人為的	—	—	—	—	—	9土壌	—
11	(1.43×1.15)	—	(1.30×1.18)	0.22 (82.08)	—	円形	自然	—	—	—	—	—	13土壌	—
12	(1.65×1.55)	—	(1.47×1.40)	0.26 (82.22)	—	円形	自然	4	2	—	—	—	13土壌	—
13	0.65×0.95	—	0.96×0.64	0.90 (81.50)	—	長方形	人為的	—	—	—	—	—	10, 11土壌	—
14	0.76×0.53	—	0.60×0.40	0.20 (82.31)	—	長方形	自然	—	—	—	—	—	15土壌	—
15	2.73×2.52	2.65×2.39	2.70×2.48	0.90 (81.58)	—	円形	上部自然 下部人為的	60	195	1	—	楕3, 小形楕1 楕1, 楕1	14土壌, 13住	底部に銅具底
16	2.30×2.44	—	1.73×1.89	1.00 (81.57)	—	円形	自然	—	25	1	—	—	14住	—
17	1.85×1.71	—	1.72×1.53	0.28 (81.99)	—	円形	人為的	2	21	—	—	小形楕2 環2	13住	底部に銅具底
18	0.54×0.36	—	0.40×0.21	0.50	—	長方形	自然	—	—	—	—	—	—	—
19	0.37×0.40	—	0.05×0.07	0.21	—	円形	不明	—	—	—	—	—	—	—

深さが浅く口径がⅠ a類より小さいもの。11号土壇，12号土壇が該当する。互いに近接して存在する。出土土器片も少なく，時期不明。性格も不明である。

Ⅰ d類

口径が小さく鍋底状を呈するもの。9号住居址南 P₁₉ 遺構一個のみである。

土壇内から，五領期の甕・坏・器台が出土した。破片ではあったが，ブルドーザーを使って遺構検出面まで削平されていたことを考えると，より大きく遺存していた可能性がある。単独で存在し周囲には付帯する遺構はない。祭祀的性格を有する土壇ではなかろうか。

Ⅱ a類

長方形を呈し壁が直線的に立ち上がるもの。4号土壇，10号土壇が該当する。両土壇とも規模は全く同じである。覆土はロームを主体とした一層の土層であり，掘削した後すぐ埋められたと考えられる。出土遺物なし。時期は，4号土壇が3号土壇に，10号土壇が9号土壇に切られていることからⅠ a類以前の時期が考えられる。墓壇的性格を有する土壇である。

Ⅱ b類

長方形を呈し壁が2段に立ち上がるもの。13号土壇1個である。Ⅱ a類より規模が小さい。覆土は固くしまっていた。墓壇的性格を有する土壇と思われる。Ⅱ a類とは形態において区別されるが，性格・時期の違いは，わからない。13号土壇は，10号土壇・11号土壇によって口部を切られているのでⅠ c類以前の時期が考えられる。

Ⅱ c類

長方形を呈し，長辺と短辺の差がⅠ a類，Ⅰ b類より小さいもの。14号土壇と1号住居址東土壇の2個がある。形態からⅡ c類としたが，両土壇が同じ性格のものかどうかは不明である。時期・性格とも不明。

Ⅲ a類

平面形・断面形とも不整形のもの。6号土壇1個である。形態からみて土壇を何らかの意図で使用することに意味があったとは考え難い。しかし，その性格については明確でない。

Ⅲ b類

5号土壇をⅢ b類とした。形態・出土遺物とも不明のため時期・性格とも不明のため時期・性格とも不明。できれば，他に分類できる可能性がある。

以上，本遺跡発見の19個の土壇を大きく3分類し，さらにⅠ類を4つ，Ⅱ類を3つ，Ⅲ類を2つに分類し，それぞれについて述べてきたわけであるが，本遺跡ではⅠ a類とした土壇が特徴的であり問題があると考えられるので，更に検討していきたい。

Ⅰ a類土壇について

前にも述べたように8個の土壇がふくまれる。以下，形態，覆土の状態，出土遺物及びその

出土状態、構築時期、類例と用途について考えてゆく。

形態

底面の状態と壁の立ち上がり方が特徴的である。底面は、3号土壌を除く8個の土壌に掘具の跡と思われる細かい凹凸がある。全体的には平らにしたが、平滑にきれいにする必要がなかったと考えられる。換言すれば、底面を平滑にして何かを置くということに意味があったのではなく土壌内空間の保持に意味があったのであろう。

壁は2号土壌、17号土壌を除いて底面より内側に傾斜して立ち上がっている。7号土壌、8号土壌、15号土壌のように、いったん内側に傾斜して立ち上がり壁の中ほどに最小径を持って口部では外側に開く形態があることから考えると、底径を大きくすることに特別の意味がありそうである。

覆土

覆土の堆積状態から見ると、自然埋没の土壌と人為的に埋められた土壌の2種類がある。

人為的に埋められた土壌は掘削後すぐに埋められたものであり、自然埋没の土壌は開口状態で土壌内に何も無い状態で廃棄されたものである。

このことから考えると土壌は、何かを納める目的で掘削され、開口状態で廃棄されるに至ったと思われる。

出土遺物

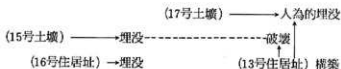
自然埋没土壌出土の遺物は、埋没過程での流れ込み、あるいは投棄と考えられる。

人為的に埋められた土壌の出土遺物には、土器・石製模造品（有孔円盤）がある。土器片は、覆土中全体にわたり散在していたことから意図的に埋めたとは思われない。意図的埋納の可能性のあるものとしては、3号土壌出土の石製模造品と15号土壌下部出土の完形の碗形土器がある。意図的埋納とすれば何らかの意味があったのであろう。

構築時期

構築時期を考える資料としては、8号土壌の底面から出土した甔形土器、15号土壌下部から出土した碗形土器、13号住居址と15号土壌、17号土壌の切り合い関係がある。

15号土壌は前にも述べたように、完全に埋没した状態で13号住居址に切られ、17号土壌は開口状態にあった時期に13号住居址構築のため埋められている。また15号土壌から出土した弥生式土器片と16号住居址出土の弥生式土器片が接合できたことにより、16号住居址と15号土壌上部は同時期に埋没したと考えられる。これらのことと15号土壌下部出土の碗形土器、8号土壌出土の甔形土器の時期を考え合わせると次のような前後関係が考えられる。



※15号土壌埋没と17号土壌構築の時間差については、明確でない。

以上のことからⅠa類の土壌は、鬼高期初頭の限定された時期に、構築されたと考えられる。他の土壌覆土出土の遺物もこの時期よりはずれものではない。

他遺跡の類例

県内で同様の土壌が発見されている遺跡に佐野市上敷遺跡^⑤、上三川町大野遺跡^⑥がある。

上敷遺跡では8個検出されている。時期は鬼高Ⅱ式期かやや下の時期とされ、1個の底部から炭化した「ヒエ」が検出されたことより、その用途について次のように述べている。

「収奪の対象となる『コメ』は弥生時代以来の高床倉庫に、一般食用の『ヒエ』は縄文時代、弥生時代と継承されてきた土壌に保管したのであろうか。この故に、高床倉庫は調査区域外のどこか、倉庫令などにいう高燥の地に集中させられ、土壌はいつでも使用でき、しかも私有的性格の強い『ヒエ』の貯蔵穴倉としての性格をもつものであろう。」^⑦

大野遺跡では、2個検出され性格不明の穴とされている。

本遺跡で検出された土壌では用途を明確に判断出来る資料はなかった。

以上Ⅰa類土壌について考えてきたが、発掘区域が限られているため集落全体の中での位置づけは不明であり、その性格・用途について明確にすることはできなかった。

本遺跡検出の土壌を大きく3類に、またさらに全体で9類に細分し考察してきた。土壌の類別にも問題はあろうし、またⅠa類土壌の発掘地域内での散在性と住居址との関連及び鬼高期初頭という限定された時期に構築された意味、他遺跡の土壌との比較については何ら述べることができなかった。これらをあわせた土壌論については後日検討したい。(水品信男)

註① 辰己四郎，岩上照朗，石橋知明「宇都宮市瑞穂野岡地遺跡」宇都宮市瑞穂野土地区画整理組合，宇都宮市教育委員会 1978年

② 山ノ井清人『後岡遺跡』「東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書—その2—」栃木県教育委員会，日本国有鉄道東京第二工事局 1975年

③ 川原由典，橋本澄朗「薬師寺南遺跡（挿図編）」栃木県教育委員会 1978年

④ 註①に同じ

⑤ 竹沢 謙，山ノ井清人他「上敷遺跡」栃木県教育委員会 1977年

⑥ 倉田芳郎編「栃木日産遺跡」駒沢大学考古学研究会 1971年

⑦ 註⑤に同じ

4 権現山北遺跡採集の石器について

はじめに

権現山北遺跡は古墳時代の集落址として周知の遺跡であるが、先土器時代の資料が出土することにはやく着目したのは、下野考古学研究会の山崎芳家氏であり、ここに記載する資料の大部分は、同氏がフィールド調査により採集した資料である。資料①は地元の山崎義一氏が20数年前に採集された資料で、採集地点は権現山北遺跡であることは確かであるが、明確な採集地点は不明である。資料③⑤はやはり地元の故山崎茂吉氏が、1928年に採集された資料で、これもまた採集地点は、権現山北遺跡であることは確かであるが、明確な地点は不明である。現在、山崎安一郎氏が保管されている。資料⑥はこのたび発掘調査を行なった地域内で、開田工事が行われた際に筆者が削土（ソフトローム）中より採集した資料であり、採集時の状況から推察して竇積土層の最下層またはソフトローム層中に遺存していた資料と思われる。他の資料はいずれも先の山崎芳家氏が採集した資料で、同氏によれば、採集地点はいずれもこのたび発掘調査した地点周辺とのことである。

以下資料についての若干の説明を記すが、文中のA面とは図左側の面を示し、B面とは、図右側の面を示すものであり、図に示したパーカッションバルブ痕については、剝離方向を示す意味において幾分誇張して図に示した。いずれも表面採集によって得られたものであるが、権現山北遺跡の性格を一層理解していただけるものと思ひ筆を執った次第である。

採集資料について(第104図)

①は完形品で、全体に剝離の細かい石器である。最大長103.5mm, 最大幅20.5mm, 最大厚7.9mm, 有舌部17.8mmで断面は薄い凸レンズ状を呈する。A・B面とも押圧剝離が施されており、まず幅約6mmで荒く剝離し、後に幅約3mmの剝離をし、周縁部に細かい細加工が施されている。有舌部にかげ浅い扶り込は、大きく剝離を施したのちに有舌部を作っている。石材は流紋岩製で、採集当時は乳褐色であったとのことであるが、現在は油が付着し灰色を呈している。

②は先端部および基部を欠損し、全体に作りの荒い石器である。最大長86mm, 最大幅21.4mm, 最大厚8.8mmで断面は薄い凸レンズ状を呈する。A・B面とも押圧剝離が施されており全体に約15mm以上で非常に荒く剝離したのちに、幅9mmの剝離をし、周縁部に所々細かい細工が施されている。石材はあまり石質の良いチャート製である。

③は完形品で、最大長37.3mm, 最大幅11.3mm, 最大厚5mmで断面は三角形を呈する。パーカッションバルブの方向から推察して、縦長の剝片を利用して製作されたものと思われ、B面下部端に打撃点が認められ、他の面に認められる剝離面よりも鈍角で、製作はまずB面から行なわれ、全体の形を作ったのちに先端およびその周辺を鋭くするために、A面先端部および右縁

上部に加工を施したものと思われる。石材はチャート製。

④は先端部を欠損し、全体に作りの荒い石器である。最大長33mm、最大幅12mm、最大厚8mmで断面は丸味を呈する。押圧剥離が施されており、A面は周縁部からほぼ直角な角度にて剥離を施しているため中央部は平端である。B面はA面と比較すると緩やかな角度で剥離を施し稜を作っている。下端部は薄く、両面より加工が施されている。石材はあまり石質の良いチャート製。

⑤は先端部を欠損し、全体に作りの細かい石器である。最大長58.4mm、最大幅14mm、最大厚6.8mmで断面は凸レンズ状を呈する。A、B面とも押圧剥離が施されており、まず幅約8mmで基部から先端部へ剥離し、のちに幅約3mmの剥離をし、周縁部に所々細かい剥離が施されているが、特にA面右縁中央部に細かい剥離が施されている。全体に先細りで、基部にふくらみを持つ、基部末端は未加工部が僅かに残っている。石質は流紋岩製。

⑥はほぼ完形品で、全体に作りの荒い石器で、最大長76.2mm、最大幅43.4mm、最大厚19mmで断面はゆるやかな三角形を呈する。B面下端に打撃点がわずかに認められることから大形の剥片を利用して作られたものと推察される。剥離はB面左縁に幅広い剥離を施し、刃部を作っている。A面左縁上部に施されている剥離は、角面を取るための加工と推察される。石質は硬質の砂岩製。

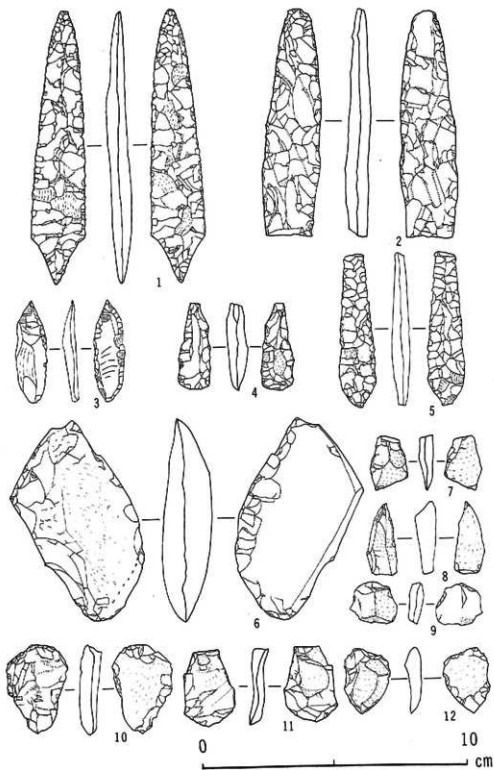
⑦は剥離片の一部に細かい剥離が認められ、最大長21.4mm、最大幅15mmで、B面に認められる打撃点とパーカッションバルブの方向とA面の剥離面は石目から剥離しており、パーカッションバルブの方向は相対していることから、B面の剥離を行なった際に剥離したものと思われる。A面下縁部、左縁部に細かい剥離が認められる。石材はチャート製。

⑧は剥片の一部に細かい剥離が認められ、最大長27.1mm、最大幅11mmで、B面に打撃点とパーカッションバルブが認められる。A面に認められるパーカッションバルブは上方向に向いておりB面と相対する。交互剥離によるものと推察され、下端は欠損している。A面左縁上部にはB面と同じ方向からの剥離が認められ意図的にも先端部を作りだし、4回の剥離により断面は四角形を呈している。A面右縁上部に細かい剥離が認められる。石材は良質のチャート製。

⑨は剥片の一部に細かい剥離が認められ、最大長15.4mm、最大幅17.6mmで、B面に打撃点が残っている。A面には稜が一条認められ、稜から推察しても、少し大きな剥片であったものと推察される。加工はB面左縁上部に非常に細かい剥離が認められる。石材は石質の悪い瑪瑙製。

⑩は剥片に加工が施されており、最大長28.5mm、最大幅22.5mmで、A面は周縁を除いて全く未加工である。B面は打撃点が認められ、加工は主にB面左縁中央部、右縁中央部に押圧剥離にて加工が施されている。石材は流紋岩製。

⑪は剥片の一部に細かい剥離が認められ、最大長29mm、最大幅19mmで、A面に打撃点と剥離



第104图 采集石器实测图

面が認められるが石材が悪い為か、剥離面は凸凹している。B面は多方向からの剥離痕が認められる。A面右縁中央部に非常に細かい剥離が認められる。石材は石質の悪いチャート製。

⑫は剥片に加工が施されており、最大長24.2mm、最大幅17.6mmで、B面には打撃点が認められ、A面には明確に認めることのできるパーカッションバルブは3面に認められ、パーカッションバルブの方向が同一であることから一定方向からの剥離によるものと推察される。加工は押圧剥離にて、特にB面下縁部に施される。A面右縁下部には非常に細かい剥離が認められる。石材はチャート製

考察にかえて

権現山北遺跡から採集した石器は、図示した資料以外に細剥片数点を数えるのみで、資料の散布は非常に少ない。先述のとおり大部分の資料の採集地は、このたび発掘調査を行なった地点およびその周辺であり、類する資料の散布範囲は極限られた小範囲に認められるものと推察される。開田工事を行なった場所は以前畑地であったが、台地の崖付近の上層は、腐植土層が非常に薄く、所々にローム層が認められたが、他の畑地においては腐食土層の堆積が比較的事から、資料の散布を見ることができなかつたものとも推察される。したがって今後さらに新しい資料が発見される可能性が考えられる。

図示した資料について、剥離方法にもとづいて分類すると、I両面加工、II片面加工、III一部両面加工、IV細かい剥離の施されているものに4分類することが出来る。

Iに分類される資料は①②④⑤で、①②⑤の加工方法が、押圧剥離にて3回に分けて行なわれている点の共通性が認められる。①に類似する資料は、栃木県塩谷郡喜連川町早乙女野辺山猿塚より採集されているが、同遺跡から他に採集された伴出資料については不明である。⑤に類似する資料は、茨城県水戸市開江町、通称一本松遺跡より単独採集されており、詳細は不明であるが、所謂有舌尖頭器群の一群かと思われると報告されている。④の資料は、所謂錐および尖頭器的な機能を有する石器であるが、下部部が薄く、表面裏面から加工が施されている点をも考慮すると、先に示した機能以外にもスクレイパー的要素をもつ石器である。

IIに分類される資料は⑥⑩⑫で、⑥は形態から、所謂擷器的な要素をもつ石器である。⑩は剥片の周辺に荒い剥離加工が施されている所謂剥片石器である。⑫は小形ではあるが所謂スクレイパー的要素をもつ石器である。

IIIに分類される資料は③で、形態から分類するならば、所謂尖頭器類に分類される資料であるが、剥離の状態、特に先端部およびその周辺に加工が施されている点から、スクレイパー的の要素をもつ石器である。

IVに分類される資料は⑦⑧⑨⑪で、剥片を利用し、いずれも剥離面が不規則に潰れた感じを受ける資料で、⑦は剥離から推察するならば、意図的ではなく偶然に出来た剥片を利用したも

のと推察される。⑧は意図的に先端部を作り出しており、所謂錐の機能を有する石器であろう。

Iに分類した資料はいずれも剝片の原形をほとんど認めることができなく、ほぼすべての面に加工が施されており、ある程度石器の機能に定められた形態であるが、II-IIIに分類した資料は、すべてが縦長の剝片を利用して製作されており、剝片の中から適当な剝片を選んで素材として使用=利用したものと剝離面から推察することができる。反面③⑧の資料のごとく、剝片はほぼ原形であるが、ある程度石器の機能に定められた形態を作り出している資料も認められる。

前述したとおり、権現山北遺跡から採集されている資料は、表採による資料で層位的関係および共伴関係は全く不明であり、採集されている資料も数少なく、十分な検討をすることができないが、2・3の問題提起をすることができるものと推察される。有舌尖頭器の形態移行については、東京都瑞穂町、狭山遺跡B地点および浅間谷遺跡において、吉田格氏は尖頭器を発掘資料・採集資料に基づいて形態でA-Eに分類し、そのうち有舌尖頭器に属すると考えられる形態をA類とし、移行形態としてA類をA¹・A²・A³類に分類している。A¹類とは、先細りで基部が三角形を呈する形態で、狭山遺跡B地点の表採資料1をこれにあてはめている。A²類とは、先細りであるが全体に丸味を呈し、胴部下半よりゆるやかな曲線にて基部を呈する形態で、狭山遺跡B地点の発掘資料46をこれにあてはめているが、出土層位、共伴遺物に付いては不明である。A³類とは、所謂有舌尖頭器の形態で、浅間谷遺跡の表採資料17をこれにあてはめている。A¹A²類を有舌尖頭器の古い段階におき、A²はA³類への移行形態と推察しているが、移行形態を器形剝離技術の面において、分類するならば、A²→A¹→A³類の移行形態方がA²→A³類において形態変化、剝離技術の面において若干問題が残るが適切と思われる。権現山北遺跡の①⑤をA²、A¹、A³類の分類にあてはめるならば、①はA²類に分類され⑤はA¹類の直前に位置するものと推察することができる。前述したように吉田氏の分類は狭山遺跡B地点および浅間谷遺跡から発掘・採集した数少ない資料の分類であり、今後の発掘調査等により、有舌尖頭器の形態の相関関係および、それらに伴う石器組成等についてはより明確になるものと思われる。

IIIに分類した資料特に⑦⑨⑩のように剝片に、細かい剝離が認められる資料についてであるが、細かい剝離は、作為的なものなのか、または使用=利用することによって偶然にできたものなのか、剝離面を観察することによりある程度分類することができるものと思われるが、剝片の形態および細かい剝離が施される位置、細かい剝離が作為的なものか使用=利用することによって偶然にできたものか等を考慮して今後分類することは、此の時期の石器組成を究明する上で重要な役割を果すものと思われる。

最後に周辺の先土器時代の遺跡分布を見ると、

①雀宮遺跡、宇都宮市雀宮612番地、尖頭石器・石核・剝片等を表採し中村紀男氏が報告してしる。

②上の原遺跡、宇都宮市戸室上の原、縦長ブレイドや細石核の形態を有する石器等が表採し中村紀男氏および筆者によって一部が報告されている。

③瓦作遺跡、宇都宮市大谷町瓦作、石核を土木工事後のローム層中より検出し、筆者が報告している。

④大溜東遺跡 鹿沼市池ノ森、剝片石器を表採し筆者がその一部を報告している。

⑤富士見台遺跡 宇都宮市下欠町富士見台、尖頭器が表採されている。未報告。

⑥大林遺跡 鹿沼市上石川、石核、剝片等がローム層のカッティング面より集石と推察される石群とともに検出されている。未報告

⑦中泉87遺跡 壬生町中泉87番地、石核、剝片石器、剝片等を土木工事の際ローム層中より集石とともに検出したが、残念なことに十分な記録を取ることもなく、土木工事のため破壊されてしまった。未報告

⑧オシメツクシ遺跡 宇都宮市江曾島町、通称オシメツクシ、石核が表採されている。未報告

以上の8遺跡は筆者が報告書やフィールド調査によって確認しているが、雀宮遺跡を除いて上の原遺跡・瓦作遺跡・大溜東遺跡の資料は一部が報告されており、富士見台遺跡・大林遺跡・中泉87遺跡・オシメツクシ遺跡の資料については全く未報告であり、梅現山北遺跡の剝片石器とともにいずれ何らかの機会に報告する予定である。

(五十嵐利勝)

参考文献

1. 「かみしき5号」下総史料館 1971年5月
2. 「栃木県史 資料編考古1」栃木県 1976年3月
3. 「茨城県における先土器時代資料1」常総台地研究会 1973年11月
4. 「日本の旧石器文化5」雄山閣 1976年8月
5. 中村紀男「宇都宮市雀宮発見の蔵骨器および石器」足跡1、宇都宮学園高等学校 地歴部 1969年3月
6. 五十嵐利勝「栃木県豪川流域の考古学調査」下総考古学5 1973年11月
7. 五十嵐利勝「鹿沼市内における二三の遺跡」足跡5 1976年10月
8. 吉田格 肥沼問博「狭山、六道山、浅間谷遺跡」東京都瑞穂町文化財調査報告1 1970年10月

V 結 語

今回の発掘調査は、権現山古墳の北方に広くひろがる権現山北遺跡のうち、開田により消滅することになった北東端の一角（60m×40m）を対象としたが、約2,000㎡の小範囲に竪穴住居址18、土壇19、溝状遺構3の遺構が検出された。それに伴って多くの土師器・須恵器・石製模造品などが出土した。また遺構は検出されなかったが、先土器時代の石器や縄文式土器・弥生式土器が採集されており、発掘地区周辺におそらくはそれぞれの時代の遺構が遺存しているものと思われ、権現山北遺跡は、先土器時代から平安時代にかけて断続的に営まれた集落遺跡であると推測される。

検出された遺構・遺物の特徴的な点をいくつか列記してまとめたい。

発掘によって検出された住居址18軒は、五領期1（8号）和泉期8（1・2・5・6・7・11・14・18号）鬼高期6（4・9・10・12・13・16号）国分期2（3・17号）不明1（15号）に区別されるが、このうち2・4・5・7・9・12・13・14・16号址は焼失家屋であり、丁度半数の9基が火災に遭遇したことになる。また発掘区の西側や南側の隣接地区からも表土を少し掘りかえすとかなり多くの炭化木が出土することから、台地上の集落の大半が何回にもわたって類焼したことが知られる。本遺跡の立地する低台地上からは東方はるかに筑波山を、北西方のかなたに男体山を見ることができ、目をさえぎるものがないが、同時に風当たりも強く、一軒で失火をおこせば忽ち集落の大半が類焼したであろうことは容易に想像される。集落間の争いによる焼失、あるいはアイヌの風習のように病死者が出ると自ら火をつけるなどの理由も考えられるが、立地条件からみて自然の影響が大きいといってよいのではなからうか。

住居址は和泉期のものが8軒でもっとも多い。一般に和泉期の集落の特徴として、①和泉期だけの単純遺跡が多い。②前後の時期の集落が存在するのに和泉期の住居址のみ欠落する遺跡が多い。③大規模集落があまり認められない。④和泉期の住居址どうしの切り合い関係はあまりみられないなどの現象が指摘されているが、本遺跡の和泉期のものはやや越を異にする。①と②とは関連をもつ現象であるが、すでに「Ⅲ. 遺構と遺物」の章で明らかにされたように、本遺跡では五領—和泉—鬼高と集落の連続性が認められ、①・②の特徴とは異なる。③については、発掘地区が遺跡全体からみれば北東部の一角に限られていることや、和泉期のものも2期以上に細分されることなどから明言はしがたいが、検出された住居址群のうち和泉期のものが約半数を占めていることから、同期にかなりの集落が営まれたことを推測することも可能であろう。④については、2号址と18号址、5号址と6号址の間にそれぞれ重複や切り合い関係が認められ、これまた和泉期の一般的特徴とは異なる。和泉期の一般的特徴を高橋一夫は「五

領期において、生産に対して人口が飽和状態に達し、和泉期には生産性を高める農業技術や農具を持ちえず、周辺におそらく世帯を単位として分散(分村)していった。」結果生じたものと考えたが、本遺跡のように4つの特徴の範疇に入らないものについても「^① 広大なバックマッシュを持ち、人口が増加すればさらにそれに対して生産を上げられるところでは分村の必要もなく、大規模な集落の維持ができたのであろう」と示唆に富んだ指摘をしている。本遺跡の存在する低台地の周囲は水田の好適地が広がり、弥生時代以来連続して農耕が営まれ鬼高期まで分村することはなかったものと思われる。ただ今回の発掘によって真間期の住居址が一軒も検出されず、表面採集によっても同期の土器が認められないことは注目される。発掘区域を拡張すれば検出される可能性もあるが、移住したことも考えられる。本遺跡の北東約1kmのあたりは律令制下に条里がしかかれたことが知られており、真間期には風当たりが強く火災に遭いやすい台地上から、新たに整備された水田の近くの微高地に移住したのかもしれない。今後の検討課題である。

和泉期について多いのは鬼高期のもので6軒をかぞえる。このうち特に注目されるのは4号住居址である。火災に遭い、とるものもとりあえず避難したのであろうか、常住の生活をそのまま示すかのように、日常雑器である大量の土師器が散乱することなく、当時置かれてあった位置・状態のまま検出された。祭具である石製模造品も土器群からは離れた位置から20個以上も出土し、鉄鎌・鉄鎌など、鉄製品も3点を数える。一般に焼灰住居址からは遺物が多く出土するが、4号址は特に顕著で同期の他の住居址との格差は大きい。大家族の家父長の住居であったことをおもわせる。本址は竪穴住居内での日常生活の状況を示す好資料というだけでなく、当時の家族関係を示唆する重要な資料といえるであろう。

本遺跡を特徴づける遺物としては滑石製の石製模造品がある。住居址18軒のうち10軒から出土している。内わけは和泉期6軒、鬼高期2軒、国分期2軒である。とくに多いのは和泉期で、検出された住居址8軒のうち6軒(1・2・5・6・11・18号)から出土している。これに対して鬼高期には6軒のうち2軒(4・12号)から出土しただけである。ただ検出された遺物の量からみれば、和泉期に比して鬼高期の場合は、4号址から20個以上、12号址からも13個というように大量に出土していることが特徴である。屋内祭祀を反映する石製模造品が、本遺跡の周辺雀宮一帯からかなり採集されることは古くから知られているところであるが、今回の発掘結果から石製模造品の使用の推移をたどれば、和泉期後半に多くの個々の住居が個別に^④ 屋内に石製模造品を保有し、鬼高期になると、少数の大量に保有する住居と多くの全く保有しない住居とにわかれるようである。住居址出土の石製模造品についてはすでにくいつかのすぐれた研究があり、高橋一夫は、「和泉・鬼高期に家父長層の竪穴から出土し、鬼高II式期に減少し、^⑤ 真間期に消滅する。」^⑥ とし、鬼高II式期における減少の原因を開発などによる地縁的な村落の形成とそれに

表29 石製模造品出土住居址一覧

種類 住居址	勾 玉	管 玉	白 玉	小 玉	土 玉	剣	有 孔 鏝	不 明	合 計
1号	2			6		1			9
2号			2						2
3号			(1)						(1)
4号			8			4	8		20
5号								1	1
6号			2						2
11号	1		2						3
12号		1	1	9	1		1		13
17号							(1)		(1)
18号		1	9						10

伴う村社の発生とに求めた。一般に和泉Ⅱ式期から鬼高Ⅰ式期にかけての時期に最盛期があり、真間期にはほぼ消滅することはよく知られることであるが、今回の発掘結果からみると、鬼高Ⅱ式期に該当する4号址から最も多く出土しており、鬼高Ⅱ式期に減少するとはいいがたい。本遺跡の場合、高橋の指摘する「開発などによる地縁的村落の形成」は北東にひろがる条里の存在からみて真間期以降のこととする方が妥当であろう。本来支配者階級の独占的な呪具であった鏡・玉・剣が、滑石製の小形模造品であるとはいえ、被支配者階級の住居に保有されるようになったのは、古墳時代の社会の中での大きな変化であることはまちがいないが、模造品減少の時期のずれは、地域により社会の発展のずれがあることを反映しているであろう。なお園分期とみられる2軒の堅穴(3・17号)からも石製模造品が出土しているが、両住居址に伴うものかどうかは不明である。

住居址出土の遺物でもっとも量の多いのは土器であるが、そのうち特に注目されるのは16号住居址出土の須恵器と17号住居址出土の土師器である。前者は形態・焼成からみて恐らく畿内からはこぼれてきたものと思われる。後者は坯の外面に「大大上観念念右」とも見える意味不明の7文字の墨書がある。かつて秋田城址でも須恵器の高台付坯の内面に「念」の字を含む7字の墨書がみられたとのことである。本遺跡のものは、赤外線フィルムで撮影し、赤外線テレビでも観察したが文字そのものは明確にはならず、習書によるものか呪的なものか或いは他の意図によって書かれたのかすべて不明である。今後の検討に俟ちたい。

刊行時期に追われて不十分な報告書となった。とくに第Ⅳ章では、弥生・鬼高期の土器に僅かな検討・分析を試みただけで他の時期の土器を分析することはできなかった。それらについては今後さらに検討を加え「峰考古」(宇都宮大学考古学研究会誌)に掲載する予定である。

(久保 哲三)

- 註① 高橋一夫「和泉・鬼高期の諸問題」原始古代社会研究2 1975年
- ② 前掲註①
- ③ 岡田隆夫「下野の条里について」県史だより第32号 1976年
- ④ 寺内武夫・篠崎善之助「下野中原遺跡調査概報—第二回—」考古学10—10 1939年
- ⑤ 原島礼二「日本古代社会論」現代歴史学の課題(上) 1971年
- 高橋一夫「石製模造品出土の住居址とその性格」考古学研究18—3 1971年
- 金子裕之「古墳時代屋内祭祀の一考察」国史学84号 1971年
- 楢山林経「住居址発見祭祀遺物の研究」国学院大学日本文化研究所紀要35輯 1975年
- ⑥ 前掲註①
- ⑦ 岩崎卓也氏の教示による。
- ⑧ 東京国立文化財研究所の石川隆郎氏のお世話になった。心から謝意を表する。

図 版



発掘風景（北より）



権現山北遺跡全景（北方より空撮）



権現山北遺跡発掘区全景（東方より空撮）



① 発掘前風景（北より）



② 1号住居址（西より）



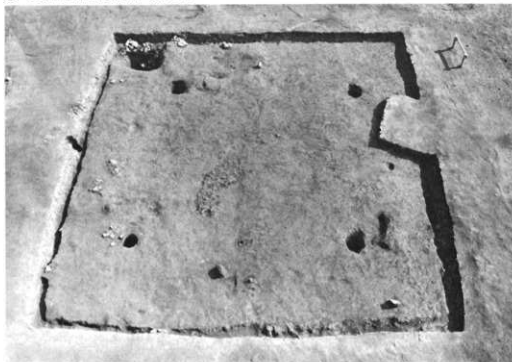
① 1号住居址全景（南より）



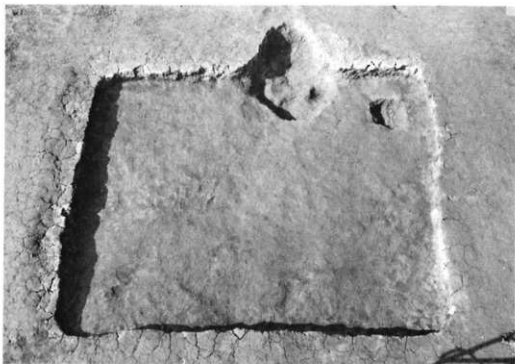
② 2号住居址貯蔵穴遺物出土状態（北より）



① 2号住居址階段状遺構（北より）



② 2号住居址全景（北より）



① 3号住居址全景 (南より)



② 4号住居址遺物出土状態 (東より)



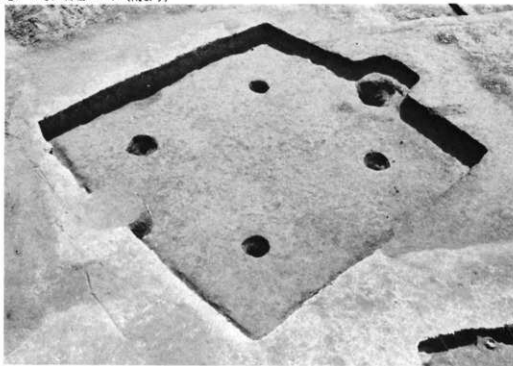
① 4号住居址カマダ付近遺物出土状態（南より）



② 4号住居址遺物出土状態全景（南より）



① 4号住居址カマド (南より)



② 4号住居址全景 (北西より)



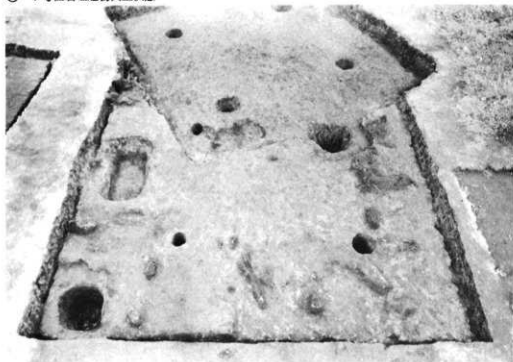
① 5号住居址階段状遺構（東より）



② 5号住居址階段状遺構内遺物出土状態（南より）



① 5号住居址遺物出土状態



② 5号住居址全景(南より)



① 6号住居址遺物状態（北より）



② 6号住居址全景（南より）



① 7号住居址貯蔵穴遺物出土状態（北より）



② 7号住居址遺物出土状態全景（西より）



① 7号住居址全景（北より）



② 8号住居址全景（北より）



① 9号住居址全景（南より）



② 10号住居址遺物出土状況（西より）



① 10号住居址カマド (南より)



② 10号住居址全景 (南より)



① 10, 11, 17号住居址全景 (西より)



② 12号住居址張り出しピット遺物出土状態 (南より)



① 12号住居址張り出しピット (南より)



② 12号住居址カマド (南より)



① 12, 13, 14, 15号住居址全景 (南より)



② 13号住居址遺物出土状態



① 13号住居址カマド（南より）



② 13号住居址全景（南より）



① 14号住居址遺物出土状態（北より）



② 14号住居址，16号土坑全景（南より）



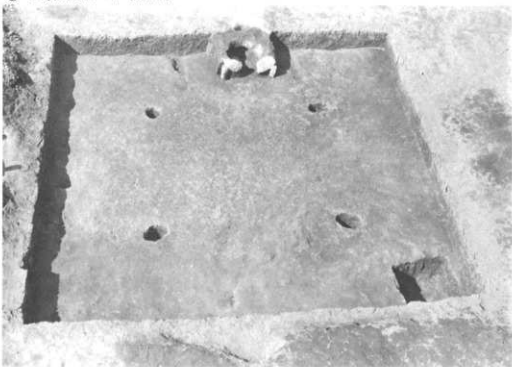
① 16号住居址南北セクション（東より）



② 16号住居址貯蔵穴遺物出土状態（東より）



① 16号住居址カマド（南より）



② 16号住居址全景（南より）



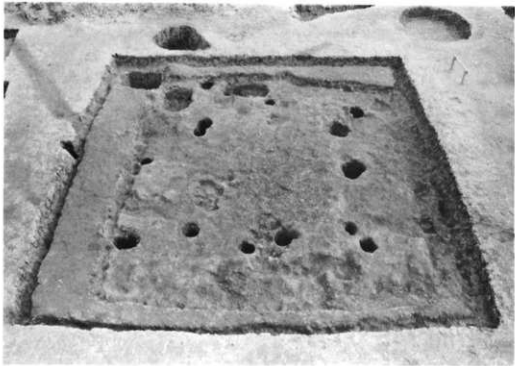
① 17号住居址遺物出土状態（西より）



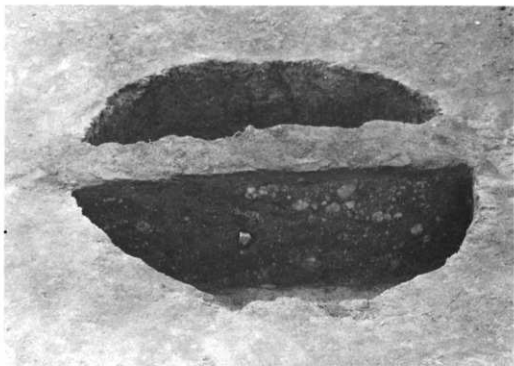
② 17号住居址，溝状遺構全景（南より）



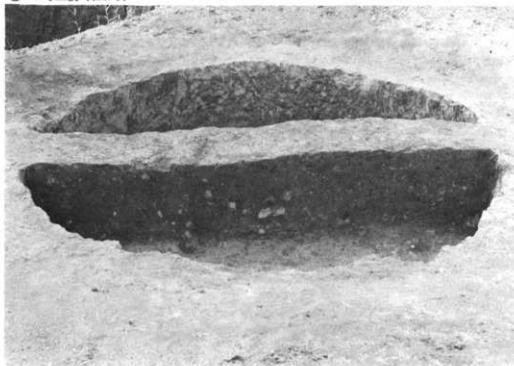
① 18号住居址貯蔵穴遺物出土状態（東より）



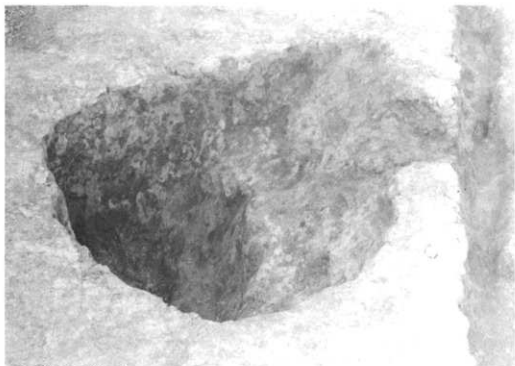
② 2, 18号住居址全景（北より）



① 1号土坑 (北より)



② 2号土坑 (北より)



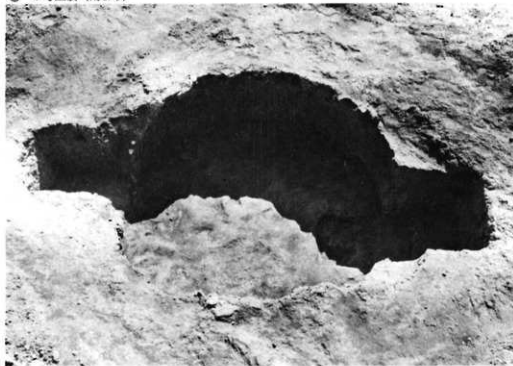
① 6号土坑 (北より)



② 7号土坑 (北より)



① 8号土坑（南より）



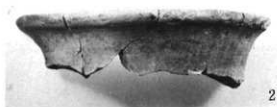
② 9, 10号土坑（東より）



① 11, 12, 13号土城 (北より)



② 14, 15, 17号土城 (南より)



1号住居址出土土器



1号住居址出土土器



1号住居址出土遺物



2号住居址出土土器



6



9



7



10



11



8



12

2号住居址出土土器



13



16S



14



17



15





3号住居址出土遺物



1



3



2



4

4号住居址出土土器



5



7



6



8



9

4号住居址出土土器



4号住居址出土土器



20



26



21



27



22



28



23



29



24



30



25



31



32



38



33



39



34



40



35



41



36



42



37



43

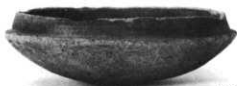
4号住居址出土土器



44



50



45



51



46



52



47



53



48



54



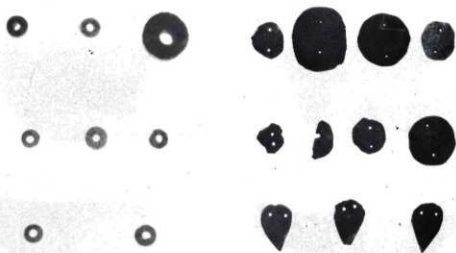
49

4号住居址出土土器



17

34



4号住居址出土遺物



1



2



3



4



5



6



7



8



9

5号住居址出土土器



10



15



11



16



12



13



17



14

5号住居址出土土器



18



21



19



22



20



23

5号住居址出土土器



24



30



25



31



26



32



27



33



28



29



33

5号住居址出土土器



5号住居址出土土器



1



2



3



4



5



6



7



8

6号住居址出土土器



9



10



1



2



3



4



5



6

7号住居址出土土器



7



8



9



7号住居址出土土器



13



16



14



17



15



18

7号住居址出土土器



19



24



22



25



23



26



1



2



5



3



6



4

8号住居址出土土器



1



4



2



5



3

9号住居址出土土器



1



3



2

9号住居址南P₁₀遺構出土土器



10号住居址出土遺物



11号住居址出土遺物



1



5



2



6



3



7



4



8

12号住居址出土土器



9



13



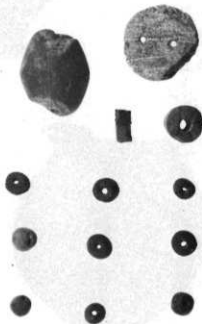
10



11



12



12号住居址出土遺物



1



2



3

13号住居址
出土土器



1



2

14号住居址出土土器



3



4



5



6

14号住居址出土土器



1



3



4



2



5



2



6

16号住居址出土土器



7



12



8



13



9



14



10



15



11



16

16号住居址出土土器



17



18



19



20



21



22



23



24



25

16号住居址出土土器

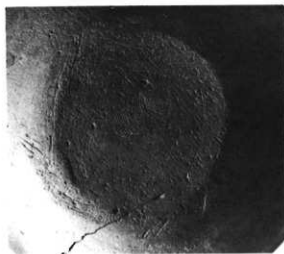


26S

16号住居址出土遺物



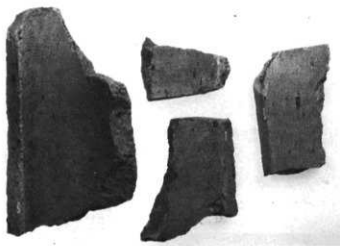
1



17号住居址出土土器



2S





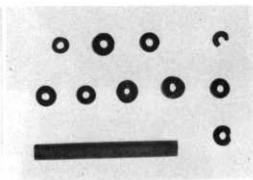
1



3



2



18号住居址出土遺物



15号土壙

8号土壙

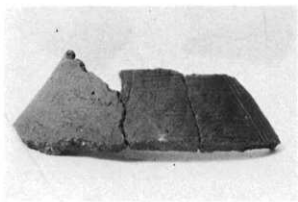
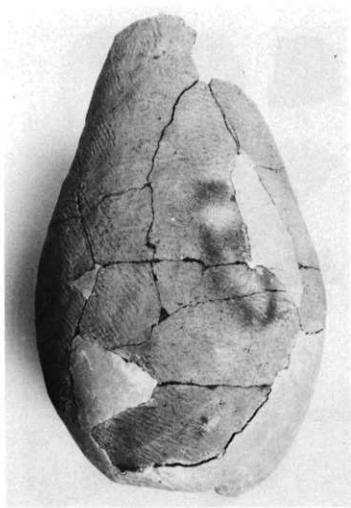


15号土壙

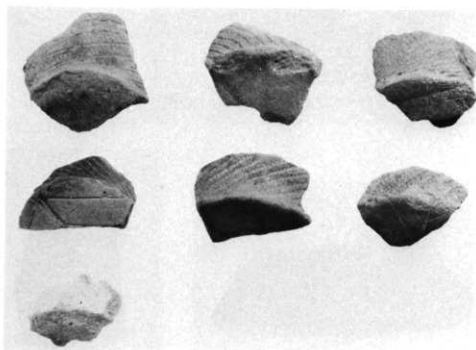
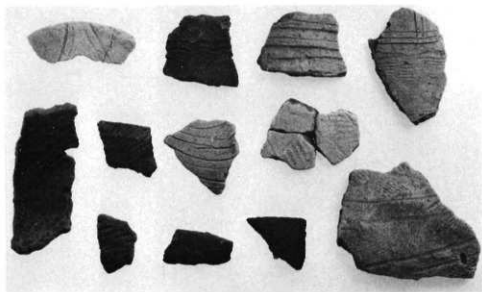


17号土壙

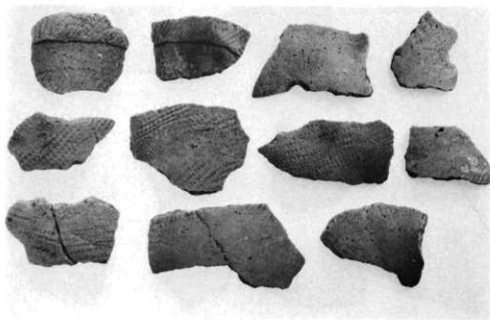
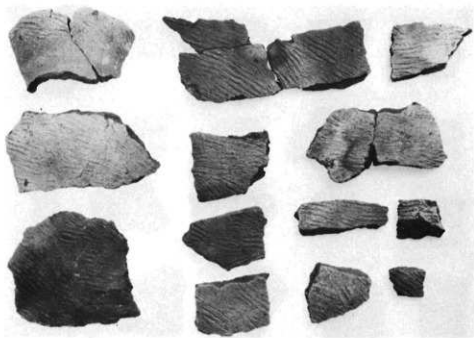
土壙出土土器



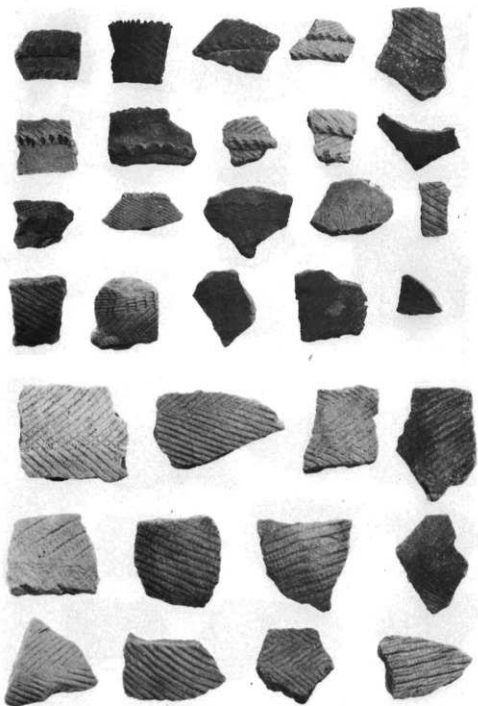
覆土出土弥生式土器



覆土出土弥生式土器



覆土出土弥生式土器



覆土出土弥生式土器

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第5集

権現山北遺跡

1979年3月31日発行

編 集 久 保 哲 三

発 行 宇都宮市教育委員会
栃木県宇都宮市中央1-1-13

印 刷 株式会社 松井ビテオ印刷
宇都宮市平出字南原4287-7
TEL0286 (62) 2511

宇都宮市教育委員会